

奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

内容刷新

〔記念〕特別号

1964・5

大好評連載小説 「花と蛇」 団鬼六



5月号

昭和三十一年四月二十日印刷 昭和三十一年五月一日発行 五月号 (第十八巻第五号毎月一回) 日発行

昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十一年六月七日国鉄大田特別郵便承認 第三〇〇号

奇譚クラス

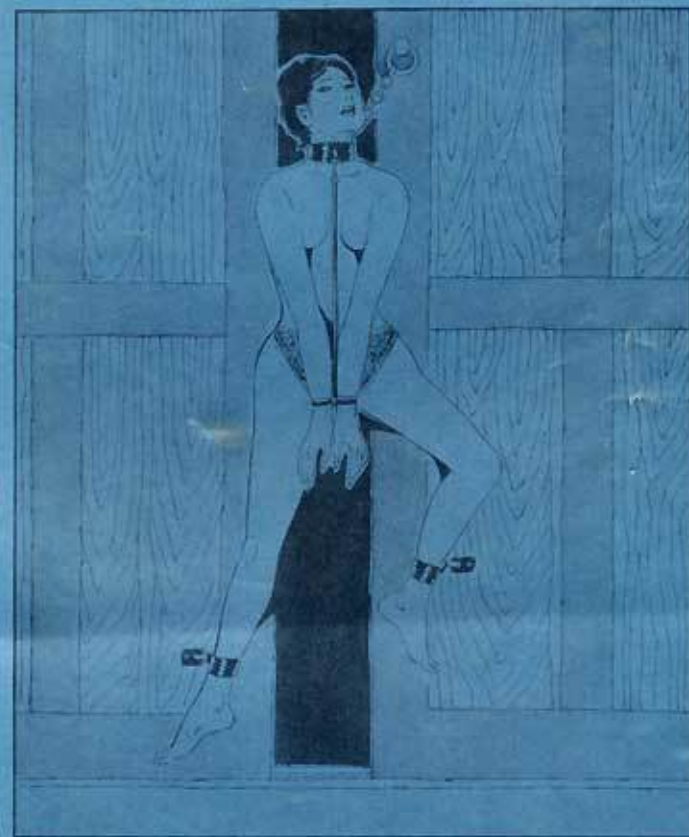
5月号

定価二五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



5月号

¥250

四馬孝画廊

大中判(13種×18種) 印画紙極鮮明、全面焼付。お好みのものを先ず貴方のコレクションの方々のコレクション用として描いて頂きました。従来比較的成绩のよかった「切腹」「洗腸」「女体責め」を主といたしました。

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

五枚一組 一〇〇〇円

略号「しせ」

一、姫君切腹

美しき姫君、豊満な上半身をくつろげて、短刀をしたたかに下腹に刺す。鮮血あふれる膝の上。

二、介錯寸前

覚悟の切腹。白裳束の娘くつろげた前をきりと九寸五分にて斬る。ふり上げた大刀まさに首筋へ

三、娘子軍切腹

城を目前にして、力及ばざるを殿にお詫びして、いさぎよく腹を切る娘子軍の娘二人。

四、早まるな

屏風をめぐらした一室で白衣の胸もあらわに腹を切る若妻。帰宅した夫の止めるのもきかず。

五、恋人の介錯

さあ早くお討ち下さい。と下腹をかき切った娘は、首さしのべて恋人の刃を待つのであった。

洗腸責め図譜

△強制洗腸五態▽

五枚一組 一〇〇〇円

略号「しき」

一、片足吊り洗腸

片足を高々と吊られて、逆さ吊りの女の臀部に対してイルリガートルの嘴管が非情に迫ってくる。

二、いちじくの恐怖

革紐で身動きもできない女を抱えあげて、露出した尻へイチジクの軽便洗腸が挿し込まれる。

三、高圧洗腸

後手に縛られてタイルの上にころがされた女体の口には、高圧ポンプのゴム管が挿入されている。

四、五十CC硝子ポンプ

カウンターに麻縄で縛られたホステスの盛り上った双丘に狙いをつけガラス洗腸器のあくどさ。

五、大量洗腸

医局のテーブルに手足を縛られた看護婦が医師の手でイルリガートルから洗腸を施されている。

洗腸責め図譜

△洗腸緊縛五態▽

五枚一組 一〇〇〇円

略号「しえ」

一、踊子の洗腸

両手と片足を天井から吊られて奇妙な恰好のままイルリガートルから洗腸される踊子。

二、ヒマシ油

足をバタつかせても縛られた上にヒマシ油を無理に飲まされて、このあとに来るものが恐ろしい。

三、進じる洗腸液

ガラスポンプからグリセリンの原液が腸内へ送り込まれると、激しい便意が身をさいなむ。

四、洗腸用責衣

お尻のところだけが、ぼっかりと口の開いた奇妙な責衣。液を流しつつゴムが尻に近づく。

五、両足吊り洗腸

このポーズだったら、イルリガートルの液は、もういくらでも体内に流れ込むだろう。

羞恥責め絵巻

△異色責めの五態▽

五枚一組 一〇〇〇円

略号「しい」

一、人工妊婦

女の腹はもう臨月に近いくらい膨れ上っているが、まだ水はどんな送られてゆく。ああ。

二、浴槽の女神

後手を括った皮は、湯を吸って喰いちぎれるように痛い。男は荒縄タワシで柔肌をさいなむのだ。

三、三角木馬の責

荒縄で乳房の上下を縛られた女が三角木馬に跨がらされて、呻めきながらムチ打たれている。

四、全裸の柱抱き

真白な豊満な背中から臀部にかけて、むごたらしいミミズ脹れが女に対する激しい責を物語る。

五、女体洗滌

二つ折りの奇妙な形に縛られた女体に、汚れを洗う水が手荒く注ぎかけられる。



奇譚クラブ 5月号 目次

第一 森の中の美形
後手高手小手四態
松樹に捕えられるまで
鉄枷と足首くさり
ハリツケられた囚女
梨花悠紀子
大塚啓子
絹川文代
大塚啓子

アイデア画 レインコートの女
女相撲 「禁じ手五題の内」
責画 一、前袋を横からとってはならない。
美しき鼻吊り
ドミナとスレイブの部屋
四馬孝・画
雪崎京人・提供

女体切腹 「若妻の自決」
人間馬の試乗
ブラシの尻打ち
四馬孝・画

第二 グラビヤ
廊下にさらす生贄
鏡の妖しさ
白肌は電光に映えて
縄の猿ぐつわと首繩
柔肌のくびれと腰巻
梨花悠紀子
山路ミヨ子
長野良子
大塚啓子
大塚啓子

◆奇クサロン◆ 編集部編 (33)
○悪女と悪妻と悪書……編集子(33) ○サロン楽我記……辻村隆(34) ○モデル
哀歌……塚本鉄三(35) ○強烈マゾ絵画「巨臂に屈伏する男」評……田麻須男
(36) ○女相撲「出し投げ」……昨亭数久(37) ○アブ・ア・ラ・カルト(37)
○「煙草責」フオートについて……畠山好一(38) ○私は解剖を見た……上城裕
(40) ○変天古林短信(40) ○女腹切「落城の女」……飯森潔(41) ○短信往来
「出産をすまして」……馬場アヤ子(42) 女王様への思慕……犬山蒼男(43) ○

鬼六談義 S小説作法
マゾコント 「長煙管の火の羅宇」……福田 久文(52)
「奇譚三十九夜」物語 (第三十五夜)……辻村 隆(58)
殿中妖艶女相撲絵巻……岡平 吉夫(78)
マゾ芸術考 女性男装管見……田島 直士(83)
女性切腹の可能性……高野 原美(88)
(切腹の心理と腹部マゾヒズム)

ガン作マニヤのノート (続濡れにぞ濡れし) 芳野 眉美(96)
マゾコント 「モルモット」……犬山 蒼男(103)
連載小説「花と蛇」に期待する……佐土 良志(108)
長篇SM小説 宇宙のどこかで……佐治 麻造(112)
雪夜に捧ぐ(女装と自虐につかれて)……木下 明(130)
殺し屋ものがたり……佐出 須登(132)
(「十三人の女死刑囚」別篇)
ラ・ムール・デスクラヴァージュ……三原 寛(144)
連載小説「花と蛇」(第十一回)……団 鬼六(150)
夫婦SMプレイ難感……新宮 明夫(160)
アルバム列伝……芳野 眉美(162)
本誌最近号総目次 (39年1・2・3・4)……東山 映史(186)
懐かしい縛られ美女……東山 映史(190)
◇読者通信◇……東山 映史(192)

縛られた美女ばかりの超豪華アルバム

第三集

頒価 一〇〇〇円(送共) 略号「美3」

美人モデルの素晴らしい緊縛姿態が、春色に匂う花のように爛漫と咲き競って、皆様のお求めを心から、お待ちしております。両面特アート紙にギッシリと満載された緊縛美女オンパレードは、本誌ならではの素晴らしい企画です。写真はいずれも今迄一回も発表されたことのない、とっておきの秘蔵品ばかりです。

一般書店売りは一切いたしません。直接お申込み下さい。

緊縛女体百二十態

△本誌優秀モデル総登場▽

212019181716151413121110 9 8 7 6 5 4 3 2 1

樹間にさらされる
豆しばりの猿ぐつわ
縄目と裸身の羞ら
後手首に喰込む縄目
荷造り縛り人形
バンド着用しばり
替ゴム猿ぐつわ虐め
ゴム布に包まれて
椅子利用エビ縛り
厳しき胴絞
輝く白肌をさらして
荒縄黒皮フンドシ
野性的な緊縛模様
全裸のいましめ
白晒六尺フンドシ
百C浣腸器責め
荒縄のトゲに喘ぐ
両手吊りさらし
M女性の本領発揮
足錠をつけられる
美貌を踏みつける

絹四梨桜大大遠愛絹大関絹東梨東遠大梨長絹絹
川方花井塚塚藤川川塚谷川浦花浦藤塚花野川川

424140393837363534333231302928272625242322

悦虐の園にさまよう
若肌の襲う白ローブ
蚊群の襲うにまかせ
きびしき縄目に喘ぐ
麗しき裸身の縄目
猿ぐつわ黒フン縛り
あえぐゴム布嵌口
美しい顔をなぶる
飛び出す双丘と後手
首繩胴縛り股間縛り
被虐に耐えた表情
生首フオト
祭壇のささげもの
パンプス開股しぱり
越中フンドシ緊縛
飛びだした双丘
塩水と無理に飲ます
胸部と脐窩の魅力
脐窩を狙う蛇の舌
顔枷の装着中
鼻孔ゼムピン責め

絹四梨遠大加大大新水絹長梨大愛絹加絹若水
川方花藤塚茂塚塚塚宮本川野花塚川川茂川原本

82818079787776757473727170696867666564636261605958575655545352515049484746454443

鼻孔から薬液注入
豊體にまつわる黒繩
ピンクカバーと豆絞
斬首処刑フオート
両手首吊りさらし
後手足首逆エビ縛り
丈なす黒髪
責衣からのぞく乳房
美貌放心の表情
後手強烈しぼり
従順なるマゾの発散
手錠足錠首くさり
白晒六尺フンドシ
ガンジガラメの繩目
首繩胴絞め股間縛
引き回される裸身
豊胸を彩る茶の繩
捕われの女学生
被虐のマゾ女性
大きな猿ぐつわ
可愛い足首
黒髪なぶり
喰い込む柔肌に繩
裸身に投げたタオル
緊縛の優美ポーズ
くわえた赤い花
エビしばり正面縛
美貌美身の緊縛
首を締めるくさり
手吊りのけぞり姿
乳首に咬みつく蛇
後手縛りと臀部
ピンクの腰巻さらし
重圧に耐える表情
強烈アグラしぼり
ボリウムの誇り
鏡にうつす裸しぼり
惜しみなく晒す裸身
ゴム帽子麗身晒し
首絞めに苦しむ

大梨 大山 桜絹 大東 絹 大桜 絹 大梨 絹 絹 加大大 絹 竹東 竹大 絹 桜絹 大四 竹梨 梨大 大梨 大新 絹 若大
塚花 塚路 井川 塚浦 川塚 井川 塚花 川川 茂塚 塚川 野浦 花塚 川井 川塚 方野 花花 塚塚 花塚 宮川 原塚

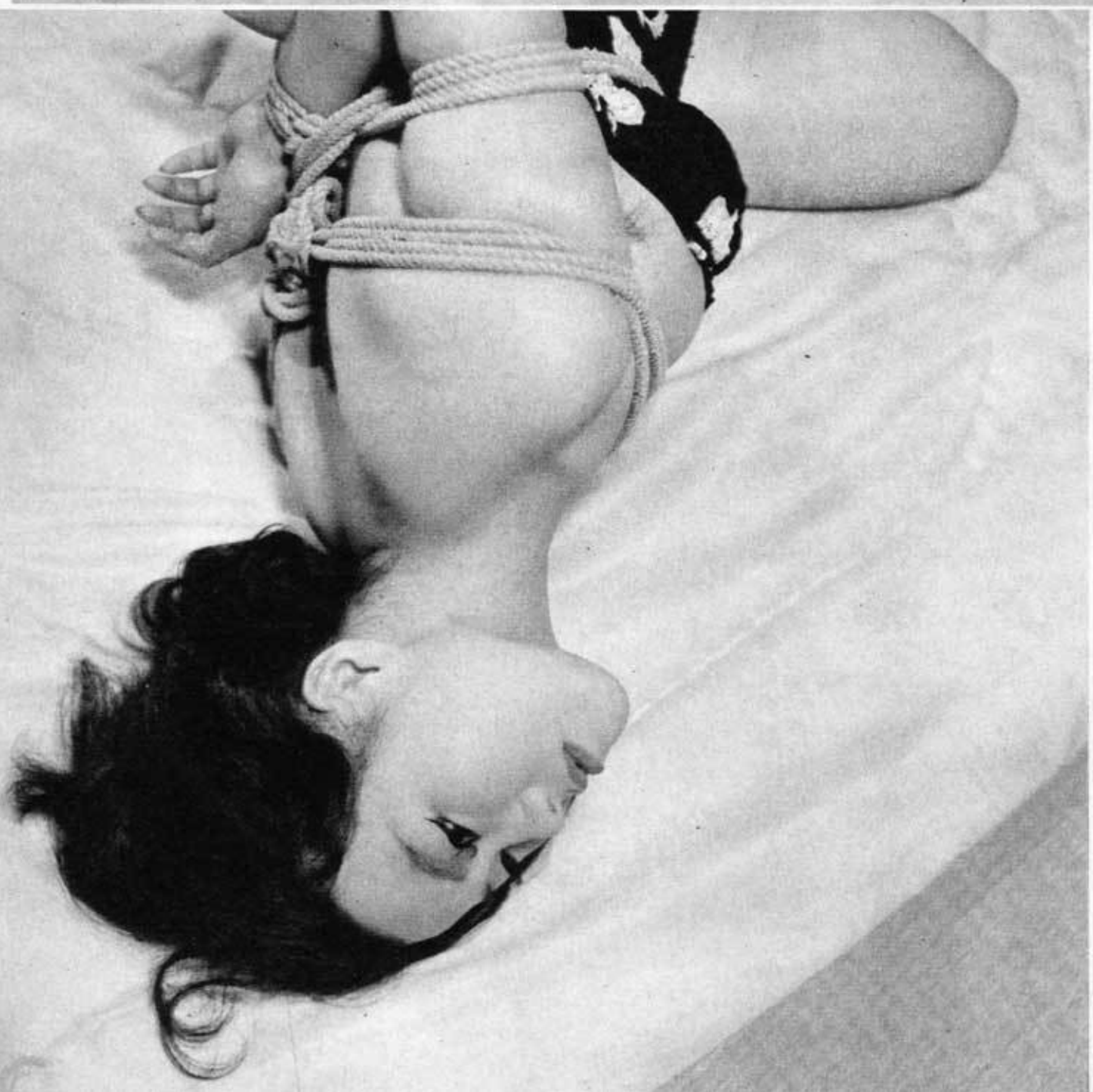
120119 118117 116115 114113 112111 110109 108107 106105 104103 102101 100 9998 979695949392919089888786858483

麗身をもだえさす
猿ぐつわの苦悶
黒繩にもだえて
全裸の手吊り責め
ゴムの猿ぐつわ
汚れた繩と輝く白肌
手首足首椅子しばり
あえぐ夫人の表情
首吊りのブレイ
後手縛り猿ぐつわ
電光に肌は映えて
噛まされる猿轡
柔肌高小手
後手背高しばり
高小手股間縛り
柱後手縛りにて
下げられたズロース
十文字しばり
木洩れ陽に白き肌
叫ぶ捕われの乙女
汗まみれの被虐
洋服タンスに吊る
全裸にてもだえる
黒繩地獄
るせつの裸身
セーラー服を縛る
首繩から膝繩まで
高々と上った後手
くびれた胸と腹部
カクテルドレスの女
浣腸責め
首のくさに悶える
黒のズロース
破られたズボン
正面立姿全身縛り
くさに捕捉される
銅甲型股間しばり
長襦袢と腰巻

大(山)大(梨)絹(絹)大(絹)大(梨)大(梨)四(関)大(梨)大(絹)桜(梨)山(絹)水(梨)東(梨)絹(大)関(梨)絹(絹)大(大)加(絹)
 塚(路)塚(花)川(川)塚(川)塚(花)塚(花)方(谷)塚(花)塚(川)井(花)路(川)本(花)浦(花)川(谷)花(川)川(塚)塚(茂)川

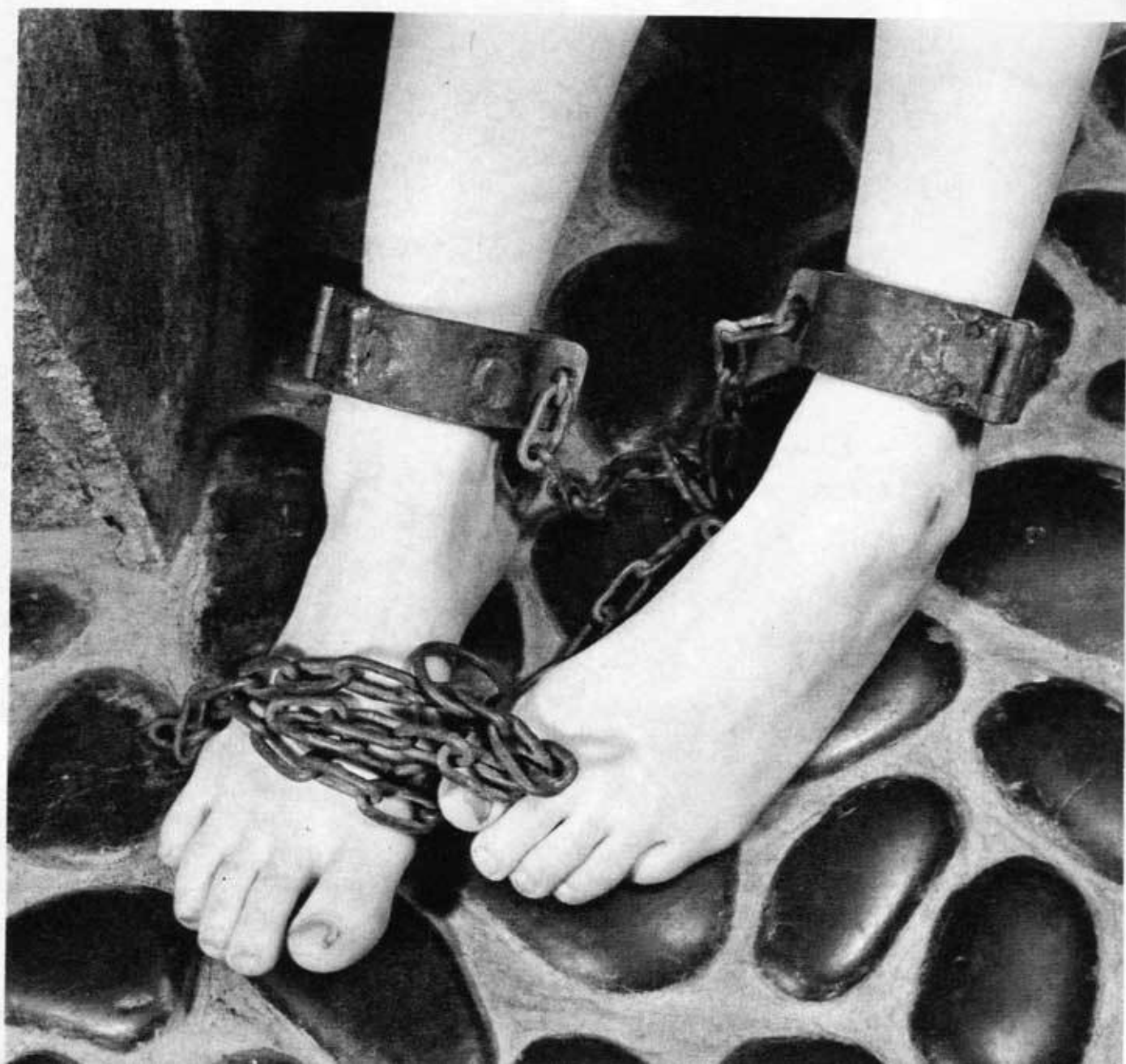




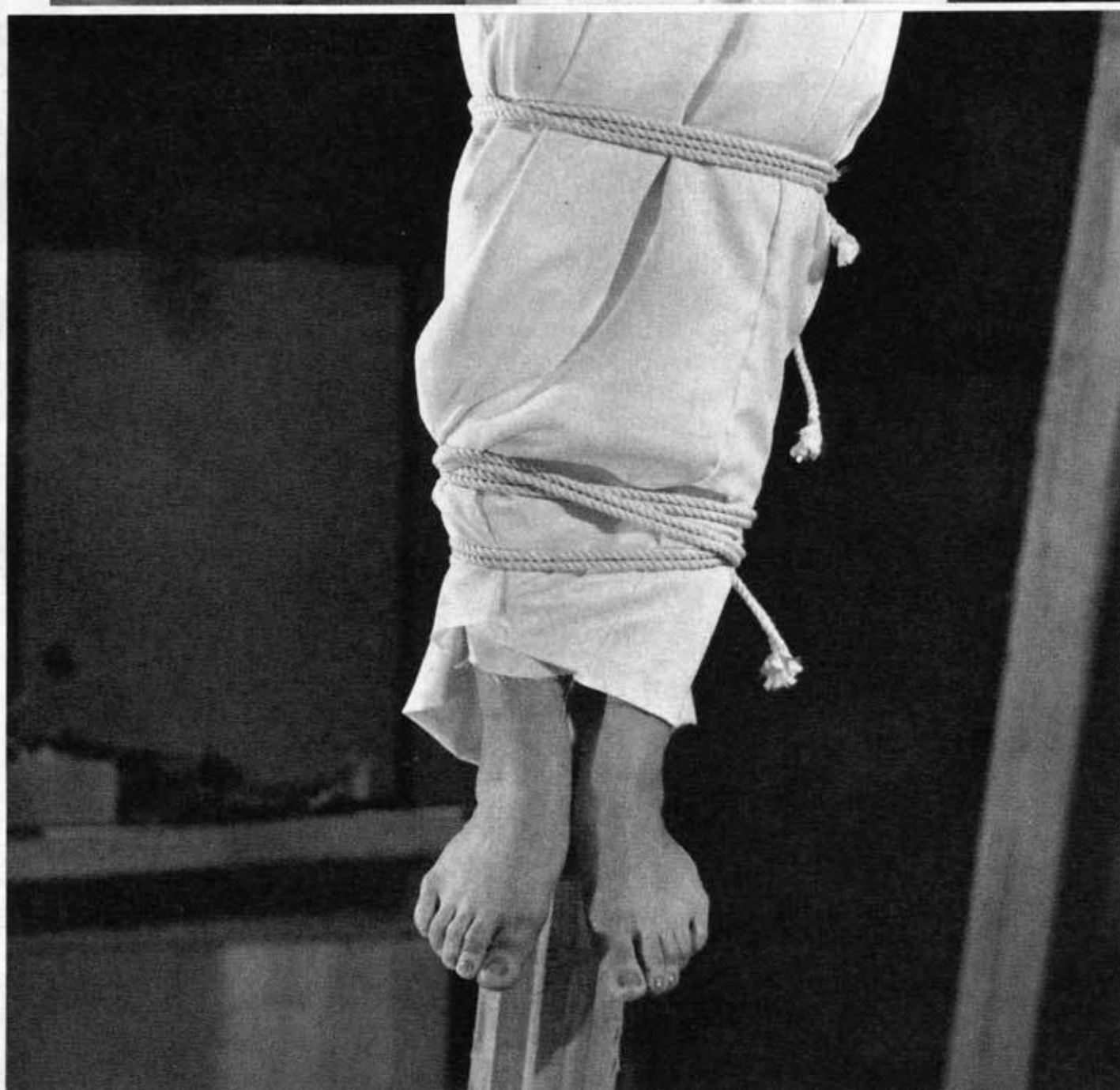














レインコートの女

四馬孝・画



筆筒の鑲応用

美しき鼻吊り

四馬孝・画





ドミナとスレイブの部屋

ドミナとスレイブの部屋

(7) ブラシの尻打ち



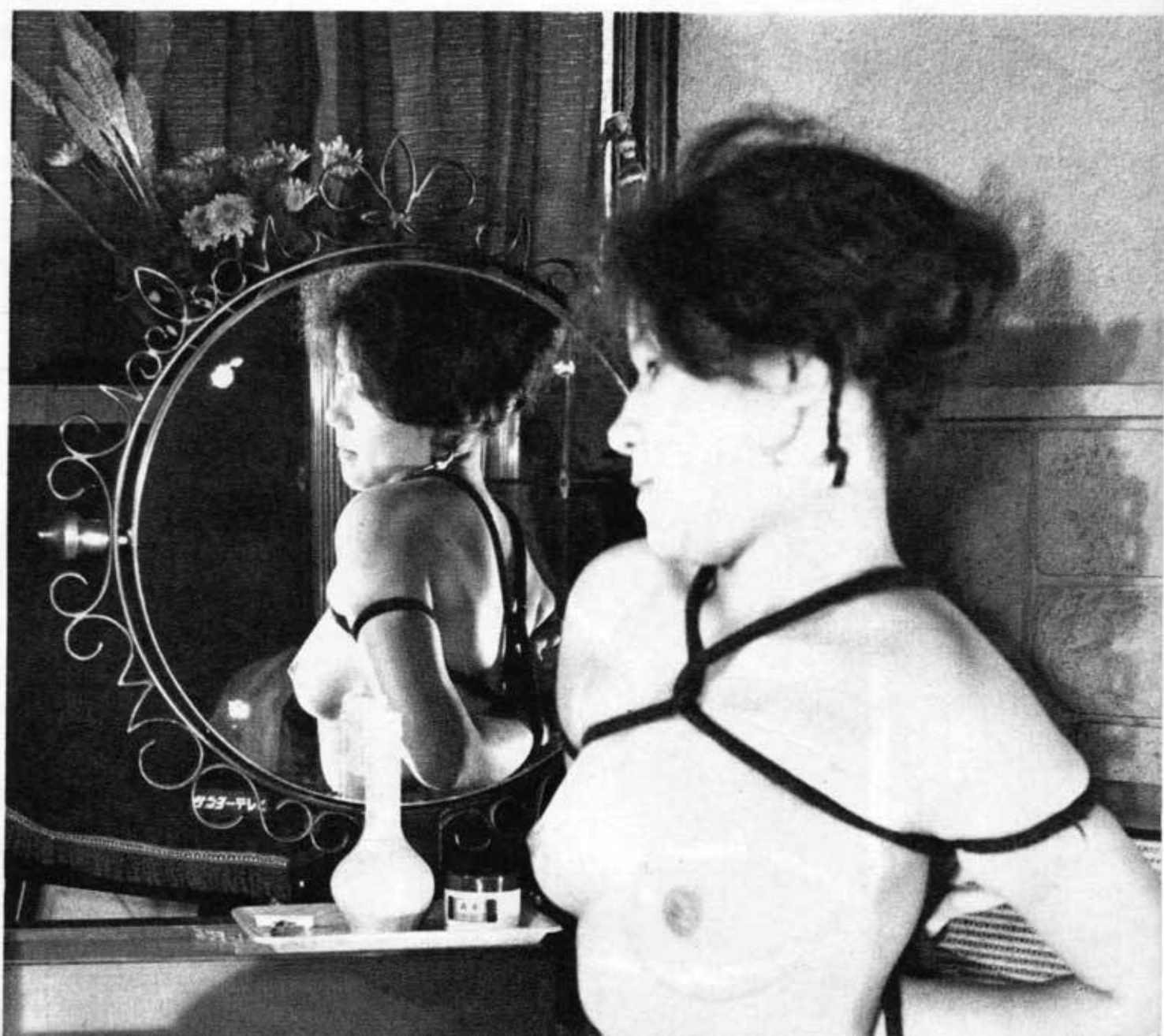


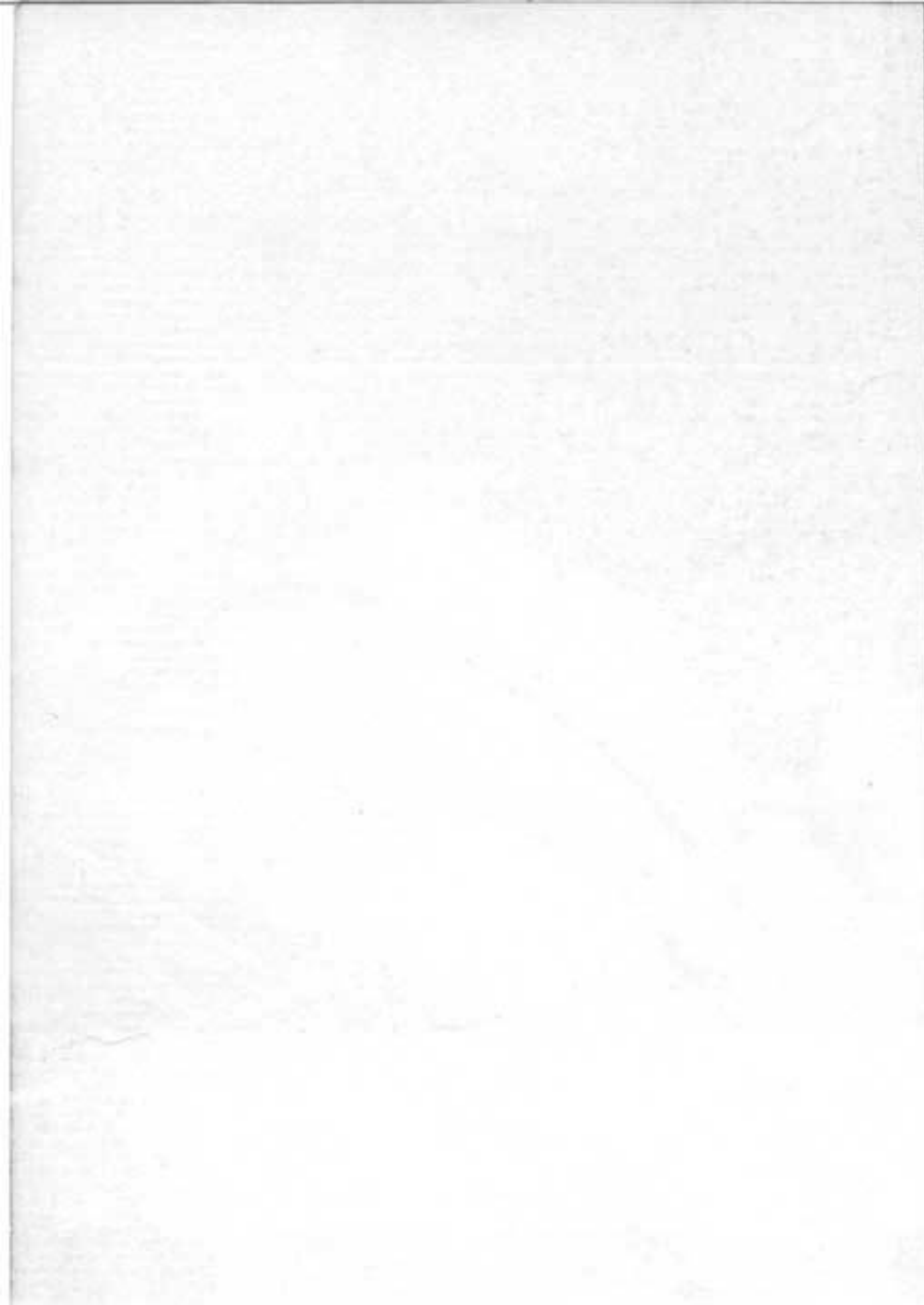
女性切腹

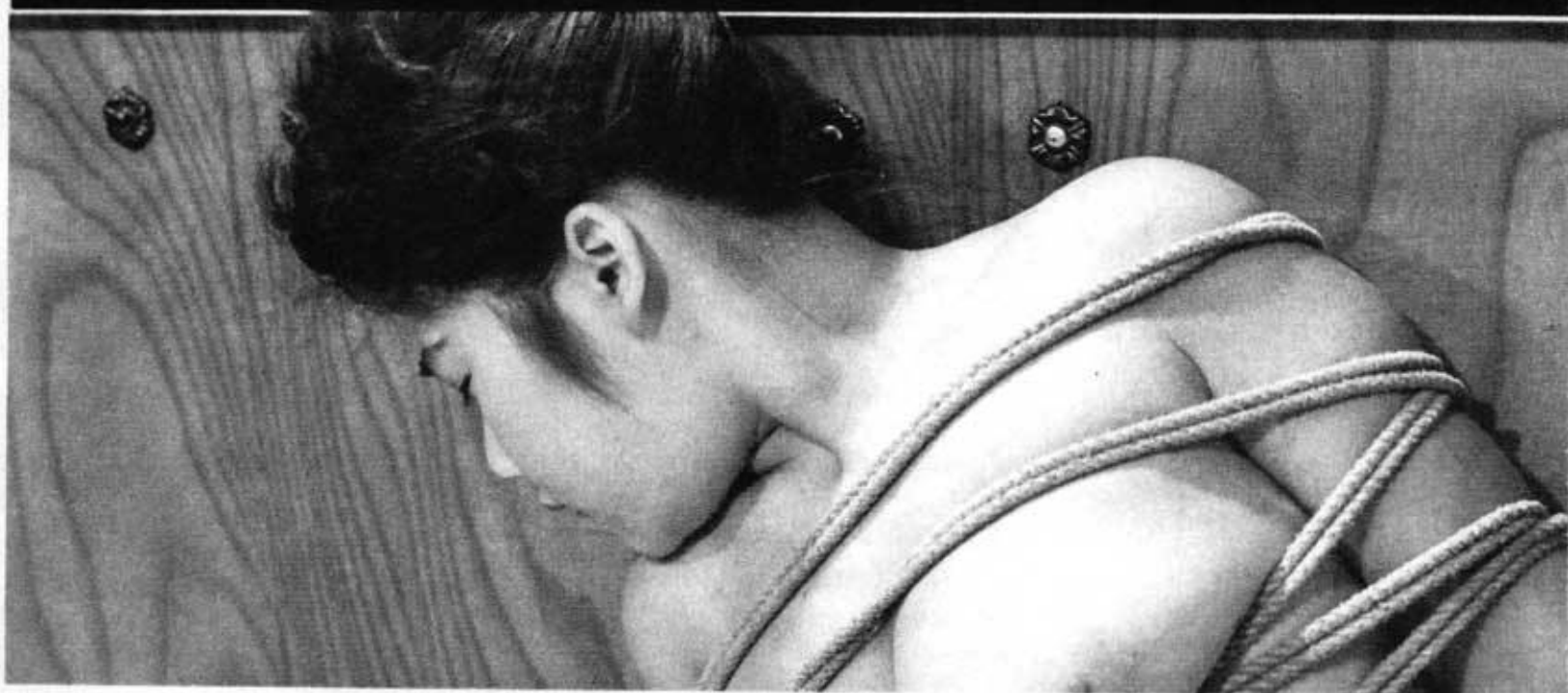
若妻の自決

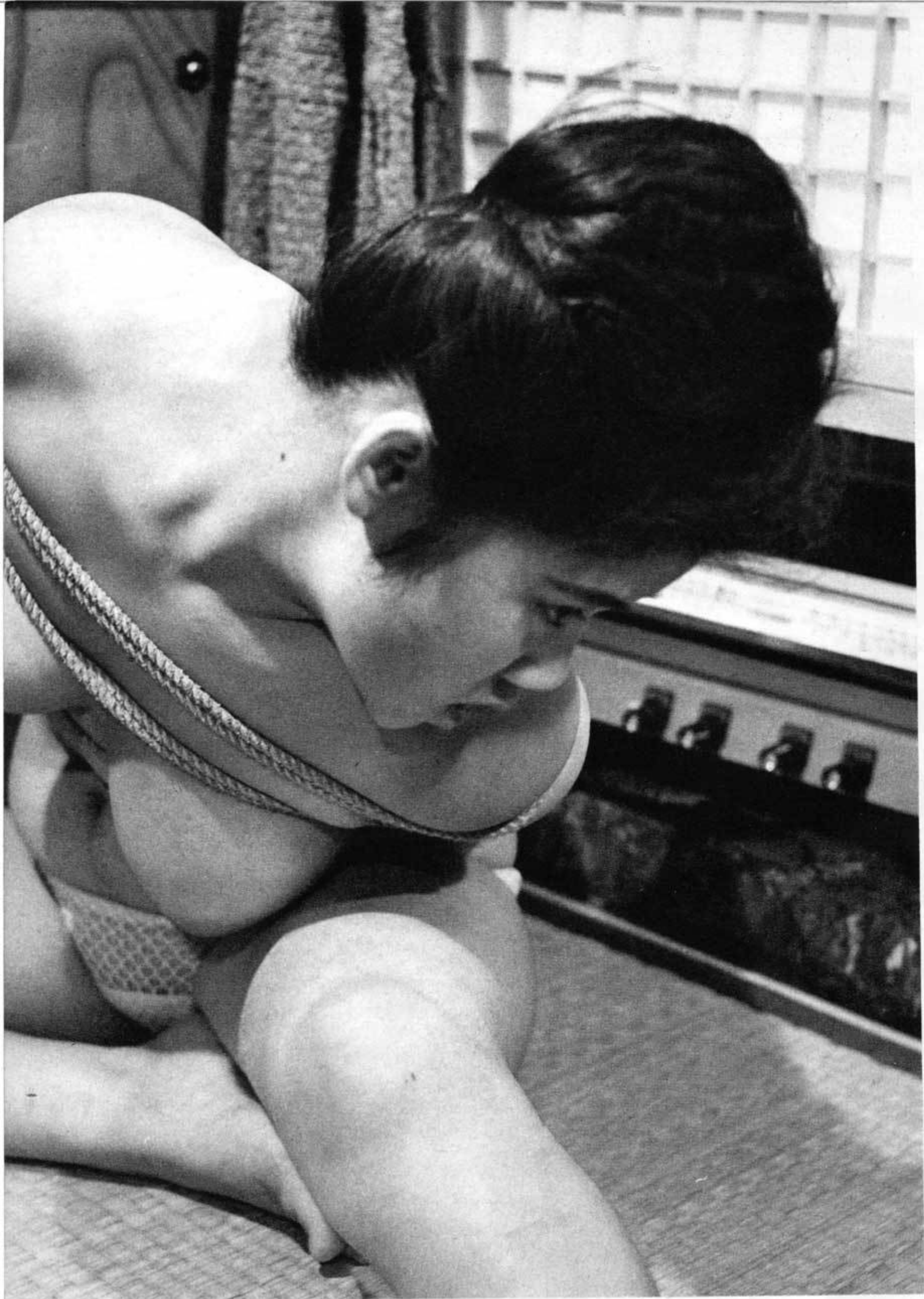
四馬孝・画

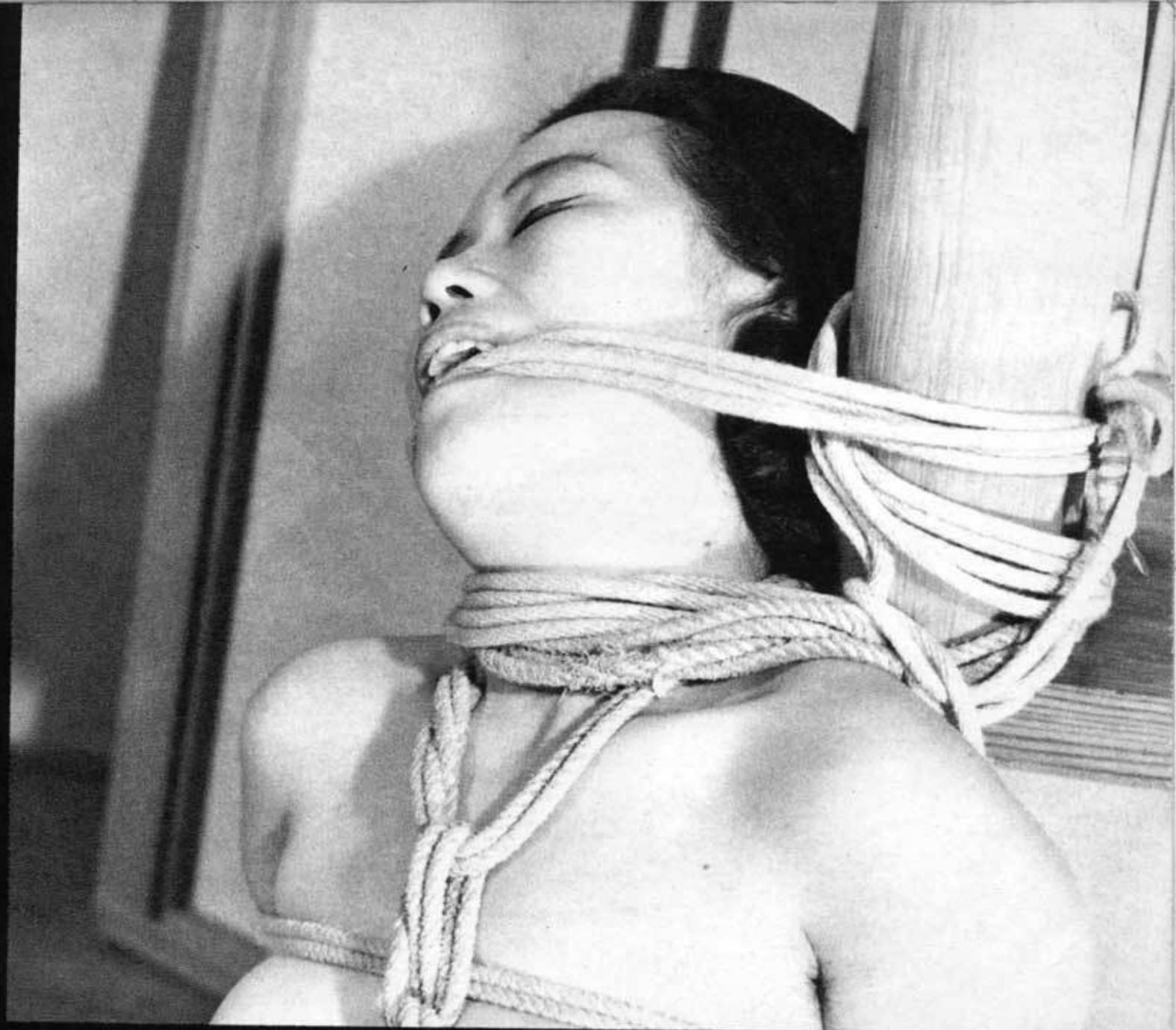






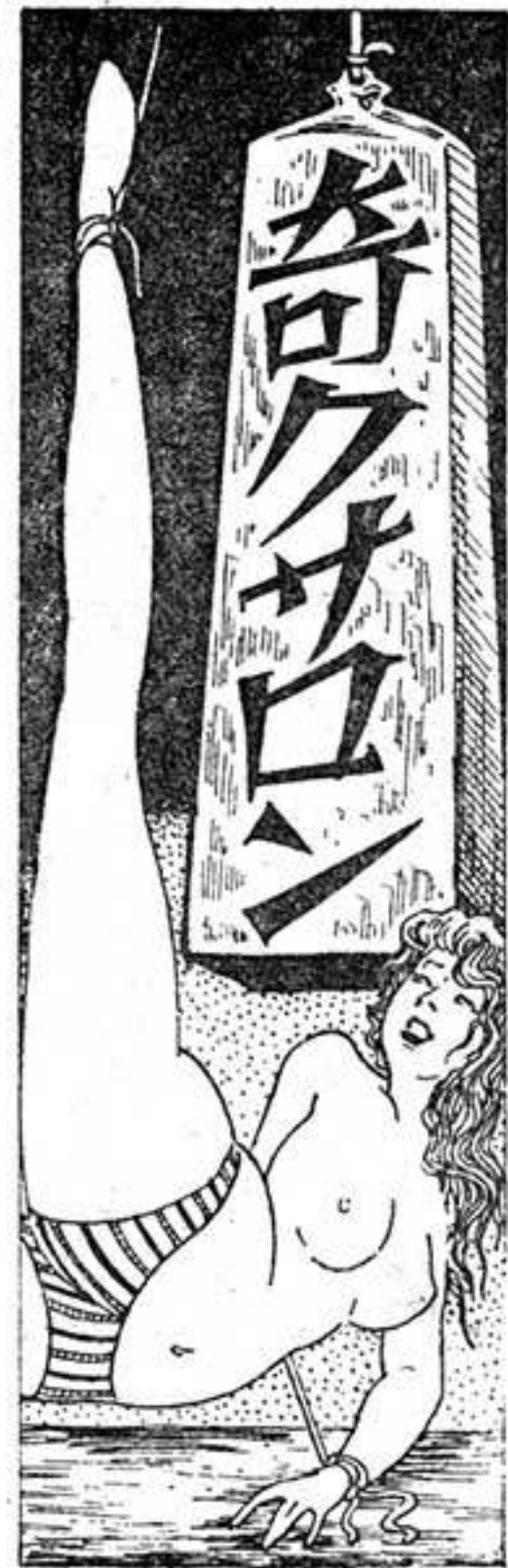












ひところ「悪妻」という言葉が流行してテレビでも徳川夢声、サトーハチロー、渡辺紳一郎、近藤日出造、奥野信太郎などの座談会「春夏秋冬」でも話題になったことがあったが、結論としては、悪妻必ずしも悪い妻ではないということに落着いたように記憶している。最近では、「悪女」とか「悪女ぶり」とかいった言葉が使われはじめた。

テレビの人気ドラマ「孤独の賭け」で悪女役を演じて一躍スターダムにのし上った小川真由美が、「悪女」の元祖のように言われている。二月二十日の夜「メイ子のごめん遊ばせ」で、この小川真由美がゲストとして登場。「悪女」役乾百子に扮したことから、悪女についての意見感想を述べさせられていたが、素顔の彼女からは、そういった悪女らしいイメージは

いささかも汲みとれなかった。

東映映画「二匹の牝犬」でも、売春婦を振り出しに株とミストルコで荒かせぎをして、遂に欲望のドロ沼に自からの身をほろぼしてしまふという徹底した悪女役を演じているが、彼女の異母妹でセックスをチリほどにも思わぬ現代娘役には、バーからスカウトされたという新人緑魔子が抜擢されて、魔女ぶりを発揮している。どうやら二代目悪女になりそう。

「こんな可愛い悪女なら大いに結構ですよ」と鼻の下を長くするファンが案外多くいるのではないだろうか。或は本年は悪女ブームになるかもしれない。

悪女悪妻から、先頃追放運動で槍玉に上った悪書となると、大分趣が違ってくる。良妻よりも悪妻の方が面白く、とは言えても、悪書は良書よりも面白いといったら大いに叱られそう。悪女悪妻はどんどん増えて貰って結構だが、悪書の方は姿を消してほしい。

元来(悪)という字には、悪源太義平、悪僧、とかいう使い方にもあるように、勇猛とか武強とかいう意味にも用いられる。さしずめ憎まれ子世にはびこる式の暴れン坊で、どうやら、現代の悪女とも似ていそうである。

悪女や悪妻である以上、弱々しくってはお話にならない。やはり男や世評を屁とも思わぬ猛猛しさはなくしてはならない。一匹狼的な孤高の悪女には、なにかしら興味が持てそうである。しかし、現実には悪女がいたら、袋叩きにあうのが必定だろう。現代の良識からいってそれが当然と考えていい。

高校の卒業式の答辞で恩師の棚卸しや攻撃をやらす男があるか

と思うと、入学試験に金を積んで裏口入学を計ろうとする男もいる現代である。大学入学率のよい高校から一流大学へ入り、よい成績で卒業して一流会社へ入社するのを、人生最大の目的にしている青年の多い現代の良識は、まさに小市民的であり、或る意味では泰平ムードに包まれた平和時代の様相である。

そんな小市民的な幸福の望まれる時代であればこそ、空想の世界では「悪女」が望まれるのかもしれない。現実には平穏だが、無味乾燥な生活を送るかわりに、小説や映画やテレビの上では、悪女を期待しているのだろう。

事実、一昔の婦徳とか、婦大学式の婦人に対する思想から考えれば、現在は悪女悪妻の氾濫時代といえる。人妻のよろめき小説やドラマが、案外貞淑な人妻の間で人気があるのも、一種の欲求不満のはけ口として見られているということも考えられる。

とまれ、悪女悪妻は大いに一世を風靡してほしいものだ。そして悪書の方は、出来るだけ早く消えてなくなれ。悪女悪妻が讃美されれば悪書は消滅するだろう。

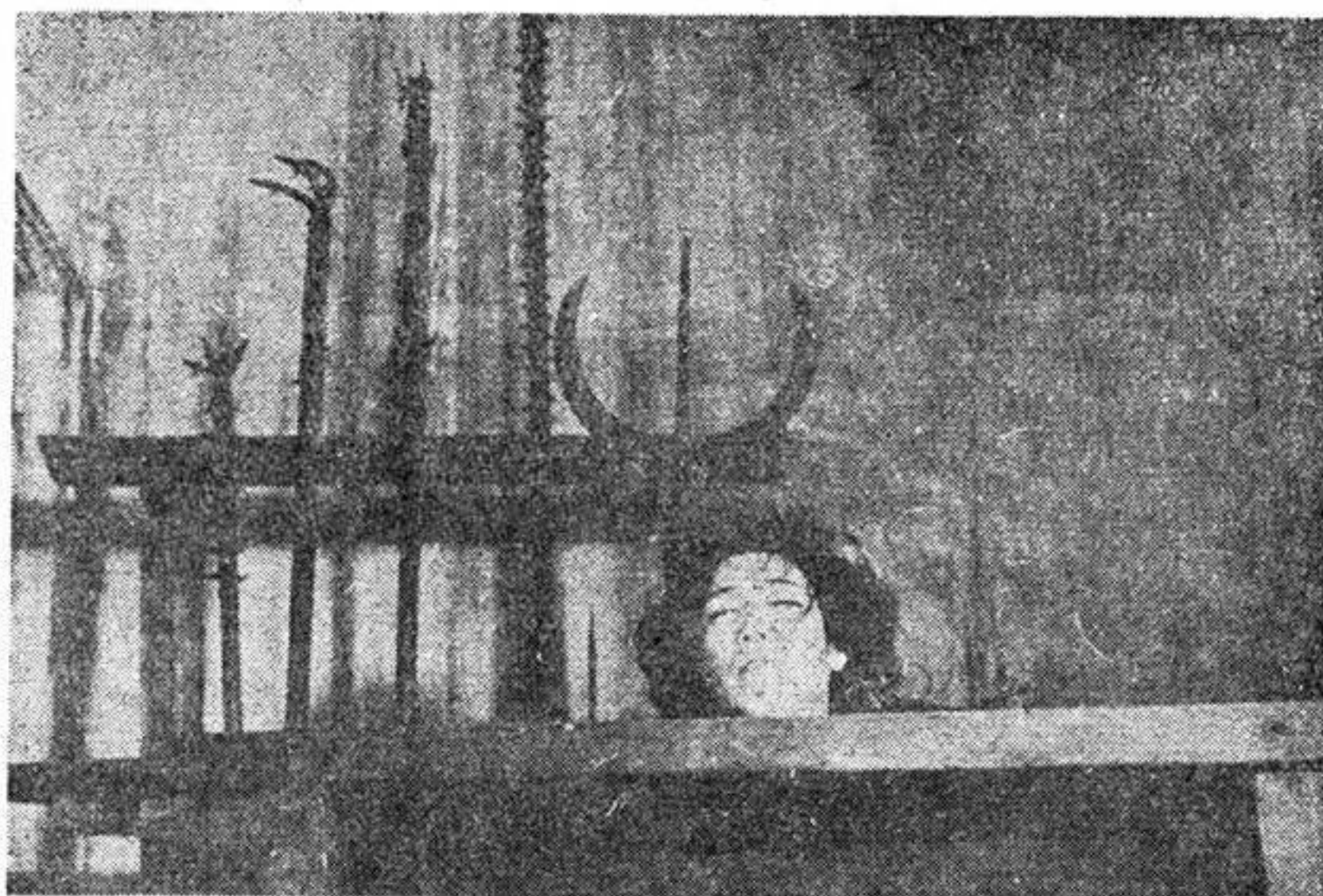
悪女と悪妻と悪書 編集子

サ
ロ
ン

楽^{らく}
我^が
記^き

辻
村

隆



「奇譚三十九夜物語」ひとつで汲々とする私だが、編集部からおしりを叩かれて、枯木も花の賑わいに、奇クサロンの片隅をまたぞろとりとめもなく埋めることになったが、諸賢よろしく――。

× × ×
或る週刊誌を開いたら、日大生の映画サークルが、サド映画と銘打たれた『銷陰』と称する、『砂の女』の亜流めいたものをつくって、物議を醸していた。銷陰とは関東流でいえば「お皿」と称して小野小町を謂うが、同じお皿も

関西へ来るとパイパンを意味する。一度観賞して見たい気しきりだが、部内の映画となると一寸その機会もなからう。

× × ×
三十九夜でも、少し触れたが、「奇ク」が、キンゼイ研究所で、翻釈されて、図書室に蒐集されているとは、いよいよ本誌も世界並み？の稀書として扱われ出した。拙作「三十九夜」がどの様に釈されているのか、一度その英文にお目にかかって見たい気がする。況してや同所の内外のセックス関係図書が、コーネリア・クリステンソン夫人という美人一人で管理しているそうであるが、ブルー・フィルム（？映画）の山に囲まれて、彼女一体何を思索していることや。

× × ×
馴れる（狙れる？）ということとはこわいもので、私が若かりしころ、某彼女と深い関係に陥り、遂にソーハの己むなきに到ったが、彼女を見舞った時、その医院の医者が、どうぞここを通過して下さい、と、診察室の奥を指さした。私は何気なく通り過ぎようとして、そのカーテンの横の、手術台に横たわっている若い女の、羞恥と驚愕

の眼を未だに忘れることが出来ない。開かれた両脚の前に座った医師は、平然と血にぬれたスプーン型の掻出鉗を振って私に目礼したのだったから……。

同じ職業の馴れた刑事にもあって、私が紛失屈で警察署を訪れた時、何を犯したか知らないが、如何にも小心翼翼とした、一見善良そうな四十過ぎの背広の男が、手錠をはめられた儘、人の出入りの多い、警察署正面の××課長と書かれた三角の立札のある机のよこに座らされていた。私が入って出る迄、男はその手錠の儘の姿で、羞かしそうに身をこごめ、おどおどと入口の方に眼をやっていた。

両方とも、職業に馴れた無神経が、つい何の悪気もなくそうさせたのだらうが、当人にとっては浮沈の瀬戸際の気持である。もう少しいたわりの配慮あっていいと思う。

さわいえ、私が箕田氏と逢った場合、喫茶店の片隅で喋べる話は縛りであり、裸であり、責めである。話熟せばつい声が高くなってドキリとする事を平然と大声で喋べっている。人がきいたらどう思うだらう。私も箕田氏も心すべきであらう。ひとごとではない。

モデル哀歓

塚本鉄三



× × ×
羽村京子さんと新宮明夫さんか
ら最近お便りいただいた。奇くを
通じて何か他人でない気がする。
いずれ折を見て、この人達と対談

し、心行くまで、浣腸のハナシや
生首、処刑のハナシを語り合っ
て見たい。その節は羽村さん、新宮
さん、何卒、よろしく願いま
す。尚岐阜の水野弘様——。私も

貴方の趣味を持合せている様で
す。新宮さんを通じて、私の住所
をおききになり、文通下されば幸
甚です。

× × ×

新宮さんへの、また四月号三七
頁記載の水野弘氏「女の晒し首」
へのお返しとして、私のとっとき
の生首写真ここに掲載します。御
笑覧下さい。

い意欲にかられていた矢先、残念
で仕方がない。或は富佐子夫人の
御主人が、当初考えていたグラビ
ヤに掲載したことによる効果や目
的が果された、ということも考え
られぬでもない。

マゾヒスティックなモデルが登場
すると、その女性が素人であれば
あるだけ、ファンから逢いたい、
とか紹介してほしいとか、写真を
うつさしてほしいとかいう希望が
多く寄せられるらしい。しかし、
その女性が仮に良いパートナーを
見つけたとしたら、再び誌上には
登場しないことを意味している。

○
なにしろマゾ女性、マゾモデル
(但し若い女性に限る) に対して
は嫁一人に婿八人だから、余程好
運兎でないといふ金を射止めること
は出来ない筈だ。しかし、宝クジ
や公団住宅、テレビのクイズ番組
の申込みと違って、アテモノじや

ないのだから、タイミングと腕が
よかったら、うまく金星を獲得で
きるチャンスがある。

○
これからは、せいぜい素晴らしい
マゾモデルをどんどん発掘開拓し
て、マニヤの方々へプレゼントし
たいものだ。それにしても、モデ
ルをホステスとしてキャッチ出来
た人が、その後の経過を報告して
くれないのは、ひどい。希望が
なったら、あとは野となれ山とな
れか。さりとては、なさけない。

○
いずれにしても、関谷富佐子夫
人の、あの迫真な好演技に対して
ファンの期待は大きい。なんとか
もう一度撮影のチャンスを持ちた
いものだと思う。或は妊娠された
のかもしれないが、もし事情が許
すのなら、この呼びかけに対して
何分のお応えを頂きたいものだ
と切に願う次第である。

○
自らマゾヒストと誇らかに自称
して、グラビヤ誌上にその麗身を
飾った関谷富佐子夫人は、その迫
真的な被虐の表情によって、多く
のファンを獲得していたのだが、
私の撮影記が余りにも刻明に描写
したのがいけなかったのか、その
後、便りに接しない。

人妻であるということ、商業的

なモデルでないこと、マゾヒスト
の素質を十分に持っていて、しか
も十分に訓練されていること、自
らグラビヤの掲載を望んでいるこ
と、等からして、従来にない型破
りのモデルであった関谷夫人。
○
鐘や太鼓で探し求めたって、簡
単に得られない貴重なモデルであ
っただけに、小生としても、これ
からもっともっと、いろいろ撮りた



強烈マゾ絵

“巨臀に屈伏する男” 評

田 麻須 男

毎月多くの試練を克服して奇くを発行して下さることを厚く感謝申し上げます。私たち読者も一致して奇く発展のため、協力したいと思っています。

小生の拙い一文を数回読者通信に載せていただいて、よろこんであります。自分の文が活字になることは、とてもたのし事です。読者の方々の傾向はSが非常に多いようで、従って奇くの内容もS傾向が多くなるのは、やむを得ないとは思いますが、やはり私たちMにとっては、一寸さびしい気がします。事情の許す限り、男性マゾをとりあげたものも、できるだけ多くのせて下さいますよう、おねがい致します。

○ 所で三月号一八三頁の広告に出していた、マゾ画「まか」は先に注文、送って頂き、その感想を読者通信（十一月号）にのせていただきましたが、あの広告を拝見し、改めて眺めてみますと、また新たな感じが湧いてきます。（勿論時々出してはいますが）先に述べた感想と重複する点もあると思いますが、重ねて感想を述べさせて頂くことをおゆるし下さい。

○ まず「臀部に潰された顔」ですが、本当に待望久しきものの遂にいずのことがびびったりです。今まで拝見した絵やフォトの中あのようにまともに、仰向いた顔

を完全にお尻の下敷にされたのはなかったようです。ただ記憶にあるのは、ずっと前、白表紙の時代の「変ないたずら」の中の四枚の絵の四番目のが、パンティー一枚のお尻を顔の上にのせているのがありましたが、これは、しかれているのも女性だっただけに、興味半減でした。

また、これも号は忘れましたが「サドル攻め」とかいうので、自転車のサドルの所に仰向けにしばらくつけられた男の顔の十センチ程上に、お尻を浮かせてペダルを踏んでいる女王の姿のがありました。が、顔とお尻の間に、あれだけのへだたりがあったのでは、あまり実感も湧きません。

更にマゾフォト「芳香に泣く」の一枚、椅子に仰向けになった男の顔をお尻の下に置いて、その臭気を嗅がせているのがありました。が、これも逆のりになっていて、男の鼻の穴がお尻の下に密着しないので、これでは十分にその臭気を嗅がされることはないと思います。あのフォトの場合も、今度の絵のようなまたがり方をされると、男の顔は完全に女性の股の下にふさがれ、パンティを通しての強烈な臭気に嗅がされたであろうと思います。

○ さて今回ののは全く今までのとは違います。たくましい巨大なヒップが完全に男の顔を下敷にし、あごのあたりがわずかに見えていて鼻などヒップと股に完全にはさみこまれているように見えます。女性の立派な体格から推して、あのようにまたがられたら、どんなに苦しいか、想像するだけでも胸がわくわくします。そして小生の想像は更に進みます。もしあの絵でスリッパがたくし上げられてパンティー一枚のヒップの下にしかれていたら、而もそのパンティが四、五日穿かれて、ひどく汚れていたら、その臭いはどんなに強い

だろう。あの男はどんなにくさい
思いをさせられるだろうと。

次に「人間トイレ」の方ですが
これ又、他には絶対見ることで
きない強烈シーンです。これもい
ろいろと想像できますが、まずこ
れを排泄前とみます。仰向けにな
った男の顔の上にまたがり（便器
に対していつもするように）下ば
きをずり下げ、今まさに放出せんと
する前の一瞬。

今一つの想像は、すでに排泄が
すんで、これからこの男に後始末
をさせようとする所。

以上「まか」二枚についての拙
い感想をのべさせて頂きましたが
マゾフォトは今後作らないとか、
これも希望者が小数とあれば、仕
方のないことですが、何とか一枚
でも二枚でも出して頂くようお願い
致します。万一このようなフォ
ト（「まか」のような）が実現す
るような場合でしたら、M男のモ
デルになってみたい気もします。

○
小生もちろんM傾向ですが、皆
さんの告白や手記を拝見している
と、自分の告白も書いてみよう
と、何度ペンをとりましたが、中々
思うように書けなくて中断してい

ます。Mといっても肉体に強い苦

痛を受けることは好みません。今
まで実行してきたこと（○印）。

これからは是非チャンスに恵まれた
と思うことを述べさせて頂きます。
（好む対象は二十五、六才ま
での未婚の大柄な女性）

1、四、五日穿かれて適度に汚れ
たパンティの臭気を嗅きなめる。

パンティは綿メリヤスが最適。小
水のある程度しみこんだのは尚良
好、（○類似のは何度かありまし
た）

2、開いた両脚の間に顔を入れ、
スカートの下に首をつっこんで中
にこもる臭気にむせびたい。

3、仰向けにねた顔の上に馬のり
にまたがられ、思いきりお尻の臭
気を嗅がされたい。

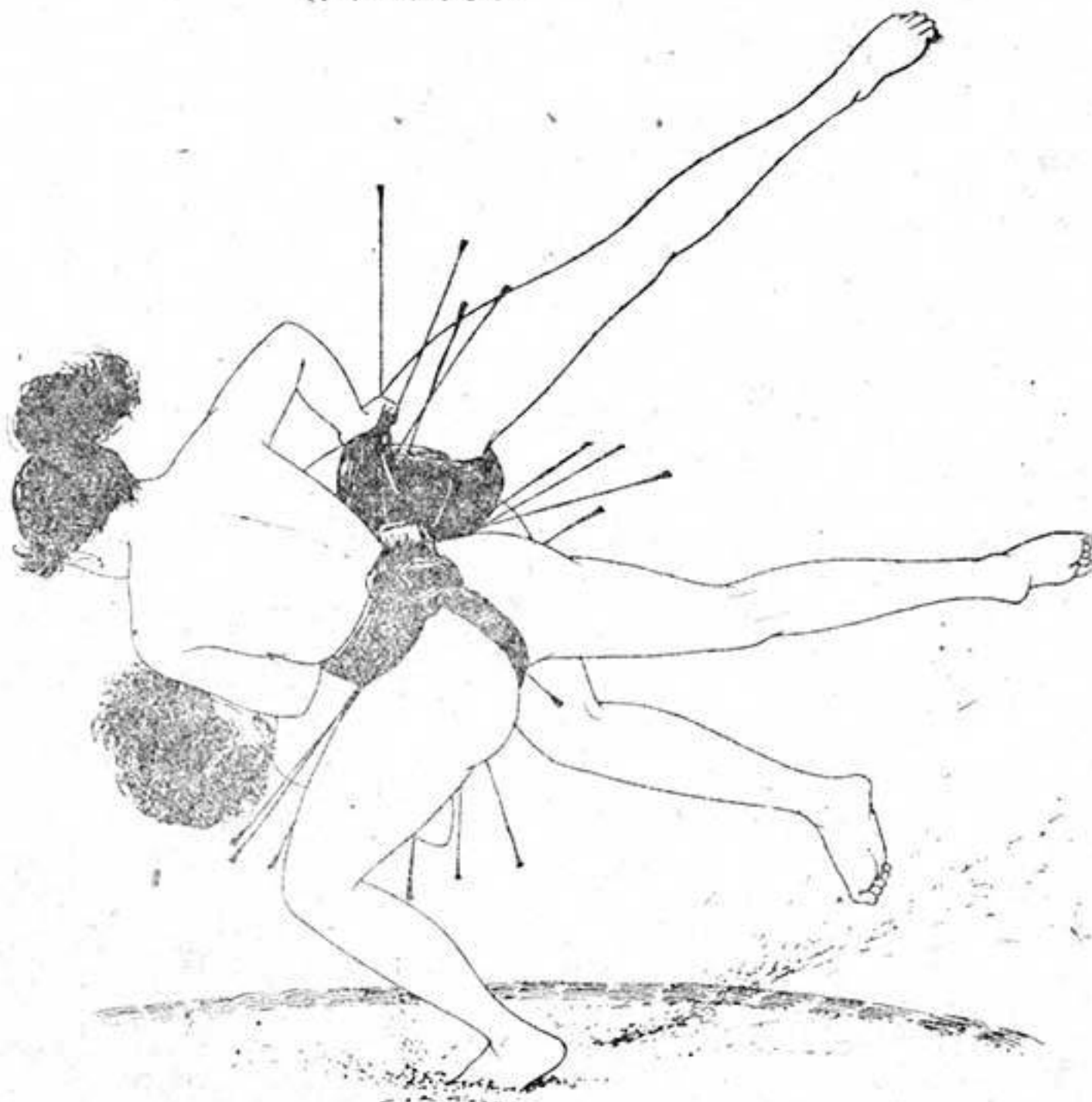
4、用便後のチリ紙の匂いを嗅き
濡れた所の味を味わいたい。（○
これはかなり多く体験している）

5、用便後のチリ紙の代用になり
たい。

以上、長々と下らぬことを並べ
ました。貴社の事業、企画を支持
し又なぐさめられることを感謝し
編集部の方々を心から信頼して、
思いのすべてをかくす所なくのべ
させて頂きました。どうかよろし
くお取計らい下さいませ。

久数亭畔

女相撲
（出し投げ）



△アブ・ア・ラ・カルト▽

○ふっくらとした丸い感じの白い
女の足が、画面いっぱいにおらさ
がっている。若い女の縊死体だ。
ボクは、縄にぶらさがった女の足
の爪先に、かぎりないサジスチッ
クなものを感じた。

○女装して深夜の街をさまよい歩
く男。そこには、スリルと無限大
の空想が入道雲のように湧きあが
ってくるのを覚える。

○本当にボクを足下にひれ伏して
しまうような素晴らしい女神は現わ
れないかなア。そんな女神がいた
らボクもマゾヒストになる。

○マゾヒストって、虫のよい空想
家。努力しないで金を貰って、そ
れでいじめてくれたって。その点
サディストは現実派だ。どちらが
幸福か。それは神のみぞ知る。

「煙草責め」フォトについて

畠山好一 (京都)

一月号、二月号、充実して楽しい限りですが、「鼻で吸わせるタバコ」は平凡すぎて余りいただけませんでした。

私も長年、タバコ責めを愛好して参りましたが、やはり口で吸わせる方が面白く思いました。赤い

写真(4)



唇にキセルやパイプが突きささっているポーズ等、同好の士を多く持っていると思います。

今回は私の撮りました口によるタバコ責めのフォトをお送り申し上げます。モデルは以前と同じBGです。この他に女子高校生の制服で縛り上げ、ハマキとキセルを吸わせて責めたフォトもあります。が、モデルが本当の女高生なので社会的に考えて遠慮させていただきます。

私はこのフォトを先生に御一見いただいて高評を仰ぎたく、ハマキ、マドロスパイプで責めていただけないでしょうか。

私の体験しましたモデルは今のところ三人で、共にタバコは吸いませんが、責め方によって非常に煙にむせるリアルな姿を見せてくれます。BGのモデルは前に述べた通です。全然喫煙の経験もなくタバコがきらいな方です。女高生は京都のある私立女子高校生で、

実際ガラは余りよくありませんがタバコを吸う習慣もなく、面白半分には吸う程度ですが、縛り趣味がなく、むしろ嫌がる方です。着衣の上からの軽い縛りといった程度で、どうしても制服の上から縛り上げることになります。

マドロスパイプのパイプタバコの香が好きだといって、マドロスパイプをくえさせておくと、何時間でもつき合ってくれます。ハマキ、キセルはどちらかというといやがりますが、ナタメギセルにパイプタバコをつけて吸わせると機嫌がなおります。

最後の一人は洋裁学校へ行っている二十四才の女性で、彼女は緊縛にしてもタバコ責めにしても、セックスがともなうのが好きなので、私のインスピレーションを完全に満足させてくれません。しかし、調子のよい時は、鼻の穴にシガレットを二本さし込み、口に短いハマキを二本くわえさせて火をつけて吸わせてやると、顔中煙だらけにして吸い続けます。又、彼女はキセルが好きで、キセルをくわえたまま白い煙を吐き出しています。大の字縛りのキセル責めも彼女の好きなポーズの一つのようです。

写真(8)



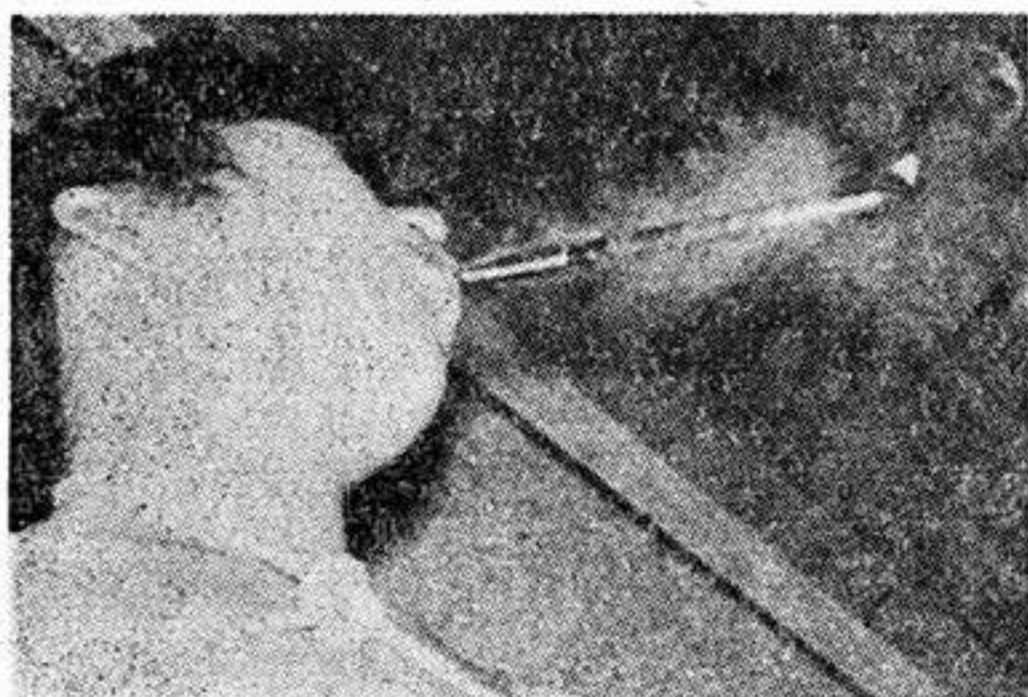
BGのモデルは一番素直に私の好きなポーズで撮らせてくれるので、楽ですが少しおとな過ぎるのが欠点です。

ここに同封しました十四枚のフォトの説明。

一、パイプ二本をくわえさせて責めている所で、少しタバコに酔ってへたり気味です。

二、高手小手に縛り上げてパイプをくわえさせて喫煙させているところ。全裸です。

三、全裸で腰の後手縛り、パイプで喫煙させながら、これから引き



写真(14)

廻します。
四、綾縛りに縛り上げて柱につながぎ、パイプでタバコを吸わせています。タバコの煙がよく出ているでしょう。
五、柱に後手に全裸で縛り上げ、シガレットを横ぐわえさせて責めています。
六、イスに縛りつけ動けないようにして煙草を吸わせています。
七、全裸でシガレットの横ぐわえのポーズです。
八、同じポーズで煙の演出。

九、イスに開股全裸縛りにしてタバコを吸わせています。短くなつてくると悲鳴を上げます。火の落ちる所が……。
十、BGに対する拷問、身もだえして泣きながらタバコを吸っています。
十一、全裸で柱へ後手縛り、口にはキセルがぐわえさせられ、喫煙中です。
十二、高手小手に縛り上げて長キセルでタバコを吸っています。
十三、ポニーテイルの少女が全裸で縛り上げられて、長キセルをぐわえてタバコを吸っています。
十四、縛り上げられてキセルをぐわえて煙をふき上げる少女。
貴誌におきまして十四のポーズのどれか、あどけない女性にあってはめてタバコ責めを写して下さい。私は単なる空想だけでなく、このようなフォトを先生に見ていただいて一つのイメージを作っております故、よろしくお願い申し上げます。

可愛いモデルでお願いします。
勝手なお願いばかりでしたし、誠にすみませんでした。よい手本があれば、私も今後タバコ責めに捧げるつもりであります。
(タバコ生)

【編集部より】
畠山氏から送られた十四葉の煙草責めフォト、セミ判密着焼は、いずれも煙草責めファンである氏が永年の経験を生かして撮影した快心作ばかりで、私達も大いに参考になりました。
ここに掲載しました四、八、十四の三葉は、背景に黒又は黒に近いダークグレイを用いて、吐き出す煙草のけむりをうまく画面に出しています。これが白っぽいバックだと、全然けむりの感じが画面にあらわれず失敗に終わるところなので、さすがに畠山氏はよくこの点に留意しています。
四、のパイプ。八、の紙巻タバコ。十四、のキセルと三通りの喫煙具の使用した責めが、カメラアングルを奇抜なまでに変えている



写真(9)

のも平凡さを救っています。
九、の椅子に坐っての後手しぼりは、面白い狙いで煙草責めとしてでなく、単に緊縛フォトとしてもよいポーズです。只惜しいことには背景がごたごたしていたため、折角の煙草のけむりも目立たないしくわえた口元も見えません。バックを整理し、やや顔を左向けに回して口元を見せ、怨嗟に満ちた視線をカメラに合わせたら、素晴らしい作品になったと思います。
掲載できなかった作品も、それぞれに面白いのですが、特に注目したのは、六、のモデルの身のこなし方と、二、の後手のしぼり方でした。

「私は解剖を見た」

上 城 裕

小生は思いがけない事から、解剖に立会ったことがあります。そのショッキングな光景は八年経過した今も尚、まざまざと小生の印象に深く刻明に残滓を残しております。

小生は当時、株式会社といえ小さなワンマン会社の総務課長をしておりましたが、小さい会社のことゆえ、社長の片腕になって、何でもゴザレの存在でした。

社長は相当の好色家で、三号ぐらいまで囲っており、小生だけはすっかり打明けられて、二号、三号の連絡をしておったわけです。

忘れもしない四月十八日のおシヤカ様の日です。前日、社長の奥さんが急死しまして、小生もその為、夜中に駆けつけ、あれこれと葬儀の準備に走り廻りました。急な心臓麻痺の診断でした。翌日葬儀の正に始まろうとする時、数人の警察の方が見えられ、死因に不審な点があるから解剖したいとのことでした。

小生も急死で少し不審は感じていたのですが、警察に分ったのは近所の人の、投書からだったそうです。兎も角親戚一同の口添えで葬儀は無事終り、火葬場で柩は一且カマに入りまして、人々が散開したあと、小生は唯一人、責任者として残り、その場から再び柩は出されて、霊柩車で、運転手と刑事と小生の三人が乗って一路〇大の解剖室へ死体が運び込まれたのでした。

小生はよければ立会いする様にいわれ、胸をドキツかせ、刑事と二人棺桶と共に、白いタイル貼りの、ガランとした、いやに光線のみが明るい解剖室に入りました。裸の上から白い筒袖の白衣をきたマスクをかけた解剖執刀者が三人無表情な顔であらわれ、社長の奥さんを柩から出すと、無雑作に死出の晴着をくるくると剥ぎとり、すっかり裸にして、解剖台の横の台秤にのせました。刃方を記入しておくのだそうです。

「紫(死)斑が出ているネー」とその一人が呟やき、夫人を台上にねかせました。急死の為夫人の体は全然おとろえておらず、死出の薄化粧で、まるで生きている様に静かに横たわっています。子供がなかったもので、三十九才でしたが体は若い娘のように引きしまっていました。

執刀人は胃の辺りから下へかけて軽くメスを入れました。腹部がパクリと割れても、血も流れません。長い腸や、胃が片鱗を覗かせ始めます。もう一人の眼鏡をかけた白衣の方がその胃の辺りに顔をよせ、覗き込み一人でうなづきました。何かそれと共に食物のかけらを皿にとり出しました。傍らの刑事に冷静に告げているのが小生の耳にも入りました。

「矢張り胃酸カリですよ——」
刑事は小生を残して、メモをしまうと帰りました。二人は物体を扱う様に手早く腹部を縫合していきます。うっすら汚れた腹部を、アルコールで拭くと、再び台秤にのせ、刃方をしらべてから、着物をきせたのです。

二号、三号のあることを知った奥さんが自殺して夫に社会的な痛烈な復讐をしたのです。

◆変天古林短信

○小説「ソドムの罌」で男性の同性愛を描いたシャンソン歌手兼作家の戸川昌子さん。今度は自作の「獵人日記」が日活で映画されるに際して、主役の人妻役で主演することになった。

○この作品の筋は、奇型児出産で男性恐怖症に陥った人妻が、美しい女を愛撫するようになっていく精神的な面とその肉欲とを追求していく、という代物だけに、新しい女性同性愛のシーンに期待できそうである。

○ショッキングな映画として話題をまいた「地球の皮を剥ぐ」ではパリの同性愛クラブに隠しカメラがもち込まれ、若い女たちの同性愛の姿を見せてくれたが、伊仏合作映画「ショック」では、「人間の性的欲望を白日の下にさらす作品」という凄惨なサブタイトルにもあるように、今までの「夜もの」「残酷もの」より一歩突っ込んだアブ的な世界にレンズを向けている。

○黒人男と白人女のセクシーなダンスは、これまで何度か登場しているが、この映画ではそれにマゾヒズムとサディズムをからみ合わせる。

女腹切「落城の女」

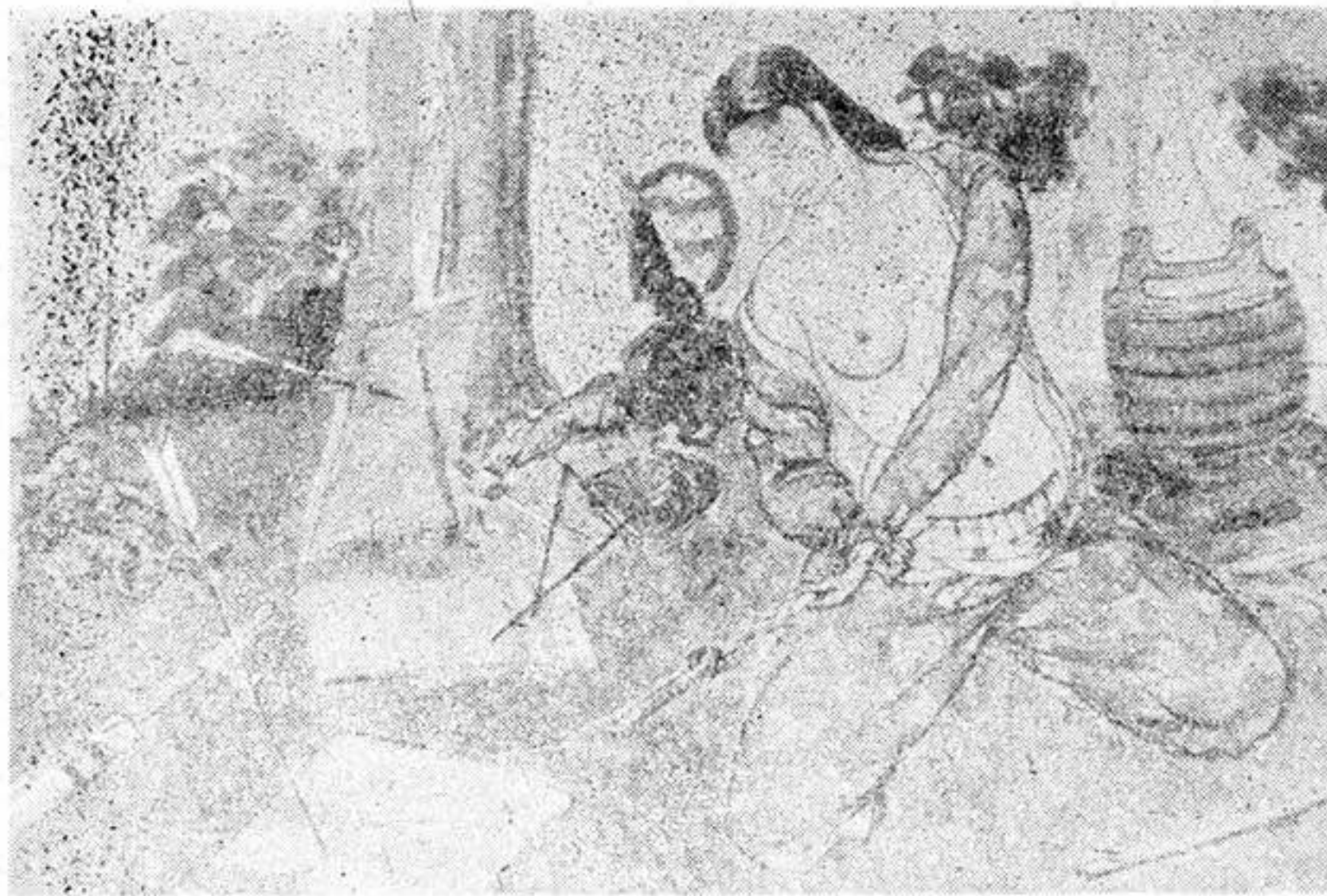
飯 森

潔

私がひまを盗んで画いた女腹切の絵です。上は戦いに敗れた陣屋

にて侍大将の娘が敵の迫る前に潔く腹を切って果てます。下は城外

にての転戦利あらずして引上げる途中、すでに城が火に包まれているのを見て、今はこれまでと雄々しくも小山にて腹を切る武家の娘二人の姿。



せ、本当にかみ合ったりなぐりつけるなど、男女とも肌から出血するといったぐあいで、現代イタリヤ人の好む一つのスタイルをあらわしている。

○マゾヒストのダンサーとして有名なリデー・サガッティニ(26)は、男三人になぐられて床に倒れた打ちまわりながらエクスタシーにおち込んでいく。アップにされた彼女の肌には生傷の跡が点々と見えているそうナ。

○ただし、日本の映倫では「変質的演技ならばまだ別だが、本当の変質者の姿を公開することには、心傷者の項にあてはまる」ということだから、大いにカットされることだろう。

○一月二十三日に放送されたTBSテレビの「海に出る蝶」は、人妻の妊娠中絶シーンを描いて「中絶ドラマ」の先駆をなしている。ヒロイン(蔵悦子)は病院をたずねて中絶する。手術台に乗った彼女のアップ、そして過去の思い出画面。看護婦が「ハイ、終りました」と声をかけ、気がつく彼女。医者は手を洗っている……。

「昨日の雲は帰ってこない」「振りむけばひとり」(TBS TV)も人妻の中絶を扱っている。

短信往来

「出産をすませて」

馬場アヤ子

二十五才になる人妻でございます。夫が時々「奇ク」を買って参りまして愛読しておりますので、夫の出勤後、思わず開いて顔を赤らめたり、ドキドキして読むうちすっかり「奇ク」のトリコにされてしまいました。

私は記事の中でも、特に妊娠のことに興味を惹かれます。と申しますのは、私自身、つい一カ月許り前まで、はちきれそうなオナカを抱えていたからでございます。私のこのすばらしいオナカを夫がカメラで撮ってくれたら……と幾

度考えたかと思いますが、恥かしくてそんな事はいい出せませんでした。

私は結婚後一年半で宿りました。この度が初産でございます。婦人雑誌などで随分出産の心得も読んでおりまして覚悟はしておりますが、流石に八カ月を過ぎると体がだるく、両脚は青い脈瘤がくつきりと浮き上り、膀胱が子宮のふくらみにつれて圧迫されますのか、とても小用が近くなり、何か少しでも重いものを持ちたりすると、思わず洩らすことがございます。夫に内緒でオシメカバーを手製でつくり、アンネナプキンや脱脂綿を挿んで防いだこともあり

ました。臨月になりました、夫のすすめで、或る産婦人科に予定日の四、五日前入院致しました。生れて始めての高圧浣腸で腸内のものをすっかり出して、摂食し、無痛分娩レコードをきかして戴き乍ら、無事男児を分娩致しましたが、院長先生が、間もなく入って来られ、私の産んだ男児の、それこそ産み立ての赤児の写真を見せて戴きました。(あとで夫より知らされましたが、それはボロライドというカメラで、撮ってすぐ写真になっ

て出るという便利なカメラだそうです) 私はうっすらと涙を浮べて我が腹を痛めた男の児の写真をみつめていましたが、こんなことを思い浮べました。若しこの院長先生に私の口からお願ひしたら、私の臨月腹の写真や、分娩時の写真も、都合によったら引受けて頂けるのではないかしらと思ったのです。そんな考えが、思わず私の顔を赤らめ、羞恥が全身を走りましたが、私が秘かに誰にもお見せせず大切に保管するのだったら、院長先生はきっと快諾なされる事でしょう。

若し運よく、再び妊娠したら、その時こそ、私は勇気をふるって私の臨月のおナカの写真と、分娩の写真をとって戴く様お願いするつもりです。

まるでホテルの個室の様な病室に分娩後三日間、ゆっくりと休みまして、私は無事退院しましたが健康な私のことですから、いずれ早晩、産児制限でもない限り妊娠することでしょう。それまでに私は勇気を培う覚悟でございます。産婦人科病院では、最近あちこちで、この種のカメラで、サービスなさっているそうですから、私と同じ様な気持で、「奇ク」の

女性の方にも、妊婦のフォトを申込みれる方はいらっしゃいませんか。でしょう。

□ □ □



女王様への思慕

犬山 畜男

誰にも秘密はあるもの。私自身の長年に亘る苦悩に満ちた半生の裏側こそ、苦しくもあり又愉悦に満ちたものでした。私のマゾ遍歴の大部分は、世のマゾヒストの皆様と同じ様に、多分に空想的であり、まれに果し得たマゾプレーも極めて初歩的な今にして思えば赤



面の至りというべきものでした。しかし、これらの数多い空しい過程の中に持ち得た、極めて僅少の夢幻の世界こそ、今の私にとっては、何物にも代え難い貴重な姿なき宝でもあるのです。

世にも賤しい下等動物である事を願う私犬山は、己が人生の裏側総てを白日の下にさらし、伏して御理解ある女王様方に懇願申上げる次第でございます。

私は過去の体験から、私共マゾ

ヒストにとって、空想と現実とが如何にかけ離れたものであるかを良く理解しております。空想の世界に於ては、最も私を楽しませたはずの行為が、現実には何等価値なき場合が実に多いのです。

以下、私は自らの実行し得る恥辱苦痛の世界の限界を、率直に申し上げ、数少ない確率に希望をつなぎつつ、私犬山に君臨する女王様の御呼びかけを御待ち申し上げる次第です。

一、鞭打等による肉体的苦痛

私は肉体的苦痛に関しては、率直に申し上げて、忍耐力が強いと申し上げられません。但し臀部に受ける鞭打に対しては相当量の苦痛を耐え得られます。しかし鞭打が奴隷に対する屈辱の代償として行なわれる場合は、別の感興が湧き強度の鞭打に耐え得られます。緊縛については、強度のものにも喜びを以て耐え得る事を申し添えます。尚、血を見るが如き責めは、残念ながら否定せざるを得ません。

二、動物化による御奉仕

マゾヒストの願望する畜化現象を大別して、恥辱願望は犬化、苦痛願望は馬化の二つに別けられると存じますが、恥辱願望の強い私

は犬化を特に望む次第です。

犬として扱われる場合、肛門に尻尾をさし入れ、全裸にて首輪、鎖をつけ人目につかない屋外を引廻される事、残飯の投与等、いずれも実行した事があり、特に私を楽しませてくれました。馬としては約一時間以上にも亘りカーペツトを敷きつめた室内を、十三貫三百匁を女王様を御乗せして這い回った経験がございます。但し、膝には脛当てをつけさせて頂きました。体力のある私にとって、重量はさ程でもありませんが、膝がすりむける事により女王様が御乗心地の悪くなるのを防ぐ為です。

三、屈辱による責

1. 叱責による屈辱感、私にとって非常に有難いおめぐみでございます。どの様なおさげすみの御言葉もいとませぬ。

2. 道具化による屈辱感につきましては、次の様な事を体験し又実行致しました。

○椅子代りとして半日六時間に亘り御奉仕致しました。

○人間テールとして四つ這いの背にシートをかぶせ板を背中に縛りつけて体を動かす事なく約二時間、女王様と御友人の御食事の間御奉仕致しました。

○灰皿代りとして、口にビニールの袋を押し込められ、その中に水を少量入れ、唇にセロテープで其の袋を固定され、まる一日絶食のまま御奉仕致しました。

四、汚物に対する御奉仕

便器として御奉仕する事は、私にとって、最も自分の下等を満足させる行為でございます。私の過去の経験の中でも、此の行為が非常に多かった事は事実です。しかし、私は糞尿がおいしいのではなく、それを食べねばならぬ自分の下等さに心ひかれるのです。

以上、思いつくままに申し上げましたが、私の過去に於ける実際に体験した事を率直に告白し、此れ以上の苦痛恥辱を喜んで受け得る様な、真の下等家畜として、私を御飼育して下さいます貴くも残忍な女王様の御呼びかけを伏して御待ちする次第です。

尚、私犬山は当年四十一才の雄にて、昼は従業員約五〇〇人の会社の社長を致しております。身長は一七〇糎、体重は二十三貫で、スポーツで鍛えた体力には自信がございます。御呼びかけは誌上或は編集部へ御問合せ下さい。

東京都(犬山畜男)

△夫婦のSMプレイ▽

私のうつした写真

長田 実

最近の本誌では、新宮明夫氏や水野弘氏の「夫婦のSMプレイ」によるフォトが掲載され、大変よろこばしく思っております。

只、以上のお二人は、SMプレイとはいっても、いずれも生首フォトを中心にしたもののが、私にとって残念にならないところで

した。もっと、ひろくSM全般に亘っての「夫婦」のプレイが誌上に紹介されたら、と常々考えている一人でした。

かく申す私は、本誌の古くからの熱心な愛読者で、妻を相手に下手の横づきの写真をものしているマニヤですが、本日はここに近作



の中、数点をごらんに入れ、編集部の方々の御批評御意見を賜りたいと存します。

読者通信には、よく夫婦のプレイについて、お便りを寄せられているのを拝見するのですが、その作品に関しては、余りお見受けしないので、私の拙い作品をごらん頂いて、その上で次々と愛読者の作品がのりますことを心から願っております。

〔編集部より〕

長田実氏から寄せられました写



真五葉（中二葉掲載）は、いずれも露出も適度で仕上げも入念に綺麗に上っていて、美しい写真でした。モデルになられた方も若くて中々の美人なので、緊縛フォトとしては、立派な作品となっております。縄の掛け方や猿ぐつわについては、各人それぞれの好みがあるので批評は差し控えますが、惨酷味よりも緊縛美の方に重点がおかれた作品のようにお見受けし、この狙いは大変好ましく思われます。



現代世相アプノルム

○ 戦前、日本で最も発行部数の多かった雑誌は、産業組合のだして「家の光」であった。書店へは一冊も配本していない、この雑誌が何故日本一の発行部数を誇ったのだろうか。それは組合員に対して、否応なしに割当てたからである。従って或る農家では、親爺と息子と娘の三人が一冊宛持って帰ったという話もある。講談社のキングが五十銭の時、家の光はたしか三十銭だったと思う。

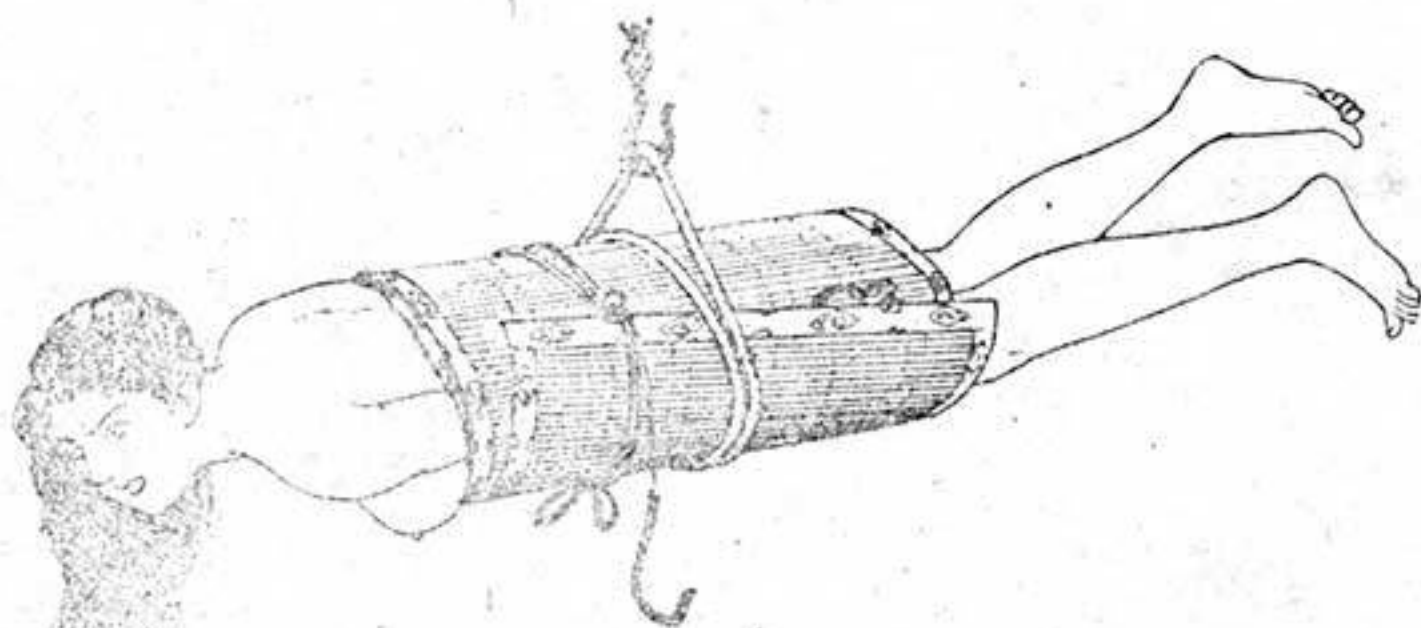
○ 現在では、最も発行部数の多いのは、新興宗教の機関誌ではないかと思う。これは信者になった以上、皆買うだろうから、先ず信者の数だけは確実にでる。S学会なんか、内容は攻撃的で非常に熱心なのが特徴だ。

○ 新興宗教といえば、神道から出た出雲なるとかという大変病気をよくなおす教祖のいる宗教団体の祭礼の日、小児麻痺の子供を焚火の上に渡した板の上の歩かせて墜落してヤケドを負うという事件が起った。板の上をうまく渡り終えたら病気はなおるというのだが、もともと手足の不自由な子供だったので、途中で落ちたらしい。

○ その信者に聞いた話だが、教祖家族の住んでいる本堂の前を信者が通る度に、石畳の上に土下座して拝礼する由、それも通る度にやるのだから、日に何回も何回も土下座しなければならぬ。ちょっと考えただけでも、マゾヒスティックな感興にかられる。

○ 御上人さまの浴みされた風呂の湯をお下りの水として、珍重して頂く(飲む)という風習のある仏教もあるそうだから、既成宗教があながち新興宗教を蔑むに当らない。既成宗教も元をただせば、新興宗教だったのだから。

○ 宗教といえ、キリスト教の例をとるまでもなく、迫害がつきも



簾巻き

畔亭数久

のである。現在日本国憲法では信教の自由を謳われて一応表面的には自由らしく見える。しかし所詮これも、言論出版の自由や再軍備廃止といった憲法の明文程度の保証に過ぎないのだから。

○ 迫害を受けた宗教では、これを

「法難」として信者に対する宣伝材料に用いるから、迫害者のSに被圧迫者のMという形で、宗教団体の内部では、かえって結束が固くなるというものである。然し迫害者がいつも優位にあるとは限らない。嘗ての憲兵や特高が戦後追放されて、飼われた猫のようになつた例もある。

○ 昨年の夏の日中、〇〇教団の会館建設地で、十七、八才の信者の乙女達がモンペにズック靴という袋で土運びしている光景を目撃したが、顔だけきれいに化粧した乙女達が泥まみれになってモッコを担いでいる有様は、一寸見慣れぬ異様さだった。手足や顔の白さからして都会育ちのお嬢さんだろうが、バカンスブームに湧き立っている夏休みの最中、こういう奉仕を自発的に強いている宗教のあり方に驚異の目を瞞ったものだ。

○ 「宗教は阿片なり」といわれたことがあるが、宗教的法悦境と麻薬的陶酔境とは一脈相通するものがあるのは事実だ。麻薬にしても宗教にしても、人民がその醍醐味に耽けることに対して為政者が好ましく思わないのは当然である。

奴 隷 募 集

津 田 亜 紀 子



ゴムプレイに興味のあるマゾヒストの男性の方で（なるべく中年で妻子のある方が好ましいです）週二回位、私のドレイとして奉仕して下さる方はないでしょうか。私はある外国系の商社に勤めておりますO・Gですが、高校時代にゴムの魅力にとりつかれたのが病みつきになって婚期におくれてしまいました。

自信があります。現在アパート一人住いです。
私のコレクションは、
ゴム合羽（表黒、裏赤ゴム）新
しいもの一着、古いの二着。
水枕（ダンロップ）
ゴム円座（赤ゴム）
ゴム浮輪（大）
ゴムボート（小）
ゴム長靴（黒、一枚ゴム裏ばりなし）
太ももまでのもの一足。ひざまでのもの一足。

エヤーマット（ビニール）
ゴム前掛（黒）
ゴム手袋、炊事用赤一、黒一、手術用白一。
というところです。
これらの品を組合せて、大体毎日（お休みの日ですと、夜中に一回または朝方にもう一回位）ゴムプレイを楽しんでいます。しかし一人ですと、どうしてもプレイに限度があって、たとえば水枕やゴム長などはプリプリ動きますのでベッドの中で両手を使ってサポートしないと、タッチが楽しめません。ゴム合羽も肌に当てた上から撫でるように摩擦しないとゴムの感触が十分味わえませんが、手を使うと、どうしても感興が削がれます。
それで最近はいつも椅子にエヤーマットをしぼりつけ、クッションの上に空気を入れた円座と水を入れた水枕をおいて、その上にひろげたゴム合羽をカバーのようにかぶせてゴム椅子に裸になってゴム長を穿いただけで後向きに馬のり跨って楽しむ「ゴム椅子のプレイ」を愛用しています。
そんなわけで理解のある男性の方に、ベッドでゴムプレイの奉仕をしてもらえればと思うのです。

プリプリする水枕や円座をゴム合羽にくるんで用いたり、エヤーマットの上にひろげたゴム合羽の上に腹ばいになり、折り曲げたゴム長をおすもうさんのまわしのようにならねえと、ピタリ押さえていてもらったら、どんなにすばらしいでしょう。
それから自分一人では、どうしても出来ない人間トイレもぜひ使ってみたいのです。もちろんユニオンの方だけで結構です。太ももまでのゴム長をはいたまま、思いきり浮輪や水枕、円座などの量感をとり入れた人間トイレのプレイを楽しんだらほんとうに嬉しいと思います。
ドレイには、私のつくったゴムパンティ（パンティのうらにゴム合羽のゴムを切りとってぬいつけたもの）を制服としてはかせてあげますし、ゴム長ぐつを穿いた足で踏んだり跨ったりしてタップリいじめてあげます。時には思いきりけとばすかもしれないが、傷になるようなことは、しないつもりです。うつぶせにしておいて、太ももの間にゴム長をはいた足先をさし込んでこね上げるプレイも考えています。
どちらにしても、私を楽しませ

てくれれば、ドレイの奉仕次第できつとヒーヒーうれし泣きがでるほどのきついじめ方をして差し上げます。

御希望の方は、条件を書いて奇クに投書して下さい。
(東京都太田区雪ヶ谷八津田亜紀子V)

チリ紙奇譚

(夏山の出来事)

佐美山 新

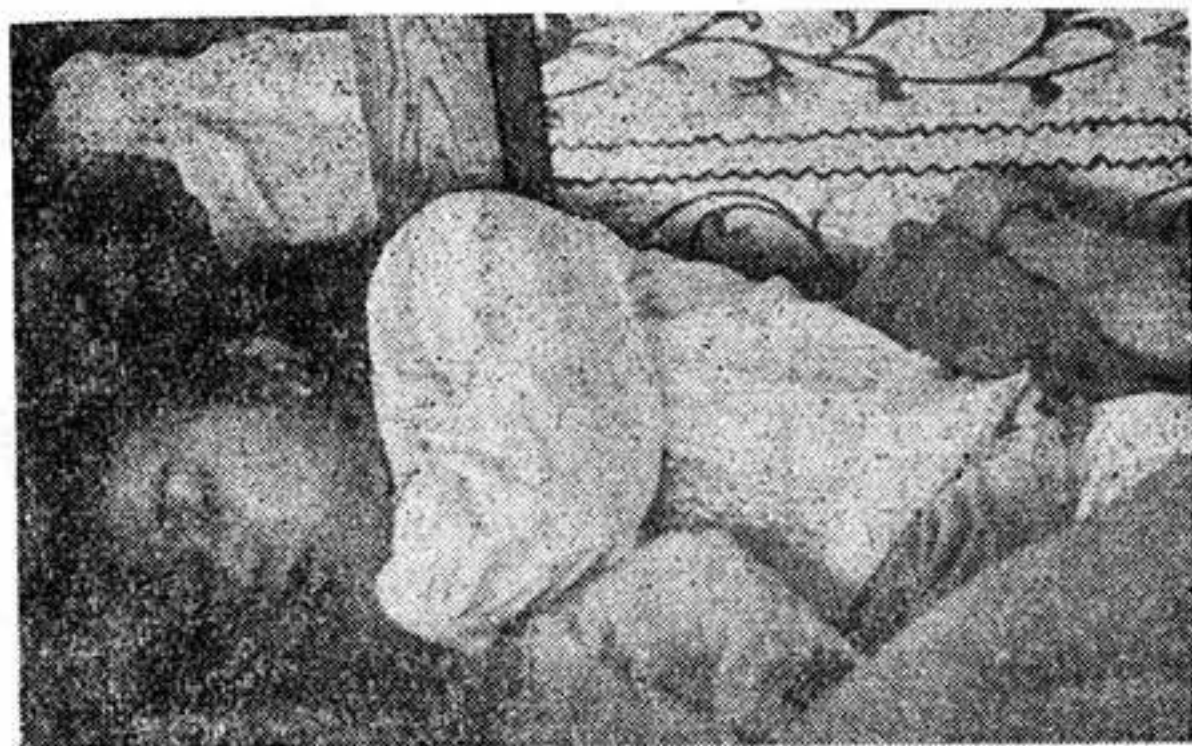
私は何時の頃からか、変な事を覚えてしまった。いや、覚えてしまったというより、この頃では、大変な興味をおぼえ、自ら漁るようになってさえなっている。

それは、その辺にありふれたチリ紙である。チリ紙といっても市場や雑貨屋の店頭に山と積まれているうす汚れた黒味の再生紙のことではない。三十枚位にたたまれて赤い帯封をかけた、あのまっ白いすぐ破れるあのチリ紙である。ましてやピンク色のキレー紙ときたら尚更結構であるが、未だに私の漁っている範囲内では、そんな高級なチリ紙に出くわしたことがない。殆どが水につければすぐ

とけてしまいそうな白いチリ紙ばかりだ。

それも、ただの白いチリ紙に興味があるのではなくて、道傍や公園の木陰、林の中、森の中、人の行けそうな草深い所にいくありげに投げすてられた、或はすこし水分をふくんだしっとりとしたチリ紙こそ、私にとっては天にも登るような心持にさせられる宝物なのだ。

草の生い茂った林の中で、人和れずここでのようにしてチリ紙が使われたのかと思うと、私は人の気のない林の中とはいえ、そつと周囲を見回しつつ、そのチリ紙をひろげてみる。しかし、大てい



の場合、ただの丸められた何んの意味も味うことのできないチリ紙ばかりである。

行きずりの人が鼻をかんで捨てたものか、又唾液をチリ紙に受けて捨てたかも知れない、こんなものでは私の興味は湧いてこない。

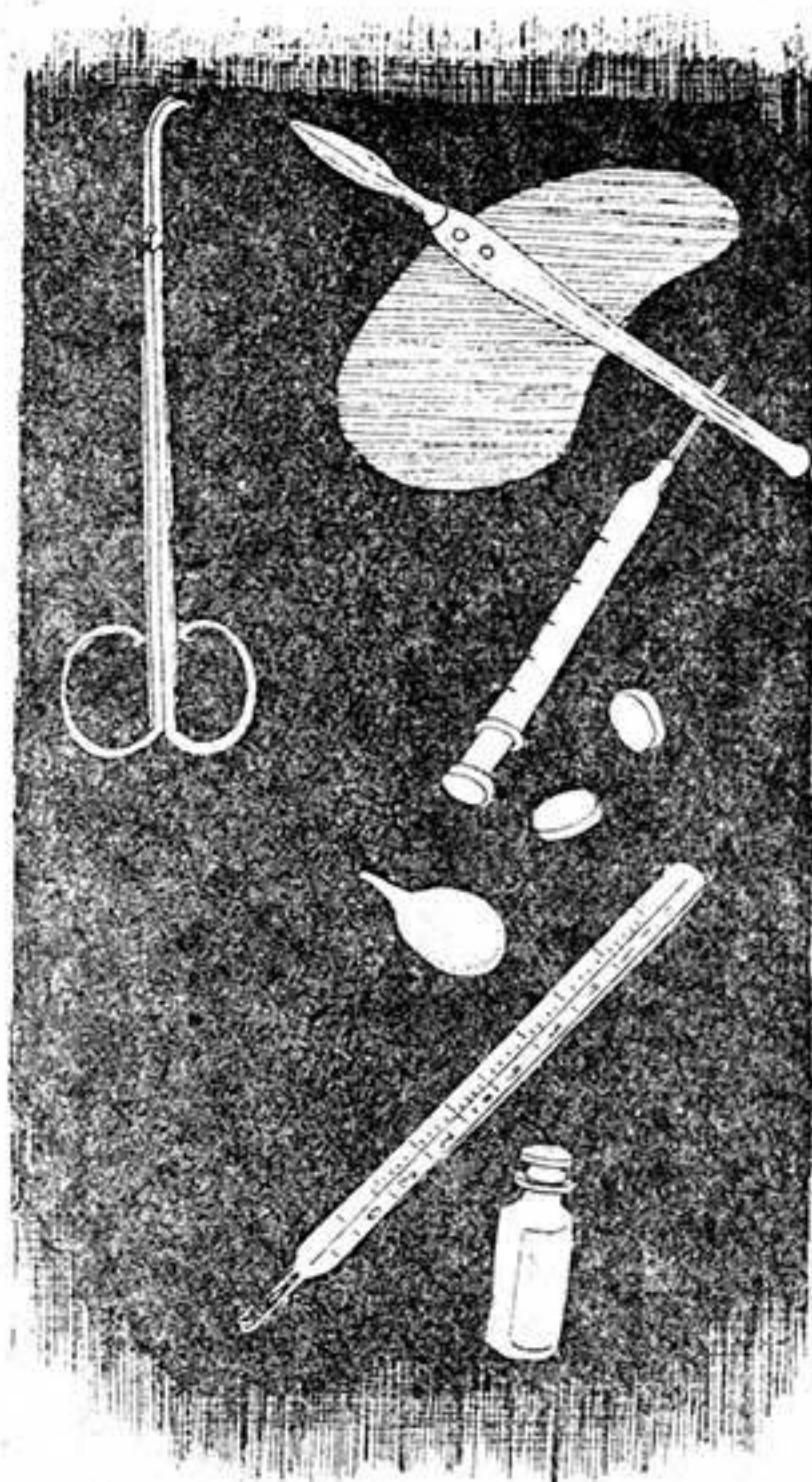
ところが、そんな奇行癖を持つ私を喜ばせる事が一度あった。昨年の七月、暑い日の事、私は自転車を走らせて生駒山へ登った。日曜日だが朝が早いので、まだ人影はなかった。急な坂道なので私は

自転車を押しながら登った。頂上に近く長い坂道を登りつめると屋敷が立ち並び、小高い所に一軒の旅館があった。そこで道がとぎれ、私は自転車を木のかげにかくして歩きだした。

ややしばらく行くと、今迄来たこともないような道に入り込み、それと気がついて後に引きかえそうとした時、生い茂った草の中で昨夜あたり寝ころがったと思われる草の押し倒された後と、そこにあの白いやわらかなチリ紙がまるめて捨てられてあるではないか。

私は急いでチリ紙を拾いあげるとひろげてみた。私は正しく天に昇るような気持になって狂喜する自分をどうすることも出来なかった。尚その辺の草地を探している時、チリ紙に包まれたイチジク浣腸の使ったものを発見した。私はそのピンク色の浣腸用器をいつくしむかのように、ほほずりしながら、そつと自分の服のポケットに入れた。

その一個のイチジク浣腸の殻は私に對して一層興味とはげしい強い期待をおぼえ、色々な考えが錯綜して、頭の中を渦まきだし、私をして、そこを立ち去らしめないものであった。



〓浣腸の告白〓

「クリスタールの効果」

完 寵 児

私の浣腸の最初の動機は蟻虫が肛門にわいたからです。テレビの深夜劇場を見ていると、突然耐らない搔痒が肛門に起り、それはウジウジと、その周辺を這っている気持です。

私には家内を呼び、そっとズボンや下着をとり、肛門周辺を見てもういました。「あらッ、糸屑見たいな虫がついてるわ——」

家内が、頓きような声で叫びました。私は家内にピンセットでそれをとる様に命じ、黒い紙の上に並べさせました。一センチにも満たない白い虫が二、三匹まるくなってかかんでいました。「こいつだな、尻の搔ゆい原因は——」

私が叫ぶと、家内までが、「私も何だか搔ゆくなって来たわ——」とおしりをももぞさせます。恥かしがる家内を四ッ這いにさせて、肛門周辺を見ると、矢張りいたいた、同じ様な蟻虫が、数匹這っていたのです。

翌日薬局へ行って「ベキササン」と称する、ピペラジン製剤の錠剤を買って来ました。一度に十六錠服用して、しかも一週間つづけるのです。錠数があまりにも多いのに私も家内も閉口しました。

私は意を決して浣腸する事にしました。蟻虫浣腸というイチヂク型の専門薬もありますが、あの程度では到底根絶出ません。

私はイルリガートルを買って来て、子供達の寝静まったあと、それを鴨居に釘をうって引っ掛け、二立は入るその硝子ビンになみなみと石鹼水をつくって注ぎました。

たたみに腹這いになり、家内が黒いゴムホースをとって、その尖端の水止めを握っています。腰を持ち上げ、水止めの尖端のエボナイトを肛門に挿入すると、水止めの握ると共に液体は硝子管からドンドン体内に移行して行きます。

「一寸まってくれ——」

私は、とうとう悲鳴をあげました。イルリガートル一杯の石鹼水は、最初の高圧浣腸では、到底腸内に収容しきれませんでした。

数分後私は便所に立ち、せいせいして戻って来ました。家内に今度は実施する番です。

私と同じ姿勢をとらして、残りの半分の液体がすっかりなくなるまで私は、しっかりと水止めを握っていました。

待てしばしく家内は便所へ走りました。

しかし、浣腸を三回ばかりつけて実施したお蔭で、あの白い糸屑みたいな蟻虫は、すっかり、一匹のこらずとれてしまいました。

ヒョンなこと、浣腸をした私達ですが、ある液体が入って行くときの、ジーンと腸にしみこむ、液体の重量感忘れることが出来ません。爾来、便秘の時も、又時には、プレイとしても時々、このイルリガートルのお世話になっております。

夫婦でたのしむ浣腸のプレイ。それももとはといえばあの蟻虫からです。私達は今更乍ら、小さく白い蟻虫に、反って感謝しているのです。

鬼六談義

S 小説作法

団
鬼
六

KK誌に『花と蛇』を連載する事になって何時の間にか十一回目に至った。早いものである。最初、このS小説は、せいぜい五回位で打切る予定であったのに、どうして、こう延々と続いたか——それは拙作に代って登場してくれる本格的S小説が近頃のKK誌に見

当らない故である。もともとSマニヤでありKK誌ファンである私は、自分で書く事よりも、S小説の傑作なものにぶつかると喜ぶものである。十年ばかり前のKK誌は、執筆者も挿画画家も揃っていて、私も充分満足させて頂いたものであった。

こうした種の雑誌に掲載されるSM小説というものは、むつかしいもので、如何に名文家であってもマニヤでない作家のものは、どこか空気が抜けている。また、いくらマニヤであっても、原稿紙の埋め方もろくに知らぬ素人作家の作品は、書いた本人だけがわかっていてだけで、妙にベタベタした感じで読む気になれない。材料が如何に豊富であっても料理するコツを知らなければ何んにもならない。現在のKK誌は後者の作家で占められてきた感がある。

——彼は彼女の着ているものを剥ぎ、裸にした。そして、彼女の悲鳴に耳をかさず縄で縛りあげたのだ——。

こんな単純な描写が、はっきりS小説という名のもとに掲載されている。執筆したものが本当のマニヤならば、これだけの事を表現するために原稿用紙数枚を充分使用するだろう。着衣強奪という女として最も恐しく羞しい拷問、女の心理的肉体的苦痛に、拍車をかける男のおどし、更に一枚一枚剥がされていく女の羞恥狂乱図も描写せねばなるまい。裸にされた女は男の期待通りの見事な肉体であった事の説明も必要だし、遂に縄を肌身にかけるに及んで女の羞恥はクライマックス

に達し男の劣情の炎は音をたてんばかり燃え上る、といった事も不可欠である。

責める男と責められる女との心理的な合戦つまり、調子が合わなければならず、作者は力及ばずといえどもそうした描写に腐心すべきである。縛りあげた女を、ムチで打つもよし、つるし上げるもよしだが、残酷の中に一幅の美しさを盛り上げる事を忘れてはならない。と同時に、女の羞恥心をつくという責めが、S小説の場合の大事なキメ手になっている事をよく心得るべきであって、そこにおのずと凄惨な色気というものがにじみ出てくる筈である。

それだけに女を責めるには、むしろ時代劇の方がムードが出るものだ。だが、こいつは作者に相当の力がなければ駄目だ。というのは、時代劇に登場する女の髪形、かざりもの衣類の描写がかなりむつかしいからで、そうした知識が全くないとつまらないものになってしまう場合が多いのである。

日本髪でも種類は多い。丸髻、高島田、くずれ島田、銀杏がえし、桃割れ——等、責められる女の髪形を選ぶのは作者の自由であるが、その髪のかざりものなどかなり複雑である。着物にしても、長襦袢、肌襦袢、湯文字

の柄から、半襟、帯、帯どめ、伊達巻、腹合せ等現代ものに比べると肩がこる。そんなものくわしく書く必要はないといってしまえばそれまでだが、あまりくわしく書くのは、たしかにわずらわしいけれど、時代劇では、着衣強奪のシーンがS小説の場合、クライマックスだと私は信じる。

美しく着かざった小町娘あたりが雲助などに薄汚い小屋に連れこまれ、着衣強奪の拷問に合う時、それはマニヤから見れば一枚の錦絵のように美しいものだと思う。鹿の子絞りの艶めかしい着物を始め色香あふる紅や紫の下着や腰紐が、脂粉をまき散らす花びらのように土間に積み重ねられていく様はこたえられない。がっくりくずれた高島田、赤い鹿の子のてがらがヒラヒラとそういう風に細かく描写すればするほど、ムードが高まるのではなからうか。私の好みからいえば現代ものより時代劇の方がいい。

話はかわるが、私が長くKK誌を愛読して、傑作だと思った作品は、これも十年ぐらい前のことであるが「甘美なるアリスの降伏」という何回かにわたって連載されたS小説である。これは、私の知る限りで、つまり私の好みからいってKK誌における一番傑出

した作品と思う。「甘美なるアリスの降伏」を一読した時、この作者は玄人だという感じがした。筋は単純で、責めそのものにも新味はないが上流社会の令嬢が一人の紳士の暴漢によって女にされるまでの甘い暴力行為をつづったもので、令嬢の戦慄、羞恥、屈辱感を実に巧みに表現していた。名文といっても過言ではあるまい。ああした作品を眼に出来ぬ近頃のKK誌はふと寒々しい気がする。リバイバル作品として「甘美なるアリスの降伏」を今一度誌上へ掲載されるようKK誌編集室へ希望するものである。未だこの作品を眼にされぬSマニヤには必ず御満足頂けるのではないかと思う。

私が、S小誌なるものを、ふと閑を見つけ書く気になったのも、その小説に刺激されたといえるかも知れない。それで、私が始めて書いたS小説は、KK誌の古くからの読者なら御記憶されているかも知れぬが、KK誌の白表紙時代のもので、「お町の最期」である。

小太刀の使い手、美人の女侠客のお町が、小町娘の危機を救おうとして、逆に毒婦お銀の奸計にかかり、悪漢一味に捕われて、素っ裸にされた上、淫虐な責めに合うもので、女

が女をいたぶる私好みのテーマであった。責められる女を美人の女俠客にしたのは、そういう鉄火娘の方が、羞恥責めにされた場合の屈辱感が大きいというところからである。その頃の私は、こうした読物の限界がはっきりわからなかったので、大阪べんというえげつない描写を沢山書き入れたが、そこは適当に編集部の方でカットされ、げっそりした事を覚えていて。だが、挿絵のお町がなかなかよく描けていて、原文通り、小桜ちらしの湯文字一枚にされた鉄火娘、お町が高手小手に縛りあげられ、（そのたった一枚も剥がれる事になるのだが）きつと辱を喰んで屈辱に耐えているポーズには満足した。

『花と蛇』の挿絵を見る毎、私はS読物における挿絵の大切さを痛感するのである。いい時もあるが、時々、情なくなるような挿絵が描いてある。全裸であるべき筈のものが、誰の許しを得たのか、パンティを勝手にはいっている時もある。これは編集部が悪いのではなく色々雑誌の内容に制約がついて来た事が原因で、仕方のない事だろうが、それなら、それで、むしろ、抽象的な挿絵にした方がいいのではないか。その意味で三月号の挿絵は満足である。

読者は、適当に美人を想像して頂きたい。静子夫人を山本富士子にするなり、月丘夢路にするなり、また京子を青山京子に、三原葉子もいいだろう。女学生的美津子は、高石かつ江、三田佳子といったところか。作者の方も、そうした美人を空想して書きすすめるものであるから、ケツタイな女の顔をかかれるとイメージがくずれるのである。

何時であったか、読者通信かに、静子夫人と京子を責め抜いて欲しいという事が書かれてあったが、作者の方も、つい調子が乗り過ぎて、えげつなく責めすぎ、KK編集部にその部分をカットされてカットになった事が幾度もある。しかし、これも、目下の世論の状況上やむを得ぬ事だろう。掲載されている所だけでも、編集部としてはヒヤヒヤしているのではないかと、その苦勞はお察し出来る。

故に読者の方で、掲載されているのとは違って原文の方は、もっとすざましくリアルなものであると想像をたくましくして頂けば幸いである。ただし、念入りに書いたところに限って、カットされる感があり、作者としても何とも残念である。Sマニヤの読者のためギリギリ一杯まで掲載して頂きたく、作者よりも編集部へお願いする次第である。

ある人々から見ればKK誌は不良出版物に

見えるかも知れない。しかし、マニヤにとっては、夢のオアシスなのだ。寂莫とした単調な日々の生活のいこいとして、我々は、ふと異次元の世界に入りたい欲求を持つ。KK誌を開いて、空想の世界にこっそり入る時、我々は子供のようになつて無邪気になっているのである。我々は、マニヤである事を大いに喜ぶべきである。そういう秘かな楽しみのない人間は何とさびしい事か。

私は、売春禁止を天下の悪法と見なしている者であるが、この悪書追放なるものを天下の邪法と思っている。悪書追放など昔のアメリカの禁酒法よりも馬鹿馬鹿しいものに思われる。すなわち——いや、もうようそう、そんな事をここで私が論じたところで、どうともなるものではない。我々は消極的態度で、空想の世界に遊び、自分達に小さいながらも魂を酔わせ手足ののぼせる異次元世界のある事に感謝すべきなのである。

話は再び脱線したが——読者諸兄の御要望あらば『花と蛇』の中にそのアイデアを取り入れたくも思う故、川田や銀子達になつたつもりで、静子夫人以下美女群を如何にいじめれば楽しいか読者通信において作者にお教え願いたい。何時も短時間で仕上げてしまう故舌足らずのところもあり、愚作を申しわけなく思っているのであるが、マニヤ諸兄姉の御批評も乞いたくお願いする次第である。

マゾヒスチック・コント

ながぎせるひらう 長煙管の火の羅宇

福田久文

長煙管の火の羅宇

わたしはビールの酔いとこみあげる怒りを
おさえて床に立ち、彼の後手の縛りを解いて
やった。すると彼は、椅子に腰をおろしてボ
ストンバックをひらいているわたしには目も
くれず、やむをえず今夜はもう帰すことにし
てくれたのだとおもいこんで、案の定わたし
に背を向けて入口の洋服ダンスの方へあゆみ
よった。わたしは彼がクレープシャツを手
にしたときをまって、わざとらしく丁寧に声
かけた。

「ああら、そんなにはやく帰る支度をなさっ
ては、わたしが可哀そうよ。そのままこっ

へいらっしやい」

彼は力なく白いふのついた緑色のリノリュ
ーム床にシャツをおとして、澄んだ眼でうっ
たえるようにわたしを見た。彼の心がわたし
とのSMプレイを離れてなにかおもい悩んで
いる風情を如実に示すこの澄んだ眼は、これ
までわたしのこころよい刺激だった。この眼
に挑戦して手ぎわよく誘い、その澄んだ色
をうしなわせ、わたしの取扱いに目を細めて陶
酔させるとき、わたしはどんな男からも得た
ことのない征服感をたのしむ。：しかし、き
ようの彼の眼はわたしを、ものおじさせるほ

どなにか深い底をもって澄み、異様な苦しみ
に悶えている。手におえない感じ。：一人の
見も知らぬ小娘同様の女のために、こんな不
愉快な目にあわされるなんていらだたしい。
この気品のある顔、きゃしゃで白い体、その
うえ教養と人柄と家庭の良えが揃った本当に
得がたい青年。はたちの美しさと心の明るさ
がもう記憶のなかにさえ薄れているわたしは
彼と一週間まえ式を上げた小娘に、この澄ん
だ眼がいつも微笑とともに向けられているの
だとおもうと、いましがたの不満もてつだっ
て、片手でゴム棒の柄を振り上げると、その

中央に穴をあけて取りつけた長い四本の革紐を思いっきり床にたたきつけた。

「めめめせんと、おいで！」

腰かけていた肘掛けのない椅子を小卓に背をあてて暖炉の方へ向け、そのゴム棒をもったまま坐りなおすと、見えない縄でひかれてあるかのようにうつむきながら、わたしの背後から現われた彼は、わたしの方に小廻りして立ちどまった。

右側に開かれたままの黒いカーテンのしたにベッドがあり、左側は壁で上部のガラス戸はすっかり暗くなっている。正面は暖炉のすぐそばに浴室に通じるドアがある。天井には深紅のラシャをはりつめて金メッキのけけばけかしいシャンデリヤをつけさげている。この種のホテルの例に洩れず狭い間取りだが、暖炉のあたりに半坪許り平石をはめこんだコンクリート床が空いている。そこに立った彼をわたしはすぐ前まで手まねき寄せ、かがむようにいつけて、すぐゴム棒を口へ押し込んだ。二本の革紐を鼻孔をふさがぬように気をつけて猿轡同様ぐるぐる巻きにして結んでから、残り二本の革紐を使って後頭部でX字型に組み下した手首を幾重にも十文字に縛りつけたうえで、すでに巻きつけた革紐の上にさ

らにその縄尻を数回巻きつけた。手と口とを鼻から下の顔へぐるぐる巻きに巻きつけた革紐で同時に縛りつけたわけ。責めをたのしむ場合も、この交戦中の捕虜を彷彿させる恰好はいかにも嗜虐心をそそって面白い、案外はやらない縛り方の方うだけど。

「まっすぐ立たずに、うんとかがむのよ。もっと。かがとはつけて。許したげるまで、そのままにしていなさい。わかってるでしょ。いうことかなんだら、今夜は帰えしませんよ」

わたしは立ち上って入口のそばにある冷蔵庫からありったけのサイダー四本を取り出してきて腰をおろした。アルコールがすっかり体に廻っているせいか喉がとてかわいていたので一本はすぐあけてしまった。ベッドの方の壁にはめこんだ大きな一枚鏡と窓ぎわの床のうえに据えた三面鏡に、空壕の口を握ったわたしと手と口と一緒に縛られてうなだれたまま身がかがめる彼がうつっている。わたしは壕で彼の顎を叩き上げ、次に右の頬骨打って顔をたへ向けさせた。

「鏡をよおく見るの。こんな恰好しているのを、可愛い奥さんが見たら涙を流して悲しむでしょうね。どお、あんた、すこし泣いて

見せて」

彼は責めの苦痛の度合とはかわりなしに時として後手に縛っただけで優しくしてやっているときにさえ、眼に涙を溢れさせて突然さめざめと泣くことがある。みずから進んで最低の男同様振舞っていても、彼には彼なりの自負と過去の清浄な記憶があって、われとわが身を憐むかのようにすすり泣く。そんなとき、本当に少年のようにいじらしくて、わたしの悪遊びに興味を添えてくれるのだけれど、これだけは命令しても痛めつけても無駄であり、偶然をまつしかない。でも、この椅子に腰をおろして以来、爆発を抑えて来た怒りはなにか手ごろな口実をつけて思いっきり発散させようというわけで、

「泣きなさいて、いったでしょう！」

と声を高くして壕を振り上げ、かなり力を入れて頭の上へ落してやった。彼はひとたまりもなくわたしの足もとへ倒れた。その体を片足で抑えてはね返える動きを味わいながら両手でしっかり椅子をつかんで、手加減なしに踏みつける。ようやく彼の体の動きが鈍るのをまって立ち上り、倒れた体と床との境の一線へサイダー壕を次から次へ叩きつけ、中身そのまま木端微塵にしてやった。



「さあ、またかがむんだよオ」

興じてくると、自然に言葉がぞんざいになる。ぞんざいな言葉を使うと折檻に力がいいるのかも知れないけれど、とにかくそういつて両手で頸をつかんで立たせ、また足をくの字型にかがませた。そして飛び散ったガラスの破片をスリッパをはいた足で彼のまわりにかき集めながら、面白そうにいつてやった。

「こんど倒れたら、体じゅう傷だらけ。今夜帰えしてあげても、ややこしくなるのよ」

わたしは卓上のシガレットケースから煙草を取り出して、三面鏡でわたしと彼とを見ながらライターの火をともし。壺を思いっきり割って気分がすこし晴れたうえに、目の前で彼が不安定な苦しい姿勢に耐えているのを眺めていると、煙草の味がまた格別。冷房がき

きすぎてゆかた一枚ではうすら寒いぐらいで、彼の方はパンツ一枚なんだから、肌がひどく鳥肌立っているのは多分そのせいもある。倒れんばかりにかすかなうめきをひびかせて身を震わせ始めた。

「疲れたでしょう。しばらく足をのばしてわたしの胸にもたれなさい」

できるかぎり真面目をよそおって、そういうながらまた立ち上った。彼は頭をたれたまま姿勢を正して、安心して頭をつけてもたれかかってきた。わたしは縛り合せたその手首の一つをしっかりと片手でつかむ。犠牲者を従えて引き寄せ、これからいたぶろうとしている者の表情と姿態とは、たとえそれが自分自身であつても魅力のあるもので、わたしは鏡にうつっているわたし自身に見せるかのように煙草を一口のんでから、鏡をたよりにその火を彼の腋のしたに当てた。毛がちりちりと焼け、彼をつかんでいる手と胸にこころよい激しい身悶えが伝わってくる。両腋の毛を焼きつくすまで交互に二、三秒づつ火をあてて堪能した。

短くなった煙草を灰皿に捨てたわたしは、その手で鉄拳を構えて体に打ち込むことにした。片手で彼を従えたまますこし引き離す。

「眼をしっかりあけてわたしを見るの！」

いささかの陶酔もなくただ悲しげに光る彼の眼をにらみつけながら、腹などに、なぶりものにするかのように手加減して言葉の途切れごとに鉄拳を打ち込みつつ、続けた。

「わたしはね、申し訳ないが、親がきめてしまったので結婚させてくださいって頭を下げて頼むのなら、そのときかぎりであんたは手離すつもりだったのよ。何なの、一言もいわずに旅行までずませてくるなんて。なるほどお手当は取らないから渡しませんでしたよ。だからといって、大きな顔しなさんな」

かなりの苦痛を受けている筈なのに、彼の眼は別にわたしをにらみかえす様子もなく、ただ一途にわたしでもないまた彼の新妻でもないなにか無形のものに許しを乞うかのごとく悶えている。いつもなら苦痛のとぎれるとき、自分から眼を見はって鏡をみ、表面だけしかない人形のそのような眼つきになるのに、きようは痛めつけられつづけるほど彼の眼は、その奥底を深くする。と、わたしはなにかに憑かれたように嗜虐の心がたかぶるを覚えた。手加減を忘れそうになる手をかろうじて抑えて、新しい思いつきを実行するために腰をおろした。

「いいから、しやんと立ちなさい。でも、そのかわり片足は前へ上げるの」

彼の眼に恐怖の宿るのをみて、ことさらににやりと笑いながら、ボストンバッグの底から、黒塗りの長煙草を取り出す。こんな恰好をさせて足の裏に煙草の火を当ててやるのは始めてのことだけど、長煙管の火口に煙草を立てて吸口をくわえ、ライターをもった片手をのばして火をつけているわたしをみて、自分がこれから何をされようとしているのか、はつきりわかったのである。そしてよしくくださいといっているであろう。はげしく足ぶみをはじめた。吸口から口を離して、ゆっくり煙をはき出してのち、いったやっ

「いったとおりにしなければ、どうなるかわかっているのでしょうね。さからうのは、ご自由よ」

意気地なくまたもと通りおずおずとさし出した足の裏へ火近づけて煙管を吸う。徐々に雁首を上げていくと、足も上っていく。しかし足を少し上げただけで、もう姿勢が不安定になってしまう。だから、わたしは何もせず煙管を吸っているだけで、彼の方から足を火に当ててくるわけ。こうして足の裏の前部

に両足とも火ぶくれをつくってやった。

「きようはなんでもいうこときくわね。さ、股をひろげて、つま先で立ってもらいましよ。かがまなくてもいいことよ」

そういいつけて、煙管を横ぐわえにする。と、つい彼のひきつった顔につられて吸口をつよく噛んでしまった。横に口をいがめたわたしの顔を鏡でみて思わず煙管を口から離して吹き出してしまふ。口から離れたその煙管をのばし、火をパンツの尻に当てて彼をすこし手前へ引き寄せる。この機会に懸案の火責めにかけて面白い踊りをみてやるのだ。たのしくなって来て吹き出した口元がほころんだままなのを、鏡でちよつとたしかめてから、長煙管を真正面に向けて吸った。赤く灼熱した火が彼のパンツの縁を焦していく……。

ひとしきり踊った彼に、最後の一服の火をあくどく押しつけてから、わたしは前の方のガラスの破片をほんのすこしスリッパの足でどけて、

「疲れたわね。さあ、さ、そこへお坐り」

といってやった。辛うじて膝を傷つけずに彼は坐った。うなだれて眼をつぶっている。陶酔の気配は相変らず微塵もない。ただいたぶられるがままに身悶えた体を休めて、次に

くる苛責におびえている。その白い肌が粟立って、羽根をむしりとられ、翼を切り取られた可憐な白鳥のような感じ。食べるまえにケークを指でつついてみる子供のよう、雁首を逆手にもって太股に吸口を突き立て、眉が可愛くもりあがるのを眺める……。

いよいよ最後の責め。長煙管をもったまま、肘掛けのない椅子に深くまたがって、うなだれている彼を叱った。きゃしゃな細くて長い十本の指が花のようにひらいているなかから中指と薬指を二組選んで、羅宇をはめこみ、椅子の上に顎を置いた彼の背中へ片足をあげて、力まかせにしめつけてやった。正坐した脚のまぎわまでガラスの破片が散らばっているから、脚は動かさない。坐って踊るダンスのように、彼は腰を振ってゆれ動く。

いつもとかわらぬ疲れ。それとともに黒いカーテンをひらいて立ち上った数十分まえの腹立たしさも、その怒りをあおって過激な苛責に走らせていたビールの酔も薄れ、もう彼を帰してやろうと思った。万が一にも彼がやけどをしている素足に体を支えて徒手空拳でわたしに反撃するようなことがあったら、この拘束具はほいたらすく鞭として使えるのだから、遠慮なく鞭跡をつけて帰してやろう

と決めて、椅子に普通に坐り直し、注意ぶかく紐をほどく。何事もなく彼の自由になった手は、その膝の上に揃えられ、現れ出た可愛い唇はその眼とともに、わたしの視線を避けてやすらう。

何ということだろう、束縛を解かれても、ひとこともなく正坐しつづけて、じっと床をみている彼の眼のものの悲しい涼しさは。底知れぬ光明の清水が溢れんばかりに潤って、深く自分自身を恥じている風情である。自由になった手をしおらしくその膝のうえに置いたとき、椅子に坐ったわたしの膝のうえに抱き上げ、いつものとおりいたわりの言葉の一つもかけてキスをしようとしたのだが、彼をまじまじとみつめると、わたしにはとても手をさえられない高貴な人のように感じられてきて、ついためらってしまった。彼からこうした感じを受けるのは、めずらしいことではないが、はしたない場所で、はしたない姿をしているときには絶えなかったことだ。

また、彼のさわやかな声と巧みな話術は、その内容の深さと豊富さは別にしても、その表情を眺めながら聴いているだけで気持がよいものだから、つとめて会話に誘うのだが、それもきようはできないように思われた。

わたしの心の動きをみとおしているかのよう、に彼はわたしを見上げた。こうして奴隷のようにひざまづかせていても、わたしは彼を愛している。彼が結婚したという事実を知ってもそれは変わるものではない。愛しているというのがその異性を他の異性よりも貴重に思っている、独占したいと願うことであるかぎり。：彼はよくひかえめに詩や宗教（彼は国立大学の数学教室の助手であって、まったくお門違いのことだが）の話にわたしを誘ってこうした男女の愛以上のすばらしい永遠なものが人と人との間にあるのだということがある。

二人の男女の仲ははしたない慾望とともに恐れてこの永遠なものに触れようとする祈りを欠くかぎり、いかに親しそうに見えていてもいつ憎しみに変わるかも知れぬ不安定なものだというのだ。

「それ、わたしと別れるときの用意？」

といってからやってやったら、彼ははっと気づいたような表情をしたのち悲しそうに黙ってしまったことがある。でもわたしは彼のなにげないしぐさや言葉のはし、そして何よりもこの綺麗な深みのある眼に、ふとその永遠なものに触れる思いがして、彼が夢うつつをいつているのではないのを知っている。：わ

たしは彼を愛しているばかりでなく敬意さえ抱いているのだ。うぶな娘は中年の道楽男にかかるとすぐ摩れた女に変わるが、この種の青年はどんな女の手にかかってもたやすくその性格を変えることなく、いつまでも新鮮な興趣を与え、ときとして彼をもてあそぶものの胸に漠然としたうしろめたさを覚えさせるものだ。いま彼の眼に触れると、この根強いしるめたさと酔ぎめの寂しさのうえに、彼独特のあの深みのある愛情につつまれている二十三才の女への羨望が交錯して、わたしがと

Mフोट・モデル募集

長らく中止しておりましたMフोटの撮影を開始いたします故、左記要項にてMモデルを募集いたします。

女性又は男性を対象とするMモデル及び男性ヌードモデル。女装モデル。口絵には発表しませんから顔面の隠蔽を望まない方で、日曜祭日以外にも出演可能の方。御希望の方は年令職業身長体重並に好まれる傾向などにつき明記の上御便り下さい。秘密厳守、詳細お返事いたします。採用の方には、交通費日当を差し上げます。

ても不幸な女に思われて来た。彼との三年のつきあいを冷静にふりかえってみれば、やはり、彼のもっていた多少のマゾ趣味をいいことに、いろいろと趣向をこらして得た満足は、そんな情慾を離れてたのしんだ彼とののどかな対話以上によかったとはいえない。彼のような青年に、はたちのときに逢えていたら幸福だったのに……。鼻が痛くなって来た。涙が出そうだ。

「さ、福田さん、もうおしまい。たって身じたくをなさいな」

彼がだまって立って行くと、わたしはもう耐えられなくなって、椅子の向きを変えて卓上に伏した。あんなにひどいことをしたのに彼はすぐそばへ来て、何もいわずにわたしの肩を抱いてくれた。はたちの甘い純真さが涙とともにわたしに迫ってくる……。わたしは伏したまま手を組み合せた。彼の弱味をしっかり握ってなんというあくどいことを、三年もの間、このやさしい青年にして来たことか。嗜虐趣味と保健美容を兼ねて、わたしは若い男の体から直接血を飲んでるが、アルバイトの学生のうまく手にはいらぬときは、彼をバスの窓の取手から片足をくくって逆吊りにし、股のつけ根に、やすりを当てたことさえ

ある……。

「ごめんなさい！ ひどいことをして……。ゆるして……」

わたしの涙を拭ってくれたのち、向いの椅子に腰をおろしたクレープシャツ一枚の彼を見上げると、また泣きたくなくて伏せた。いましがたまでわたしのまえにひざまづいていたのは彼の体だけだった。いまわたしは身も心もひざまづいている……。

彼は卓上の茶びんから冷えたお茶を二つ入れてわたしにすすた。鼻の吸りのとまらぬま顔を上げて、わたしはそれを口にした。彼が努めて何もなかったかのように微笑してくれているのが、いっそうわたしの心をひざまづかせる。わたしにかかわりなしに彼は幸福をもつことができるのに、彼なしではわたしはとても不幸だ。そしてそれが当然のことだと思えるので、わたしはいつそうわたしの悲しみのやりどころがない。いつか彼が話してくれたように、この悲しみによってわたしの心身を促えて心の幸福を奪っているあの激情がいくらかでも弱められるのなら、いくらでも涙が流れるがよい——そう心のなかでいいながら、わたしは少女のように泣きつづけた。

「奇譚三十九夜」物語

第三十五夜

辻村 隆

暖冬異変とはいえ、流石に寒い冷たい日が続く今日此頃です。スチームの通った新館のこのクラブの一室——。レギュラーは例によって八人のメンメン。

パイプ氏は応揚に紫煙をくゆらせ乍ら、

「パイプ愛好の私にどうやら凱歌が上った様ですね。ゴルフ氏もライカ氏もドクター氏も今日は珍らしくパイプ御持参ですが……。扱ては、矢張り肺ガンが恐ろしくなりましたのですかな？」

「知らない時はいざ知らず、ああ書き立てられるとね、一寸紙巻タバコも遠慮したくなりますよ」と、これはライカ氏。

「私も明治の昔にかえって、キセルで吸うことにするかな」とナイロン氏も合槌を打ちます。

煙草談議で一しきり、話に華が咲いたあと、頃合を見てドクター

氏がさりげなく一同を制しました。

「回数の少ない私のことです。御指名を受けないうちに、口火を切らして戴くとしましようか——。

これは或る神経科の医師の物語ですが……」

第八十夜 殺意のトリミング

二月二十六日——。私はこの日に死んだ第二の妻のことを考えていた。

滅多にない事故だが、去年の今日、妻は電気洗濯機で感電死したのだった。私は妻を失なった悲しみを仕事で忘れようとして、働らき過ぎる位働らいた。

私は妻を想い出す意味で、二十六日だけは、ゆっくりと瞑想に耽

り、妻とのなりわいの数々の楽しい追憶のひとつときを持つ様にしていた。

精神病医として、仕事に注意を集中するためには、斯うして自分の心理状態を整えるひとときのあるのも悪くはないと思っていた。

第二の妻を醜に浮べると、しらすしらす私は最初の妻のイメージを頭に描いて見る様になる。

六月三十日——それが最初の妻の死んだ日だ——。妻は私が大学へ研究に出掛けたあと、奥の間で自殺したのだった。

自殺した第一の妻、事故死した第二の妻。私はどうして、こうも女房運が悪いのであろうか——。

私に再度、後添えをすすめてくれる人もあるが、どの妻とも子供のなかったのが幸いでもあり、私は再婚の話にはどうしても乗気になれなかった。

この日が、私の心の休養の日であることは、受付の増田さんも、見習看護婦兼お手伝いの八島も知らない。働らき過ぎる私が、唯、何となく頭を休めているのだと考えているらしい。私もそう思わせておくにしくはないと考えていた。

昼食後のひる下り、庭の山茶花の、桃色づいた人肌を思わす花から眼を離してふり向いた時、見知らぬ新患の青年が、私を小バカにした様な眼差しで、黙って革張りの診察椅子に腰を落していた。私は何故ともなくドキリとした。虚をつかれた、空白の状態を見透かされた狼狽と動揺は、最初から私を受身の立場においていた。

何しろ私は、もう五十に年の届く、灰色の人間になり、保守的に診察室の片隅で、ひっそりとくらしている初老の男であった。

「お名前は……」

私は医師の立場に戻って切り出した。

「鈍木泡亭……」

「何ノドン・キホーテ？」

「そう、書きましょう」

青年は傲慢な態度で、机上のカルテを無断でとり上げると、ボールペンでサラサラと書いてニヤツと笑った。

偽名を使っている事は間違いない。然し、私を訪れるクランケでそれは別段珍らしいことではない。私は、黙って彼の様子と観察した。青年の虚勢は徐々に崩れ、緊張した表情が消えてフト子供っぽい顔付が覗いた。

「先生はボクを助けることが出来ない。ボクは何がいけないのか、自分でよく分っているんだ——。この儘で行けば、ボクはきっと大変なことを仕出かしそうなんです」

「大変な事っていうと……」

「そのつまり……、ボクは美しい若い女を見ると、ムラムラと暴力を振いたくなるのです。例えばボクは電車で揺られ、秘かにポケットに忍ばせたカミソリの刃を、幾度握りしめたかしれやしない。ボクの眼前で豊かな女のおしりが、電車の動揺の度に、ブルンブルンとゆれうごく。ボクは生唾をので、衝動を押えるのに必死になる。しかし、ボクは、大江健三郎の小説『性的人間』の主人公のように大胆には振舞えない。だがボクの心は日に日に兇暴になる……」

暴力を振り、嗜虐的衝動にかられることは、クランケにもよくあることだ。こうした精神病者には、自分は異常だと、クランケに考えさせない方がいい。

「今まで、そういった暴力行動に出たことがあるのかね？」

「ええ、まあね。ムラムラっとしてくると……その衝動が、何の前触れもなしに突如として現われる時があるのです」

「たとえば……」

しかし鈍木泡亭と名乗るその青年は、ニヤニヤしただけだった。

「何か嗜虐的な夢を見ることがある？」

私は夢から精神分析しようと、そんな質問もしたが、彼は矢張り無言だった。

私は話題をかえて見た。

「何か、君自身の話をしてくれないかね」

彼は一寸考える風にしたが、ポツリポツリと自分の事を語り出した。話がどうもアヤフヤだ。暫らく聞いているうち、それがテレビの『図々しい奴』の一部になったり、そうかと思うと、赤坂、六本木の話が出てきたりして、とりとめがなかった。明らかに作為的なことが分ったが、しかし、裕福な家庭に生れ、父に次々と女が出来て、女性に対する憎悪が胚胎し、それが、青年を狂暴にかり立てるのではないかの、不完全乍ら、一つの結論は出て来た。

「ボク、又やって来ますよ……」

突然鈍木泡亭は立上り、私を尻目にして診察室を出て行った。とりとめない彼の告白の裏側に、私は精神分析的に見て、興味を惹く事実のあるのをかぎとった。

受付の増田さんが診察室に入って来て、私に告げた。

「例の山口様の御容態が急変したとの事で、往診を頼んで来ておられますが……」

「そうだね。あの人は分裂の最悪状態だ。病院の方へ廻して貰う様電話しといてくれ給え。私は新患を診察しているうち、頭がズキズ

キして来てね……。ああ、それから八島君は？……」

「裏で洗濯していた様ですが……。頭痛なら、セデスでももって参りましょう」

増田さんはテキパキと応えた。

増田郁子はいかにも女性的な、優雅な、そのくせ、芯のしっかりした二十五才の女性だった。一昨年、結婚して、社宅が、私の医院の近くの関係上、子供の出来る迄という期限付で、私の許で働らいていてくれる。ノイローゼや精神病患者許りの環境で、彼女は実に明るく朗らかに動き廻っていた。正式の看護婦の免許状はないが、一通りの事は何でもやってくれる便利な存在だった。

「あのう、それから……、主人が夕方出張から帰って参りますので、少し早目に帰らせていただいてもいいでしょうか……」

「ああ、いいとも——、本当に幸福そうだね……」

私は羨望とも嫉妬ともつかぬ気持が、つい年甲斐もなく働らくのを恥かしく思った。

数日して、鈍木泡亭が、又何の前触れもなく、受付の増田さんの眼を盗む様に、足音を忍ばせて診察室に入ってきた。まるで、クラシケのおらぬのを窺がってでもいる様に、私一人の時をねらって現われた。

彼の手には、ショップでサービスする買物用の紙袋が握られていた。

彼は平然と私に話し掛けた。

「遂々、盗んで来ましたよ。ホレ、これがブラジャー、これがパンティ、これがシュミーズ。ボクはどうしても盗らねばおられない衝

動にかられたんです。誰のだとお思いになります？　ハハ、分らないでしょう。増田郁子——、先生ところの、受付の増田さんですよ。これ全部……」

「君、一体、これはどうしたというのだね」

私は飽気にとられて、彼の差出した、なまめかしい、女性用下着に眼をやって思わず生唾をゴクリとのみ込んだ。

派手な明るい色のブラジャー、レースのついたパンティ、ブルーのシュミーズ、それらの一つ一つが、増田郁子の肌についていたものであることを思うと、私は平静でおられなかった。

「今に分りますよ。ボクは受付に座る、増田さんのあの美しさに、心を惹かれたのです。巷を歩く女性、満員電車の女性、盛り場の女性と、美しい女は街に溢れています、それらの女は絶えず、流れて行きます。現われては消え、そしてボクの網膜に映像を落してはトリミングされてしまう。増田さんは眼底に焼きついて消えない。いつもの場所にある——。その為です。ボクはガンをつけた獲物のあとをつけた。彼女は先生の宅とは眼と鼻の先に住んでいる事をつき止めました。晴れた日——、洗濯繩にひそやかに乾してある、これらを失敬することは、赤児の手をねじるより簡単です。洗濯された下着にも増田さんの残香は匂い、ボクはそれを嗅いで激しく動悸の昂まるのを覚えました。ボクはこわいので。増田さんをボクのものにして、散々に責めさいなみ、高々と逆さに吊って、暴力の限りを振ってみたい——、そんな衝動にかられるのです。ボクはこれを先生の許に差出して、キッパリと、衝動の根源をきり度いと思って持参したのです。何かの方法で、どうか返しておいて下さい」

私はかえすと約束した。そして今後、増田郁子の事は忘れる様努

めて欲しいと頼んだ。

患者に頼むとは何と奇妙な事だろう。しかし、ことは対岸の火事ではなく、足許に火がついた様で、私は少なからず慌てたからでもあろうか——。

私が彼の戦利品をロッカーの抽出に入れるのを、鈍木泡亭は凝視していた。そして神妙に頭を下げると出て行った。

私は増田郁子の下着を、どうして返そうかと思い悩んだが、返すとなれば鈍木泡亭の精神状態を話さねばならず、あれこれするうち日は終ってしまった。彼女としても、恥づかしい下着類の紛失など私に話すこともなかったもので、まさか、彼女の下着類が、私の手許にあらうとは考え及びもしなかったであらう。

増田郁子の不在をねらう様にして、鈍木泡亭が診察室に姿を現わしたのは、あれから十二、三日後であった。

彼はドサリと机上に小型のバッグを放り出した。

「先生開けて下さい——」

私は言われる儘にファースナーを裂き開くと、中から双眼鏡と、二筋の柔かい使い馴れた縄が現われた。

「一体、これは何だい？」

「双眼鏡で、ずっと増田郁子の生活をのぞいて居たんです。彼女には夫がいますよ——」

「勿論だよ。だから止めたまえといっただろう。増田郁子は素晴らしい女性には違いないよ。しかしだ、現在は結婚して楽しい家庭をもっている。所詮は無駄な事だよ——」

「いや、先生は彼女の表面の素晴らしさしか御存知ないのです。ボ

クは毎夜毎夜双眼鏡で観察しましたが、大きな発見をしたのです。見て下さいこの縄を——。増田郁子は素晴らしきマゾヒストですよ。この縄に、彼女のしたたりこぼれるような凝脂がしみ込んでいます。ボクは夫である男性が、実に愉しそうに、郁子の肌はこの縄をかけ、二匹の獣と化して、戯れるのを、この眼で判っきり見ました。その時の彼女の歓喜に溢れた顔、輝く許りに桃色に色づ



行為から、徐々に発展して、やがて、恐怖を捲き起す暴行行為へと病状は進みつつあるらしい。

鈍木泡亭の心の中に入りこみ、その病因をつきとめられぬ為、私はいつも頭を悩ましていた。ハンサムで、若さを代表するような、この青年の、何処に、こうした兇暴な心が潜んでいるのであろうか——。

いた柔肌——、ボクはたまらないのです。ボクは夫を殺してでも、郁子さんを我がものにしたい衝動にかられるのです。ボクのなやみは爆発寸前です。その危険から立直る為、これを預けて来たのです——」

「縄は、どうして手に入れたの？」

「一昨日、夫は出張しました。増田さんはここへ来て働いている、その無人の隙をねらってボクは窓硝子を破って忍び込み押入に隠してあったその縄を失敬して来たのです」

私の脳神経に冷たいものが走った。彼はすっかり痴漢となっていた。彼自身心配していた様に、始めは幻想的な小さい異常

私は恐らく顔をおさめていた事だろう。増田郁子の気配に、敏感な彼はハツとして、辺りを見廻すと、さっとレントゲンの暗室にかくれた。入れ違いに増田さんが診察室に現われた。

私の異常さに、増田郁子は気付いた様であった。

「まあ、先生——お顔の色が勝れませんわ。しばらくお休みになられたら……まあ、こんなところに、バッグがおいにありますわ。何かしら……」

私はそれを取り上げかけた彼女に、慌ててバッグを引ったくる様にとり上げた。

「いや、これは何でもないんだ。先程のクランケが預かってくれとおいていったのでね。私が片付けておくよ——」

中身を見られたら一大事である。増田郁子は、羞恥と恐怖から、私のところをやめるに違いないだろう。

「だって休みたいのはやまやまだよ。しかし今は駄目だ。どうしても手の離せない重患がおるのでネ」

「誰だったかしら……?」

増田郁子は、あれこれとクランケの顔を想い浮べる風であった。

「でも、先生御無理なさらないで下さいね」

彼女は優しい笑顔で、私をいたわる様にそういつて診察室を出て行った。

私は鈍木泡亭の持参したバッグを、大急ぎでロッカーに入れた。

増田郁子の私有物が又一つ殖えて、私はやり切れぬ想いだった。

うしろで低い笑いが起った。眼の下に隅をつくって、冴えた顔で

鈍木泡亭が、私の狼狽ぶりを嘲笑する様に立っていた。

三月にあげず、増田郁子の留守をねらって、鈍木泡亭は現われる様になった。

この若い美人の受付に対する彼の関心は、日ましに高まり、まるで重病人の体温装の様に不吉な上昇線を辿っていた。

私がいくら話をそらせ様としても、彼は現われてから消えるまで終始、増田郁子の話をした。

彼は部厚い手紙を私に見せた。長々と書きなぐったもので、増田郁子に差出すものであった。内容は猥雑で読むにたえない事が羅列されてあった。彼はマルキ・ド・サドの『悪徳の栄え』をそっくり写しとったのでないかと思われる様な文章を、憶面もなく書き上げていた。増田郁子に、極力悪徳をすすめていた。夫を毒殺せよ！自分との責めの交歓こそ、地上最大の悦びである、とも書いてあった。

「どうして彼女に出さないの？ それとも、じかに手渡すつもりなのかね」

「増田郁子は、未だボクが存在を知らない。何れ、ボクは彼女の前に現われるでしょう。しかし、これは先生から渡して欲しいのです。下着も縄も返してくれた先生なら、これぐらい取継いで下さってもいいでしょう。いや彼女は先生がそれらを返したことに依ってボクが存在を知っているかも知れない。いや知っている筈です——」
私は返していないともいえず、黙って彼のその手紙を預かって、ロッカーに入れた。

彼は再び手紙をもって現われた。

「ゆんべ見ましたよ、奴の部屋の窓でしたね。彼女と狸みたいな亭

主の野郎が、キスしたり抱きついたり、それでカーテンがあると思つて電気も消さないんだ。享主野郎奴！彼女を床に寝かしつけ、押入れをゴソゴソやっていたが、首をかしげてましたよ。お目当ての縄がないので間違ついていたんですよ——」

「君はあれ程私がいつているのに、やはり、近づいているんだね」「すっかり、奴等の生活をばらした手紙ですよ——これを先生から渡して下さい。ハハ、どんな顔をするだろう、あの享主——」

渡せる筈のない手紙を、彼はさも当然といわん許りに私の前に差出した。病状は愈々進んでいる。

「ボクは決心しましたよ。あの狸野郎をバラす事にしました。増田郁子にふさわしくないあいつをトリミングしてやるんです——」

「いけないよ——そんな事をすれば、君、殺人だよ——」

「なーに、平気ですよ。先生にはいわなかったけど、私は既に過去に、二人の女をこの世から消してしまいましたからね——。先生には迷惑はかけない——まあ高見の見物してして下さい。増田郁子を手に入れる為には、ボクはあの享主野郎を絶対消さねばならないのですから——」

恐ろしい予感がした。私は頭の血が一瞬サッと下る思いがした。頭がズキズキと割れる様に痛む。私はこの鈍木泡享の出現により、大分寿命を縮めた様に思えた。

「明日の晩、十時きっかり、ボクは忍び込みますからね。メスを一本借りますよ。いいですね——」

「いけない。そんな事、私が許さない——」

私は必死になって彼を拒んだが、鈍木泡享は私を押しつけると、手術器具のケースを膝手を開き、脳切開用の直剪刀を握って、さっ

と山花茶の咲く、庭へ窓越しに消えた。

「お呼びですか、先生？——」

扉が開き、増田さんが診察室に入ってきた。白衣をさっぱりと着た彼女は、いかにもノーブルで、健康そのものの微笑みを浮べて立っていた。鈍木泡享がいう様な、この彼女に、マゾの血が潜んでいるようとは、どうしても思えなかった。

「ここですよ——さっきから待っていました」

鈍木泡享は闇から私に小声をかけた。彼の行動を阻止すべく現われた私を、彼は傍観者と勘違いしたらしい。

「止めたまえ——本当に……。大変なことになるよ——」

私は喉にからまる声で、辛うじて彼の袖をひいた。

「シーッ」

私にいうなと指を口に当てて合図した彼は、一躍——植込みを越えた。私も己むなく彼の跡を追った。心はジーンと氷のように冷えてきている。正に惨劇は起ろうとしているのだ。狂暴性の患者を、医師として放置していいものか、私は激しいジレンマに苦しみ乍ら何故か彼の行動を、半ば許容している自分を不思議に思えた。

窓枠に釘を差し込み、こじ上げて、彼は苦もなく、音も立てずに窓硝子を一枚外した。

寝室のドアを開くと、薄暗いシェードに二人の寄り添って眠る姿があった。

鈍木泡享は、静かに増田郁子に近づいた。

瞬間、彼女は気配で目を大きく見開いた。ハッと信じられないように、彼女は臉を二、三度パチパチさせた。

「どうしたんです？」増田郁子は起き上ってネグリジェの胸元を合

わせて、恐怖に震える声で叫んだ。

「ベッドを降りるんだ」

鈍木泡亭の手に、白々と光るメスがしっかりと握られているのを見て、郁子の顔色は変った。あわてて傍らの夫を起そうと、手を夫の肩にかけるより早く、鈍木泡亭は郁子に飛びかかって、片手で彼女の口を塞いだ。

「おとなしくしないと、命がないよ——」

彼は手早く、床に落ちていたストックキングで、口を縛った。続いて郁子の両手を暴れられない様に、用意して来た縄で後手に縛り上げた。

夫は物音に眼を覚した。俄破と起き上ると、恐怖におののくかと思いの外、夫は思ったより勇敢だった。それこそ死物狂いで鈍木泡亭に抵抗した。メスを握った右手にしがつき、心臓に迫る鋭いメスの先を引離そうと、必死だった。恐ろしい格闘の数分——。夫は遂に押えられて、鈍木泡亭の足下にあがいていた。彼は兇暴な喜びに歯をむき出し、決定的な一撃を加える為、メスを振り上げた。

増田郁子は、ストックキングの猿轡を懸命に頸にずらせてゆるめていた。

彼女は助けてくれ——と金切声で叫んだ。そして一撃を加えようとする者の名を呼んだ。

しかし、それは鈍木泡亭の名ではなかった。

「木村先生——。お願いです。夫の命だけは助けて下さい——」

その途端、刺す様な頭痛が又始まった。

私は人殺しを見物していたのではない——私自身が、その人殺しだったのである。

足下にふまえた夫と、床に転がって、必死に泣き喚めく増田郁子の、恐怖におののく瞳を私は、夫に馬乗りになった儘、見下していた。

私が鈍木泡亭だったのだ——。

鈍木泡亭のことが、あれ程気がかりになったのも無理はない。それは私自身の事だったからだ。鈍木泡亭は私が意識下に抑圧されていたものを、彼の名のもとに、私がつくり出した、私自身の欲望の現われに外ならなかったのだ。

刺す様な頭の痛みの片隅に、最初の妻の顔が浮かんだ。献身的で奴隷の様に私のいいなりに仕えた妻——。第二の妻がプレとして私の医院に現われた時、私は最初の妻に不必要を感じた。子宮ガンと偽りの診断を下し、痛み止めと称して、劇痛を起す注射を打ってやったら、妻はそれを信じて、自からの身を、自分の手で亡ぼした。私の計略はマンマと図に当り、プレであった彼女を第二の妻とした。第二の妻は、最初は死物狂いで抵抗したが、やがて私のいう儘になった。逆吊りや水責め、針責め、浣腸責めと私は医療器具を総動員して彼女を責めた。そして妻がそれを飲こぶ様になった頃、増田郁子が受付として、私のところへ勤め出した。第二の妻は最早不要となった私は、電気洗濯機の絶縁アースを切り、強電を通して、過失死として葬むり去った。

増田郁子への慾望は、近くを幸いに私は彼女の下着の失敬から始まり、暇さえあれば山茶花の咲く庭から、双眼鏡で増田郁子の状況を観察した。私は二人の妻に使った愛用の縄が、郁子にも使える日の近い事を願って、診察室に持ち出して来て、バッグに入れておい

ては、絶えず郁子を縛る幻想にとらわれた。私は郁子夫婦の生活がノーマルであればある程、それを打破って、やがて郁子を飼育して行く喜びに胸を震わしていたのだ。

真実がときほぐれ、私はヨロヨロと立上った。私の手からメスが離れ、床に刺ささってブルブルとふるえた。

夫が走り、やがてドヤドヤと五六人の男がかけ込んで来たのを、私は激痛の脳裡の片隅に感得していた。

私がガクッと膝を打って、床に手をついた。

私は奇妙な檻の部屋に閉じ込められている。何十回目になるのだろうか——、白衣の男が二人、又私の前に立った。私の性格破綻の原因を探る為——。

燥憂性空想癖……自己暗示……、自己内部の感情分裂……

彼等のきく事はいつも定石通りだ。

私は何でも知っている……それが本職だもの……。しかし、私にはもうどうでもいいことだ。鈍木泡亭はもう二度と私を訪問しはしないだろう——。

ドクターの話は終わりました。引続いてゴルフ氏が、今宵の二番手として話を始めたのです。

第八十一夜 偏落の打算

——妻のひとり言——

△私はどうして、こうも魔性の女であろうか——。夫の圭介は申し分のない、むしろ私に比例して出来過ぎる位の人であるのに、いま

だに田崎のことを想うと、わき上ってくる肉体の疼きを感じるのは、どうしたことであろうか。

ある女流作家の「渴き」という小説そっくりの私の現在のなりわいである。

若い大学生田崎修とは、逢う度毎に縁の糸をプツリと切るつもりで、夫に隠れて出掛け乍ら、逢って見ると口には出せない。

愛慾の決算を思い乍ら、田崎から離れることの出来ない私の肉体の血を、私は切なく泣けてくる時があった。有夫の年上女の愚かしい悲しみではあるが、一旦若いたくましい男性を知った時、その交歓の過去や、事実を忘却しようとするれば、その苦しさから逃避するために、一度は死の谷間をさ迷う程の苦痛に耐えなければならぬのではなからうか——。

この儘では、果てしなく転落する愛慾地獄に、我と我が身を沈めて行くに外ならない。

その夜も、私は足音を忍ばせて我が家の扉を開いた。お手伝いの光子も既に寝たのか、玄関の灯も消えている。廊下の奥に微かに灯りの洩れるのは、夫の圭介が、未だ書齋で、明日の講義の下調べをしているに違いなかった。私立大学の講師である夫は、余りにも真面目過ぎた——。それが反って私を不倫へと駆り立てたといえまいえなくもない。

所詮は、泥棒にも三分の理の諺通りで、一方的に不貞の妻である私がいけないに違いないのではあるが……。

勿論夫妻生活も至極淡泊で、私が官能の欲情に陶醉した刹那、夫は既にワインベッドの隣りに移動していた。心の交流に昇華するよ

すがもない結婚生活が、フト演奏会の夜、隣り合せて座った大学生田崎に惹かれ、すべてを許す仲に迄発展したとしても、それは夫が強く私をひきつけておかなかった。心の隙間ではなからうか——。

私は放心した様に三面鏡に向い、愛慾の陰を落して立上った。夫に紅茶を入れる為に——

——夫のひとり言——

△玄関が開いた様だ。どうやら詠子は帰って来たらしい。あの田崎とか言う若い大学生と今夜も逢曳したに違いないのだ。しかし、俺は何と言うお人好しだったのだろう。選りによって、俺の勤める大学の若い学生と詠子がよろめいていたなんて——。それを数日前まで俺は知らなかった。あの貞淑な詠子に限ってそんな事は絶対ないと信じきっていたのだから……本当に目出度い男だった——。世間でいう、知らぬは亭主許りなりってやつだ。助教授のVから、詠子の事について忠告された時、俺は詠子に限って、絶対そんな筈はないと憤慨した。しかし、俺は認めざるを得なかった。度々、昼間から家をあけていた事も、時には演奏会や観劇に乗じて逢っていたことも俺は知る事が出来た。つまりは詠子の日記からだった。妻は丹念に茶飯事に亘って記帳しているが、日記の処々に、空白がある。

書けないから空白なのだ。書くことが万一を慮ばかって恐ろしいから空白なのだ。

俺はある一日の日記を脳裡に想い浮べる。

『主人を送り出して、庭の花壇の手入れ——。もうすぐ温室のシクラメンが咲く、うれしい。お手伝いの光子と二人で味けない昼食をします。(五行空白)』

大急ぎで、駅前のスーパーマーケットで夕食の買物をすませて帰宅。夫、八時に帰る。遅い夕食後書齋に今夜もこもる。テレビを見乍ら編物……。何か心はうつろ。午後十一時まで夫を待ちて、先に就寝。心燃えて寝つかれず——ああ……

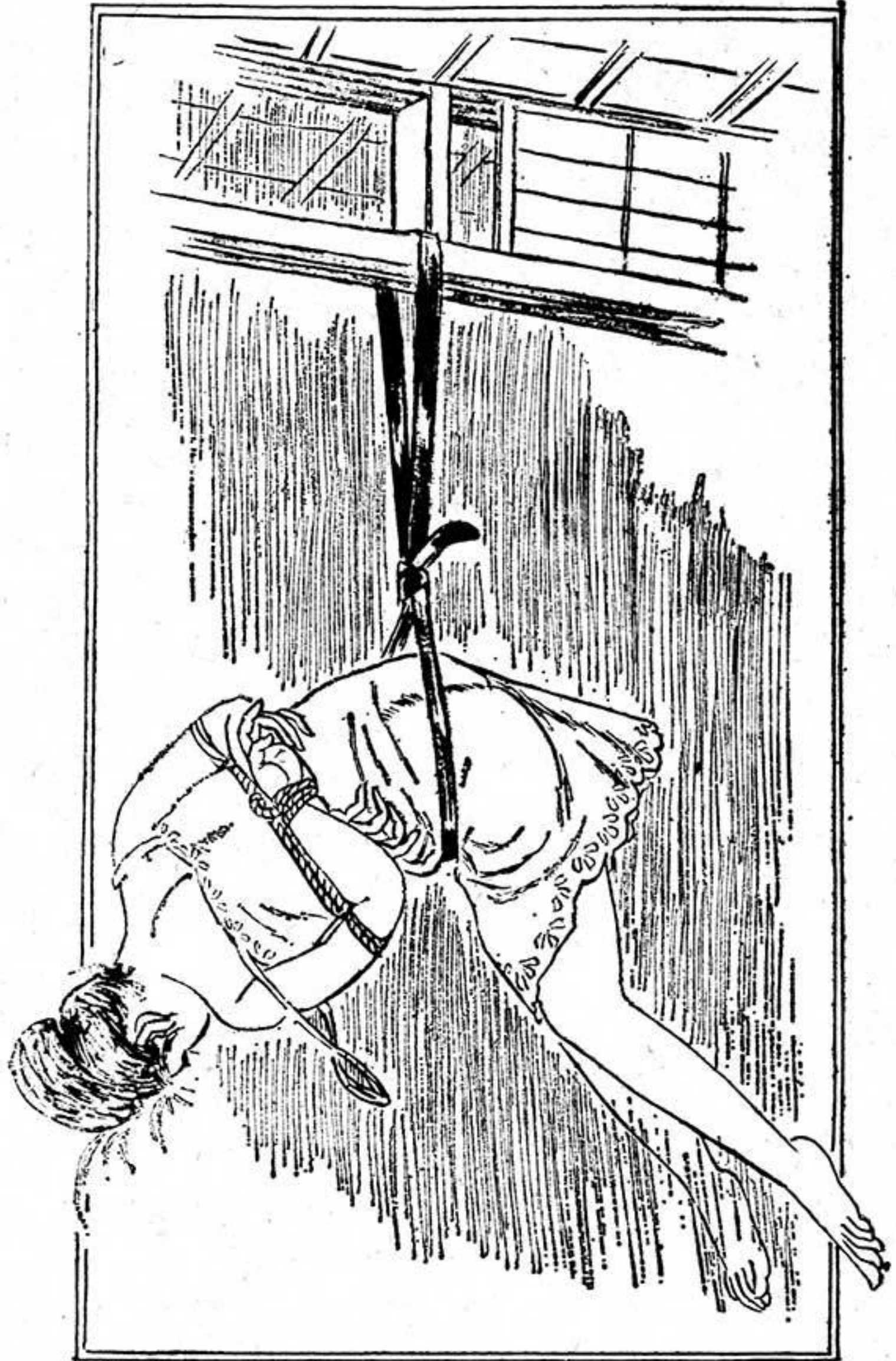
この昼食をすませてから、帰宅までの五行の空白は何を物語るのか——。空白こそは、何にも勝る雄弁を時には物語っているものだ。

詠子はこの五行の文字を心に埋めているに違いないのだ。心に書けば誰にも覗かれる懼れもなく、いかに赤裸々に露わに書いても顔を赤らめることもない——。

空白の回数が、密会の回数に繋がるとすれば、妻は既に十八回も田崎と出会っている事になる。俺は今日程教師という職が呪わしく思った事はなかった。偽善を装おい、似而道德者振り、紳士の仮面をからぶるを得ない俺達の職業なのだ。

俺は過去その偽善に対して、どれ程苦痛を味わった事だろう。人並にバーで酔い痴れ、麻雀にうつつをぬかせたら、そしてレディ・ハント出来たらと、そんな果敢ない希望を抱きつつも、俺は職業意識が遂に妻に迄及んで、君子面で過して来た。

莫迦な学生共を相手に、糞面白くもない講義をする為、書齋に閉じこもり、研究していた。しかし、俺の今の感情は、爆発寸前だ。何の取柄もなく、唯、若いというだけの、頭のカラッポな田崎の様な野郎に、詠子の心を奪われたかと思うと、怒りで俺の心臓は破裂しそうだ。どうやら教師の仮面をかなぐり捨てて来たらしい。俺は世の誰もが怒る様に怒り、詠子を殴り、或いはもっと非道いことをもしかねないだろう。



あの貞淑ぶった詠子を裸に剥ぎ、荒縄で犇々と縛り上げて、俺の憂憤の納まるまで、打って打って打ち据えたら、どんなにスツとするだろう——。

俺に煮湯を吞ませたあの、滑らかな肌に、齒型を喰いこませて噛みつき、情事に汚れきった皮膚を鋭いメスで切りえぐりとりてやりたい慾望にかられる。

サツと蒼ざめた。肩先がブルブルと震えている。
俺は又意地悪く振向いた顔を元に戻して、本に向けた。
声も音もなく、詠子は俺の後ろで、立すぐんでいるのが、手にとる様に分る。

「私は盲じゃないんだよ——」
冷静に私はいったつもりだった。が、突然激しい憤怒が、大きな

扉が開いた。詠子を取り澄ました静かな物腰で入ってくる。紅茶盆を捧げて……。

「遅くなって申沢御座いません。映画の帰りに、道でお友達に出遅ったものですから、つい話し込んでしまひまして……」

詠子は眼を伏せて、おずおずと言訳がましく呟やく様にいつている。俺は黙って本に眼を落した儘だった。

「あのう……何か御用は御座いません？……」

「いや別に——、ああ、そうそう——田崎君が君によろしくとね——」
俺はズバリと相手の名前を出してやった。

「えッ！」

確かに反応はあった。詠子の顔は

何もいえない妻の立場が分つてい乍ら、無言の抵抗をしている様に思えたのだ。

田崎に身をゆだね、黄色いくちばしのそのくせに、ただけしきだけをもつ慾情に、こたえている詠子の肢体が、歴々と隙に映り、心一杯に憎悪が拡がって来たのだ。それは底なしに俺の体内を包んでいた。

夜のしじまを破って、互いの吐く息が、音になって、敏感に、針の先の様に鋭く尖った詠子の神経へ、金属的な響きで突きささっているに違いない。

俺は俄破と立上った。結婚以来始めての、俺の掌が、小気味よい音をたてて、詠子の頬に炸裂した。

爆発した俺の憤怒は、バチバチと火花を散らして発火し、俺は倒れた詠子を足蹴にし、打伏して乱れた髪を床に埋めたその顔をスリッパで踏みにじった。抵抗はなかった。詠子は俺のされるが儘にやっていた。

何という不貞の従順さ——。俺の心は雄叫びを上げて燃え上った。

帯が乱れて解きほぐれ、胸ははだけて、白い円味を帯びた胸が露わに覗いた。もう俺は止まらない。

着物をしめた数条の腰紐を外して、俺は長襦袢一枚に剥いだ詠子の手足を夢中で縛っていた。俺にもこんな勇気があったのか——と自分で自分を見直したいくらい、俺は獐猛に行動していた。

俺の軀はどこもかしこも、かっ、かっ、と、灼ける程熱く、じっとりと汗ばんでいる。

俺の足下で悶える妻——、俺はもっともっと詠子を縛りたくなっ

て来た。責めても責めても、責めたりない気がして来た。

喉が乾いてひりひりと痛む。

俺の目先に、「くっくっ……ああ……」と呻き乍ら、殆んど裸身に近い軀をのけぞらして、受難の身を横たえている妻に、俺はフト何の関連もなく、一つの想念を浮かび上らせた。

詠子は打たれ、蹴られ、殴られる事によって、瀆罪のつもりでいるのではなからうかと——。

べつとりと黒髪を、汗するひたいに絡ませた妻は、艶冶であり、その表情は、嘗って俺の見た事もなかった満ちたりたものであった。

夢中で俺は妻を抱きしめていた。荒々しい慾情が勃然と湧き上るそのさきに、意識のすべてを喪なわせる悦楽の谷が横たわってでもいるというのであろうか——。

俺は今、その谷へ陥ち込んでいこうとしている——。命を刻む愛慾に、仮面をはがした俺は、突入して行こうとするのか——。▽

——妻のひとりごと——

音をたてて燃え、はぜるような激しい仕草であった。私は夫の圭介を眼のさめる想いで見直した。肉体を踏みにじられ乍ら、私は生れ変わった気持であった。縛られた、半ばしびれた私の体に、ぐっと強い腕の力が加わって、ぎゅっと抱きしめられた軀に、熱い血が駆けめぐるのが分った。悶え、のけぞる私の顔に、蔽いかぶさった圭介は、私の柔かい肌とジリジリと押しつぶしていた。私は情慾の埒塙へ、音を立てて崩れていった。

「田崎と逢うなら逢え——、せきを切った俺の心は、その度毎に、お前をより激しく責めつけるだけだ。田崎とのどろどろに汚れたそ

の軀を、俺は水をぶっかけてきよめてやる。その肌を逆さに吊してジリジリとローソクでやいてやる。逃げるなら逃げて見ろ——俺は地獄の果てまでも、お前を追いかけて、責めて責めて、責め尽してやるから……」

切れ切れに叫ぶ夫の言葉は、私の女体を、尚更に妖して悶えさせた。

糞面目な夫に不満を感じた私は、裸の圭介を見て、迷いがさめた様だった。

私はもっともっと圭介に責めてもらいたいと思った。それがより激しい愛情の絆になるに違いないと思ったからだ。

翌朝、夫は、実に何年振りかで朝寝坊し、遅刻して、氣まり悪げに出勤していった。元の善良な夫に戻って……。昨夜の夫のカケラもない——。

私はつましく見送って、或る感慨をこめて、振向いた夫へ手を振って見せた。

三月经った——。夫は又いつもの夫に戻ってしまつて書齋に閉じこもっている。どうしたというのだろう。私の視線を避けるようにしている。言外に意味を含ませても、夫はサリげなく、弱々しく眼をそらす。何だか夢を見た様な氣持だった。私の過去にある、女豹その儘の、肉体の悪魔を、あの一夜で払拭し得たと思っているのであろうか——。

もう一度夫の情熱をかき立てる手段として、それなれば田崎と逢曳を続けられよいのであろうか——。

私はあの一夜を境に、夫は私に対して変わったと思ったのに、それは私の思い過して、やはり夫は、あの一夜を苦い悔恨で噛みしめているに違いないのであろうか——。粗々しく縛られ打擲され、夫の膝下で呻き悶えた、あの悦楽の谷間。私はあのひとときを忘れる事が出来ない。甘美といわれるか——。妖しい惑溺を覚えたひとときなのに——。私に潜在的な被虐の快感がありとすれば、それに違いない。

肉慾をたぎらせて、ぶざまに燃えるだけの田崎との逢瀬にくらべそれは何といふ強烈な刺激だろう。

私は夫を喚起する為に、今一度危険な冒険に足を踏み入れて見る事にした。

田崎はいつもの喫茶店で待っていた。脂ぎった顔、情慾に餓えた瞳——、これが思い悩んだ田崎であつたのか——。

彼は顔一杯に、快心の笑みを浮べて、年上の女と狂うひとときの勝利感に酔っているようであつた。

タクシーは梅田から新道へ抜け、雑踏の中をよたよたと御堂筋をまっすぐ走っている。

春には珍らしい地軸を流す様な豪雨が沛然と降りしぶき始めた。「これから例のホテルへ行つて、さて……少し時間が遅くなるね……。十一時五十分の終電に間に合わないかも知れないな。若しそうになったら、詠子さん泊る勇氣ある？」

「いいわ、どちらでも……」

私はうるさくなって来た。獸慾をむき出しにして、私の手を車中で握る田崎が段々とましくなって来た。端麗な白哲の夫の姿が、醜に浮んで消えた。

ホテルの前で、田崎は傲然と先に降りた。私にタクシー代を払わす気らしい。既に彼の足はホテルの入口の扉に向っている。

「この儘やって——」

突嗟に私は運転手に叫んだ。軽々とエンジンの音を響かせて車はその儘一方通行のホテルの前を通過して走り出した。

何か田崎が慌てて追い掛けて来て、手を振っている様だった。

——ざまあ見ろ……と私は内心快哉を叫んだ。

田崎との縁の糸が沛然と降る雨と共にプツリと切れて吹っきれた想いだった。

私は悠々と電車に間に合うと家路を急いだ。

夫は茶の間に、背広の儘座っていた。私が静かに一礼すると、

「ついてこい！」と一言言って立上って、寝室に消えた。

「逢ったネ——」

私は素直に「ハイ」と応えた。

「分っているネ——」

夫の眼は私を穴のあく程凝視している。私は、いい訳はしなかった。やがて起るある種の行動に期待したからだ。

「裸になるのだ——。なり給え、すぐ……」

高飛車に命令調だったが、私には快よかった。いわれる儘に着ていたものを脱ぐと、夫は買立らしい、真白な固い感じのロープを、抽出しからとり出した。

だっと躍りかかった夫は、私を高手小手に縛り上げた。後ろ手に縛られた私の軀は、ついで、柔道用の黒帯で胴中を吊られ、鴨居につり下げられた。

ぎりぎりと肌へ喰い込んでくる縄は、私自身の体重もかかって、

ジリジリと肉を喰い始める。鬱血で顔じゅう真赤にふくれ上る思いであったが、狂おしい熱情が体内をかけ巡って、全身をかつと火照らせた。

夫は精悍そのものに見える。ズボンのバンドを引抜くと、一振り二振りして、私に振りかぶった。

瞬間、灼熱の疼痛が、ジンと走って、私はめくらめく想いで、もっと打ってもっと打ってと叫んでいた。それは恐らく、いのちの震える善こびと、痛飲の入り交った、生々しい叫び声ではなかっただろうか——。私の心は急激にその陶醉の中に傾斜していった……

——夫のひとりごと——

△妻の浮気を希むなんて変な気持だ——。詠子はその後思わせ振りに、私にうるんだ瞳を投げかけるが、俺はじっと我慢した。

この次、若しこれに懲りず、田崎に逢う様であつたら、その時は俺にも覚悟があつたからだ。

夕方——、詠子は映画だといって家を出た。待っていたチャンスだ。俺はそそくさに身を戻して後を追う。喫茶で田崎と逢っている詠子——。俺は最後の決算をつける決意を定めていた——。甘くみるな、田崎も詠子もどうするか見ろ……。俺に殺意がたぎっていた。

タクシーにのった二人を追って、俺は直ちにタクシーを拾ってあとをつけた。

ホテルの前で、突然詠子は田崎をおいてけ堀にして走り去った。俺の車もそれを追う。田崎のわめきちらしているのを横眼に見て、俺の殺意が一瞬、快楽の幻想に変化した。

梅田から電車にのる詠子をたしかめて、俺はタクシーで一路家へと戻った。幸い詠子は未だ戻っていない。



俺の方が早かったらしい。
 姦通は未遂に終わったのだ。しかし俺の一旦熱を発した嗜虐のエネ
 ルギーは刷け口がない。
 その日を愉しみに買い求めた二条の真新しいロープが、詠子の

残る深い傷あとは、打撃と共に、薄紙をはぐ様に消えて行き、詠子
 のいとおしさだけが、肉体に残滓となった。
 奔子を恨むより、むしろ嗜虐に傷つけ乍ら、この愛しつづける自
 分の心が切なく泣けてくるのであった。

肌を恋しがっている。

とつおいつ思案するうち、詠子が戻っ
 て来た。

俺は密会の事実を、妻がどういかに
 興味をもった。免も角

「ついてこい！」といって寝室へ歩き出
 すと、詠子は素直に従って来た。

「逢ったネー」「ハイ」と妻ははっきり
 応えた。

「分っているネー」

妻は微かにうなずいた様だった。

一切弁解もいい訳もなかった。妻の
 体が今日は綺麗である事は俺は知ってい
 る。——妻は希んでいるのだ、それを……

俺は突嗟にその事に思い到った。

詠子の体を胴吊りにし、バンドでびし
 びし打ち乍ら、俺の眼から涙が溢れた。

手も足も感覚を失なっているに違いない
 詠子は、空間に声を殺して呻き乍ら、俺
 のバンドの鞭を甘愛していた。俺の心に

嗜虐の愛情——、この激しさを詠子は希んでいたのだ。俺はやつと今にして知った。

詠子、お前は どうして、こうも魔性の女であらうか——

ゴルフ氏の物語りは終わりました。よろめきについてひとしきり話題が飛び交います。魔性の女には、毒を以て毒を制するというか、つまりは、案外世の中に多い、よろめき夫人の対応策として、嗜虐の鞭が、より強烈な刺激となって、よろめきを治す特效薬であることに結論はいった様です。

更に話を移ぐべく三番手として、ライカ氏が登場しました。クラブの雰囲気は、いよいよ佳境に入っていきます。

第八十二夜 火箸が知っていた

「一月三十日号の『週刊現代』、に（私のみたキンゼイ研究所の内幕）という一文がありました、ここで仕事をしていた、関口英男氏の報告では、キンゼイ研究所の図書館に、われらが『奇ク』も、整然と蒐集分類されて保存されているそうです。愛すべき『奇ク』の一読者として快哉を叫ばずにはいられない報告ですが、キンゼイ報告で有名な、アメリカインディアナ州、ブルミントン市の一面で海を渡った、『奇ク』が翻訳され、性科学研究の一助になっていることは、『奇ク』のもつ洛陽の誌価が、高く評価されている何よりの証拠だと思えます」

私の奇友、奥本さんが、その『週刊現代』を持参して庭伝いにやって来て、そう話をしてくれたのです。

庭園の昨夜来の雪は、朝陽を浴びて、サンプラチナ色に輝やき、ボタボタと滴を激しく落して解け始めていました。

縁側で、家内の差出した紅茶を啜り乍ら、奥本さんは、痛む右太腿部を撫でさすり、感慨深げに呟やくのです。

「やはり冷えると痛みましてネ。どうも一生の古傷ですよ。傷が痛むと、この足を責めつけられた往時が生々しく偲ばれるんですよ。今じや語り草ですが、終戦直後の、あの憲兵の鬼畜ぶりは、思い出ししても慄然としますね——」

度々聞かされている話ですが、奥本さんは終戦の時まで、思想犯——いやな言葉です。それで奥さんの美津さんと一緒に捕えられていて極度な拷問をうけた。謂わば軍国政治の被害者の一人でした。

敗戦になって解放された時、奥本さんは完全なるビッコになっていたし、美津さんも亦、一生子供を産めぬ体にされていたのです。

筆禍事件と一口にいつてしまえば、簡単ですが、劣勢挽回に狂奔する軍部は、奥本さんのほんの原稿用紙十枚足らずの、平和論の随筆めいた投稿文を、左翼ときめつけて、一言の弁解も許されず、教壇から引立てていったのでした。夫婦は共働らきの小学校の教師でした。平和を希う、小市民のささやかな希望も無漸に打砕かれて、彼は政治犯なみに牢獄と放り込まれ、非国民と銘うたれ、精神を入れかえさせてやる、鍛えなおしてやるという、横暴な憲兵達の手で数々の拷問を受けたのです。白状することもない——、自分一人の考えで書いたものが、やれグループの名をいえ、それ、関係者を白状せよと、責めつけられても、奥本さんにとって、何を告白し、何を白状すればよかったのでしょうか。拷問が目的の拷問——、そんな日が続き、拷問の苦痛から逃れ得る為に、でっち上げの罪状が出来上り、奥本さんは、数日後には、いっばしの、重要政治犯になっていたのです。

「何しろ緊縛はプレイではないのですからね。手首の縄に皮膚が挟まれていようが、胸縄で呼吸が切迫してこようが一切お構いなしですからね。私は取調室で越中褌一本にされまして、三人掛りで、無理矢理押えつけて、太いロープを首にはめて、両手を後に縛り上げた上、右足首を一本のロープで輪をつくってはめて逆さに吊り下げられたのです。足首も縛って吊すと左程でもありませんが、輪にしてはめて吊すと、体重が足首一本にかかって、しめつけてゆく一方です。その時の苦痛は痛いなんてものではありません。全身の重みが足首に凝結して、太腿の辺りはひきつり、右脚一本、腰の附根から脱臼したように思えました。憲兵は青竹や、木銃で情容取敢もなく殴りつけ、煙草の火を私の体へ押しつけてもみつけます。気を失なうとバケツを持ち上げて、私の顔をバケツにつっ込むのです。」

梁から降された時、私は腰に激痛を覚え、どうしても起てませんでした。そして右足は完全に麻痺してしまいました。

その翌日、私は這う様にして再び取調室に引き立てられて来ました。

——面白い見世物を見せてやるから、そこへ座れ——

憲兵伍長は、脂ぎった憎々しげな不気味な笑みをたたえて、私を拷問椅子に座らせました。被服廠でもつくらせたのか、その椅子は堅い木製の、肘掛椅子でしたが、肘掛の部分に、亜鉛板が貼ってあり、尾錠のついた帯革がとりつけられてありました。私の両手を左右の肘掛の上にのせ、手首を帯革でしめつけられ、両脚も、椅子の左右の脚に、ぴったりと縛りつけられました。少々もがいても、暴れてもビクともしない頑丈な電気椅子でした。

取調室の扉が開いて、憲兵に小づかれて引き出されたのは、蒼ざ

め、数日で見える影もなく焦痺した妻の姿でした。

妻のかぼそい両手に、白々と手錠がかみ合っておりまして。

——手錠を外してやれ——

憲兵伍長の命令で、手錠は外され、よたよたと妻は、その場へ崩折れてしまいました。

——おい、奥本……、奥さんが可哀想なら、すっかり吐いてしまえ。吐かぬと、これからどうなるか分っているだろうな……——

——私には、最早何もいうことはない。幾度もいつている様に、背後関係もグループもない、唯、私一人が、平和を希い、たまたま投稿したまでだ。家内の勿論しつた事ではない。もう止めてくれ——
——フン、止めてくれだと……。その根性をたたき直してやる。じゃあそうそう始めるか、おい、その女を裸にせい——

命令一下、最早容赦ありません。待ちかねていた様な餓狼達は美津のモンペに手をかけ、筒袖の紺の着物を引き剥がしにかかりました。結婚後一年有余、未だ二人の間に子供のない私達でしたし、妻も二十四才の女盛りの体でした。あまりの無体にも勿論家内は抵抗しましたが、それは所詮蠅螂の斧の類です。

妻は忽ち、あられもない姿を、賤しい憲兵達の眼前に曝してしまいました。

——フーム、綺麗な体をしたオナゴじゃなあ、責めがいがあったいぞ——

舌なめづりせん許りに、憲兵伍長は、穴のあく程妻の体を凝視して、これから行なわれる拷問を愉しむかのように、両手をこすり合わせていました。

——妻にだけは止めてくれ——卑怯だぞ。止せ！それが帝国軍人

の所業か！ やめろ、やめろ……—

私は必死で叫びましたが、頬桁がくだかれん許りに殴りつけられ、挙句には口の中に油くさい、掃除用のボロ布を口一杯に押し込まれ、上からしっかりと細引でぐるぐる巻にされた上、首に縄を巻きつけて椅子の凭れに縛りつけられてしまいました。

憲兵伍長は私に尻眼もくれず、立上ると、旨そうに『ほまれ』にライターで火をつけ、妻に近付くと、憲兵達に命令して、妻を立たせました。両腕を押えられ、身動きならぬ妻に憲兵は顔を近付けライターの炎を、妻の形のよい乳首の先にもって行ったのです。

—あっ、ひーっ……—と、妻は、ジリジリ乳首をやく熱さに悶えましたが、容赦のない憲兵伍長は更に、炎を近付け、やがて肉のこげる微かな臭気が、部屋に立ちこめたのでした。私の血走った眼に、妻の桃色づいた乳首が黒くやけただれているのが、つきさす様に、臉の奥にやけつきました。

—塩水責めにせい——
彼等は、まるで愉しくてたまらない様に、キビキビと動作しました。

ひざまづいて押えつけられた妻の口に、漏斗がさし込まれ、バケツに塩をたっぷり入れてとかした食塩水が、一人の憲兵の手によって、漏斗にバケツが傾むいてゆきました。

もがいても、さからっても、無慈悲な食塩水は、妻の口から、食道へ、胃へ、腸へと、ゴクゴクと嚥下されて行きます。二リットルはあったでしょうか。

バケツの底に、とけきらぬ食塩を残して、溶液がなくなると、伍長は、待て待てと、妻の体をその押えつけた儘の姿勢にさせて、ズ

ボンのボタンを外しました。

更に忌わしい液体が、しめやかな音をたてて、妻の食道を嚥下していったのです。

—オナゴを吊り下げろ——

伍長は重々しく、さも威厳をつけて命令しました。

数分後には、妻は後手に縛られ、梁から高々と、地上二米の高さに吊られていました。

食塩水で膨脹した腹部は、ボツテリと、さながら妊娠中期の女のようにふくれ、妻は、懸命に尿意をこらえていました。食塩が体内に吸収され、恐ろしい苦痛が、腹部をえぐっているに違いありません。

私を縛りつけた儘、肘掛椅子が、妻の足下に担がれて来て、振り仰いだ、私の鼻先に、ダラリと垂れ下った、妻の足の爪先が、鼻もすれすれに宙に浮いていたのです。

—ああ、美津、許しておくれ。私のトバッチリで、この様な死にも勝る屈辱をうけ、恥かしめられて、私は、お前になんといって詫びたらいのだろう。許しておくれ美津……—

私の血を吐く思いの絶叫も、油くさいボロ布にさえぎられて、それは一言の言葉にもなりませんでした。

数人の見入る憲兵の前で、妻の忍耐の限界がきた様です。微かな呻きと喘ぎがきこえ、

—あ、あなた、ゆるして……—

と、きれぎれに妻は叫びましたが、その時私の鼻先に、足の爪先を伝って、絹糸にも似た液体の流れが、糸を引いてふり掛ったのです。それも束の間、進ばしる様に、谷間を割って流れるせせらぎが

雨で水かさをましたかの様に、その流れは沛然となり、振り仰ぐ私の顔一杯に振りそいで来たのでした。私は妻の苦痛を甘受してやりました。それが今の私に出来るせめてもの心尽しだと思ったのです。いいから存分に流すのだ。私はいい、最後のしずくまで、私にふりそいでくれ。

敗戦の数日後、私はボロ屑の様な体になって放り出されました。顔はハチにさされて一杯にふくれ上った様に、はれ上っており、唇はさけ、耳はガンガンし、前歯は三本折れておりました。

妻と対面した時、私は手を取り合って泣き、兎も角、お互いが命のあった事を喜び合いました。妻は蒼ざめ、すっかり痩せおとろえていました。

——貴方、私とうとう赤ちゃんの出来ない体にされてしまいましたわ。口ではいえない非道いことをされて……——

妻は泣き泣きそういったのです。私は聞きただそうとしましたが妻は口を頑なに結んで、その仕打ちを打明けませんでした。余りにも、ショックな行為に、妻は私に告白するすべもなかったのです。私もそれ以上たずねませんでした。聞いたとて何になりました。古傷をあばいても、それは二人の嫌な思い出を助長させるだけに過ぎなかったからです。しかし、冬の或る夜、妻は私と二人火鉢をかこみ乍ら、じっと、火鉢のふちに挿してある、鉄の火箸を憎々しげにいつまでも見つめていました。

私はある事にハッと気付き、愕然としました。そうか、そうだったのか——。あの鬼畜にも等しい憲兵伍長なら、やりかねないだろう。

——美津、火箸はよして、火ばさみにしないかね——
今なら当然、石油コンロか、ガストーブに、すぐにでも取り替えていたでしょう。

その終戦翌年の冬の夜では、闇の炭にたよる以外、暖をとる術もなかったその頃でした。

妻はじっと私を見つめ、涙がみるみる眼球に溢れ、玉の様にポロリと頬に伝いました。

——お分りになったのネ。あれはもっとも長いものでした。それでわたし……——

——それ以上いわなくとも分っているよ。さあ捨てちまおう。忌わしい思い出のものは捨て去るべきだ。こちらへおよこし——

私はその火箸をとり上げると、力任せに庭に叩きつけました。鈍い音を立て、二本の火箸は敷石に当たって、ハネかえり、つもった辺りの雪を乱して、バランの葉蔭に没し去ってしまいました——。

「同じ雪でも、見る眼が違うと、こうも美しいものなんですわ……いや御邪魔しました」

奥本さんは縁側から腰を上げた時、敷石づたいに奥本さんの奥さんが呼びに来ました。

四十才を越した人とも見えぬ若々しさで、美津さんは、丁寧に私に一礼すると、

「いつもいつも主人が御邪魔していて、本当にすみませんわ。又、いいお話なさっていたのでしょう。貴方——御食事よ……」

私は心から睦まじそうに、肩を並べて立去る奥本夫妻の後姿をいつ迄も見つめていました。生きていてよかった。苦難を共にした夫

〔新版〕 女体悦虐フオト七十選

Z組七十集 大手札印画紙 (9×13 輝) 焼付各組一枚一組(送料共)

一組 一枚	一〇〇〇円
五組 五枚	四〇〇〇円
十組 十枚	七五〇〇円
二十組 二十枚	一四〇〇〇円
三十組 三十枚	二〇〇〇〇円
四十組 四十枚	二五〇〇〇円
五十組 五十枚	三〇〇〇〇円
六十組 六十枚	三五〇〇〇円
七十組 七十枚	四〇〇〇〇円

Z 1 ゴムの猿ぐつわ (梨花)
Z 2 囚女第六十三号 (柳)
Z 3 猪型手足吊り (梨花)
Z 4 逆エビ強烈縛り (大塚)
Z 5 ローソク責め (四浦)
Z 6 豊臀への珍責め (絹川)
Z 7 淫らな変型縛り (愛川)
Z 8 ザリガニしばり (梨花)

Z 9 引き回しシーン (東浦)
Z 10 全裸後手高小手 (加茂)
Z 11 豊満な肌の被虐 (大井)
Z 12 黒髪いたぶり (大塚)
Z 13 足吊り媚態責め (絹川)
Z 14 黒縄高小手縛り (四方)
Z 15 強烈荒縄しばり (梨花)
Z 16 肌の喰込む白い縄 (東浦)
Z 17 裸身の足指苦悶 (桜井)
Z 18 無茶な猿ぐつわ (前本)
Z 19 ハリツケの女体 (竹野)
Z 20 おへソなぶり (梨花)
Z 21 逆手足吊り (大塚)
Z 22 美肌のいたぶり (竹野)
Z 23 仰向きの鼻いじめ (絹川)
Z 24 恐怖の表情一瞬間 (加茂)
Z 25 火箸で責める乳房 (若原)
Z 26 (梨花)

Z 27 全裸の海老責め (熱海)
Z 28 ベッド上の痴態 (絹川)
Z 29 足の裏の櫛り責め (大塚)
Z 30 閨の女体飾り縛り (竹野)
Z 31 首絞め晒しもの (大塚)
Z 32 鼻孔に加虐 (若原)
Z 33 悦虐責放状態 (梨花)
Z 34 手枷足くさり (四方)
Z 35 寝室でのプレイ (花本)
Z 36 猿ぐつわの妙味 (梨花)
Z 37 首縄、柱しばり (絹川)
Z 38 巻煙草責め (大塚)
Z 39 尻立て縛りポーズ (桜井)
Z 40 厳しきエビ責め (東浦)
Z 41 ゴムのカバール縛り (竹野)
Z 42 ワンピースの縛り (花本)
Z 43 荒縄縛り竹棒責め (梨花)
Z 44 尻を突つ立てて (大塚)
Z 45 鏡に映す縛り裸像 (山路)
Z 46 苦悶に喘ぐ柔肌 (大塚)
Z 47 酔後の淫らしばり (絹川)
Z 48 逆十字エビ縛り (大塚)

Z 49 全裸縛り猿ぐつわ (東浦)
Z 50 欄間に宙吊り (梨花)
Z 51 全裸逆エビ縛り (絹川)
Z 52 荒縄のお仕置室 (梨花)
Z 53 庭園の惨酷風景 (館)
Z 54 被虐の果て (大塚)
Z 55 痛められた裸身 (大塚)
Z 56 鏡の中の全裸像 (愛川)
Z 57 セーラー服縛り (梨花)
Z 58 檻の中の緊縛裸身 (愛川)
Z 59 全裸の股間縛り (絹川)
Z 60 オムツ逆エビ責め (田中)
Z 61 胴縄に膨らむ腹部 (桜井)
Z 62 ゴム人形の女 (竹野)
Z 63 荒縄のトゲ責め (梨花)
Z 64 女子大生恥態責め (田中)
Z 65 白肌露出の全裸縛 (絹川)
Z 66 強要する開股縛り (絹川)
Z 67 強烈縛り全裸の晒 (愛川)
Z 68 亀甲縛り乳房責め (梨花)
Z 69 ベッド上のもだえ (愛川)
Z 70 恥しさに耐えて (館)

婦こそ、一生の伴侶として、何ものにも勝る堅い堅い絆で結ばれているに違いないと思ったことでした。

縁先には、彼のおいていった『週刊現代』が春めいた風にパラパラとまぐれ、彼の話していた、(私のみたキンゼイ研究所の内幕)という大きな見出しが、これ見よがしに偶然にも開いていました。その左側の頁、四階建のキンゼイ研究所の写真の下段の活字の頁の片隅が、くっきりと赤線で囲まれ、その活字の中で、赤く一本線を引いた個所に、『奇譚クラブ』の五文字が、ありありと、雪映に輝

りはえて、私の眼に飛び込んで来たのです。

ライカ氏の話は終わりました。彼の話を書き付ける様に、戸外には牡丹雪が霏々と舞い始めておりました。

聴て訪れる春の前触れの様に、雪は天の一角から果てしもない舞い狂って地上に降りそそいでいたのです。

屈男達は一人又一人立上りました。迎えの運転手達はさぞあくびの連発だった事でしょう。

(終)

殿中妖艶女相撲絵巻

岡 平 吉 夫

江戸大名屋敷ではあらゆる遊興にあきたのか、奥女中を裸にして相撲を取らせ酒盃をかたむける好色大名が現われるに至った頃、このことを伝え聞きし豊前中津藩の十五石二人扶持、水木新十郎が組頭を通じて、これまた遊芸にあきた藩公のなぐさみとして殿中相撲の開催を進言した。

この新十郎の進言は、単なる座敷相撲とは違って彼自身、常日頃実現してみたいと思っていた幻想を、そのまま具体策として書状にしたためたものであったが、
「それはよき趣向、一切を新十郎とやらに任

せよ、但し、余の氣に入らぬ場合は多数の金子を使った上のこと、そのままには捨て置かぬぞ」

との沙汰があつてから丁度三年間、とんだ粹興から命がけとなった新十郎も日夜この殿中相撲に没頭した甲斐あつて、殿のお氣にも召し今では加俵され母と二人の生活も何んとか手内職もせず、その日その日を送ることの出来る身分となった。

水木新十郎の殿中相撲とは大名が女中衆を裸にして座敷内が相撲をとらせたとして、女中の片手間、それも恥じらつて真剣な取組は望

めまい。さりとて興行女相撲では丸裸というわけにも行かず、その上醜惡な大女の集りであつてみれば何んの風情も湧かぬは必定。

故あつて路頭に迷う美貌と肢体の整った素人娘をかり集め、殿中奥庭に土俵を築き相撲を取らせては如何。

それも東西三役には興行女相撲からかり出し幕内、十枚目をこの娘達で配置し春秋二回を本場所とし東西對抗にて取組ませ、場所以外は城内の一角に東西二部屋を設け稽古に励ます趣向。

この本場所の勝負結果から番付がぬりかえ



られ幕内となれば年二両、三役入りをすれば
小判十枚、但し、三役には前記本職の女力士

がひかえておれば容易ならざる難関ではある
が、小判十枚の報賞金の外に自由放免、当時

の小判十枚も持てば

ちようにした小店も

開けるだけの価値が

あり、それをもとで

に店を持つなり、世

帯を持つことも出来

るとなれば、おのず

から稽古に励み何ん

とか三役入りして未

来に希望をたくした

いもの。こんな根性

を抱かせて殿中相撲

を始めたのであるか

ら藩公のお気に召さ

ぬわけがない。

今では人買人など

の手を経て、四十名

近くのえり抜かれた

容姿とも端麗なる娘

達が秋場所千秋楽を

前にして、その星数

の明暗を胸に抱きな

が稽古土俵に花を

咲かせている。

「おきぬを居るか」

東部屋に顔を出したのは新十郎。

春乃海おきぬは稽古場から土俵上の立会い

を見守っていたが、まわし一本の裸身を恥じ

らってハッと両手で胸をおおった。

男禁制のこの部屋に出入が許されているの

は世話役新十郎ただ一人。

「おお、おきぬ、明日の勝負、案ずることは

ない。心ゆくまで相撲をとってくれ」

近寄った新十郎は低く、ふくみのある声で

ささやくと、ギョツとおきぬを見つめて、そ

のまま部屋を去って行く。

おきぬのうつむきかげんの面持から、さっ

とあか味がさした。この二人の間には何かが

ある。

風呂あがり夕餉もすませ、春乃海おきぬと

浜風およしは六畳間で一と息ついていた。

春乃海は藩内百姓の娘からこの殿中相撲開

設当初、酒飲みの父親のため金一両のかたに

取られて東部屋入りし、浜風およしは遠く江

戸下町の大工の娘として生れたが商家奉公の

さ中、その番頭と不義を働いたというかどで

勤め先から追われ、家にも戻れず居るところ

を人買人によってここに送り込まれた。が、

田舎育ちのおきぬと江戸育ちのおよしとは相補うものがあるのか、特に親しみを増し、東前頭筆頭春乃海おきぬ、二枚目が浜風およしと兎も角も素人としては最高位まで進んでいた。この六畳間も二人だけの部屋にあてがわれ、洗い物、食物の仕度は幕下の娘達によって面倒をみてくれ、まあ、今日までの生い立ちからすれば、裸相撲にも馴れ何不足ない境遇というもの。

「おきぬさん、あんた、新十郎様のこと思っているのじゃあないかえ」

「あら、いや、そんなこと」

「でもさ、新十郎様はおきぬさんのことを思っている。わたしにはそれがわかるのさ」

「いや、いや、もうよして」

「おきぬさん。明日の一番に勝って晴れて三役入り、そうなればたと金子をいただいて自由の身、晴れて新十郎様と世帯を持つすんばうじゃあないの」

「もういや、およしさん、わたしは百姓の娘そんなだいたいそれたことを考えないわ」

「何もさ、隠すことはないよ」

男を知っているだけに、およしはただならぬ兩人の仲を見抜いている気配。おきぬは今日までの星が四勝四敗、およしは五勝三敗、

明日の一番に勝てば東小結が休場とあるよき機会に恵まれて正小結、張出小結の番付は明らか、それに東方は三場所振りに西方を大きく引き離し特別の報賞金まで出るというから氣の入れかたも一入。

東方大関松錦お熊も

「皆の衆、明日一日の辛抱じゃ、殿様からも東方に軍配があがれば特別に三日のお暇とご褒美を下されるとの、お達しが出されたのじゃ。負けられぬぞ、皆の衆、東方一同白星をかざっておひらきとするのじゃ」

と云われたばかり、士氣とみにあがった東方部屋。

「およしさん、そう云うあんたこそ、三役入りをして江戸で待っているいい男と一緒にいるのじゃあないのかえ」

おきぬはわざと話題をそらす。

「いやさ、そんな粋な夢でもあればおきぬさん、あんたより強くなって、とっくにおさらばしているよ、でもねえ、わたしは男はつくづくこりたよ、冗談はさておき、あんたも男には氣をおつけ」

ときっとにらむ。

明けて翌日、殿中奥庭には紅白の幕が秋風

になびき、荒れ狂った土俵も清められ殿中相撲気分も上々、正面離れの間には奥方を従えた藩主秀政公を初めとして重臣一同がずらりと観戦の坐をしめている。女中衆も酒盃の酌に二十数名。

千秋楽ともなれば、何時とはなく東方が最肩、いや西方が最肩じゃと上は千石取りの侍から下は庭番足軽まで固唾をのんでひかえている。

番数も取り進みいよいよ東方浜風およし、西方前頭筆頭竜見山おさきの顔合せ。

おさきは四勝四敗、この一番に勝って張出小結をはりたところ。漁村に育ったというだけあって、女としては筋肉質、稽古で鍛えた引き締った肢体は西方女力士随一である。

一方、浜風およしは江戸の初湯をつかっただけに雪の白さを思わせる柔肌に脂肪が多く弾力性をおびた腰のふくらみは圧倒するばかりの色気がただよう。

行司の四股名の呼びあげに、一瞬両女力士は緊迫した表情と斗志を燃やして土俵へ。力水、清めの塩は型通りではあるが陰にこもった氣迫がせまり四股を踏む有様も力強い。

入念の仕切りが二回、三回と続く。行司は充分に仕切らせ呼吸をはかって軍配を引く。

浜風、竜見山の体がぶつかり合った。バシッという音、はじき合うように離れた両女力士は直ぐガッチリと四つに組み合う。

力に勝る竜見山おさきの逞しく伸びきった足が前後左右、外がけ内がけと目まぐるしく投げを打つ、浜風およしの柔肌はたちまちこれをこらえて桜色に紅潮、汗びっしょりとなり秋の日ざしを受けて美しく光る。

おさきは相手の腰の強さに業をにやし、大きな尻を躍動させて、寄り進む。あわや、およしは、このまま土俵を割るかと思われたが俵に足をかけ上手をしかり取って腰を落せば寄切れず、竜見山おさきの「えい」とばかり下手投げを打ったのが却って悪く、およしのひねった技に、もろくも土俵溜りに顛倒した。

軍配はさつと浜風およしにあがる。この一番に敗れた竜見山おさき、当分は三役入りはおぼつかないだけに、背中一杯付けられた砂を振りはらうこともなく、キラッと無念の涙が二筋、頬をつたって流れている。

「よき勝負であった」

藩主秀政公は酒盃を片手に上機嫌。

「浜風およし、近うよれ」

勝名乗りを受けたおよしに声がかかった。

およしは荒い息使いを整え印半纏を引っかけると、恐る恐る正面に進みより平伏。

「そち、六勝三敗、当然三役入り、めでたいぞ。ほめてとらす」

「おそれながら申し上げます。このよしは例えお許しがありましても、何処とて戻るあてはござりませぬ、それにもまして御殿にて相撲を取りますことは、わたくしにはこの上なき幸せ。どうぞ、このまま御殿にお残し下さいませ」

およしはよどみなく言上した。藩主秀政公もこの返答にはいたく満足した様子。

「うむ、ういことを申しおる、これ新十郎、こやつは六勝三敗、小結をとんで関脇じゃ。いずれ大関を張るようになれば、小判百枚をとらし、一生大事なきよう取りはからえ」と下命した。

扱て、前相撲もこれにて取り終え、三役相撲、行司の呼び声も一段と高く、東方春乃海おきぬ、西方小結都野川お仙が土俵上へ。

いざ、大勢の注視も果然興に乗り、藩公も膝を一步踏み出す有様。

おきぬの二十前の若鮎のような肢体には黒縋子の褌に下りがよく似合い、緑の黒髪も水もしたたるばかりの櫓落しの大銀杏に結いあ

げ惚れ惚れする姿は錦絵のようである。

一方、都野川お仙はさすが本職の女力士。体格はまるで男と変らず胸のふくらみも見立たない上に浅黒い肌は長年、荒稽古で鍛えられ、三十を越したにも拘らず一向に衰えをみせず、おきぬに比べて身長体重とも数段まさっている。

満場は思わず騒然、居ならぶ侍達も、この顔合せばかりは心秘かにおきぬの勝を願っている模様。

春乃海おきぬは、この大敵を向うに廻し、いささかもわるびれることもなく可愛らしき太股を大きく開いて四股を踏むが、この一番に何んとか勝って晴れて自由の身になりたい願望がありありとその表情からも伺える。それに反して、都野川お仙は、その魁偉な容貌にも似ず氣力を欠いた四股の踏み方は日頃躍動する下腹の皮下脂肪も淋しげなる模様。

この中であって、ただ一人、この組合せを静かな面持で凝視する侍、水木新十郎の不敵な眼差しがギラッと光った。

両者は五、六度仕切り呼吸合ったとみたかおきぬは勢よくつかけた。お仙もそのまま立ち上ったものの立遅れ、双差しを許したまま西土俵まであっけなく後退、おきぬは得た

りとばかり腰を落しグイグイ寄り切ろうと必死、二の肌の筋肉がもり盛り太股が力をこめる度にはち切れそう。お仙の立みつは股に食い込む。まわしが二枚腹上にずり上り上背のないおきぬの寄り身の力は半減。そのまま俵に足をかけ静止、寄り返そうともせずあせったおきぬ、そのまま体を預けると、そのまま土俵を割った。

やや力ぬけのした勝負に、行司も不審の表情。

「待て、その勝負、土俵上の両名、そのごまは何事なるぞ、我が眼をあざむく所存か」

藩主秀政公はみるみる内に顔面蒼白となり「真剣の取組なき時は、そのままには捨て置かぬと申付けたはず、無礼なげす女め」

と刀を手取るなり庭先に進み出る。一同愕然としたものの、ただならぬ事態の出現に狼狽の程。

「暫く、暫くお待ち下され、これには何か仔細あつてのことかと存じます。先ずそれなる仔細をおきき召された上に」

指南役古野多門が進み出た。興奮さめやらぬ藩公も

「うむ、多門、然らば仔細あつてのことと申すか、それならば早々にそちらから明らかにせよ」

と一応思い止まった模様、多門は庭先に下り立ち、

「これ、両者。何の所存か、殿の御前においてなれ合い相撲をとるとは、速やかに申せばよし、さもなくばこの多門、直ちに首をはねようぞ」

茫然としたおきぬは事の次第をのみ込み、ふるえながらも、

「いえ、いえ、決して、そのようなことは致しませぬ」

「黙れ、げすめ、殿を始めとし我々一同の眼をふしあなと思うか」

と多門、再びお仙に向って、

「どうじゃ」

と一喝する。

「申し上げます。実は新十郎様のたつての申し付けで――」

と都野川お仙はふるえながら口走った。

「何と、世話役新十郎に頼まれたと？」

「はい、若し聞きわけぬその時は殿中から追ひ払うとお言葉、わたしにとって相撲は本職、何んの取りえもない私、このまま座頭のもとにも戻れぬのです。何んでも新十郎様はこのおきぬさんとは深い仲、元手が出来れば

侍をやめ大阪あたりで商人になられるとか」と泣きじゃくった。

「相わかった。新十郎、前へ出よ」

秀政の怒りに満ちた視線が光った。事の次第を知ったなみいる侍も意外の表情。

新十郎は観念した。も早や逃げ隠れは出来まい。かみしめるように一歩一歩進み出る姿からは、あの不敵の眼差しは恐怖のいろと変っている。

「新十郎、無礼な奴、不義を働き、その上余をだましおろうとは、覚悟はよいな」

「恐れ入ります」

もう何も云うまい。新十郎は眼を閉じた。不覚であった。最後の瞬間にして吾が野望はたたれた。

「余の眼をたぶらかそうとした不届者、刀のさびにするのもけがらわしい、多門、両名を早々、討首にせよ」

「殿、ご慈悲でござります。この勝負、およしは何も知らぬこと。これなる不心得は拙者一存のこと、およしの一命だけはお許しの程を」

新十郎はせめておよしだけは助けてやりたかった。

「成らぬ、不義者同志、容赦はせぬ、多門、

マゾ芸術考

— 高倉みゆき論 —

田 島 直 士

I

男装、それも、乗馬服姿のきりりとした女性を考えて行く上に、高倉みゆきを逸することとは出来ないだろう。およそ、銀幕には星の数ほどいる女優、そして隕石となって落下した元女優の中で、彼女ほど、マゾヒスティッ

クな興味をそそる対象はいない。登場から退場までの三年間は、きわめて劇的な時間であったといえる。彼女の盛衰を辿ることは、単に一人の女優の誕生から、没落を眺めることにとどまらず、新東宝という会社、更には異様なエネルギーをもった映画の運命とも、と

け難く絡まり合っている。
高倉みゆきは、昭和九年三月二十八日千葉に生れた。今年は三十才である。新東宝への登場は、三十三年新春封切りの「戦雲アジアの女王」であるから二十四才の時である。「新東宝への」とわざわざ断ったのは、彼女

このまま両名の首を刎ねよ」

当然、残る関脇大関同志の取組みは取り止め。藩主秀政公は、足荒く奥の間へ姿を消した。

をはねた。

妖艶女相撲の絵巻も、このまま開かれることもなく幕を閉じた。

古野多門は新十郎、およしを、その場で首

都野川お仙も、その後興行女相撲に身を寄せたが往年の元気もなく、幕下あたりで小娘

を相手に醜体を演じているとか人づてに中津藩にも噂がのびたが、その後は全く女相撲は禁句となった。

ひとり浜風およしは、褒美金百両を下附され江戸にのぼって世帯を持ったとか。

△女性男装管見▽

は既に東宝の大部屋にもいたし、東映に移って、本名和田道子で、三十年頃流行していた伝奇的な児童活劇のお姫様役などで、伏見扇太郎やその他の若衆男優と共演していた。もとよりここでは存在をみとめられなかった。それが一躍新東宝のトップ女優に祭り上げられたのは、大蔵貢が大川博から貰い受けてからである。東映でくすぶっている彼女を見た大蔵が「あんないい子を遊ばせておくのは勿体ない、もらっていく」と持ちかけ、大して惜しがられもせず大蔵の手に渡ったという。そのあとで彼女が大蔵の何であったかということはいい古されていることなので、ここでは何もいうまい。

II

さて「戦雲アジアの女王」は彼女にとって夢のような抜擢だったに違いない。この川島芳子を主人公にした映画は、芳子を実説よりも更に人間くささを抜きにした、東洋のジヤンヌ・ダルクというような影像を求めて作られていたようだ。

川島芳子を主人公にした映画は、吉村公三郎が村松梢風の「男装の麗人」をもとに監督し川路龍子が主演した「燃ゆる上海」があった。ここでは川島はかなりコケツトリで複雑

な性格の近代女性に描かれていたと記憶している。それに反して、この「戦雲アジアの女王」の芳子は、ひたすら東洋を合一するため活躍する清朝の血をひく女性というやや大時代的な設定にしてあった。これは野村浩将という「愛染かつら」で往年あてた監督がメガホンをとった所為もあるろう。下敷になった榎本捨三の作品はもっと、川島芳子のいやらしさを描いていた筈なのだ。しかし、こういう芳子像が映画に描かれたのは新人の高倉みゆきの印象に合わせたものともいえよう。私は、この映画が、高倉みゆきが入社したために企画されたものか、以前から企画されて、たまたまイメージにぴたりした役として高倉にふりあてられたものかは知らない。ただ今から考えて、もし高倉がいなかったら当時の新東宝の持駒としてはどういう女優がふりあてられたかは一寸興味がある。まず考えられるのは日比野恵子、筑紫あけみ、久保菜穂子（小畑絹子は、高倉と前後して新東宝入りした）などであろうが、彼女らでも一応見られないこともないが、もう、適役とはいえない。して見るとこの場合は企画と女優の入社とがぴったり一致した幸福な例といえなくもない。オルレアンカ羊飼の娘が三軍を叱咤し

たジャンヌ・ダルクへ変貌をとげように、彼女も思いがけない幸運に途まどいながら必死にこの役にとり組んだことだろう。乗馬を一度もしたことがなかったというのに、しまいには映画界きっての騎者にまでなった努力は並々なことでない。

この段階で、努力して川島芳子たろうとした高倉みゆきは、外から、かり立てられた存在。いみじくもかつて藤山女史が表現していた言葉を拝借するなら、「馬にのせられた女性」という存在なのだ。無理に強くさせられた女、男の上に君臨するようにしむけられた女。という倒錯した感じがあり、悲壮感があった。

もっと颯爽としていたらいと思うような演技だったし、正直言って、容姿は飛び抜けて美しいとは思わなかった。ただ、きらきらと熱っぽい大きな目と歯並びの美しい、華やかな唇が顔全体を派手にしているはずなのに哀調をたたえて内向的なのが興味があった。

この映画では、彼女は、数場面を除いて乗馬服、軍服、礼装の三種の男装で現われる。冒頭は、内地で、芳子が恋人の山野少尉（高島忠夫）と二人で睦じく馬を並べている。ここではもっともオーソドックスな黒い乗馬服

を着ている。相手に対しては「山野さん」と呼んでいるが、これは満州に行ってから一貫して「山野」と呼びすてにしているのと同象的だった。



やがて彼女は義父川島浪速からの要請で、涙をのんで東洋平和のために清朝の皇帝に嫁ぐ。しかし婚姻の日に、皇帝は、匪賊のために落命して、芳子が代って指揮をとることに

なる。安国軍の指令官（金指令）になって、盟約をする場面は凛々しい。金モールに飾られた真紅の上衣に、白い乗馬ズボン、深い長靴をはいた芳子が、サーベルをきらりと抜き放ち「安国軍と名付ける」と一声高く宣言するのだが、この場面の芳子は、一寸他に例がない程美しい姿を見せていたのではないかと思う。それから後の彼女は、最後の山野少尉の墓前で追悼をする時に礼装になるだけで、一貫してカーキ色の背広型の軍服を着用していた。これも仲々すばらしいと思ったが、一

そのこと日本軍の将校用の軍服を着用させて見たらどうだったかと思う。私の記憶にある芳子の写真は、日本軍の将官と同じ軍服にきらびやかな肩章をつけた彼女が、ぐいと軍刀の柄を白手袋をはめた手で握りしめて椅子にかけた姿である。貧血質ともいって良いようなすきとおった白い細面の顔に軍帽が似合って、これでは当時の女性に熱狂的なファンを作ったのも肯けると思っただ。ともあれ、このドラマでは芳子の奔放な生涯は余り出ず、健気な国に殉ずる面ばかりが出ていたようだ。

野戦の場面で、拳銃片手に馬上から射撃戦をする場面も、何か痛々しいものが感じられた。もっと強くて冒険を愛する、スーパー・レディとしての芳子を出して見てもよかったのではないかと思う。もし、この後、芳子を映画化するようなことがあるなら、余りに悲壮にせず、一種の貴族令嬢の道楽というような面を強調して見ても良いのではないか。そのため下層の被圧迫民が犠牲になるというのもマゾ的で面白い。美しい程女性がみにくい弱者をふみにじっていくというテーマを大胆に出す試みをしない限り、このような作品は成功は覚束かない。

ところで、このデビュー作は、高倉みゆき

のタイプをかなり明確に規定してしまったようだ。国事や大義のためには恋を犠牲する女性、どこか暗いまでの寂寥感をただよわせた女といったイメージがそれである。この年は「天皇・皇后と日清戦争」「不如帰」「陸海軍流血史」「汚れた肉体聖女」などに主演した「汚れた肉体聖女」はカトリックの尼僧の同性愛の物語で、聖らかさと汚れとの奇妙な混じり合いが興味深かった。次に彼女が乗馬服の男装で颯爽と登場するのが三十四年新春の「女間諜曉の挑戦」である。

III

三十三年の暮、東京新聞夕刊は、この年が当り年だった男女優数人のために「いい年でした」というシリーズを計画した。

この何回目かに、高倉みゆきが新作「女間諜曉の挑戦」での扮装の黒い革ジャンパーに白い乗馬ズボン、長靴という、実に勇ましい姿で登場している。そして「今度の作品では馬にのったり、オートバイを飛ばしたり、ピストルをぶっぱなしたりの勇しい役です。この一年は乗馬服で明けくれました。」と語っている。この作品は土居通芳のメガホンである。舞台は終戦直前の中国、高倉の扮するのは日本軍特務機関の紅一点である三津田雪と

いう女性である。この配下に天知茂の扮する武井中尉が赴任してくるのだから、中尉待遇以上ということになる。筋は彼女の女間諜が大活躍をして敵を全滅させるという勇ましいというより他にいいような作品である。

この作品の全篇を通じて男装でない場面は一つもない。上記の革のジャンパー姿が中心になっている。しかし、中でも一番興味があつたのは、最初に近い場面である。中国に赴任した武井中尉と三津田雪が郊外に馬を走らせている。雪は勇ましく先導しながら後から来る武井を見やって満足そうに「武井は仲々ののり手ね」といってほめ、完全に武井を目下にあつかう。この映画では、前の「戦雲アジャの女王」に見られたような弱々した態度はなく、男と同等、それ以上の智勇をもった女性として堂々とした演技をしている。こうしているうちに、一人の貧しい農民風の中国人が二人の方をうかがっているのに気づく。途端に高倉は、厳しい表情になる。そして、脱兎のように逃げる中国人を追って、馬にひらりとまたがると一鞭くれ、追いかける。遂に河原まで追いつめられて、恐怖にゆがんで哀願めいた様子をするのもかまわず腰からピストルを抜くや、一発でしとめてしまう。そ

して、傍らで息を呑んでいる天知をふりかえって、「これで安心、敵のスパイはやつけたわ。では命令する。武井は……」と上官の口調になって命令を伝える。この農民風の男は、スパイであったかも知れないし、それ以上に通りがかりの農民である可能性も強い。日本人の、それも、余りに颯爽とした美しい女騎者に恐れをなして逃げ出したかも知れないのだ。いわば、この場面は、一歩誤れば弱者圧迫の場面ともなりかねないと思うのだ。だが私にはこれこそ、マゾ映画としての本質にふれたものと思ったのだ。

前にも書いたように貴婦人が醜く弱い男性を玩弄すること。踏みつけにすること。これがマゾの本質なのだ。相手が醜い弱少民族なのだから狩猟でもするように、追いまわしピストルを打ちこんでいい。こうした論理がこの女主人公の心底にあるらしく思われて面白かった。要するに敵スパイなどというのは名目だけでいいのだ。そういえばこの映画で高倉の颯爽とした活躍ぶりは、冒険そのものを楽しんでいるということとは主として原因があるのだと思う。最後に敵の本拠に単身オートバイでのり込む場面もいい。正面からカメラを向けるオートバイにまたがり白いマフ

ラーを風になびかせ髪を逆立てて、顔は快い緊張にひきしまっている。こんな美しい勇しい女性の姿を私は見たことがなかった。こうした強い女性、しかも、活動的な女性を描いた映画は珍しいものだと思う。さて、スパイの本拠地について彼女は、マフラーを後に引きながら入口から飛び込み、檻禁されている天知を救おうとする。しかし敵の首領（江見渉）が天知を射つ。怒りに燃えた高倉は、見事に気押されて逃げ出す江見を追いつめ、相手に引金を引く間も与えず憎しみの一弾を酬いて倒す。この最後もよかった。

いつか藤山秀緒さんがこのあとの部分で、三津田雪がここで切腹して果てるという結末をつけたらといわれ、自分で一文を草せられたのを面白く読んだ。たしかにそうした成り行きに持って行ってもいいと思う。

IV

ところで、高倉は、その後「東支那海の女傑」で、日本軍に協力する中国人の女海賊になって活躍したし、「嵐に立つ王女」ではモンゴリア王国の王女として、一場面乗馬場面が出て来た。しかし、その後、男装は遂にとられないままに終わった。新東宝は彼女の乗馬服姿を最大限に利用すべきでなかったかと思

う。丁度宇治みさ子の「女剣戟」と同様に。たとえば以前前田通子に「女競輪王」をやらせたが、この方法で、高倉に「女競馬王」をやらせたら面白かったと思う。競馬の女騎手同志の熱っぽい対立や、愛情などを描いたらよかったらと思う。今や高倉は主として藤山寛美などと組んで喜劇の分野で活躍している。昔日の出演映画の片鱗すら感じさせない彼女も、時折は乗馬をたのしむことだろう。その時、馬から伝たわってくる生命の躍動を感じて、再びこうして映画に夢をはせることはないだろうか。彼女にきいて見たいことの一つである。

(終り)

(補遺)

三十七年十二月二十日、二十一日、二十二日三日間日本テレビの「奥さま映画劇場」に新東宝映画「野戦看護婦」が上映された。これはやはり野村浩将監督のもので昭和二十八年の作品である。

満州での野戦看護婦たちの活躍を描いたものだが、この作品でデビューした南風洋子が仲々よかった。彼女の役柄は男まさりの看護婦で同性愛的傾向もあり、折原啓子と睦じくなり、お互に接吻したり、顔をよせあったり

する濃厚な場面もある。しかし中でも面白かったのは演芸会の場で、南風は軍服に長靴軍刀をきちんとさげ軍帽をかぶって将校姿になり折原と長々とラブシーンを展開する。南風の端整な顔と軍服とがぴたりして凛々しい女将校ぶりだった。女同志の抱擁と愛のささやきという甘美な雰囲気にも惹き入れさせるものがあり、私の前に書いた「血に染む花」を思い返させた。

(37・12・23)

△編集部よりお断り▽

本稿は末尾の署名にもあります通り、三十七年末に寄稿を受けたものでありますが、原稿が便箋に書かれていましたため、整理の都合上掲載が遅延しました事をお詫びします。

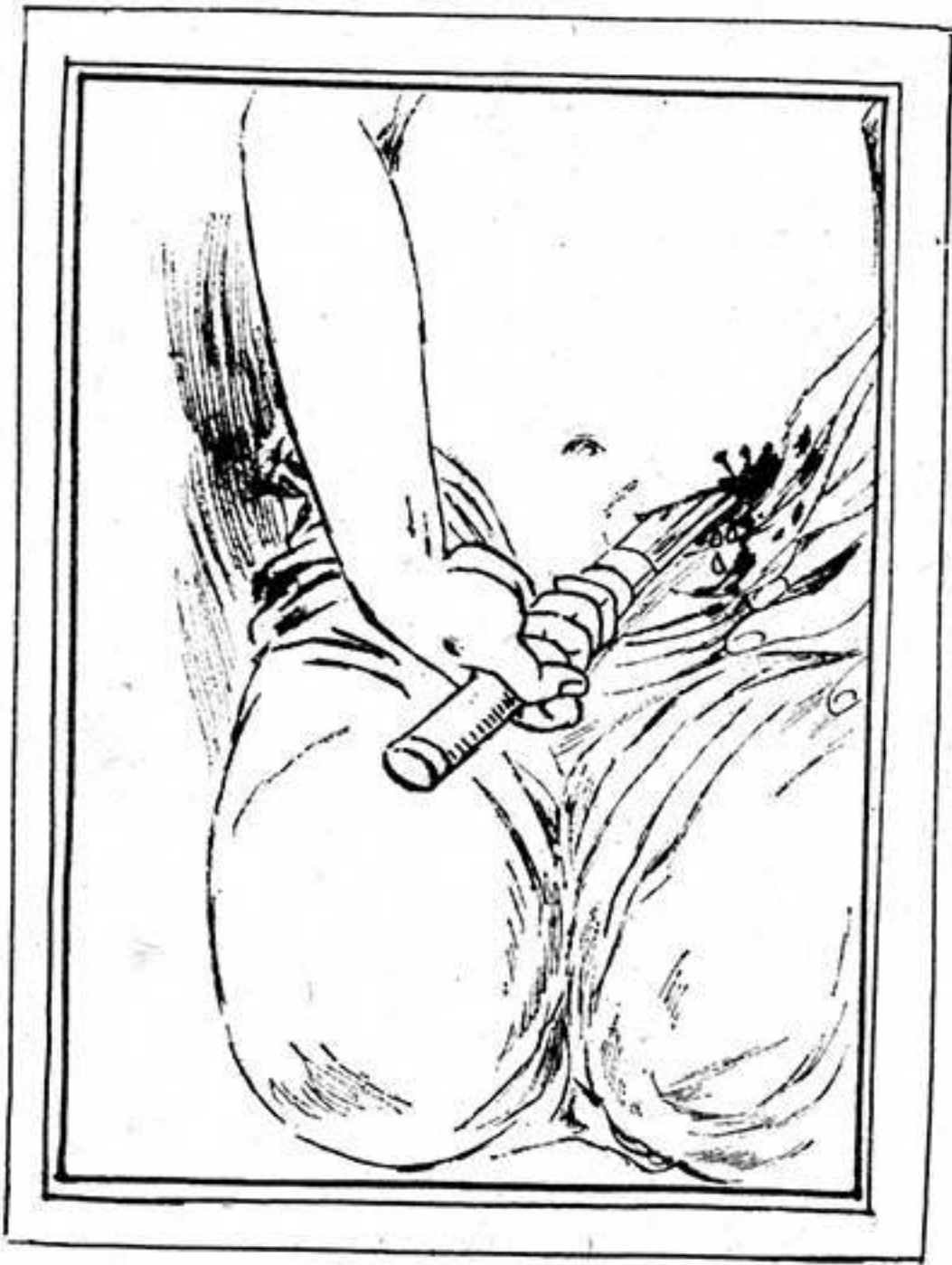
△伝言板▽

○羽村京子さんへ。昨年十二月末に貴翰に対して長文の返信を出しましたが、返戻になっているのを最近発見しました。お渡ししたい写真がありますので、連絡場所を御通知下さい。

○藤山秀緒さんへ。編集部にて今までお預りしております貴稿は、いずれも承前になっておりますため、新稿がございましたら、御送付下されば幸甚です。

女性切腹の可能性

(切腹の心理と腹部マゾヒスト)



高 野 原 美

私はかねがね女性の腹切りと、その憧れの心理について興味を抱いて来ました。山田久仁子さんをはじめ幾多の若い女性が、下腹部に傷痕の残るのもいとわず、その白い豊かな腹部に実際に鋭い刃物を突き立て痛みに耐えて、皮下脂肪まで露出するほどの切腹プレイを演じて体験を発表されている。こうして、自分自身の腹部を愛するの余り、それに刃を当てて快美感を味わう、それと同時に多くの男性の切腹マニアの女性切腹の憧れや創作・告白等も発表され、又モデル嬢による切腹擬態フオート等と誌上で女性の切腹の華が咲き乱れております。

昔から、切腹は武士の自害手段として日本武士道の華とうたわれ男性が行なって来たのですが、この切腹が型を変えて誌上では、うら若い女性が完全に切腹を独占して固定化された女性切腹マニアをつくってしまったている。私は、この機会に誌上に現われた女性切腹に関する記事を体系的にまとめ、私なりに女性切腹の心理分析と女性切腹の可能性をまとめて見たので発表して切腹マニア諸氏のご批判を乞いたいと思う。

一、腹部ナルチシズム

多くの女性は自己の腹に興味と関心を強く持っているものである。それは女性にとって最も神秘的で美しい場所なのです。特に自己愛の強いナルチシズムの女性にとっては、この最も女性的な特質を持つ腹部を露出して鏡に映して視たり、愛撫したりして独り自己陶醉に陥るものです。この腹部ナルチシズムが固定化して来ると、

△自分の真白いお腹を見つめているとムラムラとそんな気持ちになるのです。この美しいお腹にザクリと氷のような刃物を突き刺してみたいと。女性の場合はもともとお腹の中をかき廻されたりなんかすることに本能的な快感を感じるのですね。私なんか自分のお腹の中にあるものをさらけ出して死んで行くと想像するだけでもの凄く感じてしまうんです。お腹をついたり揉むようにして刺戟されただけで興奮してしまうのです▽

という状態に陥り、最も女性の運命的なものの象徴である腹部を愛し、その神秘的な腹を冷たい刀で切り裂いて内部を究めたいという心理になり、又誰れか異性の手によって腹を断ち割られ内部の臓器まであからさまに知られたいという生贄心理になり、切腹の快感に耽るのである。女性特有の腹部ナルチシ

ズムは自虐性・露出性と合併して切腹マニア即ち切腹マゾヒズムへと発展して行きます。ここに女性心理の妖しく複雑な面が明らかに示されて来るのです。告白や読者通信等にそれを求めると

△お腹をかきむしったりしていると、それだけで全身が歓びで充ちたようになることに気が付きました。最初は手で何となく圧迫したりしていましたが、その内に色々の器具を使うようになりました。真赤な血がドロドロと流れ出してくる様子を想像して全身をつっぱり自分がまるで悲劇のヒロインになったような感じで満足してしまうのです▽

△私は、たった一人で自分の幻想の実演をします。下帯をひきしめて刃物を腹にあてた時の陶醉、ああ切腹、何故女の切腹というものが、このように私を夢の世界にさそい込むのでしょうか▽

△切腹ということに異常に興味を持ち、武士が悲壮な腹切りをするという話を聞いたときから、それを想像しただけで妙に五体がうずき……やわらかい腹へ、ぐさりと刃をつき刺しぐいっとそれを横に引いたとしたら、どんなに素晴らしいことだろう。私は度々自分の真白い腹を素手で撫でては夢見る様な眼付きで

その上に刃物を当ててみるのでした▽

△ヘアピンを一本取り上げると、この前刺したと思われるあたりを、そっと突いて見ました。初めは痛さというよりは寧ろ擦たく感じましたけれども、力を加えると段々熱さにも似た快い痛みと痺れるようなうずきを味わいました。痛さはある種の快感だといいますが私は自虐的趣味があるのか快い思いを味わうのです▽

△切腹って大好き、やっぱり美しい女性の身体でなければ駄目。最初は日増しに丸く豊かになる自分の身体がいくとしく可愛く、だれか好きなお友達に見せたいと思っただけ、それがいつしか切腹のまねごとをして独り楽しむことを覚えてしまったの▽

△切腹という哀美な仕草を愛する。これが私の儚ない自慰なのだろうか、もしそうだとすればこの私が一層可哀そうである。左脇腹からキリキリ刃を廻せば激痛が下腹から背筋に走り生温かい血汐が肌をつたう。この一瞬、私は何物も忘れて全世界がうす暗くなるようなショックを受ける▽

△知られたいというのが、私の悶えでもあります。女として私がもっているもの、その営みすべてを誰れかに知ってしまったてほしいの

です。見るばかりでなく実験され解剖され徹底的に調べられたいのです。この私の身体を切り開いて臓器を切開して全部を知ってもらいたいのが私の望みなのです▽

△私の一人寝の夜半の空想にでてくる物語は自分が解剖されていることです。その際、私の空想に出てくるのは、数人の異性の手によって行なわれることです。胸から腹まで真一文字に厚い皮下脂肪をもった白い肌がたち切られ、腸・肺・子宮なんかぞろぞろと出されます。私はこの検死と解剖に異常なほどの昂奮をおぼえます。私の場合は自分からお腹を切るというのではなく、他の方からお腹をたち割られたいという願望なのです▽

このように自分の美しい、いかにも女らしい肉体を保持し、その特質を誇っている腹部を愛する腹部ナルチシズムの女性が如何に多いことか。これは一般の女性においても多かれ少なかれ、こういう心理を潜在的に持っているものと思われるのです。この腹部ナルチシズムは、美しいもの・憎いほど愛らしいものを自分の手で汚し破壊したいという自虐心理とあいまって刃物を腹に当てがい、その時の快感に驚き腹部マゾヒスチックな方面に進んで行く。それが女性切腹へと型が固定化

して行くのであります。

この様に女性は、本来からお腹を切るということに憧れと歎びを持って生まれて来たのであるから、切腹という自害方法が女性の手を離れて男性―特に武士のみに与えられてきたということは、この自害という面から考えても女性が第二の性として男性に押えられて来たかという悲哀の歴史の跡を物語るのである。切腹は、女性の手に戻さなければならぬ。

しかも、切腹が疼痛と苦悶に長時間耐えねばならず、簡単に息を引取らず死ぬまでの苦悶が激しいこと、その苦しみを承知の上で自分自身の手で腹を切り裂くという精神的、肉体的苦痛を忍んで堂々と死んで行くということに武士の面目を見出し、武士道の発露として選ばれたという点を考えるならば、男性に与えられた自害形式として許し得るのです。又、あとで述べるが、女性の羞恥心―上半身を異性の前に露出して腹を掻き切り七転八倒の苦しみに悶え転げ廻る醜い姿を見せたくないという奥床しい心―が切腹を自害方法として選ぶことをためらわしたであろう。

女性は自己犠牲の心が強く、特に異性のためにはそれが強烈な様である。そのため昔か

ら多くの女性が生贄として人柱にされ、又神の祭壇に供せられ花の生命を散らして来います。三国史の中に、客人が訪れたが何も食べさせる物が無いので、妻が自分の肉を客人に捧げて下さいといい主人は悲しみを隠して鹿の肉があるので、これでも食べて呉れという挿話がでていますが、これ程、女性は自己犠牲の心が強いらしく、大塚啓子さんが、

△古代の社会は無数のいけにえを必要とし、それを祭壇に捧げました。この昔の哀れな涙を一見さそう生贄たちは本当に嫌で悲しみ歎いたのであろうかということです。魚心水心といえます。心の奥底に漠然と生贄になりたいう願望を持ていない女性がいるのでしょうか。それが外側に表われたのを見つかつて白羽の矢が立つたではないでしょうか。漠然とした願望が急に現実となり、自分の生命が絶たれることに気が付いて、がく然としても九分の恐怖と苦悶と残りの一分は多くの男達の羨望の視線を集めている嬉しさの中で、彼女達は息を引き取ったのではないのでしょうか。私の肉体は数万の射す様な視線につきさされ男性や時には同性の方々の眼にもとまりそこでそれぞれの人の思いのまま空想のまま

にあらゆる生贄に供せられるでしょう。もう娼婦の段階すら通りこした牛馬以下の白い肉塊です。存分に拷問の上で火焙りに、打首に絞首刑に、股裂きに、逆さ吊りにお好きな様に処刑下さい。▽

と「いけにえの幸福」と題して一文を書いている。この様に女性は、いざとなると血を流して死ぬこと、特に多数の異性の前で、その美しい白い肉体を羞恥に耐えて誇らし気に示し（露出癖）つつ血に染んで死ぬことを誇りとも喜びとも感じ、そのために死の恐怖からも去るとも考えられる。女性の羞恥の歓喜とでもいおうか。露出性は羞恥をのり越えて死を求める。

△着物が上半身から、ぞろりと脱げて左の肩から滑り落ちた。右の手は短刀を腹の中に突込んだまま腸と血の中に埋まっている。ゆわえていた膝の紐が抜けて、着物の前もはだけた。本能的にまくれた膝頭をかくそうとしたが左手はしびれたように動かないので彼女は直視して観念した。女二十才の若い花の生命を女だてらに、お腹を切って死ぬなんてと自分自身を憐れむ気持ちがあふつと湧いた。

「恥しい、女の腹切りだなんて……」半裸体で血まみれになり豊かなボリリュームを誇った

お腹は無惨に口を開けて腸が飛出している自分の姿をかすみかけた眼で見ると、居ても立っても居られない様な羞恥心が血の気の失せた顔を僅かにほてらせた。みにくい死体を他人の眼に曝したくない！しかし今となっては、どうすることも出来ない、早く死にたい。それだけが、彼女の今は望むことであった。もう恥しさよりも死ぬことが先だった▽と恥しさをのり越えて、それを充分に承知の上で切腹して行く女性の哀れな心理が良く描き出されている。

二、切腹の喜び

腹部ナルチシズムの女性は、自分の豊かな腹部に刃を当て思いきり切り開いて内臓や多量の鮮血の流出の中で思い切り切腹の苦痛を味わい、七転八倒の苦しみの中で息を引き取る姿を思い浮べて自己陶醉するのである。自虐を愛する腹部に与えているという喜びが他のどんな苦しみをも消してしまうのである。切腹の苦痛は快感として感じられる。そこには、女性特有のマゾヒズム本能がのぞいていて、それを空想するだけでは満足しきれなくなつて実際に刃物で皮下脂肪まで切り、出血と疼痛の中で本当の切腹の味を知って妖しい

昂奮に心をときめかし陶醉するに到る。

その時の心理を山田久仁子さんは

△浴衣を脱いで右手でメスを取り上げると立ち上り、やや足を開き気味にすると下腹の印のところに刀を押し当てました。何か、こう胸苦しくなる様な気持ちで悦びと期待と怖しさが一緒になった様な気持ちがしました。自分以外の人が眼の前で下腹部を切り開いた傷口から脂肪の層がはみ出して血が激しくたたっている様子を初めて見ましたが美しいというより身体がうずく様な光景でした。私達は、お腹を思うように掻き切って溢れるようにはみでてくる腸やその他の内臓、そうして流れる鮮血と激しい苦痛に本当に憧れているのです▽

と述べている。

愛する腹部を切るという自虐性は、女性たちをして切腹の前に十分な腹部への愛撫をさせ、自らの手で無惨にも切り裂く腹部の最後の美しい姿と別れの挨拶をさせている。執拗なほどの腹部の愛撫、それは当然なことでしょう。

△感慨こめて「切腹」とつぶやいて両手の拇指を軽く自分の臍にあててグッと押えるとゴムマリの様に弾力を秘めて下腹部全体が大き

く凹んだが指の力を抜けば弾ね返ってふっくらと張り切ったもとの姿に戻る。この柔かい可愛い下腹部を冷たい刃物で思い存分に切り開こうとしているのだ。どんなに痛く又快いことだろう。どんなに沢山の血が流れ苦しむことだろう。今日こそは、このお腹を切り開いてしまふのだわ、最初で最後の機会だと思ふと一気に切るのが惜しまれ、手でお腹の感触を楽しむのだった。昂ぶる心を鎮めるように静かに眼をつぶると左の掌で激しく波うっている温かい腹部全体を愛しむように何度もゆっくりと撫で廻した▽

△その臍下三寸近く、十分に下腹部まで大きく腹をむくと、わが腹を愛しむかのように今から無惨に切りさいなむ腹を目を閉じて一度二度とゆっくり両の掌で勝子の方は臍から下腹に撫で廻した▽

△裸の身体を今更のように見惚れ、もうすぐこの美しい腹を自分の手で切りさいなむのだと思うとお腹がいとおしく哀れに思われ愛撫するのでした。この白い滑かなお腹を私は自ら切りさばなくてはならないのだ。目の前が、ともすれば興奮のためにぐらぐら揺れます。これから無惨に切られる我が腹に最後の訣別を告げました▽

こうして自分の愛する腹部の最後の感触を楽しんだ女性は、心を鎮めて憧れの切腹に入る訳です。

短刀を腹に突き立て激痛に身を悶え苦痛に耐えて切り裂いて行く時の喜びは切腹を愛する女性にしか理解し難いものがあるのではないだろうか。

藤村綾子さんは、十文字腹を見事に切った時の感想を次の様にのべている。

△私のお腹は何か赤い花でも咲いたように鮮血に染まってしまいました。とうとう立派に切った。私は女ながら、こんなに見事に十文字腹を切ったのよ、そう叫びたい気持ちでした▽

その他、創作で切腹する女性の気持ち

△短刀はいくらか斜めの角度で若い女性特有の下腹部の厚い脂肪層や筋肉を腹腔の臓器を貫いてブスツという低い音を立てる。「ウ、うれしいわ、ずーずいぶんーい、いたい、いたいけれど」女は身体を弓の様に曲げ切っていた……一瞬苦痛のため極度に唇は歪めてはいるが、しかし満足そうな顔であった。……女の顔に刻まれていた今迄の強度の疼痛による苦渋の面は次第に消えて行き顔こそ硬ばらせていたが法悦の表情が滲み出ていた▽

△それにも耐えて臍を切り裂き傷口を押し開けると短刀を放し、右手を腹の中に入れて、脂汗にまみれ歯を喰いしばり陶醉によったようになつていた▽

△「お姉さま、わたしは……嬉しい、幸福よ、私は立派に切腹をして死にたいわ」と苦しみながら断え断えに私を促すのでした。彼女は満足して死ぬのだからと覚悟して「ユミ子さん、立派に切腹をするのよ」と耳もとで力づけると、右手に力を入れてグイッと右に引いた。「痛い……お姉さん、とても痛いわ、でも幸福よ」と叫ぶようにいう度びに血はしばらく出されて白く豊かな腹を朱に染める▽

私は、今迄くどくどと女性の切腹を憧れ、又実際に切腹を行なった場合の耐え難い程の喜びを述べて来ました。これによって女性の腹部マゾヒスティックな一面を充分に理解していただけたものと思う。

四、女性切腹の可能性

昔から女性が切腹死した実例は僅かに数えるほどしかない様です。その理由として、日本の女性は夫に仕える絶対服従者——第二の性——ということが極端なほどの羞恥心をうえつけられて、他人に肌を見せるということは死よ

りも苦痛と感じて来た。その羞恥心と女性にとって精神的・肉体的苦痛に耐えて、自分自身の手で豊満な腹部を切り裂くことは、女の弱さから考えて不可能であるとの二点があげられて来た。私は羞恥と女の弱さという二点からこの女性の腹切の可能性について考察して見たいと思うのです。

・ 先ず羞恥という面であるが、死後の姿まで飾りたいと願い香をたき死に化粧までして自害して行った武家の妻や娘にとって肌も露わに血に染んで死ぬという自害方法は、到底耐え得られなかったであろうと思われる。森田氏が「斬られる女と腰巻」と題して

△：父にグサツと脇腹を刺され、絶叫と共に仆れると、断末魔の苦悶に裾前はハラリと開き真紅の腰巻を波打たせて二転三転、やがて絶命の姿勢になります、その苦悶の間にも赤い腰巻を恥かしがって掻き合わせようと幾度か空しく手が泳ぐ

という状景を描いていますが、死の直前にもなお腰巻ですら男の眼に曝すのを嫌って隠そうとした女性が、どうして肌も露わにして切腹することができようか。

そのため、小笠原凶礼式によると、切腹を命ぜられた女は検視の役人に挨拶して短刀を

もって二つ折りの屏風を二双、向い合せて立ててあるこの中に入り、腰から上はすっぱりと双肌脱ぎになり裸になって誰れにも見られないで心静かに腹を切る。美事に切腹すると屏風の外に居る近親者が別室で待っている検視に、切腹したことを告げると正使だけが屏風の中に入って、女の腹の傷口を改めるということで、ここでは双肌抜きになって切腹する女の、羞恥心を尊重した態度が取られている。しかし、女性といえども男性の前で羞恥心を克服して美事に切腹死して行った例はある。

△：…介錯人が、「いざ」と励ますように声をかけた。ふと礼津はうなづき、胸高にしめた黒襦子の帯に手をかけた。解こうとするらしい。その指先がぶるぶる震えたが、これは気怏れや畏怖というより、たかぶりのせいであろう。解かれた帯には、まだ女のぬく味が残っているのを膝行した徒士の一人が退いていった。すると礼津は襟を大きく開き、まず肩を脱ぎ左をはずすと膝を立てふくらはぎへ袖を挟み込んだ。二十一才の若い肌である。

…礼津は、その臍の窪みのかなり下まで十分に白無垢を押し下げた。場に居合わせた者皆じっと瞞め声もなかった。この美しい女体

の悲惨美を確認するものは検使、副使、介錯人、介添人二人、徒士目付二人、それに徒士四人と雑用の小者が三人で計十四人

△：作法通りに会釈、押し肌抜いて白無垢を押し下げ肌を従容として掌でさするさまに哀れさ極まって諸人思わず顔をそむける

△：二十五才の豊かな身体は白い細帯一つに止められている。勝子の方の手が白無垢の襟元にかかった。覚悟の上からとはいえ、女人の身として肌を白日の下にさらす今、さすがに気丈な奥方も瞬時のためらいが見えたが、それも束の間、さっと襟を左右にくつろげると右肩をすっとぬいた。ついで、左肩もはずすと膝を立てると袖を太腿の下にはさみ込んだ。腕を伏せたような両の乳房の先には桜色の蕾が光り、鳩尾から盛り上った腹には、よく脂肪がのって引緊った肉は弾力に満ちている。列座の者が息をつめて見守る中を勝子の方は、細帯に手をかけると、女盛りの体を包む白無垢をぐいっと押し下げると、はり切った腹の中ほどに臍が形よくきれ長に凹んで陰をつくっていた。その臍下三寸近く、十分に下腹部まで大きく腹をむくと…

女性が男性の前に羞しさに耐えて、その美しい柔肌を露出して腹を切るということは哀

切きわまるものであるが、女性の心の内に秘かに隠されている露出癖・自虐癖を考える時生贄となつて誇らかな最期を遂げる場合と同様に、男性の前で下腹部の美しい肉体を露出して美事に腹を切り裂いて死ぬことに、むしろ誇りに似たものを感じていたのではないかと思われる。

しかし、女性は切腹に当って、女のたしなみを忘れず着物の袖を太腿の下に敷き仰向けに臥して無惨な腹部を曝すことを防ぐとともに膝が割れて太腿や腰巻が見えないように腰紐で膝をゆわえ、又気丈な女性で腸まで露出する程の壮絶な切腹をする場合には、その激しい疼痛と苦悶のために身悶えし、激しい全身の痙攣のため大小便が排出される恐れがあり、そのため予め肛門や腔に綿をつめて死後の肉体を飾るようにしたと思われる。

△白無垢の裾がひるがえり、すんなりと形の良い脚がびくびくと痙攣すると太腿の辺りまで裾がまくり上った。疵改めに臨む女のたしなみの腿化粧がどこかされてあった▽

羞恥をのり越えても美しく死にたいと願うのは女性の心理で、死後の肉体を美しくすることは特に慎重であつた様です。

しかし、今日の女性は切腹死の前には、若

い張り切った肉体を何の惜しみもなく曝け出して女性切腹死の妖しいまでに美しい凄惨美を演ずるのです。女性の切腹は、やはり女の心理から考えて裸の肉体がそこにあるということが前提となるのが当然で美しい自然の姿が望まれる訳であります。

△短刀の用意ができる彼女が立ち上って無造作にスカートを外し上着を脱ぎすてると一瞬ためらったのち、思い切って下着を全部脱いでパンティ一枚になつてしまった。形よく膨んだみずみずしい乳房、すんなりと美しい腰の線、ふつくと柔かく盛り上った下腹部しなやかに伸び切った長い四肢：彼女の新鮮な果実のようにみずみずしい裸身が周囲の樹々の緑の中に映り生えていた。白昼野外で自分の裸身を眺めてわけもなく興奮していた彼女は酔つたように両の乳房をしっかりと押えながら草上に座って太陽のもとに惜しみなく曝している。今から切りさいなもうとしていく白い下腹部を凝視した。豊かな皮下脂肪によつて見守られて深く凹んだ立派なお臍は、これから起る悲惨な血で汚されることも予期せぬように、おだやかに眠っていた▽

この描写の中には、女性切腹の悲哀も、蔭も見られない。腹部ナルチシスト特有の切腹

の讚美と明るさしか感じられない。このみずみずしく明るく輝く肉体こそが切腹美の極致であり、女性切腹を引き立てるものなのである。切腹の前には羞恥をのり越えた現代女性の前には、羞恥が女性の切腹を妨げる要因になつていくという古代の説を完全にくつがえしてしまつたのである。

次に女性は切腹による激しい疼痛と苦悶に耐え得ないという説であります。

切腹といつても、昔は腹壁のみでなく腹膜まで切り裂き腸を露出して絶命するという壮絶なものであったが、江戸時代ともなると、それが形式だけのものとなり切腹死とはいうものの実際は介錯人による打首であつた。有名な赤穂浪士も、三宅に手を伸ばすと同時に首が斬られたといひます。又中康氏によると「自刃録」に「左の手にて三度腹を押し、臍の上一寸計の上通りに、左へ突立て、右へ引廻す他。或は臍の下通りが宜しと云。深さ三分か五分に過べからず、夫より深きは、廻り難きものなり云。」又「余り深きは、廻りがたき物なりとあり。首の切損ぜん事を、あやぶみての事也。至剛の人にてあらば是になづまず十分に搔破るにしくはなし。腹切短刀は切先四分出して、紙に巻が、故実なりと云。」

の記録があると云うことです。

切腹を自害の儀式として扱う場合は、その切腹自体が死を意味するものでなく、介錯による斬首が死を決定的にするものであるから浅く腹を切るのもよからう。しかし、一人で切腹死する場合は、腸露出の所謂無念腹でなければ目的は達することができない。

体験記を発表された山田久仁子さんは七分の深さで藤村陵子さんは七ミリの深さで大きく下腹部を切り開き、立派な切腹プレイを演じておられる。即ち山田さんの三度目の切腹においては

△：忽ち二寸五分程、臍の下を横にかき切りました。出血はかなり多く、切り終えて手をとめると、ぐっと傷口が一寸程もはぜて房になった黄色い脂肪層が大きくはみ出していました。皆の「アアッ」という感たんの声を夢中に聞き刃を抜きとると白布まで血まみれの刃を上向に持ちかえて、たたき込むように刃を突立てました。のけぞりたい程の痛さ、筋肉に突立った痛さと違う鋭い痛みでした。大変痛くて気が遠くなりそうな痛みを感じながら切上げました。……血が激しく溢れ出て来たのを見ると小さな血管を切ったからでしょう。夢中で横の切口まで切り上げました。手

をゆるめたために、傷口が開き脂肪層がはみ出していますが、むしろ傷口そのものは横の一字より小さいです。脂肪が押出される様に大きくはみ出し物凄く見えました▽

という程、文字通り立派な十文字切腹を行なっているのです。彼女達が行なったのは腹部マゾヒスチックな切腹プレイであり、切腹死ではありませんが、もし切腹後、左乳房を深く刺し貫いて死んでいたら、昭和の女性切腹史の一頁を飾っていたであらうでしょう。これ程立派な切腹を体験しておられるのですから、女性は切腹の苦痛に耐えられないというのは当を得ないと思います。

田谷氏によると、終戦時に暴徒に拉致され切腹を強要された十八才の少女が、腹一文字に掻切ったのち、両手で両脇腹を押し、溢れ出た腸を掴んで絶命したという勇烈な女性切腹の記録もあります。

切腹における苦痛であるが、山田さんは「皮下脂肪までだったら耐えられないほどの苦痛は感じられなかった」といっており、又「切っている時は、腹部を切り裂かれる痛みが腹部から全身に伝わり、その苦痛が、又自分で自分のお腹を切っているという実感を強めて、手に力をこめさせ、そのために新たな

苦痛が又力をこめさせる。自分がなくなっても腹部を切り裂く苦痛とそれをもっと望む底知れないものと一体となって行く感じというものです」といっておられる。

確かに切腹する刀が、皮下脂肪のみにとどまる時には、どうしても耐えられないという程の疼痛はないと思います。しかし、腹膜を切り裂く時には、物凄い疼痛と嘔吐に悩まされどれ程気丈な女性であっても七転八倒の苦悶に悩まされ、その苦痛のために右脇腹まで刀を引き廻すのに困余を感じるのではないかと思います。腸露出の切腹ということは、自分自身の手で行なう生体解剖に他ならないからです。しかし、困難性はあっても男性にできる腸露出切腹が女性にできないという理由はないと思います。ただ死後の肉体を飾りたいと願う女性において、豊かな白いお腹を大きく切り開き、黄色い脂肪を露わにして腸を流出し、苦悶の表情物凄く、脚を開き転げ廻る姿を想像する時、この苦しみをのり越えることの方が苦痛であろうと思います。覚悟が決めばお産のあの苦しみにも耐え、自虐心の強い女性においては、苦しみを喜びに変えて立派に切腹して行けるものと思います。

ガン作・マニヤのノート

続・濡れにぞ濡れし

芳野眉美

A 青木順子の緊縛ショー

神奈川県下B劇場のスチール写真に、数葉の緊縛フォトが張ってあった。

題して

「サジズムの極致」青木順子

とある。

ゲスト出演四人の中の一人なのだが、ショーの誇大広告には慣れついているから、別に気にもしなかった。

が、どうしてどうして立派なものでした。アナウンスで

「実験劇場、春木順子作」

と紹介した。

B劇場初登場のショーだと思う。

(ロープでの緊縛実演を、実験劇場とはにくいね)

白血病で死を目前にした青年が、自動車事故で記憶喪失症になり、過去は忘れたまま他人の妻になったかかったの恋人を、昔ロープで縛ったように、自分の部屋に連れ込んで責めているうちに、そのショックで恋人は記憶がよみがえったものの、その時は青年は死んでいたという筋書だが、筋書などはどうでもい

いことで、ステージの上で、観客を前にしてSMプレイが現実に行なわれたということが問題なのである。

演ずる二人の男女に、少なからず演技上の不自然さがあるのは仕方ないことで、見ている観客のほうでも、サジズムという言葉を知っているのが何人いることや、また、サジズムの意味を本当に理解している観客がはたしているものやら、ショーの前に帰った客も多かったことだし、ただ莫然と見ているだけでは、せつかくの実験劇場の名が泣こうというものであった。

単なるショーとしてのSMプレイの真似事なら、こうして紹介しようとは思わない。

ステージで、相手役の男に、春木順子が本当にロープで縛られ責められていたから書く気になったのである。

ワンピースを脱がされて、彼女は薄いすき透った短いスリッパと白いパンティだけの、半裸体であった。まだ固そうな小さな乳房がむきだしにされていた。

コントなど馬鹿々々しくて見ていられないものが多いので、コントの間は寝ているのが、私の習慣であり、この実験劇場も始めは信用しないで目をつぶっていたのだが、

「靴をくわえるのだ」

男の言葉で舞台を注目してしまった。半裸体の順子が、男の足から靴をとり、口でくわえて舞台を一周した。

「きたねえなあ」

という声が客席から起る。

男の靴は新品ではなかった。日常履いている靴であり、汚れていた。

マゾヒスト春木順子が本物だとすると、面白いショーにぶつかった幸運を喜ばなくてはならない。

(但し、この場面は、やめたほうがいいです

ね。客を不愉快にさせるだけです)

ショーの主題は、二本のロープなんです。一本のロープは、順子を後手に縛りあげ、両の乳房をがんじがらめにして自由を奪っている。男は彼女を蹴飛ばして仰向けにした。

(始めから乱暴なシーンばかりです)

二本目のロープを輪に結び、順子の首にかけ、股間から背中の中の手首の間にまわして引きつける。股間縛り。

首がぐいぐい前のめりになり

「痛い」

悲鳴があがる。

これは演技ではない。薄いパンティの上から、太いロープが彼女の股間にくいこんでいる。そのロープの先は、さらに彼女の口を切断して猿ぐつわの役目を果たしている。

春木順子の苦痛にゆがんだ顔は全くすばらしい。呻き声が客席を沈黙させる。

股間縛りは解かれ、順子はうつぶせにされる。両足を縛ったロープは、また後手にされた両手の間にまわされて、男はぐいぐい引き寄せた。

春木順子の半裸体は、見事に弓なりにそりかえる。

「痛い、痛い」

とすさまじい。二言目の悲鳴は全くするどいんです。これも台本にはないでしょう。

弓なりの順子を、男は足をもって舞台の上を引きずった。古風ないい方をかりれば

「絹をさくような悲鳴」

痛いですよ、これは。舞台の上はざらざらしていて、決してなめらかな綺麗な板ではないのだから。裸の乳房が傷がつかないかと思つて、見ている方がひゃつとした。

春木順子のセリフは、

「痛い」

と、

「うっ」「うっ」

という呻き声だけ、高く低く、また、長く短かく、一瞬で消えることもあれば、長く尾を引いてどきりとさせることもある。

ステージの二人は、どうも楽しんでいるらしい。

弓なりの彼女を、男は靴で踏みつける。

片足だけではない。順子の尻と背中を靴のまま踏んづけて、男は彼女の上に両足で立った。十八貫はあろうという男の体重ですよ。順子は呻くのがせい一杯でした。背中をおさえられて声も出ないんです。

その上、順子は男の汚れた靴を舐めさせら

れた。この時の呻き声は忘れられません。

本当のMなんだな、という実感。

できれば、タオルでもストッキングでもいい、順子の猿ぐつわをした姿が見たかった。

この次の実験劇場を期待しよう。

きっと、春木順子夫妻（多分、そうでしょう）は、種々な責めのスタイルを結び合わせて、SMショーを構成しているんでしょう。次の公演のリハーサルをしている夫妻の寝室が悩ましい。

夫がSであり、妻がMであった。そして、趣味と実益をかねて、二人そろってステージに立つ。観客に夫婦のSMプレイを実演してみせる。妻の裸でさえ、他人に見せつける。寝室の夫婦生活を、そのまま一般観衆に公開する。

こういう人たちもいるのである。その勇氣はうらやましい。

（私が見たのは、一月二十日です）

B 宮井美佐子の脚

ストリップバーの脚を抱いた話を、前に書いた（「濡れにぞ濡れし、四脚で」の項参照）
このような経験は二、三にとどまらない。
特集号で、

「サジスチン宮井美佐子の略歴」

を読んで驚いた。

宮井美佐子の脚を抱いたことがあるからである。

昨年夏の頃のことである。唯一度。同じくB劇場。

エプロンステージに腰をかけた彼女が、客席の私の膝に両脚を下ろしたからである。

「うまくやっていやがる」
と、うしろの客席から声があった。

「すみませんね」

「あら、もう興奮しているの」

と彼女がいった。場内爆笑。笑われたってかまわない。彼女の左足の指でさぐられては興奮しないほうがおかしい。

彼女は、はじめから素足だった。

私は、右脚を両手で抱く恰好になった。

客席はせまいし、エプロンステージには私の顔だけしか出てないから、私の顔に彼女の左脚をくっつけていることになる。

ステージで踊ったあとだけに、彼女の右脚は熱を帯び、彼女の体臭が香水とミックスして、ほんのりと私の頬に伝わってきた。

やわらかい彼女の右脚の感触であった。

私は両手で彼女のすんなりした右脚を撫で

たばかりでなく、彼女のすべすべした右脚にそっと唇をつけたりした。

彼女は、別に怒らなかつた。

彼女の舞台衣裳は、長靴と網タイツをとれば、特集号の写真そのままである。

（忘れられませんか）

略歴には、

「ストッキングをぬいだときです。それまで神妙に真面目くさった顔つきをしていた彼女が突然狂ったように、私の脛にくらいついてきたのです。

バカ、くすぐったいッ。

私は思わず、足で蹴上げていました」

とあり、

「彼はその場で、初めて、私の足の指を舐めさせて欲しいということを告白したのです」

二人の逢瀬は、

「いつも私は女主人であり、彼は奴隷の身分でした」

「もともと、私の身体の中に、そういう血が流れていたのでしょうか、彼を踏みつけ、蹴り倒し、ムチ打ち、苦悶にもだえさすとき、全身の痺れるようなショックを受けるようになりました」

彼は、乗馬ズボンに拍車のついた長靴を彼

女にはかせ、ムチで責められるのを好んだ。

しかし、二人は永遠の別離をする。

「彼にしては、私のハイヒールでむれた足の指で、唇を触わってほしかったのでしよう。

これが、私が彼に与えた最初で最後のキスだったのです。」

特集号の彼女の写真は、黒眼鏡をかけているから、よくわからないかもしれないが、可愛い顔をしていますよ。それに資本である身体を大切にしていますね。非常に綺麗です。残念なことに、その後の彼女のステージを私は見ていない。

C 最後の舞台

乳房の貧弱なヌード・ダンサーだったはずだが、今日はいったい、どうした風の吹きまわしだろう。

両の乳房が異常に大きく膨らんで、観客を注目させるには充分すぎる豊満さであった。

はち切れそうに張った乳房には、青い筋が幾重にも浮かび上っていた。

整型したにしては、乳首が黒すぎた。

「妊娠しているな」

と思う。しかし、それにしても腹部はほっそりと美しい。

気になったので常連の一人に聞いてみた。

「五カ月らしいね」

「めだたないですね」

「やせているからね」

「生めるのかしら」

「これが最後の舞台になるらしいよ」

健康な赤ちゃんを生んでほしいと思う。

D 香夜子の麦踏み

久しぶりにトルコに行くと、顔なじみの香

夜子が、

「麦踏みするの」

といった。

「おぼえていたのか」

「あんなことするの、あなただけだもの」

「そうかね」

「そうかね、だって。あなただから、踏んで

あげるのよ」

「有難う。だから、せっせと通っているんじゃないか」

「あまり、せっせでもないじゃない」

「浮気はしてないよ」

「浮気したら、踏んでやらないから」

トルコ風呂で熱せられ汗を流してから、私は床の上に仰向けに寝る。裸だ（あたりまえ

だ）。

水着姿の香夜子はベッドに腰をかけ、私の顔を踏みつける。香夜子の足による顔のマッサージ。

「小さい時、麦踏みしたことあるんだ」

俺の顔を鼻と間違えていやがる。

お湯に接しているくせに、香夜子の足はあまり綺麗ではない。ちよくちよく買食いに外に出るかららしい。客をトルコ風呂にとじこめたまま。

「洗ってくる」

というのを、私はとめた、

「汚れているのよ」

「そのほうがいい」

「へんなの」

香夜子の足は適当に熱していて、味も香も申し分ない。

「染めたのかい、髪の毛」

「そうよ」

日本人ばなれのした個性的な顔だちで、ほっそりしているくせに乳房だけが大きいのでナンバーワンを続けている。だから指名が多いので、香夜子に会ってられるのは、せいぜい三十分位だ。一時間も待たされて三十分とは、馬鹿馬鹿しいのだが、香夜子の魅力に

は勝てない。最小限の水着を好むので
バストもヒップも丸出した。ビキニが
禁じられているのが残念。

「くすぐったいなあ、舐めちゃ、だめ
だったら」

香夜子の麦踏みは決してやさしくは
ない。むしろ乱暴だ。香夜子の足に踏
みつけられると、三、四日眼はしくし
く痛むし、唇の裏がむけて熱いものは
口に出来なくなる。

「さあ、頭を踏むわよ」

私はうつおせになる。

私の背中にのりながら、香夜子が水
着を脱いだ。胸が苦しい。

「たまには、オスぺをしてあげないと
ね」

「うれしくなるね。どうせ染めるなら
下のほうも染めたらどうなの」

「染めてくれる」

「染めてやるよ、薬さえあれば」

「じゃ、今度染めてよ。買っておくか
ら」

うなづくかわりに、いやというほど
頭を踏んづけられる。鼻がつぶれそうで痛
い。



香夜子は両足を私の頭の上にのせている。
十四貫弱の体重が、もろに私の頭を踏みつけ

かった。

ところが、それから二日経った。なんだか

る。

銅像の土台になったような錯
覚にとらわれる。永久に香夜子
の踏み石になってもいいと思っ
た。

E 香夜子の神酒

香夜子のネクタールを飲みた
いばかりに、よくもまあせつせ
と、トルコに通ったものだと思
う。我ながらあきれる。

香夜子にネクタールなんてい
ったってわからないから、その
ものずばり、飲ませてくれとい
ったら、

「酔っているの」

「酔っているかもしれない」
これはうそ。

「さっきトイレに行ったばかり
だから駄目だよ」

「出れば飲ませてくれる？」

「いいわよ」

こんな簡単なら早くいえばよ

んだいって飲ませてくれない。

「だって、顔にかけちゃ失礼でしょう」

「それがいいんだ」

「へんなの」

「美容飲料だっていったらさ。若くて健康な美しい女性の放出する……」

「わかった。今度はかならず飲ませてあげるわ」

いつもこれで丸め込まれてしまう。

それが、私の顔を見るなりへへと笑った。

いつもと違う。私をトルコ風呂にとじこめると、

「トイレに行ってもいい」

とわざと聞いた。

「約束だろう」

「それは、そうだけど」

「もういいよ、風呂にゆっくり入っている場合じゃない」

香夜子が水着を脱いで裸になった。

「どうだった」

「薄味だな」

「水とコーラしか飲んでないのよ」

泣かせるねえ、この言葉。すっかりうれしくなっちゃった。

有難う、香夜子さま。感謝します。

香夜子の本名を私は知らない。香夜子も私の名を知らない。そんなことは、どうでもいい。

F コルセットによる蜂腰

中国の纏足と同じ様に考えてはおかしいかも知れないが、それに似ていると思うのは、欧米のコルセットによる蜂腰。

革製コルセットによる外国フォトは、種々な雑誌に数多く紹介されているから、御存知のことと思う。外国フォトといえば、コルセットといっても間違いはない。

革製コルセットは、女の裸身を狭窄するために考案されたものである。裸身でコルセットを装着された女は、緊縛感を身体で味わうことだろう。

それだけではない。

コルセットで締めあげられて、限りなく細くなった腰こそ、欧米人が求めた女性美の極限なのだといっても過言ではあるまい。

ジョン・ウィリー。スタントン・モリー。

バアン・ロッドといった人達が描く魅力ある女性の絵は、すべてがコルセットで締めつけられた蜂のように細くくびれた腰である。

蜂腰と拘束、そして革への執着が、欧米人

の性傾向を決定づけているのだろう。

欧米人でなくても、蜂腰の愛好者は多いことだろうと思う。私も好きだ。

許されるならば、中国人が纏足をつくったように、私も蜂腰をつくってみたい。夢でしようけれど。

現在は女性の下着が花ざかりで、男性の眼をこよなく楽しませていくのだが、多くの女性は、せいぜい、ブリーフ、ブラジャー、スリッパの程度で、コルセットを着用する女性は少ない。

女性週刊紙には、よく「正しい下着のつけ方」という記事があるから、まだまだファッションは日本の女性にとって、なじみの薄いものなのかも知れない。

ガーター、ブリーフ、キャミソール、コルセットが正しい下着のつけ方だそうで、この四つが一つになっているのを、オールインワンというらしい。

革のコルセットは、このオールインワン式が多い。胸部から上膝部まで固定し全体的に狭窄してしまうからだろう。広い意味で単にコルセットといっている。

女性下着の言葉はむずかしい。普通パンティといっているのは、本当はブリーフで、パ

ンティはブリーフの上に重ねてはくレースのついたものらしい。日常は、ブリーフをパンティと呼び、ブリーフという男性用下穿きを指す。全くややこしい。週刊誌でもデパートの下着売場でも、本当のところわからないんじゃないかしら。

いわゆるコルセットは、腹部を押さえるもので、腰から腹部臀部をおおっている。胴を締めつけブラジャーのついているのがキャミソール。

このコルセットとキャミソールの中間が、ウエストニッパで、外国ではこの型が一番多いらしい。ウエストニッパは蜂腰をつくるのには最適だ。

女性下着の解説をするつもりは、なかったが、進行上こうなってしまった。

いたかったのは、このウエストニッパ（これもコルセットと呼んでいるが、ウエストニッパはあくまで腰を細くするためのものである）全く女性下着はくたびれる。

日本のストリップはコルセットにしろ、ウエストニッパにしろ、こんなめんどくさいものは、舞台では着用していないが、外国のヌードダンサーには多いんです。

革のコルセットをしたブロンドを見たとき

は、ぞくぞくしましたね。

話は違いますが、上がブロンドでも、下はブロンドとは限らないと教えられたのですが彼女は上も下もブロンドでした。何がいいんだらう、俺は。

とにかく、外の人はよく見せてくれなかったから不満だったらしいけれど、私は革のコルセットを見ただけで充分満足しました。

（何を見せてくれなかったって？ そんなことがここに書けますか。発禁ものです）

紐で締められていて、自分じゃとれないから客にはずしてもらうんです。よかったな、彼女。その後見られないのが残念です。

本題にもどしましょう。

久しぶりに外国ヌードダンサーと称する者にぶつかった。同じくB劇場。

彼女、名前から受ける感じは、スカンジナビヤ系です。名前は、それこそむずかしくて十回聞いても忘れてしまう。

彼女、ウエストニッパをしていたと思召せ。それをとった。

小さい頃からウエストニッパでそだったんじゃないかな、彼女。

それこそ異様なスタイル。

乳房が盛り上った胸の骨の上に乗っかって

いる。腰はきゅっと細い。八割方、蜂腰。そして、膨れ上がった臀部が二つうしろに突き出している。いわば、出尻。それも見事な最高の、膨大な、偉大な臀部が、ゆさゆさ揺れている。彼女のトレードマークらしい。

日本のストリップの二人分あると思えば間違いない。

外国では、女性の臀部に対する鞭打の愛好者が多いと聞くが、それが実感となってわかったような気がした。

豊満な臀部に顔を押しつぶされたいと願う男性Mの方に、特に紹介します。とにかく、すごい。腰を締めすぎて、臀部に栄養がまわったのはいいけれど、骨が移動して盛り上ったのはあまりいい気持ではない。

纏足の布をとった写真は気持が悪い。

蜂腰も、胸の骨の成長はとめられないとすると、胸の美感は望めないものなのか。

美しい蜂腰も、纏足同様、同じ肉体の一部を傷つけているものなのだろう。

我国でも「柳腰」というのがあるが、これはあくまで全体的に、腰も尻もほっそりしていることで、蜂腰とは違うと思う。

なよなよした柳腰も、こたえられない魅力はあるけれど。

マゾヒスチック・コント

モ ル モ ッ ト

犬 山 畜 男

序章

T大の医学部を卒業して、東京のA病院にインターンとして配属された私は、外科医長付の助手として努める事になったのです。日本でも珍しい、女性の外科医長として有名だった、今西圭子様はまだ三十六才の女盛りを医学のため、一生を捧げるというお考えから独身のまま病院に寝泊りなさっていらっしゃるのです。独身の私は当然のことながら病院の一室に宿直をかねて起居することになったのでございます。

私は偉大な先輩の教えをいただくため、夕食後、先生の室で夜の更けるのも忘れて話し込むことも度々でございました。これから一人前の外科医になるのだと、大いに張り切っていた私は、先生の美しいお顔立ちや、本当に完成したという女を感じさせるヴォリュームあるおからだに、……ああ、若し先生があの美しい大きなお尻で、私の顔を押しつぶして下さったら……

と夢想しながらも、尊い先生に対してこんなことを考える自分を恥じつつ、一心に先生のお話に聞き入るのです。

このような私の生活を、大きく変える日がやって来たのです。

一、

宿直室の書棚の鍵を開けて、日頃愛読していた奇クを取り出し、胸おどらせながら、口絵のマゾフォトに見入っていた私の首すじに温かい息が掛ると

「ワッ！」と私は肩を両手でたたかれ、思わず飛び上ってしまったのです。私は奇クを急いで膝の下にかくすと、「誰だ！」とふり向いたのです。そこには今西先生が、ナイトガウンをまとった姿で立っていられるではあり



した。勧められるままに、アルバムを開いた私は思わず、

「アッ！」と叫んで、下へうつむいてしまったのでした。そのアルバムの第一頁には、見覚えのある、看護婦の京子（A病院一の美人グラマー）が、恥じらうことなく、尻を表面に向けて四ツ這になっている姿が、手札型の写真一杯に写っているではありませんか。しかもその背中には、女性らしい乗馬服をまとったはち切れる様なお尻が、どっかと乗っているのです。

「犬山君、さっき君が見ていた写真は男の馬だったけれど、女の馬もいものよ、ゆっくりごらんなさい」

そう、おっしゃると、先生は、気をきかしたつもりか、ドア続きのベッドルームへ入ってしまわれたのです。

私は、始めて見る強烈なポーズの数々に、先生が隣室のドアのすき間から、私をのぞい

ませんか。

「犬山君、一人で退屈そうね、私の部屋へ来ない。ケーキがあるから、一緒にたべましょうよ」

先生はいたずらっぽい笑顔のままでおっしゃるのでした。

やがて、先生のお部屋でテーブルに向い合

った私は、さっきの奇クを先生に見られはしなかっただろうか、と気になって、何時になく、下を向いたままだまっておりました。そんな私に先生は、

「犬山君、いいものを見せてあげましょう」と、書庫の引出の鍵を開けて、部厚い黒革の表紙のアルバムを持っていらっしゃるので

ていらっしやるのも知らずに、夢中になって次々と、ページをめくるのでした。色々の縛り。中には逆吊りの京子の首に、一杯に水をたたえたバケツがぶら下っているものもありました。下半身のみ写っている女性（それは先生でした）の前に、口を大きく開け、割り箸を口にさし込まれて、いや応なしに口を開けさせられている京子の姿。……私はこの京子が私だったと思うと……いてもたってもいられず、茫然としてみると、先生が現われました。

何という美しいお姿でしたでしょう。当時はまだ珍しかった、黒革の編上靴を膝の下まで、ピッチリとおつけになり、黒いレースのパンティをはいたのみの裸身を、おしげもなくさらして、良くしなう乗馬用の鞭を両手でしごき乍ら、仁王立ちになっていられたのです。

「犬山君。君がマゾヒストだということは良くわかってるわ、お望みなら、奴隷にしてみてもいいわ、だけど私のお仕置は一寸厳しいからね」

床に這いつくばったままの姿勢で、先生を恐る恐る見上げる私に、先生はこともなげにこうおっしゃるのでした。

「先生、お恥しい姿をお見せして申し訳ございません。私はマゾなんです。お願いです、私を先生の奴隷にして下さい」

せきをきったように、私は先生にお願いするのでした。

「犬山ノ、お前は簡単に奴隷になるというけど、奴隷というのはお前が考えているような生やさしいものじゃないんだよ。お前が見たアルバムの京子は、私の唯一匹の女奴隷だけど、そうそう、男奴隷も一匹はしくなったから、お前に白羽の矢を立てたのだ。ヨシッ！お前の目の前で、私の女奴隷を責めて見せてやるから、お前も京子と同じように私にお仕えする勇気があったら、その時、改めてお前を奴隷にしてやろう」

言葉使いも、女王様らしくお改めになった先生、否圭子女王様は、このようにおっしゃると。

「犬山ノ、裸におなりノ」

と鞭で床を一打ちなさいました。静かな夜の病院に心持ちよいひびきが伝わります。まるで、今から始まるすばらしいショーの開幕をつげるベルのように……。

二、

「奴隷一号お入りノ」

きびしい女王様のお声がすると、ゴトゴトと隣室のドアにふれる音がします。やがてドアが開くと、美しい女奴隷の京子が犬のように、四ツ這いのまま這って来るではありませんか。私は後手に縛られた姿で、一心にこれから始まるシーンに見入るのでした。

圭子女王様の脚下まで這って来た京子は、うやうやしく平伏すると、女王様の編上靴を押し戴いて、その靴底をペロペロと舐めるのでした。女王様は一心にペロペロ舐めている女奴隷を、残忍な笑顔で見下しておりましたが、鞭をふり上げると、ピシリ、と女奴隷の尻を力一杯お打ちになり、

「奴隷、誓いの言葉ノ」

ときびしく命令されるのです。

京子はハッと改めて、床に這いつくばり、額を床にすりつけながら

「私は女王様の賤しい奴隷として、女王様のお楽しみのために、生きる一匹の家畜でございます。御主人様の下しおかれる、あらゆるお仕置は、奴隷にとっては、有難いおめぐみと思い、お仕置を頂戴することを、奴隷の光栄と思ってお仕え致します」

と言上するのでした。

満足そうに奴隷の誓いの言葉を聞いておら

れた女王様は

「今日は新しく男奴隷をやとうために、お前を実験台にしてやるから、今まで仕込んでやったことを、一心に努めるのだぞ！ いいか！」

とおっしゃると、

「鞭打の姿勢！」

とご命令あそばすのでした。京子は女王様にお尻を向けて四ツ這いになると、両手をしっかりとくんで、顔の下に入れ、高々と肉付の良い真白なお尻を突き出すのでした。

ピシリッ、ピシリッ、強烈な音と共に女王様の手にした乗馬鞭が、京子の尻に突きささります。みるみるうちに真白な尻に何条もの赤い筋が浮き上って参ります。女奴隷の京子は、声を出すのを必死にこらえながら、次第に高まって来る苦痛に赤く彩られたお尻を左右に振り動かすのでした。あまりの鞭の痛さに失神して床に長々とのびてしまった京子を見下しながら、女王様は、

「フッフッ、今夜は一寸いためすぎたようだね。京子、奴隷、何だそのざまは！」

とお叱りあそばしながら、尚一鞭ピシリッ、と女奴隷の尻に鞭を下されると、薬用アルコールのびんのふたを開け、赤く染まった

奴隷のお尻に、アルコールをおかけになるのです。

傷口にしみるアルコールの痛さに、京子は「ヒュー」と悲鳴をあげると、夢中になって部屋中をかけ廻るのでした。

このような女奴隷の浅ましい姿を、圭子様は

「ハッハッハハ」と面白そうに笑いながらご覧になっておいであそばすのです。

三、

やっと正気にもどった女奴隷の京子を馬にして、女王様は乗馬をなさるのです。膝をすりむき、血を流しながら必死に這い廻る女奴隷の尻は、新しい鞭にまた真紅の色を増して行くのでした。

乗馬を終った圭子女王様は、今度は女奴隷を犬にすると、首輪につけた鎖を引き

「病院を一廻りしておいで」とご命令あそばします。女王様の鞭に追い出されたあわれな雌犬は、鎖をジャラジャラ引きずりながら、コンクリートの廊下を這い続けるのでした。

雌犬がやっと思いで部屋にもどった時は、女王様はシャワーをあびて、さっぱりとした姿を深々とソファに包んでいらっしやいました。

「ワンワン」

二吠えた時は異常なかった時のご挨拶だそうです。雌犬の報告に

「よし、いまからこの三日間、お前が口にしたものの検査をしてやる。若し私の下されたもの以外のものを食べていたら、このアルバムを病院中に回覧してやるからな」

と、おっしゃると、京子を後手に縛り上げ両脚を開いて膝立ての姿勢にするのです。顔を床に押しつけて尻を突き出した京子に、圭子様は三〇〇〇の浣腸器をお使いになるのです。

三日間というもの圭子様の排泄物のみしか口にせず、一度も排便を許されなかった女奴隷の便は、小さな山となって行ったのです。

「よし、どうやら合格だね、明日からは普通食に変えてやる」

圭子様のお言葉に、女奴隷は後手に縛られお尻を突き立てたままの姿勢で、

「ご主人様、せめてお小水だけでも、賤しい奴隷めにお与え下さいませ」

とお願いするのです。普通食のお許しが出たのに、まだ圭子様の尿を飲みたがる、女奴隷の姿に私はうらやましさを一杯に感じるのでした。

「バカヤロー、お前は命令通りにすればいいんだ」

京子の可愛らしいお願いに対しても、ご主人様は、ご自分の命令違反として激しい鞭を

本誌予約申込者募集

○本誌の送料は全部当社にて負担いたします。雑誌代のみ御送金下さい。

○一部定価二五〇円ですが、三カ月予約前金御送金の時は三冊分七〇〇円、半年分予約六冊分一、三〇〇円に割引いたします。

○最近二カ月位の間に、本誌の予約者は倍増いたしました。書店にて入手しにくいという点もありましたが、予約者優遇の割引が大きい影響したものとされています。只今毎日若干宛増加している状態です。二月号で本誌のピンチに際し皆様へのお願い、対して御同情下さった結果でしようか。

○毎月一冊宛お申込み下さる方もございますが、この際は二五〇円宛御送金下さい。局留め御希望の方は、二十五日頃、局へお受取りにおいで下さい。お受取りに便利な局を御指定下さい。大体毎月二十日頃に発送いたします。

○外部から見えないよう厳重包装の上お送りいたしますから直接お申込み願います。

読者の皆様へのお願い

○投稿原稿に限らず読者通信においても、すべてタテ書きにして下さるよう、かねがねお願いしているのですが未だヨコ書きの

下されるのでした

「犬山、お前は奴隷として私に飼われたいか」

圭子様の激しいお声に、私は我に帰り

原稿が混っていて処理に困っております。殊に読者通信は便箋でもノートでも、すべてそのまま書き直さず印刷所へまわしてお願います。用紙は問いません。

○代理部の注文品は、すべて略号にてご希望品をお書き願います。品名はお書きにならないとも結構です。略号をお書きにならないときは、対照に手間どり、どうしても発送が遅れがちになりますし、同名のものなどがあつて誤送の原因になりますから、よろしくお願い致します。

○切手をご送付になると、紙に貼つて絶対紙に貼らないように、また、一枚一枚切り離さないようにお願い致します。紙に貼つて剝したものは、お受取りいたしかねます。貼つた切手類はお受取りいたしかねます。貼つた切手一枚を同封される際も、便箋に貼つておられるのは、一体どうした原因なのでしょう。

○郵便物の局留受取りご希望の方で、封筒の裏に仮空の住所を書かれたりする方が、ごさいますが、誤送の原因となります。何々郵便局留、受取人氏名、というぐあいにお書き願います。

○発送人の個人名発送をご希望の方は、お申出次第、ご希望に応じます。但し第三種便の別名発送はいたしかねます。

「ご主人様、私は奴隷二号として京子と同じように、否、それ以上の下等動物となるように致します。どうか私をご主人様の奴隷にお加え下さい」

と後手に縛られたままの姿で、床にひれ伏すのでした。

「よし、それじゃ、其処にあるものを食べてごらん。京子の体から出たものだけれど、もとは私のものだからね。奴隷になった誓いに食べるんだよ」

私は高鳴る喜びの鼓動を押えつつ、糞尿の山に深々と顔をうずめるのでした。

……ああ、これで私は圭子様の奴隷になれたのだ……。

四、

このようなことがあつて、私は圭子様の奴隷二号として、飼われることとなったのです。半年程して、圭子様は独立して医院を持たれました。そして、京子と私は先生の助手として、また奴隷として新しい今西医院での生活に入ることとなったのでございます。

次回にまた、私の若き日の想い出を続く限り、お知らせすることをお約束して、今回の項は終りたいと存じます。

(完)



連載小説

「花と蛇」 に期待する

佐土良志

三月号は書店に出るのが遅く、二十五日から毎日書店へ通いつづけました。二十九日頃には休刊かと心配しましたが二日になって無

事入手、安心いたしました。これは貴誌の発刊以来毎月味っている私の不安であり、悦びでもあります。とくに「花と蛇」の出現以

来、その感深まるばかりです。

それだけに「花と蛇」が休載になった号などは買い求めるのに躊躇します。まず、目次をみて「花と蛇」があると内容もみずに無条件で買い求めますが、それがないと、四馬氏の口絵で私の趣向に合うのがあるか、または内容で美女羞恥責めの読物があるかどうかを丹念にたしかめてからにします。

三月号の「花と蛇」はますます佳境に入り読み終った瞬間から、もう次が待ち遠しくなりません。

美津子の出現によって死ぬにも死ねなくなった京子。すぐれた知性も、唐手もいっさい役にたたず、どのように淫虐で淫靡な羞恥責めにも、いまは全裸の麗身をただ羞恥に染めながら哀願しつつ従わされる京子。

また、自分の救出に命がけの活躍してくれながら逆に淫獣のような葉桜団や森田組の好餌となり、操まで奪われ、さらには純情可憐なその妹にまで毒牙が迫まっていたのは、京子姉妹に詫びようもなく、淫虐で淫靡な羞恥地獄の責苦に悩乱苦悶する羞紅の全裸美女静子令夫人。

そして、桂子が、美津子が……と思うと胸の高鳴りを禁じ得ません。私は、静子夫人も

京子同様、京子の眼の前で童女のようにされ「……私は、もう、二度と貴男のところへは帰る気がしません。いまは、とても素晴らしい男性のとりことなって、そのお方のおそばを一刻もはなれることができなくなりました。」

私は、貴男によって得られなかった女性の最大の喜びを心の底から知らされ、時々、愛しいその方の命令で、とても口では言いあらわせないようなお恥かしいショーに出演させられたりしてはいますが、でも、この幸福にはとてもかえられません。今夜も、その死ぬほど好きなお方に身も心もとりけるのではなにかと思うほど愛撫され恍惚と喜悦にひたっております。私って本当に、貴男に愛されていたほどの女ではなかったのね。うわべは、それは貞淑な妻でいたが、本性はどうしようもない淫婦だったのよ。この桃源境のような甘美な世界にきて、そして逞ましい殿御にかこまれて、私はほんとうに目ざめたというわけね。でも思わずあられもうめき声まであげさせていながら、私の愛しいお方は、とても疑い深いんですの。また貴男のところへ帰えるのではないかですって。もちろん私は、心の底からお誓いの言葉をのべましたわ。静子を、あなたの女奴隷として、また、あなた

の愛玩用家畜として一生奉仕させて下さい、とね。でも、今夜は言葉だけでは駄目だとおっしゃるのよ。どうしても証拠をみせてくれですって。ですから私、ウフフフ……。私の赤ん坊のようになった写真、私の真実の声とともに、貴男のところへお送りしたというわけなの。あのお方ったら、静子、このほうがとてもかわいい、ですって、ホホホホ……。

あのお方のためなら、うれしいと思いますわ。静子の考え、とても名案でしょう。これなら、ほんとうに貴男にもいまの静子の幸福がわかっていただけるし、それに、静子のこんな素晴らしいさようならプレゼントですもの。貴男の心の中で、私にたいしてすこしでも未練があまりなら、時々、コソコソみつめて思い出していただけますものね。フフ、ウフフ……。そのうち、貴男は大富豪ですから、きっと、全ストの秘密ショーに出演している私のすてきな写真が売りにゆるかれると思いますわ。そうしたら、かならずよいお値段で買ってよね。まだお名残り惜しいけど、私、これから浣腸ショーに出なければならぬの。あら、もう開演のベルが鳴っているわ。急いでオシメをしめなくちゃ。だって赤ちゃんのようになったんですもの。それに、写真

をみておわかりのように、お腹がまるで妊婦のようにふくらんでいるでしょ。でも妊娠はまだしてなくてよ、おっぱいも黒づんでいないし、妊娠線だってないんですものね。あの方にこんなにお腹が膨れるまでさっき塩水をのまれたのよ。貴男にお別れの言葉をいつている間に、私、もうとても我慢できなくなってしまうわ。でも、トイレの鍵はあのお方が持っていていらっしゃるの。でも、このオシメ、汚すわけにはゆかないの。私の好きなショーのひとつなんですもの。どう、お驚きになったホホホホ。そのうち今度は愛しいお方の子をお腹の中に宿してから、では、どんなことがあっても、私を探さないで、いまの幸福にひたらせておいて頂戴!! それが静子の一生のおねがいですわ。では、またね。さようなら」

という声をテープレコードに吹きこまれ、塩水を鰻腹のまされて写真を撮られます。

やがてきざす激しい生理の苦痛、トイレへの哀願、だが許されません。

「あら、奥さん、もう、そんなにいたい。まだ早いわよ。それに、奥さん、貴女は大家のお淑やかで上品な令夫人でしょ。私たちがけならまだしも、京子や、美津子や、桂子ま

でいる前だというのに、よくもそんな恥かしいことがぬけぬけといえたわね。それに、ホホホ、浣腸できたえられた大きなお尻を浅間しいほどふるわせたりして、ほんとに慎しみのない令夫人ですこと。フフ、ウフフフ」

と朱美がからからと、銀子が

「奥さん、そんなに出たいんなら、京子お嬢さんとおなじで、みんなの前で立小便をしてみせる？ あら、いやだというの、そう、だったら、京子のお仕置きのおすままで我慢を申し！ もしそれまでチョビットでも粗相をしたりすると、美津子まで浣腸責めにかかるわよッ。そう、ほんとに我慢できるわね。ウフフそれじゃ朱実、京子に浣腸をしておやり。

京子、お前もわかったわね。とてもつらいのを我慢してお待ちになっというなら、京子お嬢さん、おとなしくいわれた通りにタップリ浣腸をしてもらって、お腹のなかにいっぱい溜っている汚ないものを、早いとこスッカリ出してしまおうんだよ。お前がキレイに全部出してみせないことには、かわいそうに、氣位の高い令夫人が一刻も早くお前よりさきに出したいものも出せずに恥も外面も忘れて、腰をあんなにモジモジゆすってお待ちになっというんだからね。フフフフ……。そう、そうよ、

さすがのお嬢さんも、だいぶききわけがよくなったわね」

と京子の浣腹ポーズを、そして死ぬより羞かしい排便苦悶と、その後の華々しい行為の瞬間を最も完璧たらしめようと、そのムチムチと肉づきのよい真白なお尻を平手でたたきながらうながします。

静子令夫人は、自分の粗相が美津子にまで累が及ぶことを知らされ、早くも限界に達している想像を絶するほど激しい尿意の苦痛を必死になってこらえにこらえつづけます。

やがて、地下室に生暖かい湯気とともに異様な臭気がぶんぶんといっぱいにたちこめました。淫獣のような男女の哄笑と嘲笑と淫猥な揶揄が……。

私の楽しい夢は、このようにいつ果てるともなくひろがってゆきます。

私は、いまから団氏および編集部みな様に、次のことを心からお願いたします。

一、「花と蛇」は完結まで毎号確実に連載のこと。

二、毎号の四馬氏口絵のなかに本文（出来たらその号、無理なら前号）と合致するような静子夫人および京子の責め画を入れる。この場合、肉体や容貌はもちろんであるが髪

の型に統一されたものの配慮をする。

三、完結と同時に、臨時増刊か別冊の形で「花と蛇」の単行本を発行する。

四、この場合、各章ごとに最低二枚の挿絵を四馬氏の麗筆によって挿入する。

五、価格は千円か千五百円ぐらいで限定版とする。

六、近く静子夫人を秘密ショーに出演させる。髪は美しくセットされ、全身美容を施された上、耳および首飾りも令夫人にふさわしく豪華なものを付けさせられ、デルタ地帯の辺りにハートの模様のついたオムツカバーを身にまとい、エナメル製の踵の細くてすくぶる高い黒のハイヒールをはかされて、太い浣腸器を片手にもち、片脚を高々とあげて踊っている場面をだす。この場合、塩水責めにされお腹が大きくプックリとふくらんでいる。

七、単行本が無理なら、完結を待たず、いままでの分を、四馬氏により悦庵絵巻のようにして刊行する。この場合、最低次の八枚とする。

(A) 桂子が太い浣腹器を手に静子夫人のお尻の下にうずくまっている。便器を下に四つん這いになってお尻を突き出している静子夫人。

【最新版】女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

A 1	フミツケ汚辱縛り (新井)	一組一枚	一五〇円
A 2	手吊り乳房責め (五月)	五組五枚	五〇〇円
A 3	ハリツケ猿ぐつわ (新井)	十組十枚	九〇〇円
A 4	全裸正面柱しばり (遠藤)	二十組二十枚	七〇〇円
		三十組三十枚	五〇〇円
		四十組四十枚	三〇〇円
		五十組五十枚	四〇〇円

A 5	亀甲強烈乳房縛り (遠藤)	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A 6	豊満乳房いじめ (遠藤)	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A 7	鼻責鼻梁いたぶり (遠藤)	全裸後手高手小手	(遠藤)
A 8	膨隆臀部さらし (長野)	全裸正面強烈縛り	(長野)
A 9	うねる緊縛裸身 (長野)	色禪の開股しばり	(長野)
A 10	正面縛蛙股ひらき (長野)	裸自慢縛りヌード	(長野)
A 11			
A 12			
A 13			
A 14			
A 15			
A 16			

A 17	正面アグラしばり (長野)	正面大の字開股縛	(長野)
A 18	遅ましき裸しばり (長野)	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A 19	両手前縛り髪首絞 (大塚)	両手吊り股間吊り	(桜井)
A 20	両手膝下しばり (関谷)	疼れんする裸身像	(関谷)
A 21	両股縄掛け開股縛 (大塚)	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A 22	乳房晒し肉体自慢 (長野)	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A 23	投げ出した全裸縛 (長野)	捕われの全裸緊縛	(梨花)
A 24	羞らいの両股縛り (大塚)	猿轡乳房いたぶり	(遠藤)
A 25	荒縄全身縛り豆絞 (大塚)		
A 26			
A 27			
A 28			
A 29			
A 30			
A 31			
A 32			
A 33			

A 34	盛り上る乳房縄目 (長野)	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A 35	ムチ打悶えポーズ (関谷)	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A 36	縦縄股間縛り正面 (関谷)	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A 37	くさり乳房責め (長野)	強制片足挙げ責め	(大塚)
A 38	正面乳房くぶり縛 (関谷)	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A 39	手吊りパンティ落 (絹川)	白バンド後手吊り	(東浦)
A 40	豆絞り高手小手呻 (絹川)	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A 41	ガンジガラメ立縛 (愛川)	亀甲本縄股間縛り	(絹川)
A 42	立木縛竹棒責め (桜井)		
A 43			
A 44			
A 45			
A 46			
A 47			
A 48			
A 49			
A 50			

(B) 奇妙なオムツカバー一枚の静子夫人が
いま穴倉から引き出されたところ。
(C) 寝具の上に後手に縛られた静子夫人が
川田や銀子や朱実達にその大きくふくれている
お腹を、そして目の前に突き出された洗面
器を指さされている。大きなヤカンが転がっ
ている。
(D) 床柱を背に開股縛りにされている静子
夫人。足もとにメンスバンドが落ちてい
(E) 静子夫人大の字洗腸図。

(F) 縛しめをとかれ排泄物のうず高く入っ
た便器を前に泣きくずれる静子夫人。女達が
便器を指さし笑っている。ビール瓶が静子夫
人のお尻のところに転がっている。
(G) 京子開股立縛図。大きなヤカンが転が
っており相当前の方に便器がおかれ、銀子が
それを足の先でずらしている。
(H) 六の秘密ショーの静子夫人踊り図。こ
の場合ふくれたお腹を強調する。
以上の件、その実現を一刻も早く、重ね

て切に切にお願いする次第であります。
最後に、責められるのは静子夫人と京子だ
けにしていたきたい。桂子はまだしも、美
津子のようなまだ清純な高校生まで責めるこ
とは好みません。あくまで静子夫人を京子を
責める口実にすべきで間違っても、二人と同
じように操まで奪うということは絶対に避け
ていたきたいと強く希望いたします。

「長篇SM小説」

宇宙のどこかで

△或る混血老婦人の話▽

佐 治 麻 造

或る混血老婦人の話

(十六)

起床のベルの音を夢うつつに聞いたエヴァはコンクリートの床からはね起きて眼をこすった。五日程前からハイウェイ工事の労役に駆り出されている彼女は体の節々がだるく痛かった。もう少し横になつていたいと痛切に思ったが叶う事ではなかった。女囚一九九号としてエヴァが此の婦人重罪監獄に送られて繋がれてから、もう三年近い月日が流れていた。

「今日も又土運びなんだわ。此の足鎖がなかったら、ずい分と楽なだけでねえ……」

両脚の鎖をジャラジャラ鳴らして、のろのろと床に膝を折って座ったエヴァは両手で髪を撫でつけ顔をこすり、顔をしかめ乍ら首環の嵌まり工合を直し、そして腰枷を少しずらせて溜息を吐いた。両手首には手錠の痕が見るも無惨だった。独房の中でさえ後手錠のまだった最初の半年程の間の毎夜毎夜の苦しみをエヴァは身震いし乍ら思い出す。もう少し神妙に勤めれば足鎖を片方だけは除って貰えるのだ。足鎖のままの苦役の苦しみを骨身に泌みて味わった最初の頃を想い乍らエヴァは足首の鉄環を少しずらせて指先で足首を撫でた。幾度か皮が破れ肉が裂け固まっては又血を流すのを繰返した両足首の皮は、今はもうたこの様に固くなっていた。

「痛くて痛くて呻き乍ら立ち止まると革鞭で打たれて……夜、独房の床をのたうち回って呻いていると容赦なく嵌口具掛けられて……本当に地獄の苦しみだったわ。足首が固まって腰にも枷だが出来てからは楽になったけど……。考えて見ると三年間というものは一週一度のシャワーの五分間以外ずっと此の足鎖と首環はつけられ放しだったのね。今日の担当看守は誰かしら？ ああ、確かローラの筈ね。あの女、未だ若いのに、どうしてあんなに意地が悪いんだろう。今日は氣をつけないと懲罰を喰うわ。囚衣の上からなら未だいいけど、素肌に鞭を当てられるのは本当に痛いからねえ。鞭位では済まないで懲戒房へでも放り込まれたら命が縮まるもの……。」

隣りの房で激しい鞭音と女囚の絶え入る様な悲鳴が聞えた。新入りが膝を折って座り続ける苦痛に堪えかねて脚を崩したのを発見されたのだ。やがて予想通り婦人看守ローラがルージュを濃く塗った薄い唇に冷酷な笑みを浮べてエヴァの房の鉄格子の前に立った。

「一九九号囚。今日も刑を受けさせて頂いて罪の償いをさせて下さいまし。」

定められた屈辱の言葉がエヴァの唇から淀みなく流れた。鋭い眼で女囚を見下していたローラは黙って次の房に移りエヴァはほとと肩を落した。用便が許され、そして配られた粗末な食事を水で流し込んだ女囚達は次々と音高く錠が開けられた鉄格子扉を潜って房の外に出ると直ちに回れ右して房の方に向いて両手を背後に回した。通路に背を向けてずっと並んだ女囚達に婦人看守が片端から後手錠を嵌めて回った。手錠は、各女囚の腰枷の後ろにぶら下っているのだ。毎朝繰り返される事乍ら、いつになってもみじめな思いで胸が熱くなる一刻であった。婦人看守が嵌め易い様に手首を持って行き

乍らエヴァは唇を噛んだ。ローラの嵌め方はいつもきびしくきついのだ。二人宛腰を連鎖されたエヴァ達は獄庭に追われた。今日も雲一つない快晴の空に夏の朝風が爽やかに吹いていた。此の地方で今頃雨を期待するのが無理な話であった。快く晴れた青空も、苛酷な苦役が待っている女囚達にとっては恨めしかった。獄内の労役場に追われて行く女囚の群を横眼で見て

「どうして私達の区画ばかりに、獄外労役を課するんだろう？」

とエヴァは其の不公平を呪った。

「労役がきついのは勿論のことだけど、社会の人達に見られるのが堪らないわ。ハンドバッグ作りや絨たん織りも根が疲れるけど、何といっても獄内の労役はいいわねえ……。」

しかしいくら羨み不平をいった所で何ともなりはしなかった。二列に並んで腰の連鎖の中央にロープを通され十名宛一まとめにされた四十名程の女囚の群は、婦人看守の鞭に追われて二台のトラックに追い上げられた。

エヴァと連鎖された女囚は二〇七号。娑婆での名をシルヴィア・バコールといい輝く金髪の大柄なグラマー女だった。ギャングのボスの情婦で、よせばいいのに部下の犯行を見物しに出掛けて逃げおくれ、唯一人だけ捕まってしまう、容赦なく共犯にされて懲役十五年。エヴァより三カ月程前に此の監獄にブチ込まれたのだった。

走るトラックの上で女囚達は後ろを向って並んで坐り、風に乱れる短い髪の毛を時々顔を振って払い退けていた。

「あーあ、娑婆に出たいわねえ。」

あたりの景色を眺めてシルヴィアが声を上げた。

「誰だい？ 口を利いたのは」

同乗して監視していたローラが耳ざとく聞きつけて女囚達を睨み回した。

「畜生め。地獄から来やがった女が又嘔鳴ってら。」

シルヴィアが肩をすくめて呟いた。

トラックのあとから新型のスポーツ・カーが純白の車体を朝陽にきらめかせて流れる様に追いついて行った。車の中には若い男女のカップルが一组。ハンドルを握るハンサムな青年のスポーツシャツの上体に腕を回して若い娘がうっとりとして寄り添っている。トラックの上の女囚達に気付いた娘は、おどましげに眉をひそめ、嘲けりと憫れみの色を浮べて顔をそむけた。青年は横目で女囚達を見て更にアクセルを踏み込んで速度を上げる。

「ち、ちくしょう!! 頭に来るじゃないの。」

女囚達はギラギラする瞳でスポーツカーの男女を喰い入る様に眺めて溜息を洩らし、シルヴィアは口惜しげに大声を上げて両腕をもだえた。

三十哩程走ってトラックは工事現場に着き女囚達は追いつ下ろされる。ハイウェイが迂回している丘を切り崩して近道を作るのだ。地形の関係で、土木機械を使用可能にする迄は人力の作業を要するのだった。ロープが抜き取られた。

「二〇七号だね、先刻声を出して社会の方を冷やかしたのは!! こっちへおいで」

シルヴィアは肩をそびやかしてローラに近寄った。同じ鎖に繋がれたエヴァも仕方なしについて行く。激しいビンタがシルヴィアの両頬に鳴り、シルヴィアは無念そうに低く唸った。

「お前達二人は今日は手錠のまままで草取りだよ。私がつききりで絞

ってやるわ。」

エヴァは恨めしげにシルヴィアとローラを見やって泣きそうな顔をした。後手錠を外された女囚達は小屋から作業道具を持ち出して婦人看守達に罵られ乍ら土を運び石を崩し初めた。同僚から手錠を一個借りて来たローラは自分の腰の革サックから取り出したのと合せて片手にカチャカチャとぶら下げてシルヴィアとエヴァの前に立った。

「嵌めるんだろ? 後ろかい? 前かい? それとも背中中で斜めに背負わせるの?」

虚勢を張って口をとがらせるシルヴィアの右手が掴まれて音高く手錠が喰い込んだ。左手にも手早く嵌めたローラが更に両方の環を握って締めつける。

「ウツ…痛、痛い!!」

シルヴィアが呻きローラは頬に冷笑を浮べた。

「弱音吐いたって弛めてやらないからね。フ、フ、フ、さ、お前もだよ。おいで」

エヴァはローラの前に両手を差し出し乍ら哀願した。

「おとなしくしますから、きつくしないで…お願いです。」
「フン!!」

ローラは嘲笑したが余り締めつけはしなかった。シルヴィアとエヴァは、他の女囚達から少し離れた所に追われて草の茂みを素手で取らされた。

「怠けると背中や尻のチャックを開けて鞭を当てるからね。」

ローラは冷たくいって樹蔭に寄りかかって煙草に火をつけ、丸く束ねた鞭をバラリと解いてヒュウと素振りを呉れた。

「畜生!! 指が動きやしないわ。」

シルヴィアが口惜しげにそういって、手錠の鎖をやけにガチャガチャと引張り、額の脂汗を手の甲で押し拭いた。夏の陽は高く昇って女囚達を容赦なく照りつけた。

「ああ、冷たい物をグーッと呑みたいわねえ。今朝のあつあつの二人は今頃は冷えたビールかなんか飲んでいい気持ちになってるんだろ。うなあ、ちくしょう!!」

シルヴィアが口汚なく罵って草をむしる手を休めた。

「あんた。駄目よ、休んじや。鞭を喰うわよ。」

エヴァが心配して注意したが既にローラがつかつかと歩み寄って来てシルヴィアの背のチャックに指を掛けた。

「あっ……」

流石にシルヴィアも一瞬悲鳴に近い声を挙げたが、すぐに唇を曲げて不敵な笑みを浮かべ、むしった草を投げ捨ててノロノロと立ち上って空を仰いだ。シルヴィアの背がむき出しにされ、一步退ったローラの鞭が空を切って飛んで来た。二撃目でシルヴィアは悲鳴を洩らし四撃で膝について喘ぎ呻く。

「半ダースでお終いにしといてやるわ。性根を入れて働くんだよ。」

ま、お前はもう二、三度懲戒房にブチ込んでやらなきゃ駄目だけだね。明日から足鎖は二十五封度のにするからね、そう思っておいで。課長の承認なんかすぐ取れるさ。」

エヴァはシルヴィアの背のチャックを閉めてやり、シルヴィアは唇を噛んで低く唸り乍ら再び草をむしり初めた。

「畜生、娑婆に出たら、どうするか見てるがいいわ。ウツ、もう……もう指が動かない。とても今日中は辛抱出来ないわ。手が千切れ

てしまいそう……」

シルヴィアは涙を浮べて口惜しがらのだった。漸く午前中の苦役が終って女囚達は食事を貪り喰った。シルヴィアは動かない指先をもどかしがって、地面においた食器にじかに口をつけて喰った。そのシルヴィアの姿を、何時のまにか頭上に立ったローラが眼を細めて見下ろしていたが

「二〇七号。どう? 少し弛めてやろうか?」

「お……お願いします。弛めて下さい……まし。」

シルヴィアは無念そうに哀願した。

「フフフ、じゃ、私の靴の裏を舐めて、そして鼻を地べたにつけてお願いして御覧。少し弛めて貰えるかも知れなくてよ。」

シルヴィアは唇を震わせて黙った。

「そう。弛めて欲しくないのね。それならそれでいいのよ。午後はみっちり働いて貰うからね。」

ローラは手錠の鍵を指先で回し乍ら嘲けり笑った。シルヴィアの両手首に固く喰い入った手錠の短い鎖がガツと張っては弛み、左右の鉄環が触れ合ってガチガチ鳴っていたが、やがてシルヴィアの上体が地べたに倒れ伏し屈伏の言葉が途切れ途切れに洩れた。

「お靴の裏を……舐めさせて下さいまし……」

婦人看守ローラの顔に満足の笑みが浮んだ。彼女は此の不遜な女囚をいつかコテンコテンにやつつけてやりたかったのだ。居合わせの看守達が、何れも同輩の後輩ばかりである今日がいい機会だったのだ。シルヴィアは涙をポロポロこぼし乍らローラの靴を捧げて其の裏を舐め続けた。

「今度は、こっちょよ。」

右足の靴先が強くシルヴィアの額を蹴りつけ代って左足が女囚の眼前につきつけられる。

「つばを吐いていいと誰がいったの？ 馬鹿!!」

叱りつけられた女囚シルヴィアが、大きくしゃくり上げて体を震わせた。

「よし。その位で赦してやるわ。」

シルヴィアは鼻環を地べたに埋めずめる様にして哀願を初めた。

「お願いです。手錠を弛めてやって下さいまし。お慈悲です。」

同僚の婦人看守が二人やって来て面白そうに眺めた。

「ローラ。なかなかやるわね。」

「此の女は、ほんとに生意気なのよ。もっと締め上げてやらなきゃ性根は直らないわ。」

「大体此の頃は、私達に制約が多過ぎるわ。監獄法を変えたのは改正どころか改悪よ。」

「そうだわ。世界一進歩的な監獄法だなんていってるけど、行刑第一線の私達には糞喰えだわ。甘やかせりや、つけ上るだけよ。」

「昔みたいに、びしびしやればいいのよ。罪人じゃないの。」

「鼻環なんかにしてもさ、唯つけとくだけじゃないの。うまく使えばそれだけで此の女なんか一ぺんでシュンとなってしまうのに……」
ローラは同僚達に相槌を打ち乍ら、シルヴィアの手錠を弛めてやった。

「あの……私のも、働いてるうちに締って来て痛いんですけど。お願いですから、弛めて下さいまし。」

エヴァも手を合わせて哀願した。

午後の苦役が初まった。シルヴィアは思い出すと忌々しいのだろ

う、時々唇を噛みしめて何かブツブツと呟いていた。

午後の陽は次第に傾き、エヴァとシルヴィアは草をむしりむしり他の女囚達の労役場所から大分離れて行った。エヴァの指先や掌の皮が所々破けて血が滲み、腰や背が硬張って痛んだが、休むことはおろか腰や膝を伸ばすことも出来ない。婦人看守ローラが絶えず意地悪い監視の眼を二人から離さないのだ。ローラは時々二人の背後に近寄って腰や脇腹を靴で蹴り、そして鞭の束を解いては二人の尻を囚衣の上から鞭打って嘲けり叱りつけた。流れる汗で肌へばり着いた囚衣の上からの鞭の痛さにエヴァとシルヴィアは代る代る喚いて身をよじる。

「ああ、辛いわ……」

エヴァは泣声でいい乍ら素手の指先で草の根を掘った。

「こんな木みたいなの草、素手では無理よ。鎌と鍬でやれば訳ないのに。畜生!!」

シルヴィアが手錠で株をガリガリとこじり乍ら、やけになった様に呟いた。

数羽の野鳥が鋭く鳴いて飛び去り草いきれがむんむんし、そして断雲が太陽をかすめて微風が吹いた。遠くの方で鞭音が三、四度鳴り女囚の悲鳴が風に流れて聞えた。眼に流れる汗を拭おうと思ったエヴァは背後の婦人看守をそっと盗み見た。ローラはスカートを風にはためかせ乍ら空を仰いで十数米程離れた小高い樹蔭で立っていた。其のローラの背後からジャンパーの胸ポケットに青写真を覗かせた二人の男が、そっと近づくのが見えた。工事関係の人だろうと思ったエヴァが手の甲で額を押し拭いた其の時、ローラが押しつぶした様な低い声を上げた。二人の男が背後から躍りかかってローラ

の鼻と口を厚い布で掩ったのだ。クロロフォルムを吸い込んだローラは、ぐったりと崩れる。振り向いたシルヴィアは忽ち諒解した。ボスが救いの手を差し向けたのだ。

「姐御。助けに来ましたぜ。」

一人の男が駆け寄り、他の一人はローラの体を探っていた。

「お前は確かウイルだったわね。あっちの男は誰？ 何と薄ノロなんだろ。」

シルヴィアは焦れて地団駄を踏んだ。足鎖がジャラジャラ音を立てた。シルヴィアは矢庭にエヴァを引き摺って、倒れたローラの傍へ行った。戒具の鍵を探すのだ。婦人看守の体をままならぬ手で荒々しく小突き回したシルヴィアは、舌打ちをし忌々しそうに手錠をがちゃがちゃいわせた。

「どこかに持ってるわ。車どこにあるの？ 此の女も運んで来てよ。」
婦人看守の体を担いだ男の後を追ってシルヴィアはエヴァを引き摺った。

「一緒に来るんだよ。早く……」

シルヴィアは舌打ちしてエヴァを睨みつけた。がくりと垂れたローラの髪から制帽が落ち、それをシルヴィアが蹴飛ばす。

「逃げるの……？」

エヴァは唇を大きく開いて喘いで訊ねた。

「そうよ。娑婆に出て自由な身になるのよ。あんた監獄にいたいのかい？」

どうして自由の身になりたくない事があるのか。毎日毎晩、此の鉄鎖から解き放される日を、どんなに切なく思い焦がれて呻吟した事か。しかしエヴァはためらった。ローラの腰から鞭が輪に束ねら

れて地に落ちた。シルヴィアは、それを拾って囚衣の胸に押し込み乍ら連鎖を擱んでエヴァを急ぎ立てた。

「もうこうなったら同じ事よ。今捕まったら、あんたも私も同じだわ。坊やに会い度くないの？」

エヴァの頭に血がのぼり、エヴァはシルヴィアと並んで走り出した。

「此の鎖の畜生め!!」

シルヴィアは揺れる足鎖を握ろうとしたが、手錠の手では両側を同時に握れず、顔を歪めて舌打ちした。脚にまっわる重い足鎖にエヴァはよろめいて倒れ、がっ張った連鎖の先でシルヴィアは尻餅をついた。道とてない丘の斜面、ままならぬ手足で転ぶ様に走る二人の女囚の脚や腕に無数の掻き傷や摺り傷が出来て血が滲んだ。丘のふもとの小さな台地に大型乗用車がハイウェイの方を向いて停っていた。男達は後部席の床にローラを投げ込み両側から運転席に飛び乗る。シルヴィアとエヴァが後部座席に転がり込むや車はスタートした。ローラの体を容赦なく踏みつけ、続くエヴァを引摺り込んでシートに坐ったシルヴィアが息を弾ませ乍らいった。

「あんた達。なかなかいい所に停めたわね。」

バックウィンドの陽除けを少し上げて丘を見上げたシルヴィアがニコリ笑った。ダッシュを利かせてハイウェイに躍り上った車はグングン速度を上げる。

「姐御。もう大丈夫ですぜ。うまく行きましたなあ。あ、いけねえ前から二、三台来ますぜ。」

鼻環や首環は奴隷女だといっても通るが、額の赤い番号とダンダラ縞の囚衣を見られては事なのだ。シルヴィアとエヴァは身を伏せ



てやり過した。シルヴィアは伏せた身をそのままに、床のローラの体を探し初めた。

「あったわ。こんな所に納ってやがったわ。」

制服の襟の折返し裏のあたりから、環に通した二個の小さな鍵をつまみ出したシルヴィアが嬉しそうに叫んだ。エヴァの手錠を外してやったシルヴィアは、エヴァに鍵を渡して自分の両手を差出した。

「そうじゃないの!! 短い方の鍵よ。それは私、よく見てるから知ってるけど、同じ鍵で合うかしら?」

ローラが同僚から借りたシルヴィアの手錠も同じ鍵で外れた。

「腰枷も外してよ。長い方の鍵よ。」

両手首を撫で乍らシルヴィアがいった。足首の鉄環も其の鍵で開いた。

「こん畜生!!」

二本の鉄鎖をぶら下げた革の腰枷を、床のローラの体に叩きつけたシルヴィアが声高く笑った。腰枷の後ろ側に取付けられた手錠の二個の環がカチャッと触れ合ってローラの顔を打った。エヴァの体からも腰枷と足鎖が除かれた。

「ふーっ。生き返った様ねえ。体が浮く様だわ。」

シルヴィアは大きく体をそらせて伸びをし、クッションの上で二度三度とはね回った。

「こんな柔かなものの上に坐るの何年振りかしら? ああ涙がこぼれて来たわ。アッ、い、いたた...」

背と尻の鞭痕がこすれる痛さにシルヴィアは呻いて背を浮

かせた。床の婦人看守が微かに正気ずいて来て身動きした。

「さっきの布、貸してよ。」

助手席の男が、白布に小瓶の液体を更に注いでシルヴィアに渡した。クロロフォルムの甘い匂いが車内に立ちこめる。鼻と口を又も白布で掩われたローラは再びぐったりした。其のローラの体を手荒に俯伏せにしたシルヴィアは両手を背にねじ上げて手錠を嵌めた。今迄自分の両手首に喰い込んでいた手錠だ。

「ああ、いい気持ちだこと。エヴァ、あんたのを足に嵌めておやりよ。」

婦人看守ローラの太い足首には手錠の環が回り切れなかった。

「遠慮しないで締めつけておやり。私がやってやるわ。」

手を伸ばしたシルヴィアは手錠の環を掴んでグッと締めつけた。ナイロン靴下の上から鋼鉄の環が肉に喰い込んでカチリと錠が鳴った。

「そっちは、あんたおやり。」

そういわれたエヴァはローラの足首を締めつけ乍ら其の痛さを思っ
て心が痛んだ。

「どこへ連れて行ってくれるの？ そろそろ、非常線が張られる頃よ。呑気にハイウェイを走っていいのかい？」

シルヴィアが男達に鋭くいった。

「ま、細工は粒々でさ。それに未だ大丈夫ですよ。姐御達が働かされてた所にや近くに電話はありませんからね。」

「フン。そうかい。じゃ任しとくからね。ヘマおやりじゃないよ。」

エヴァは先刻の鍵を取り出して自分の首環を外そうと、首筋の鍵孔を手探った。

「フッフ、首環は駄目よ。其の鍵を私にお貸し。」
シルヴィアに鍵を渡し乍らエヴァは首を振った。

或る混血老婦人の話 (十七)

三十分程走ると切通しの所で大型トラックが一台反対方向を向いて停っていた。

定期便の貨物を山の様に積んだ其のトラックの横腹には運送会社の名が記されてある。

エヴァ達の乗用車がトラックと尻を向け合って停まり男達は飛び降りてハイウェイの前後の警戒に当たった。トラックから降りた二人の作業服の男が最後尾の荷物を軽々と動かすと荷物の間にポツカリと通路が開いた。万事飲み込んだシルヴィアがエヴァを急ぎ立てて車から降りる。

「これ持って行くのよ。」

鎖で繋ぎ合わされ各二本宛の足鎖をぶら下げた腰枷をエヴァに手
伝わせて持ち出したシルヴィアは、

「中に、もう一人女が居るわ。気を失ってるのよ。その女も運んでね。」

トラックの男達にいい捨てて荷物の間によじ登った。後手錠足錠のローラが制服をはだけ金髪を乱して気を失ったまま担がれて来てトラックの上に投げ上げられた。其の足首を掴んでシルヴィアが奥に引きずり込む。

「此の人、連れて行ってどうするの？ もう用はないじゃないの？」

エヴァの問いにシルヴィアは黙って肩をすくめて見せた。

「姐御。少しの間、そこで辛抱しておくんなさいよ。奥の方に毛布

が敷いてありますぜ。」

乗用車の男達が引返して来て、荷物で蓋をされかけている中を覗き込んでいった。

「お前達。車の中をも一度よく調べといてよ。車はどうせ他人様の物なんだから。」

男達は額を叩いてニヤリと笑い、荷物が穴が閉じられてロープが掛けられ、そしてトラックは今迄来たハイウェイを引返して走り初めたのだった。どの位走ったか、トラックは軋んで停った。暫くすると少し動いて又停まる。

「検問よ。静かにして……」

やがて走り出したトラックに揺られ乍ら、シルヴィアとエヴァは暗闇の中で安堵の吐息を洩らした。

「今頃、監獄じゃ泡喰ってるだろうねえ。胸がスウツとするわ。」

シルヴィアは低く愉快そうに笑った。

「けど、他の連中は当分きびしく締め上げられるわよ。可哀想に……」

そういわれてエヴァも気がついた。

「本当ね。私達のために気の毒だわ。」

「フッフ、ともかく私達の勝ね。此の女迄連れて逃げ出せるとは思わなかったわ。」

シルヴィアは足先で探ってローラの体を蹴り乍ら勝利感に浸るのだった。

「あ、煙草を貰ったときゃよかったわねえ。」

シルヴィアが舌打ちして口惜しがった時、又もトラックは停った。

「州境の検問らしいわ。」

二人の脱獄女囚はさっと緊張した。其の時、ローラが気付きかけて低く呻って身動きした。

「ちくしょう!!」

シルヴィアはローラの鼻と口に白布を強く押しつけ、エヴァもおろおろして其の両脚を押さえつけた。

「無事済んだわね。」

二人の脱獄女囚はトラックの動揺に身をまかせ乍ら暗闇の中で顔を見合わせてニッコリした。やがて停ったトラックの荷物が動かされて女達に食物が渡された。外は既に夜空で月のない空に星がきらめいていた。

「娑婆の食物は、おいしいわねえ。」

エヴァとシルヴィアは、サンドイッチを貪り合い魔法瓶のコーヒーを奪い合って息も絶え絶えに啜った。滲んで来た涙をエヴァは手でこすった。

「鼻環がうるさいわねえ。此の首環と鼻環を外したら、どんなにいい気持だろ。」

シルヴィアの呟きも少し涙声だった。

夜明け前のハイウェイの下の草原で用を足したシルヴィアとエヴァを再び乗せてトラックは走り続けた。少し作られた隙間から朝の光が射し込んだ。やがてローラが気を取り戻したが、今度はクロロフォルムを嗅がせようとはしないでシルヴィアは長々と経緯を説明してやるのだった。勝ち誇った調子だった。

ローラは其の声が耳に入るのか入らないのか、口一つ利かないで弱々しく身をもだえ続けた。

「どう？ 気持は。お前の手足に嵌まってるのは、お前が持ってた手錠なんだよ。何とかおいしいよ。」

ローラが初めて口を利いた。

「足を、足を少し弛めて……」

「フッフ、痛いかい？ 太い脚をしてるからさ。もっともがいて御覧。いい気味なこと。」

シルヴィアは声高くいつ迄も笑うのだった。

「私を、一体どうしようというの？」

ローラは俯伏した顔をかすかに挙げて横眼でシルヴィアとエヴァを見上げ乍らいった。其の声は弱々しかったが、何かキツとしたものが感じられた。

「どうするつもりかって？ お前が私達にした事を考えて見るんだねえ。そしたら分るわよ。ま、楽しみに待っていいで」

ローラが突如手足に力をこめて身をもがいた。後手錠、足錠がガチャガチャ音を立てた。

「フッフ、もっともっと、もがくがいいわ。」

シルヴィアが嘲った。

「あら、何だか臭いわ。あ、此奴なのね。」

シルヴィアが足でローラの体を隅の方へ押しやり、スカートの腰のあたりを足でゆすった。ローラの両眼から涙がポトリと落ちるのを見てエヴァは可哀想になった。

「ね、足錠外してやって何かやったら？ コーヒーが残ってる筈だわ。」眉をつり上げたシルヴィアがエヴァを睨んでピシリといった。

「何いってるの!! あんた此の女を憎いと思わないの？ 昨日の今頃、私達何の理由もないのに、此奴に鞭打たれ足蹴にされてたのを

忘れたの？」

其の日の夕暮れが深まった頃、エヴァ達は再び乗用車に移った。トラックは何喰わぬ顔で定期便のコースを走り去り乗用車はハイウェイから外れて山道を昇り出した。

「凄い田舎じゃないの。」

窓外の暗闇に黒々と起伏する高原や山脈を眺め乍らシルヴィアが叫んだ。

「ここなら大丈夫ですぜ。姐御。」

運転席に一人でハンドルを握る若い男がいった。ヘッド・ライトに照されて前方に急カーブがあった。

「あっしはジミーという者ですて。」

緊張して急カーブを切り終えた男が前を見たままいった。下の方で激しい川の流れが聞える。

「姐御のお噂は、よく伺ってますぜ。お助け申すについちゃ、ボスのお心使いは大変なもんで。」

「ねえ、ジミー。どこへ連れて行ってくれるか知らないけど、そこにヤボスが待ってるんだらうね？」

シルヴィアの瞳が妖しく輝き腰が切なげに動いた。

「此の峠を越えて向うの山の中腹に小さな湖がありゃすんで。そのほとりに素敵な家がポツンと建ってるという訳で。ボスが姐御のために用意されたんですぜ。こういっちゃ何だが、姐御に凄く御執心な様ですてね。へへへ……」

「ボスはそのにいるの？ 居ないの？」

シルヴィアは焦れて叫んだ。

「それがその、未だおいでになっていないんで。ほとぼりが冷めて

から、お見えになるって事ですぜ。」

「まあ!!」

シルヴィアは失望して肩を落した。

「畜生。回り切れねえや。」

男は身をのけぞらせて後ろを見乍ら車を少しバックさせた。若く精悍な横顔だった。

「あんた、中々ハンサムね。ボスにそういってよ、余りおそいとあんたを誘惑するって……」

男はギアをローに入れてアクセルを踏んだ。

「へへへ、御冗談を。あっしなんか、ほんの三下野郎でさ。しかし何ですぜ、姐御。お体もいろいろとお手入れなさらずにちゃ。だいぶ痛められておいでの様だが……」

「フーン。それもそうね。」

シルヴィアは鼻先にぶら下った鼻環を忌々しげに指先でいじり、床のローラの頭を踏みつけて黙りこんだのだった。

或る混血老婦人の話 (十八)

山中の湖畔に建てられた家は別荘風の小綺麗な平家だった。山を背負い広々とした庭を繞らせている。

「此の御役人の御婦人は、どうしますんで？」

「そこらの地べたに転がしておきやいいわ。服を汚してるのよ。臭かっただろ。首にロープをつけて樹に繋いどいてよ。」

パンティだけをつけた若い小柄な女が出て来て、男の命ずるままシルヴィアとエヴァの脚を丁寧に洗った。

「これ奴隷？」

「そうですよ、姐御。賠償で連れて来られたジャプーの娘でさ。」

「フン。革の首環だけで鼻環もつけてないのね。」

明るい居間に入ると女奴隷がコーヒを捧げて来た。

「お召替えになる前に首環をお取りしやしょう。」

「フン。鍵あるの？」

「へへへ、あっしは金庫破りの名人の助手でさ。あ、先刻から聞きそびれてるんですが、そちらの御婦人は何とおっしゃるんで？」

ジミーは道具を揃え乍らエヴァの体を視線でなめ回した。

「エヴァよ。反逆罪という恐れ多い罪で三十年喰って私と同じ鎖に繋がれてたの。あんたなんかとは人柄が月とスッポンだからね、其のつもりでおいでよ。」

ジミーは笑い乍ら数分間で先ずシルヴィアの首環を外した。エヴァのは二分とかからなかった。

「鼻環は？」

シルヴィアが首を大きく回し乍ら溜息をついて訊ねる。

「其奴にや錠がありやせんのでね。これで気長に切らなきゃ仕方がないです。」

ジミーは小さなヤスリを取り出した。

「簡単に切れないの？」

「何しろ特殊鋼ですからね。そりゃ高周波切断機がありや訳ないですがね。しかし此のヤスリだってこう見えてもダイヤモンド工具ですからね。ま、ともかく風呂に入って着替えちゃ如何です？」

シルヴィアとエヴァは囚衣を脱いで庭に叩きつけると広い浴室に入った。何年もの間、冷水のシャワー、それも週に一度許されるか許されないかで過して来たシルヴィアとエヴァは、温かい湯に心行

く迄浸って甦った。鞭痕が泌みて痛かったが、香り高い石鹸の泡で頭から足の先迄を丹念に洗うと、囚われの苦しみが垢と共に流れ去る思いだった。

ジャプー女の奴隷が入って来て枷の痕に薬をつけて揉み、全身をマッサージして呉れた。強い匂の液体に浸した布でこすると、肌に刷られた囚人番号が薄くなつて行き、やがて消えた。

「あんた、賠償で奴隷にされたの？」

エヴァは久しく口にできなかったジャプー語で訊ねた。賠償奴隷のことはエヴァの入獄後の事で、彼女は知らなかったのだ。エヴァの口から意外な母国語を聞いた女奴隷は驚き、そして忽ち涙ぐんだ。

「ハイ。くじに当たったもんですから……」

「そうお。可哀想にねえ。何も悪い事してないのに奴隷にされて……。それでどの位になるの？」

奴隷娘は故国の親兄弟を思い出したが、大粒の涙をホロホロ流したが、マッサージの手は休めなかった。

「ハイ。一年とちょっとです。最初に買われたお邸では、とてもきびしくされましたけど、今度の御主人様は、とてもやさしいんです。けど、それが御主人様かはっきり知りませんですよ。鞭も滅多に当てられませんし、枷やなんかも殆ど嵌められる事ないんです。それはいいんですけど……男の人達に代る代るに……」

娘は顔を悲しげに染めて全身に恥らいを見せた。

「そう。そうなの。可哀想に。それで今は、あのジミーとかいう男の……」

「ええ、あの方のお相手させられてるんですの。時々情けなくて堪らなくなりますが、奴隷ですものね、諦めてお勤めしてますの。」

「そう。あ、もうマッサージはいいわ。なかなか上手ね。」

エヴァは風呂場のマットから身を起した。

「私はね、もう分ってるだろうけど監獄から脱走して来たのよ。ホラ、未だ鼻環がついてるでしょ。脱獄囚なのよ。」

「ええ、知ってますわ。けど私はおいつけの通りするしかない分際ですもの。もう一度お温まりになりますか？」

中流以上の家庭に育った娘なんだわ、とエヴァは湯に浸り乍ら女奴隷の顔を憫れみをこめて眺めた。女奴隷は手錠に痛められた痕のある両手でタオルを捧げてタイルの床に跪ずいてエヴァが上がるのを待っているのだった。其の黒い瞳は、エヴァの人柄を見抜いているかの様に賢くそうに輝いていた。

「名は何ていうの？」

「名前なんかありませんわ。七号ですの。」

娘の首環の前後には、番号を刻印した小さな鉄札がつけられている。

シルヴィアのを借りて着た部屋衣は、エヴァにはほんの少し大きかった。

「やっと人間らしい気持になれたわ。」

安楽椅子に寛いだエヴァは、シルヴィアにいわれる迄もなく自由の喜びを泌々と味わった。脱獄という恐ろしい罪を犯した恐怖も今は薄らいで唯もう嬉しかった。重く冷たい鉄鎖を身にまとう事はもはやなく、ここはあの陰惨な独房ではないのだ。エヴァの頬に涙が流れた。

「シルヴィア。ほんとにお礼をいうわ。私、もう嬉しくて……」

「ホホホ。お礼なんかより、あんたこれからどうするの？ 当分は

「ここにいるとしても、それから後よ。私達の仲間になる？」

「……」

「まあ、ゆっくり考えるといいわ。」

首を動かしても、あの冷たく重い首環の切ない感触と圧迫は既になく、脚を動かしても鎖の音のみじめさはもうなかった。二人の女は夢に夢見た自由を泌々と味わい乍ら深々と坐っていた。

「坊やに会い度いわ。夫や両親にも。大きくなっただろうねえ。」

エヴァはポツリと呟いた。

「焦っちゃ駄目よ。今、動き回ったら直ぐ捕まってしまうわ。」

エヴァはうなずいて窓外を眺めた。

「逃げては見たものの、これからどうすればいいのかしら？」

星を映して微かにきらめく湖面を薄いカーテンを透してじっと見やり乍ら、エヴァはホッと溜息をついた。

「いっその事、自首して出て、ちゃんと刑を受けようかしら？」

そんなエヴァの心を見すかす様に、シルヴィアがぴしりといった。

「最初にいっとくけど、妙な真似はしないでね。私達に迷惑をかける様な事したら……」

シルヴィアはエヴァをじろりと睨んで紫煙を深々と吹き上げた。

幾度か咽喉を詰らせて食ぼった食事が終ると、鼻環の切断が始められた。シルヴィアにはジミーがエヴァには奴隷娘がついて、小さなヤスリでこすり出す。

「未だそれだけなのかい」

シルヴィアは幾度か焦れて男を叱りつけた。叱り乍ら男の体臭を身近に感じたシルヴィアの瞳はギラギラと光り小鼻がひろがり、

そして唇が物欲しげに開いてわなないていたが、疲れが出たのかやがて座ったまま寝入ってしまった。二時間程でシルヴィアの鼻環が切れ、男は指に力をこめて環をひろげて、抜き取った。眼を覚ましたシルヴィアが嬉しげに叫んだ。

「取れたのね。嬉しい。これで化粧も出来るわね。エヴァの方は未だなかなかね。」

シルヴィアは立ち去り、男は煙草に火をつけ乍らエヴァに近寄って奴隷娘を突きのけた。

「俺がやるから、お前は片付けて風呂に入って寝る用意をしな。」

男はポケットから取出した鍵で、奴隷娘の革の首環を外してやって室外に追い出した。

「御苦労なことでしたな。」

エヴァの鼻環に当たったヤスリを器用に動かし乍ら男はいった。

「お前さんは、もしかしたらあのジャブー・ローズのエヴァ・ローレンスさんでは？」

エヴァは顔をしかめてうなずいた。間近で見ると其のハンサムで精悍そうな顔のどこかに矢張り卑しげな凄味が感じられる。

「そうですかい。あっしも南泰平洋の島の塹壕の中で、お声は毎晩聞きやしたもんで……」

男の視線がエヴァの体中を這い回りエヴァは、そっと胸許を掻き合せるのだった。

漸く鼻環を除いたエヴァは、男に教わって寝室に入った。豪華なダブルベッドで死んだ様に眠り込むシルヴィアの横に潜り込んだエヴァは引き込まれる様な深い眠りに落ちて行った。其の頃、暗い庭ではローラが飢えと渴きに責め苛まれ乍ら、地上をのた打ち回って

弱々しく呻いていたし、又別室では床に跪まずいた女奴隷がジミーの靴下を、おそろおそろ脱がせてやっていたのだった。

或る混血老婦人の話

(十九)



ベルの音を聞いた様な気がしてエヴァはがばとはね起きた。固いコンクリートの庄の上に久しく寝て居た身は、ベッドのやわらかな反動でバランスを失い、上体がベッドの外に落ちて手を床についてしまった。シルヴィアも気配を感じて眼を覚ますや、夢うつつ乍らもはね起きてキョロキョロした。ベッドの上に坐り直した二人の脱獄女囚は顔を見合わせて泣き笑いした。飾り棚の置時計は六時半過ぎを指していた。

「習慣で恐ろしいものねえ。寝過した罰は骨身に沁みてるものね。」

前日の苦役の疲れが残る体で固いコンクリートの床に膝を折ってキッチンと坐り鉄格子を向いて朝の点呼と検査をおののき乍ら待つ事はもはやないのだ。きびしい顔の婦人看守が鞭を手に現われる事はないのだ。

「もっと寝てていいのね。好きなだけ」
そういつて伸びをしたシルヴィアは、銀の水差しからコップに水を注いで一息に呑み乾した。そうだ、水も自由に飲めるのだった。

「私にも頂戴な。」

冷たいミネラル・ウォーターのコップを手にしてエヴァは涙ぐむ

のだった。

「今頃は監房の外に並んで後手錠嵌められてる時分ね。」

シルヴィアが再び頭を枕に載せて首の周りを撫で乍ら呟いた。

「未だ早いわ。臭い囚人食を嚙ってる頃よ。」

エヴァも横になり乍らいった。

「私ね、膝を折って坐るのが辛くて辛くて……。いつになっても厭で堪らなかったのよ。腿に何度鞭を喰ったか知れやしないわ。」

「ね、ローラはあのままなんでしょ？ 思い出したわ。あのままで放っとくの？」

エヴァの問いに、シルヴィアは、うとうとし乍らうるさそうに答えた。

「ほっときやいいのよ。死にやしないわ。ああ、楽ねえ。これであんなに男ならねえ。」

二人の女は昼過ぎに起きて枷や鞭の痕に丹念に薬をすり込んだ。

「エヴァ。化粧品遠慮なしに使ってね。」

髪にブラシを当て化粧し乍ら、エヴァは又も涙ぐんだ。

「いい時に逃げたものね。折角伸びた髪を又短く切られる頃だったわねえ。」

金髪にウェーブをつけ乍ら、シルヴィアが楽しそうに呟いた。

食事を済ませて一服したシルヴィアは、ジミーに命じて、ローラを居間の外の芝生に引き摺って来させた。シルヴィアとエヴァに施されていた腰枷等が運んで来られ、ローラが使っていた鞭を束ねて持ったシルヴィアは、ローラの頭上に立って見下ろした。後手錠、足錠が二昼夜振りに外されたが、ローラは手足をそのままにして死んだ様に俯伏している。見兼ねたエヴァが

「何かやった方がよくはない？」

というシルヴィアが奴隷娘に命じて古鍋で暖めたミルクを持って来させた。奴隷娘がスプーンで飲ませてやるうち、ローラはやがて古鍋をひたたくってゴクゴクと貪り飲んだ。

「餌が済んだら、お立ち。」

ローラは懸命の努力で芝生の上に横坐りになって、ぼんやりとシルヴィアを見上げる。

「お立ちといってるのよ!! いう通りにしないと又縛り上げて転がしとくよ。」

ローラはびっくりとして何度か膝をついた末、漸く立ち上ってよろめいた。婦人看守の制服の上衣は方々破れ、スカートは腰から腿のあたりにへばりついてふんと異臭が匂った。ストッキングは見るも無惨にぼろぼろになり、靴はどこへ行ったか影がなかった。

「私達が誰だか知ってるわね？」

シルヴィアが、其のゆるやかに優雅な部屋着の腕を上げて、エヴァと自分を指してきめつけた。

「……………」

ローラの瞳が一瞬キラリと光ったが、直ぐに力なく伏せられ、其の膝が折れて地面についた。

「立ってろ、とおっしゃってるんだぜ。」

ジミーが鼻をしかめ乍ら、背後からローラを金髪を掴んで無理矢理に立たせた。

「服をお脱ぎ!! 全部よ。」

シルヴィアが鋭くいう。

「……………手が…手が動かないわ。」

ローラが初めて口を利いた。眉を逆立てたシルヴィアが革のスリッパを両手に握って息もつかせず両頬を撲り続けた。悲鳴を上げて倒れかかるローラの髪をジミーが掴んで支えた。

「何だって!! 手が動かないって? 笑わせちゃいけないよ。」

更に激しい往復ビンタが続けられ、ローラの両頬は赤く腫れ上って唇から血が流れ、エヴァは顔をそむけた。

「分ったかい? 早くいう通りにおし!!」

ローラはのろのろと制服のボタンに指を掛けた。其の頬に涙がぼろぼろと伝わり、肩が悲しげに震えた。異臭が更に匂い、そして最後の一枚を、長いことかかって脱いだローラは芝生にしがみついて慟哭した。細面の顔の割に其の浅黒い体はすべすと肉付きがよかった。

「ジミー。水をぶっかけておやり。お前は此奴の着てた物を焼いておしまい。ポケットの中の物は出しておくんだよ」

ジミーはローラのお金を掴んで庭の水道の所に引き摺り、奴隷娘はローラの衣服を運び去った。全身に水を浴びせられたローラが、再び蹴り転がされ乍ら、芝生を横切ってシルヴィアの足許に突伏した。シルヴィアが、束ねた鞭の輪をばらりと解いて唇に笑みを浮べる。

「此の鞭に見覚えがあるだろうね? 私達をさんざん喚かせた鞭だよ。どんなに痛いか御本人に思い知らせてやるわ。」

静かな山中の湖畔の澄んだ空気を切って長い鞭が鳴り、ローラの背に一条の鞭痕がみるみる赤くなった。絶叫が響いて湖面に尾を引いて渡り、更に鞭がビュウと鳴った。芝生を四つ這って逃れようとするローラが、ジミーの靴先で蹴り戻されてひっくり返り、今度は

腹部に鞭が炸裂する。

「ギャーッ」

体を折り曲げてのたうつ尻から腿にかけて、長い鞭が激しく吸い付いた。

「ああ、いい気持だこと。エヴァ。あんたもどう?」

エヴァは肩を震わせてかぶりを振った。

「一応これで赦したげる。これを着るのよ。フッフ」

シルヴィアが着ていた囚衣が投げ与えられた。シルヴィアが施されていた腰枷が連鎖から離されてローラの腰にきつく嵌められ、両足に足鎖が垂れた。シルヴィアが愉快そうに笑い乍ら両腕を背後にねじ上げて腰枷の手錠を入念に嵌め、昨夜自分の首から外した首環を掛け、髪を掴んで立たせておいて腰を背後から蹴り飛ばす。ローラは足鎖をもつらせて脆くも前に倒れ、後手錠の両腕をもちいて呻いた。

「ああ、おかしい!! ほんとにこんな愉快なことってないわね。」

シルヴィアは腹を抱えて涙をこぼさんばかりに笑うのだった。ローラの金髪が短く切られ、今は女囚の姿となった婦人看守は芝生に顔を押し当てて鳴咽した。

「鼻環もつけてやりたいんだけど…。ま、仕方ないわね。さ、二〇七号。あそこへ行って膝を折って坐るんだよ。二〇七号といったらお前のことなんだよ。馬鹿だねえ。未だ鞭が欲しいの?」

シルヴィアは鞭を再びばらりと解き、ローラはびくっとして体をおののかせた。庭の一隅にある下水溜りのコンクリート箱の鉄蓋の上に膝を折って坐らされたローラは、口惜しげに身をもだえた。

「私をこんな目に遭わせて…。あんた達の罪が重くなるばかりよ。」

「おや、未だそんな口を利くのかい？」

シルヴィアの鞭が正坐した腿の上に鳴り、ローラは体を二つに折って背をのた打たせ喚いた。居間に帰ったシルヴィアは、コーヒを啜り乍ら庭のローラを眼を細めて打ち眺めつつ、ジミーにいつけるのだった。

「あの女を繋ぐんだから、地下室を片付けといてね。檻があるといいんだけど。」

「ありやすぜ。」

ジミーは、シルヴィアの足首を揉んでいる奴隷娘を顎でしゃくって答えた。

「此奴の檻がね。しかし殆んど使ってやしませんから、それを使いましょうや。」

シルヴィアの足許にうずくまる奴隷娘は、ジミーの巻舌でしゃべる言葉が分るのか、微かに恥らしいの色を体中に浮べた。ローラが何か大声で喚いて膝を崩し身をもだえた。舌打ちしたシルヴィアが、それでもいそいと鞭を持って庭に出るのを見乍ら、エヴァは今となっては、あの恨み重なる婦人看守ローラが可哀想に思えて堪らなかった。

「あの女だって職務上やった事なんだから。そりゃ少しはやり過ぎたかも知れないけど。脱獄したのは、何といっても私達が悪いわ。」
脱獄の罪の大きさがひしひしとエヴァの心にのしかかった。今後の身の振り方をあれこれ考えると気が滅入ってしまう様だった。

「どんなに辛くても、矢張り監獄に繋がれていて、まじめに刑を受けた方がよかったわ。」

シルヴィアと同じ鎖に連鎖された事が恨めしかった。「脱走する

時、何故大声で騒がなかったんだろう。」エヴァは今にしてひしひしと後悔の念に駆られるのだった。

「シルヴィアって恐ろしい人だわ。ギャングのボスの情婦なんだから無理もないけど。ギャングの一味にされてしまったら、どうしようかしら。」

恐ろしい鞭音と絶叫が聞えて来て、エヴァは自分が鞭打たれている様な心地がして耳を掩うた。

「思い切って自首したら、どんな目に遭わされるのかしら？ まさか死刑にはならない筈だわ。終身懲役かしら？」

エヴァは戦慄した。昨夜釘をさしたシルヴィアの言葉と凄い眼付きが思い出されエヴァは身震いして絶望した。

「お揉みしましょうか。」

奴隷娘が足許にうずくまって足首をマッサージし始めたのにも、エヴァは暫く気付かなかった。

「姐御。大分騒いでますぜ。監獄じゃ、今朝になってしぶしぶ発表したらしんで。新聞は来ねえが、ラジオをお聞きになりやすい。丁度ニュースの時間だ。」

頬を上気させて戻って来たシルヴィアを迎えて、ジミーがそういつてラジオのスイッチを入れた。

「……エヴァ・ローレンスはともかく、シルヴィア・バコールはギャング団の一味だった兇悪な女囚であり、万一を恐れた当局は懸命の捜査を行っております。連邦警察も行動を開始し、有力な手掛りを得た模様であります。逮捕は近いものと思われませんが、市民各位におかれては充分の……」

シルヴィアは片眼をつぶってニンマリと笑ったが、エヴァの心は

両親や夫の心痛を思つて激しく痛んだのだった。
「こんな事してても、きっと捕まるにちがいないわ。逃げおうせるものじゃないもの。少し刑が重くなる位なのだったら、自首して出たいわ。」

脱獄して三日を経ずしてエヴァは良心の苛責に堪えかね初めた。

しかし又あの地獄の様な監獄の日々を思うと血が凍る思いだった。
「そうだわ。私は自分では悪い事したとは思ってなかったのに、皆で罪を被せてしまったのよ。三十年なんて、いくら何でもひど過ぎるわ。」千々に想い乱れるエヴァの顔を、紫煙の向うからシルヴィアが、じつと見詰めていたのだった。
(未完)

本誌既刊号に注文殺到！

増刊号の特価販売中止、定価にて分譲

売切号続出、在庫僅少、乞至急御申込、

本誌既刊号在庫案内

○本誌既刊号の総目次を誌上に発表して以来、注文が殺到しております。在庫も次第に減少して売切れのものも大分出てきました。売切れになりますと補充しかねますのでこの際、欠号はお揃え下さるようお願いいたします。

○左記に掲載しましたものは、只今でしただら在庫しております。送料は当方にて負担いたします。

○昭和35年5月号以前の号は全部売切れとなりました。
○限定版特別号の第一弾から第四弾まで、全部売切れしました。
○サデイズム特集号、第一集から第四集まで全部売切れです。
○「悦虐特集号」第五集(悦五)は売切れしました。

従って、只今在庫の「悦虐特集

号」は(悦一) (悦二) (悦三) (悦四)です。

○悦特(一) (二) (三) (四)の特価販売は中止いたします。定価三百円です。

○各月号の総目次は漸次誌上に掲載いたしますが、既掲載の分は左記の通りであります。

○昭和38年十一月号誌上に(38年6月号、7月号、8月号)

○昭和39年一月号誌上に(38年9月号、10月号、11月号、12月号)

○(35年9月号、35年6月号)

○昭和39年2月号誌上に(36年3月号4月号、5月号、6月号)

○昭和39年3月号誌上に(36年7月号8月号、9月号、10月号)

○昭和39年4月号誌上に(36年11月号12月号、37年1月号、2月号)

○在庫品の定価、(送料共)

昭和37年10月号	(定価二〇〇円)	昭和39年4月号	(定価二五〇円)	悦特第一集	(定価三〇〇円)
昭和37年9月号	(売切)	昭和39年3月号	(定価二五〇円)	悦特第二集	(定価三〇〇円)
昭和37年7月号	(定価二〇〇円)	昭和39年2月号	(定価二五〇円)	悦特第三集	(定価三〇〇円)
昭和37年6月号	(定価二〇〇円)	昭和39年1月号	(定価二五〇円)	悦特第四集	(定価三〇〇円)
昭和37年5月号	(売切)	昭和38年12月号	(定価二五〇円)		
昭和37年4月号	(売切)	昭和38年11月号	(定価二五〇円)		
昭和37年3月号	(定価二〇〇円)	昭和38年10月号	(定価二〇〇円)		
昭和37年2月号	(定価二〇〇円)	昭和38年9月号	(定価二〇〇円)		
昭和37年1月号	(定価二〇〇円)	昭和38年8月号	(売切)		
昭和36年12月号	(定価一五〇円)	昭和38年7月号	(売切)		
昭和36年11月号	(定価一五〇円)	昭和38年6月号	(定価二〇〇円)		
昭和36年10月号	(定価一五〇円)	昭和38年5月号	(売切)		
昭和36年9月号	(定価一五〇円)	昭和38年4月号	(売切)		
昭和36年8月号	(定価一五〇円)	昭和38年3月号	(売切)		
昭和36年7月号	(定価一五〇円)	昭和38年2月号	(売切)		
昭和36年6月号	(定価一五〇円)	昭和38年1月号	(売切)		
昭和36年5月号	(定価一五〇円)	昭和37年12月号	(定価二〇〇円)		
昭和36年4月号	(売切)	昭和37年11月号	(定価二〇〇円)		
昭和36年3月号	(定価一五〇円)	昭和37年10月号	(定価二〇〇円)		
昭和36年2月号	(売切)	昭和37年9月号	(定価三〇〇円)		
昭和36年1月号	(売切)	昭和37年8月号	(売切)		
昭和35年12月号	(売切)	昭和37年7月号	(定価三〇〇円)		
昭和35年11月号	(売切)				
昭和35年10月号	(売切)				
昭和35年9月号	(定価三〇〇円)				
昭和35年8月号	(売切)				
昭和35年7月号	(定価三〇〇円)				

在庫が僅かですの、売切の
の第二希望品をお書き願います。



雪夜に捧ぐ

—女装と自虐につかれて—

木 下

明

誰もいない一室に夜はしんと更け、午前零時を告げる時計は、ずっと前に鳴ってしまった。

順々に着ている洋服を、上衣、ズボン、シャツ、ズボン下、そしてブリーフと、全部脱ぎ捨てた。外は十数年ぶりという豪雪が二メートル近くも積った上に、更に今晚も何センチか降り積もるとみえて、時折風をともないながら粉雪が舞い狂っていた。気温は零下何度かに違いない。それなのに全裸になった私は少しも寒気を感じなかった。そして、先によく用意しておいた姿見に全身をうつして、これから自ら自分の肉体に加えるであろうプレイと女装への願望充足を思い、興奮しはじめていた。何カ月前からブラジャーの着用をはじめてから、とみに豊かになってきている胸をそっと両手で抱きしめる。

足もとに置いてある二つの風呂敷包み、これからのプレイの大切な衣裳が入っているそれを手ばやくほどいた。ピンクの女物の風呂敷、それをひろげると、たちまちあたりは目もさめるように華やかな色彩によって花が咲いたようになった。真紅のお腰、華やかな花模様の長襦袢、そして桃色の地に大輪の菊をあしらった訪問着、それらにまじっているとどりの腰紐の類と帯の黒、足袋の白さがアクセントを添えている。なまめかしい雰囲気、もう私はうっとりとしてくる。

寒気の中に全裸でいることは、もはや少しも意識の中になかった。更にもう一つの包みを開く。今度は十メートルもある麻ロープ、真紅の長い紐、そしてひときわめだつ真白な晒木綿の一反がとびだしてくる。身のまわりをそれらをいっぱいひろげる。これで準備

は完全に整った。

こうして私は次に、自分で着付けにとりかかる。まず晒をとりだす。勿論襦をしめるためである。襦は六尺あれば充分である。しかし私はそれでは足りない。私はまず長い晒の一端を肩から背にまわして掛け、おきまりのように股間にまわし、前袋を作って、それから力いっぱいそれを締めあげて、まず第一段階の六尺襦をしめ終る。それでなおあまた布を再び前から後、そして股間へとまわして先ほど充分しめた襦の上にもう一度念を入れて二度目の六尺襦をしめるのである。六尺襦を二重にしめたときの緊縛感、これが私の着付けの第一歩である。

次に腰巻をする。真紅のナイロンモスの肌ざわり、瞬間私は夢うつつの境地になる。さわり、眺め、そして私の姿の一切が前に立て

である姿見にうつっている。まさに恍惚境にみずから踏み入るのである。和装にブラジャーはつけない作法もあるらしいが、今自分は何から何まで女性になりきりたいのだから、ブラジャーも、やはりやめるわけにはいかない。

アップリツケ形の花模様をあしらったブルのブラジャーをしっかりと胸につけると、乳のふくらみは一段と増して気分もこの上なくいい。そして次いで長襦袢を着る前に、私はロープをとりあげる。そして半分に折って首にかけ、前にもってきて結び目を三つ作り腰巻の下をとおして後から首繩にまわし、両脇から前へもってきて、きりきりと亀甲縛りに上半身を緊縛してしまうのである。何度もやっていて、この手順は早くできるようになってしまった。それから長襦袢を着る。もうすっかり女の装いになった自分の姿に再び見惚れる。そして、最後に訪問着を着る。前をあわせ手頃な重なりをみはからって腰紐で結ぶ。そして帯をおたいこに結び、かくて着付けは完全におわったのである。忘れていたわけではない、髪と化粧が残っている。これははじめにするものかもしれないが、着飾ってしまったから鏡にむかって身繕いをする自分

を十分に観賞するため、いつも私はそれを最後にすることにしてしているのだ。かつらはまだ残念ながら持たない。それで付け毛をする。充分に長く、豊かな付け毛は最近入手した。それをピンで自分の頭髮にとめていく。さっきまで着物だけ女装であった不自然さがこれでまったく解消する。厚めに化粧をほどこしアイシャドーとルージュをつける。本当にこれで完全に一人の女性が誕生したのである。

鏡の前に立つ。先程までは男の部屋であった所が、いつの間にか、なまめかしく脂粉の香のただよう若く美しい女の部屋に変わってしまったのである。顔ははてり、興奮の極点に達した私の胸ははげしく動悸を打って、華やかな装いの下にある亀甲縛りと二重の六尺褌の緊縛感に加わる一方である。責めと女装とそれを同時にあじわっている陶醉は身も心もとけるばかりの思い、吐息と共に私は失心一歩手前の状態になってしまったのである。

そのまま、畳に臥してみたり、またすわったり、様々な女性のポーズを私は楽しむ。かなりの時間がすぎたようだ。そろそろ女装と緊縛の段階を終わろうかと思う。このあと、着けたものを脱いでおわりにしたり、寝てしまふには余りにもったいない。私のマゾ本能は

更にそれ以上の悦虐を我と我が身に要求してやまない。私はそれを実行することにした。窓ガラスを開け放つ。雪は降りしきっている。新雪が二十センチばかりも積った。粉雪が部屋へ舞い込む。私は丁度、神仏を前に我が身を捧げるような崇高な自分の姿を客観するように、今大自然の雪の中に自分を沈めようとする直前の興奮をおさえかねた。寒さは少しも感じないのが不思議である。

次の瞬間、私は窓から我が身を自然に捧ぐべく、降りしきる雪の中に投げていた。雪けむりが舞いあがる。私の身体は半分くらい雪に埋り、上半身は雪まみれになって雪中に臥していた。あたりは寂として音がなない。しんと雪の降り積む静かさがこめられている。ふと私は自分の姿をふりかえる。裾は乱れ、訪問着と長襦袢とお腰とが折り重って雪をはさみ、身体の中にも入り込んだ雪はつめたたく、しかし体温にとけて肌をしめらせていた。豪華な晴着は惜気もなく雪にまみれその上にまた雪が容赦なく降りかかる。神よ、我が身を受けさせたまえ、と、私は我が身に自分で加えた悦虐の数々を思い、深く深く雪にうずもれ自分の業の深さをしみじみと思った。

殺し屋ものがたり

（「十三人の女死刑囚」別篇）

佐 出 須 登

1

わたしは殺し屋よ。名前はクロチルド、二十六才。女の殺し屋なんて、珍しいでしよう。でもそれがつけ目なの。何故なら女を専門にしているのよ。女同志なら相手も油断するものね。結構かせぎは多い方よ。そうね、年に五人もお客があれば楽に暮らせるわ。

この頃はナタリーという子と組んでるの。恐ろしい女よ。まだ十九になったばかりでとてもかわいい顔をしているのに、もう八人も消してるの。もっとも、わたしの方は十二人だけどもね。

依頼主にどんなのがいるって？ それは絶対秘密。下手なこと話したらこっちが消されちゃうもの。どんな殺し方をするって？ ハジキはあまり使わないわ。わたしは首を絞めるのが一番好きだし、やりやすいわ。

今日の殺しは面白かったわ。依頼主がとてもしつこいの。わたしたちが女だから不安なのね。その気持はわかるけど、それでもベテランのつもりよ。それなのに「だいじょうぶか、間違いないか」って何度も念をおすもんだから、わたしもナタリーも「ひとつ驚かしてやれ」ということになっちゃった。

お客さんはキムっていう二十二か三のブロンドの女よ。彼女のアパートに行って合鍵で部屋に入ってみると、寝巻のかわり香水をつけただけで、ぐっすり眠っていたの。とてもきれいな身体で皮膚など透き通るようだったわ。あなたたちに見せたかったわね。

殺し方は簡単よ。傍にぬぎすててあったストッキングを、さっと頸にまきつけて、ナタリーと二人で両方から引っぱればいいんだもの。彼女、とたんに気がついて目を大きくいっばいに開いてもがいたけど、もう完全に絞まっていたから一巻の終りね。あっさりのび

ちやった。声も立てられず、何だかわけもわからないうちにね。

はじめ真赤に充血した顔が次第に血の気を失っていった。蒼白になり、やがて紙の様に白くなっていく。この変化をみるのは楽しいわ。完全に息絶えても、万一生き帰ったりしたら大変だから、それからもぎゅうぎゅう絞めて固く結んだままでおいたわ。結び目に水をかけておけば絶対にほじけないから、もっと安全なの。

面白いのはこれからよ。殺したしるしとして、わたしは死体の写真をとっていくつもりだったのに、ナタリーときたらすごいよ。首を切りおとして持っていくっていいだすの。背中が寒くなったわ。だけど依頼主を驚ろかせるには一番だから賛成したわ。

二人して死体を風呂場のタイルに横たえ、わたしたちもパンティ一枚になって、大型ナイフで頸のまわりの筋肉をこしこし裂いて頸骨をだし、その継ぎ目に刃をさしこんでぐいとこじったら、キムの首は案外簡単にこじ割ったわ。その時の手ごたえの気持の良かったら、もう一度やってみたいわ。

切りたての生首をバスに投げこんで、ザブザブ洗ってきれいにしてから、ゆっくり眺め

てみると、目を大きくみひらき、口をちよつとあけて、歯と歯との間に舌の先がのぞいていたけど、苦悶の表情という程ではなかったわ。まあ大往生の方ね。

ナタリーが生首を抱きあげて、はみでている舌の先をチョイチョイと口の中に押しもどして、舌が歯の中にかくれてしまうと、今度は歯の間に指を入れて、それをこじあげようとしているの。一本の指が二本になり、三本になり、とうとう手首から先を生首の口の中に押しこんでしまったの。すると口の中にたまっていた血汐が、泡をふいてナタリーの手首を伝わって流れてきたわ。キムはブロンド、ナタリーは黒、二人とも雪の様な身体だし、それに真赤な血汐でしょう。とってもきれいだっただわ。

手首をぬきだして、大きく開いた口を、水道の蛇口の下におしつける様にして、ザザァ流しこんだの。はじめ真赤だった水が次第にうすくなって、口から喉の斬口まで無色透明になるまで続け、それからタオルでふいて出来上りというわけね。

身体じゆう血だらけになったけど、このあとシャワーをあびたらさっぱりしちゃった。生首は髪をなでつけ、口紅もつけてやってか

ら帽子の箱に入れて依頼主のところに持っていったの。生首って案外重いね。

これなら信用するでしょうっていったら、彼、真蒼になってふるえていたわ。おかげでプラス・アルファにたんまりありつけたし気分もスーとしちゃった。

生首はどうしたって？ アルコール漬にして愛好者に売りつけたわ。案外希望者は多いのよ。でも、少しでも傷がついてるとだめなの。もったいないけど、ゴミ捨て場にもこるがすことになってしまふのよ。

2

デビーは不安な気持で毎日を送っていた。一月ほど前、彼女はある殺人事件を目撃したのだ。その犯人の人相などくわしく述べたのにかかわらず、まだ捕えられてない。次に彼女を狙っていることは明らかだった。警察では護衛をよこしてくれたが、果してその魔手からのがれることができるだろうか。

彼女はバスにつかっていた。二十一才の発らつとした四肢、みずみずしい乳房、ふくよかな下腹、そしてまだあどけない顔。彼女は自分の身体にみとれながら、この自分が近いうちに殺されるのではないか、という予感がせまってくるのを、どうすることもできな



った。

突然ドアが開いたので、デビーは顔色を変えてとびあがった。二人の女が無断で入って

両脚をぐいと前方に押しやり、顔をこして反対側のふちにつくようにまげておさえつける。丁度Sの字のようになった。脚をひろげ

きたのだ。二十五才位と、もう一人は二十才位の若い美女だった。

相手が女だったので、デビーはほっと一息ついて再びバスに身を沈めたが、心臓は激しくドキドキ音をたてていた。殺し屋が来たのかと思っただけである。

デビーは両手で乳房をおさえ、無礼をなじる様に、二人の方に目をむけた。そのとたん、一人がさっととびこみ、バスに手をつつこんで両脚をつかむと、ぐいと高く持ちあげた。不意をくらったデビーの頭が、ザブリと湯の中にすべりおちた。もう一人がその頭をつかんで湯の中におさえつける。それこそあつという間の早わざで、もがく暇も叫ぶこともできなかった。

と、その間から首がのぞいて、なんとか水面に顔をだそうともがいている。だがこの恰好ではどこにも力は入らず、しかも二人によって強くおさえられているのだ。両手をバタバタとさせても、ただ空しく湯を打っただけであった。

事件の目撃者デビーは、いま消されようとしている。溺れ死にしようとしている。それもあられない恰好、女性として最も恥ずかしい姿で。悲鳴をあげても水中では声にならぬ。心の中でけんめいに叫ぶ。

「警察は何をしているの！早く来て、わたしはいま死ぬところなのよ、事件も迷宮入りになってしまふ、早くたすけて！」

だがそれも空しく三分、四分と経過し苦しみはいよいよひどくなってゆく。鼻からブクブクと泡がたち、そのかわり湯がどんどん吸いこまれていくのがわかる。やがて肺も胃もいっぱいになって死んでゆくのだろう。

六分、七分となるに従い、デビーのものがきは次第にすくなくなっていく。両腕とも力なく湯の中にくずれおちる。殺人者の二人の女はそれを見て互にうなずきあい、にっこりとほえんだ。恐ろしい微笑、美しい顔にひそむ悪魔の笑いであった。

“もういいかしら”

“まだくたばらないわ、もう少しまたなくてはだめよ”

“それにしても窒息するのは簡単ね”

“約十分よ。そろそろ誰れかがくるから注意して”

言葉が終らぬうち、突然デビーの身体がものすごくふるえだした。これこそ断末魔の、死の痙攣である。なれたもので二人はすこしもあわてず、平然としておさえつづけた。やがて鼻孔から泡がひとつ、ポツカリと浮かびあがった。これが哀れなデビーの肺に残された最後の空気なのだろう。

一人が両脚をつかんだまま、高く持ちあげた。小柄なデビーの身体は無惨にも逆吊りとなり、胸から上はまだ湯の中に沈んでいる。ゆるみのない、ふたつの乳房が痛々しく目を射るが、もはや抵抗力は全く失われている。他の一人がつとはなれると、この恰好をカメラにおさめた。

やがて左右に大きく開かれた脚のつけね付近に、確実な死のしるしがあらわれた。これを認めてから手を放すと、デビーの美しい裸身は前と反対の位置に、顔を底の方にむけて長くのびていた。一方の手のみがダラリと外

にでている。ここで二枚目のシャッターが切られた。

ゆだって桜色になった死体をしばらくそのままにしておき、全く動かないのをたしかめてから、二人の殺し屋は死体をベッドに移しかえた。ぬれた毛髪がベツトリと皮膚についているのが哀れだった。ここでまたパチパチと音がする。

依頼者は、前から気にかかっていた目撃者の数枚の写真を見せられ、たいへん満足だった。すこしでも息のある女性なら、とうていできぬようなベッドの上で大の字になっている写真は、殺人のしるしとして生首におとらぬ価値があった。

事件は勿論オミヤ入りとなった。

3

あたしはナタリ、勿論殺し屋さ。腕は良い方だけどクローにはかなわない。クローとはあたしより七つ年上で、貴婦人といった顔をしているけど、どうしてどうして、ストッキングさばきのうまいことといったら、あっというまにキューと絞めちやうのさ。殺しの数は十五対九、全部女ばかり。この頃はずっと二人組になって仕事してる。

それでもハジキの腕はあたしの方が上よ。

だいいち、彼女は小型一挺しか持っていないけど、あたしはハンドバッグに四五口径の大型が一挺、あとはブラジャーの中や両方のガーターのところに単発の小型がはさんであるのよ。ちよっとした武器庫ね。冷たい鉄が乳房をぐんと押しつけているのは、とってもいい感触よ。一度などこの小型のおかげでやっとポリから逃げたことがある。相手は死んださ心臓に射ちこんだんだもの。どうせいずれは死刑になる身だから警官殺しなんか、へっちゃらさ。だけど一文にもならないから得点にはならないのよ。それに四五口径、まさか女が使っているなんか思わないだろうな。あの女、フランソアーズっていったかな、胸におしつける様にして射ったら、おっぱいが吹っとなじやったっけ。

ところで今日のお客さんは死体まで完全に“消す”必要があったんで、クローと相談してとっときの場所を使うことにした。

二メートル四方、深さもそれ位の穴を掘って、そこにどろどろにした細かい土をいっぱい詰めた場所があるのよ。まあちよっとした底なし沼さ。ここに落ちこんだら最後、もう絶対にあがれない。わたしたち殺し屋協同の別荘には、こういった設備がいくつもあ

さ。のぞくと首の落ちる窓とか、窒息するベッドとか、下から槍が突きでるイスなど。使料に五割とられるけど、それだけの価値は十分あるさ。持主の名は死刑になってもいいないな。

あたしとクローと、うまいこといってお客さんのアンと友達になっちゃった。彼女は自分が狙われているなど夢にも思っていないから、平気なもんで一緒にやってきた。あたしは八ミリを持っていった写真をとるといってたけど、どんな場面をとられるか「知らぬが仏」というわけさ。

穴の上には砂をうすくまいて、ちよつとわからない様になっていた。そこへ二人ではさむ様にして歩いてきて見事におっことしたわけさ。

彼女、ズブズブーの膝のあたりまでもぐりこんで、はじめは苦笑していたけど、二人とも手をかそうともしないので、変に思いながら自分であがろうと動きだした。ところが動けば動くほど沈むしかけさ。あつというまに足をとられ横におしになって、立とうとしたら腹から胸のあたりまで沈んじやった。髪の毛も美しい顔も泥だらけになってね。ここでやっと悲鳴をあげたから、あたしは

依頼者の名を教えて、こういうわけだからここで死ぬんだ、おとなしくあの世に行きなつていったら、彼女真蒼になって泣きだした。このあとは八ミリにとってあるから見てみない。

ほら、もう泥の上にあるのは首と手だけだろ、首のまわりをとりまいてるのはスカートの裾がまわってるんだ。もういくらもがいてもだめさ。髪の毛をふり乱し、美しい顔をゆがめて絶叫してるけど、絶対に知られっこない。深さも彼女が沈むには十分だし、ああ今の最後の悲鳴さ、口の中に泥が入りこんだ。あと二、三分で息が出きなくなってしまうわけだから、どんな気持ちだったろうね。口がかくれてからは、顔を上に向けてやっと呼吸している。

最後にのこったのが鼻さ、ちよつとだけ高くなつて見えるだろ、顔は殆ど真上をむけている、いざとなればあんなにも曲るんだね。ほら、泥が吹きあがった。あれが最後の呼吸さ。泡がまだ見えるわね。あとはつまらないな、髪の毛と高くのばした両手だけなもの。その両手も一センチ、二センチと沈んでいて、五本の指がせめて何かにつかまろうとして、にぎったり開いたりしている。さあ、

全部沈んじやった。あとしばらく泥の表面がブクブク泡立っているだけさ。これでぜんぶお終い。面白かった？

この別荘にはまだまだ面白い道具があるんだ。もっと話してくれって？　じゃあ、あたしとクローでやったことを話そうか。

4

ミレーヌは新しく友達になった二人に別荘に招待され、プールで一泳ぎしていた。ビキニ型水着とは布が少ない程高価だが、今三人が着ているのは最高級に属するだろう。いずれも美しい肢体を、惜しげもなく日光の下にさらしていた。

このすばらしい別荘、見事なプールの隅に物置の様な小屋があり、これは誰が見ても似合わなかった。しかも一つだけついてる窓の不気味さといったら……。

「ミレーヌ、この窓何に見える？」

「そうね、いっちゃ悪いけど、ギロチンみたいね」

「わたしたちも、そう思うの。だからギロチンの窓と呼んでるのよ。ちよつとのぞいてごらん。あまり良い気持ちじゃないから」

言葉の調子につられてミレーヌは何気なくこの窓に首をつっこんだ。そのとたん内側に

仕掛けられたギロチンの刃が落下する。

「ワァッ」と叫んだのがこの世の名残り、哀れミレーヌの身体は首を失って窓の前にくずれおちた。二人の女はそれを両脇からかかえプールの中にザブンと投げこんだ。四肢を力なくのばした死体は、首のあったところから激しく鮮血を噴きだし、プールの水を染めている。

一人が小屋の中に入り、間もなく生首をぶら下げてあらわれる。口もとを血で染めながら、無造作にこれまたプールに放りこむ。すでに紅に変わったプールの中で二人の女は、尚も血の滴る生首を、水球のボールの様に投げあつてはたわむれていた。二人が去ったあと水面にポツカリ浮いている死体の腹の上に、生首はチョコンとのせられていた。

散歩中のシルビアは、不意に足元の地面がくずれ、はっとした時には三メートルほどの穴におちていた。しかも身体すれすれに鋭い穂先をもった槍が立っているのを見て、全身が寒気だった。もう少しで完全に串刺しになるところ、それにしても何のためにこんな穴があるのだろう。

足音がして二人の女が中をのぞきこむ。ほ

っとして助けを求めようとした彼女の耳に聞えたのは、「生きてるわ」「運の良い女ね」という会話だった。

間もなく土砂が落ちてくる。生き埋めにしようというのか、まだ彼女にはわけがわからない。必死ではい上ろうとするが身体はどんどん埋められていく。辛うじて首だけを地上にだしたが、それを待っていたのは二人の冷たい目だった。

若い方がドキドキする大刀を目の先につきつけながらいう。

「あんた、ロングを知ってるでしょう。その願でこうなったのさ。じゃ、さようなら」

驚いて許しを乞うのもかまわず、さながらゴルフ・スイングの様な恰好で大刀はふりおろされた。血汐がどっと噴きあがり、美しい首はコロンとこころがった。すばらしい眺めだった。

「お見事、ナタリー」

他の一人が拍手しながら首を拾うため手をおのぼす、実に平然たるものだった。

ピアは広い別荘をあちこち案内された。前方に小さいあずまやがあった。「ここで休みましょう」案内者にいわれ、その中の一つの

イスに何気なく腰をおろした彼女は、「ギャア」と恐ろしい悲鳴をあげて即死してしまった。イスに重みが加った瞬間、かくされていた長さ五十センチの槍の穂先が、バネ仕掛で飛びだし、ピアの体内深く突きあげたのだ。いかなる美女でもたまったものではない。

「あっけないねえ、クロー」

「今度はわたしの番よ」

一人が笑いながら壁にかけてある大刀をとって、スラリと引きぬく。すでに息絶えているピアの背後にまわり、しばらく狙いを定めていたが、やがて気合と共にふりおろす一刀のもと、美しい首はもろくもコロリとこころがった。

ジャクリーヌはバスにつかっていた。一日じゆう歩きまわった疲労が、次第にぬけていく感じ。戸があいて自分を招待した二人の女が入ってくる。

「加減はどう、今日はつかれたでしょう」

「ありがとう、上々よ」

これを聞いて、にっこりほえみかわした二人の女は、傍のボタンを押す。「キャア」たった一声の悲鳴をあげただけで、ジャクリーヌの身体はせいっぱいにピンとのびた。

バスの湯がザワザワと波をうつ。強力な電流が通じたのだ。しなやかな身体が、まるで丸太ン棒の様に強直している。目は大きくみひらいたまま、声を出すことも、身体を動かすことも出来ない。

相当の高圧ではあったが、身体全体一様に加ったため、少しも焼けただれたあとは見られなかった。しかし、その生命は完全に失われていた。

エレオノラは帰りがおそくなり、泊っている様にすすめられた。案内された寝室には古代から伝わりと称する、箱型のベッドがおいであつた。

「棺桶みたいでしょう、おいやかしら」
「いいわ、生きているうちに棺桶に入るのも面白いもの」

面白いかどうか、エレオノラにはすぐわかった。彼女が横になるや否や、側の板がバタンと落ちてきて、ちようどふたをした様になったのだ。ドンドンとたたいても、力の限り押しても開からばこそ。いたずらか偶然か、それとも……激しい恐怖が彼女をつつむ。

翌朝二人が入ってきてふたをあける。苦悶と恐怖を顔いっぱいにしたたたえた死体がそこに

あつた。肉体には傷一つついてなかったが、ふたの裏には爪のあとがありありと残り、悲惨な最期をものがたっていた。

5

「クロー、何人殺した？」

「二十五人よ。あなたと組んでから随分成績があがつたわ。ナタリーは？」

「十九人。ちようど年の数だけさ」

「あなたは生首が好きなのね」

「そう、あのズッシリとする重さ、血の臭いたまらないな。それに斬口から血を吸うのも楽しみだな」

「わたしはまだ血は吸えないわ。生首が売れることも知らなかったんだもの」

「その点ではあたしが先輩さ、絞めるのより首を斬った方が多いんだもの。ところでこの前の斬りごたえはどうだった？」

「すばらしかったわ。ところで話は違うけどわたし達はいずれ死刑になる身でしょう。どんな死刑がよいと思う？」

「あたしは自分も首を斬られたいな。首をせいいっぱいにのばして待ってるところをバツサリ。思いきり遠くまでとんでやりたいね。そして最後は獄門台の上でふんぞりかえるわけ。でも一度で落ちなくちゃ」

「ギロチンはどう？ こんな想像をしてるのよ、首穴に首をつっこんでから最後のタバコをくわかしてもらおう。それを深く吸いこんだ時、首がおちて、獄門台の生首はまだタバコをくわえたまま、鼻の穴からはもやもやと煙がのぼっている……」

「それは絵になるわ、クロー」

「ギロチンといえば、フランス革命ではすぐかつたでしょうね。なにしろ王妃さまの首までが落ちたんだから」

「当時のパリ市民がうらやましいね」

「ランバル夫人の話、ナタリーは知ってる？ 彼女、あきらめてギロチンでストンとやられればよかったのに、なまじ逃げたりしたもんだから、ものすごいなぶり殺しにあったのよ。下腹をズタズタに切り裂かれ、胴体は引きづられ、首と心臓、肝臓その他の内臓が槍の先に串刺しにされたなんてすごいわね。さすがの王妃も、この生首と内臓を認めた時は気絶したそうよ」

「マラーを暗殺したシャルロット・コルデーは首を斬られたあと、刑吏のため頬ぺたをたたかれたんだってね。いったん蒼白になった死顔がまた赤くなったとかいうの、何かで読んだことがある。しかもそのあとアルコール

漬になって売られたなど、昔も愛好者がいたんだな。ちよっと待ってね……これを見てごらん。見覚えあるだろ」

「ナタリー、それはたしか、あの、デビーの生首でしょう。バスで溺れさせた！」

「そうよ。あんたと別れてから引き帰して首をとってきたのさ。部屋のかざりにね」

「驚いたひとね。内臓は売れないの？」

「勿論高く売れるさ、けどいくらあたしでも、ちよっととる気にはなれないな、同性のよしみでね」

「次に絞首刑」

「絞めるのは、あんたの専門ね」

「そうよ。同じストックキングで絞めるのでも、真中に結び目を作ってからだと、ずっとやりやすくなるのよ。ナタリーも覚えておいたら良いわ」

「苦しい？」

「五分位で、ぐったりとなるわ。完全に殺すのにはまだまだだけどね。それより絞首台上で最後の呼吸をする時の気

持はどうでしょう。真暗ななか、たった一人で立たせられ、僅かに、赤ランプがついていだけ。このランプが消えて十秒たつと、ふみ板が落ちて一巻の終りよ。この間にお祈りでもしろというのね。あとはいくらもがいても呼吸できず、生まれたままの姿で、ダランと吊り下る。ロープの先に首をくくりつけられて……」

「あたしは嫌だな、ほかの死刑のどれよりも首を絞められるのは、ぞっとするな」

「では銃殺は？」

「身体じゅう穴だらけになってバツタリ、額に止めを射たれる。絞首よりは良いな」

「電気イス」

「頭に鉄の帽子、両脚のふくらはぎに海綿のついた電極、そしてビリビリとする。全身黒

焦げになるわりに時間はかかるんだろ、ジャクリーヌを殺ったみたいなお方法なら良いけどね」

「ガス殺は」

「あたしは良いと思うけどクローは？」

「いやよ、息が全然できないのならあきらめもつくけど、毒ガスを吸うのを意識しなくちゃならないなんてこれだけはいや」

「案外嫌いな目に会うんじゃない、だってあんたの好きな絞首刑はあまりないもの。ガスか電気イスだものね、今は」



「昔だったら、わたしたちはどうなったかしら、火あぶり、ハリツケ、股裂き……」

「ゾクゾクするのばかりか」

「二頭の馬に両脚をひろげて縛られ、別々の方向にムチ打たれる。女体は絶叫と共にピシリと、真二つに裂け、あたりいちめに血の霧が降る……そして首をかきおとされ、髪の毛でもって馬の尾に結びつけられ、ブランブランとゆれながらどこかに走り去る、というのはどう？」

「クロー、あんたも生首マニヤになったんじゃない？ あたしの生首コレクションは、このデビーのほか二つあるのよ。よかったら持って行かない。そのうちあたしの首が欲しいなんていいような顔してるからさ、じゃあ、とってくるからちよっと待っててね……好きなのを、ワァッ！ ク、クロー！」

6

クローは何となく気が重かった。無理もない。彼女は今度はナタリーを消す命令を受けたのだ。何回か仕事を共にしているうち気心も通じ、死刑になる時は一緒に、とまで誓いあった仲間だもの。しかし、この命令は絶対で、そむいたら最後自分の生命が危くなる。

それにしても、どうしてこんなことになったのだろう。恐らく何らかの秘密をつかんだために違いない。

ところで友情を別としても、これは簡単な仕事ではない。ナタリーだって立派な殺し屋だから、独特の鋭いカンを持っている。自分を殺しに来たのだとさとられ、反撃をうけたら大変だ。あの四五口径の大型拳銃、あんなものを射ちこまれたら、こっちがおだぶつになっちゃう。しかも、ミッチイという女だったが、依頼主から出来るだけ苦しめてくれといわれただけで、お客には何のうらみもないのに、わざわざ小型拳銃を下腹にぶちこんで、なぶり殺しにしたほどだ。死ぬまで二時間もかかったが、その間平然とタバコをふかしながら眺めていて、確実に死んでから首をとった惨忍さ。十分に用心してさとられぬ様にしなくてはならない。

クローはナタリーのアパートを訪れた。喜んでむかえるその顔をみては、さすがの名殺し屋もはじめのうちはなかなか手がでない。話は次第にはずみ、いつか二人の間には生首のアルコール漬がおかれている。その話の内容は恐るべきものであった。

「クロー、あんた、あたしの首が欲しいんじゃない？」

「……」

クローの顔色がさっと変ったが、ナタリーは気づかず、戸棚をあけるため背をむけた。

さっと飛びかかり、用意のストックキングで首を絞める。

「ワァッ！ ク、クロー！」

「……」

なんと簡単なことか、案ずるより生むがやすいとはこのことだろう。油断なものにも、夢にも考えていなかったナタリーは、悲鳴らしきものをひとつ残しただけで、あっけなく死んでしまった。首を絞めるのに、ストックキングほどあらゆる点で都合の良いものはない。

クローはほっと一息ついた。たった今、首を絞められるのが最も嫌だといっていたナタリーが、首を絞められて息絶えている。目と口を大きくひらいて、自他共に許した殺し屋ともあろうものが、死の瞬間まで気がつかなかったうかつさに、あきれかえっている様な表情で横たわっている。その傍に机から落ちたためガラスが割れ、デビーの生首がころがりていた。

例によって死体を裸にする。浴室のタイルに寝かし首をとるのだ。大型ナイフでザックリと何なく斬り離し、髪の毛をつかんでぶ

ら下げ、滴る血汐を口に受ける。やがてきれいに洗った生首は、手足をX字にひらいた形の下の隅にチョンとおく。

意外なことにナタリーは処女だった。クローの二十六才に対し、ナタリーは十九才。それにしても日頃の態度から、こんなことはあり得ないと思っていた。むきだしの若々しい肉体を見ているうち、クローの胸にムラムラと嫉妬の念がわきおこってきた。

大型ナイフを握り直すと、ふたつの乳房にグサリ、グサリと突き刺す。続いて喉の斬口近くから脚のつけ根まで、身体の正中線に沿って四度ほど刺したあげく、最後にふくよかな臍のくぼみに、ふかぶかと柄まで刺し通した。ナタリーの白雪の如き肌にまっかな血の十字架が画きだされた。

腹に十字架を画かれたところで、どうせ地獄行きだろう。殺し屋の哀れな末路だった。

自らのも帰り血をいっぱいに浴びながら、クローはいつか自分もこんな最期をとげるのではないか、という予感にとらわれた。二十六人目、ちようど年の数と同じ。ナタリーは年の数である十九人で終わったわけだが、あるいは自分もこれが最後となるのか、と。

「さようなら、ナタリー」

死体につぶやきかけた時、突然ドアが強くあけられた。「はっ」と立ちすくむ全裸の美女。その顔に恐怖と絶望の表情が……

7

おれは殺し屋だ。女が専門さ、女には大物はないから料金は安いが、それにかえられぬ楽しみがある。若し美しい女がおれの腕の中で絶命する瞬間などたまらないな。あの手ごたえ、あの顔、実にすばらしい。こっちから金を出してもいい位だ。絞める時にはわざと時間をかけて、十分に楽しむのさ。

それから生首コレクションが、この頃はやりだしたが、あれはおれが草分けなんだぜ。これを見ろよ。二年ほど前に片付けたデボラって女の生首だ。特別の防腐液が入っているから、まだ生きている様だろ。ほかに五つある。売ったのが二十位かな、傷がついて捨てたのもかなりある。

ところがこの頃、クローとナタリーという二人がしきりにおれのなわばりを荒すんだ。しかも首をとってくまで真似てるんだ。おれは彼女らを消すことにしたよ。同業者を殺るなんて、恥としなきゃならないんだが、止むを得ないものな。

ナタリーは近くのアパートに住んでいるん

だ。おれがそこへ入ろうとすると、クローが先に行くところだった。多分ナタリーを訪ねるんだろう。二人並べて首をとれるなら有難いが、こっちも油断できない。なにしろ女でもしたたかものだから、下手したら逆にやられちゃうからな。

鍵なんかおれたちにとっちゃあ、ないのも同然だし、それに案外無関心だった。らくらくしのびこんで奥の部屋をみたら、いや驚いたのなんのって、すごかったね。あんなのを見たのは始めてだよ。

ナタリーがまっぱだかのまま、タイルの上に横たわっているのさ。大の字といたいのが首がないからX字だ。首はそのひろげた脚の間におかれていたのさ。ギロチンの死刑囚はあんな恰好で葬られると聞いているがね。

そこへクローが、これも裸のままやってきて、死体にナイフを狂った様に突き立てるんだ。一体どうしたのかな、とにかくナタリーが殺されたのは確実さ。おれが目撃者になったのは、これが始めてだ。

おれはそっと電話でサツを呼びだした。パトカーは早いね。一分後には到着し、三分後にクローは簡単に捕まった。さすがの女も裸ではどうにもならないさ。しかも現行犯以上

だしな。アルコール漬の生首も見つかって、これで迷宮入りがいくつ解決さ。おれはやじ馬に混って、ゆっくり見物してたよ。

クローは間違いなく死刑だし、おれの商売仇は二人とも電話一本で片がついたわけだ。ちよっと話がうますぎる位だね。

だがクローはいい女だった。あの身体が電気イスで黒焦げになるなんて、もったいないな。せめてガス死刑なら身体は無傷ですむから、そうなる様に祈ろうぜ。おれだったらもっと安らかに眠らしてやれたんだが……おれがやった方がよかったかな、そうすれば生首にしてゆっくり楽しめたからな。

8

独房に坐っていたクローは、窓然鳴りひびく電話のベルにふるえあがった。死刑執行の命令では？ やはりそうだった。彼女は実に二十六人の女性を殺した。恐るべき職業殺人者としてガス死刑に処せられるのだ。彼女が最も忌み嫌っていたガス死刑に……。

刑事に両脇をとられ、一步一步死の部屋へひかれて行く。八角型の鉄の小部屋で、すべての面に窓がついている。この時二度目のベルが鳴った。執行延期願が入れられるかもしれないから、しばらく待てというのだ。こうし

てクローは独房に帰される。

一時間後第三のベル……願は満場一致で却下され、即時執行せよとのこと。再び同じ道をあゆむ。ガス室の戸を開くと、中央にイスが一個おかれてあるだけ。その上に坐ると手も足もしっかり縛りつけられる。とたんに鳴りひびく四度目のベルに、クローの身体がこきざみにふるえる。またも一時中止のこと、さすがに動揺の色の濃いまま再び独房へ帰される。

十分とたたぬうち五度目のベル……クローの口から「キャッ」という悲鳴がもれる。完全に氣力を使い果たした彼女は、「さっさと殺して」と、ヒステリックに泣き叫んだ。

刑事は彼女をイスに縛りつけると、最後のタバコをくわかしてくる。

「クロー、気分はどうだね」

この言葉を聞くや、クローはその刑事の顔をめがけて、タバコをぷつと吹きつけた。

「ありがとう、上々よ」

これがクローの、この世に残した最後の言葉だった。だが彼女はふと考えた。どこかで聞いた文句だ、はて、誰の言葉だったろう？

完全に外界との交通を絶つ重いとびらが、

ガチャン、と音をたててしまふ。「どきっ」とふるえるクローの姿。つづいて両脚の間にある凹みに硫酸がゴボゴボと流れこむ。恐怖の目が大きくみひらかれ、その凹みの上でゆれている青酸カリの包にそそがれる。部屋の外では刑事が、てこに手をかけて待っているだろう。八つの窓には検死人と称する見物人が鈴なりになっている。

てこが引かれると包みは硫酸の中にザブリとおちた。この瞬間クローは全身を固くし、唇がふるえるのが見えた。早くも白い煙がもやもやと立ちのぼってその身体をつつむ。

クローは必死に息をこらえている。三十秒一分。思いきり深呼吸すれば楽に死ぬるのは知っているのだが、死刑される身になって見るがいい、できるものじゃない。

二分経過。鼻孔が大きくふくれ、ピクピクあえいでおり、見ている方が辛い位だった。見物人の半数以上が、すでに顔をそむけている。

クローの右の乳房が、苦悶のためこがりて、ピンと立った乳首がふるえている。一方左の乳房の上には、円筒型のおおいがついていて、長いゴム管により部屋の外の聴診器に続いている。これで最後の鼓動をききとる

のだ。

三分。美しい顔もみるに耐えぬ有様。三分二十五秒。遂に短かく死のガスを吸ってしまふ。とたんに喉が、気管支が、そして肺が刺戟されてチクチクと痛む。口を大きくあけ、何か叫んだ様だが、外には何も聞えない。続いてぐぐっと、大きく吸いこんでしまふ。万

事休す。手足を激しくバタつかせ、いましめからのがれようともかく。だがそれも空しく首だけが左右にふられるだけ。

三分二十八秒。ガスを吸って僅か三秒後にクローの身体はぐったりとなってイスにくずれおちた。聴診器の心音も急激に弱まっていく。心臓が一分間静止したのを確かめてから正式な死が宣せられる。時に四分四十二秒。更に十五分間放置してから、死のガスを大

(終)

【代理部新版分譲品一覧】

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てほ)

六尺禪の変形姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆは)

白晒六尺禪 (正面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しは)

白晒六尺禪 (背面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しろ)

黒フンドシの女 (正面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くま)

黒フンドシの女 (背面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くう)

相撲禪を締め込む

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(すい)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆお)

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆす)

ラ・ムール・デスクラヴァージュ

三 原 寛

此の物語は私が最近サイゴンで実際に体験した事実に基づいたもので、人の名も、土地や場所の名も全部実在のもので。ですから、現地に居た事のある人には、思い当たる方もありましょうし、又これから、御旅行の機会ある方は、何かの参考にして下さい。

話はサイゴンの或るバーから始まります。此のバーは繁華街から路地を抜けて、一步裏手に入った狭い袋小路にありました。小さな赤い扉の上に『ピガル』とネオンの浮き出したそのバーに何気なくふらりと入って居た事が、それからの私の運命を大きく変える事

になったのですから、全く人生というものについて、深刻に考えさせられます。

大体、私は孤独が好きな方で、人と一緒に馬鹿騒ぎする等は、性に合いません。赴任間もないその頃の私には、先任者や、現地の取引先からいくつも、誘いがかかって、毎晩の様にあちこち引っ張り廻されては、酒を無理強いされ、散々飲み廻った揚句には、氣も進まぬ女を押しつけられる、というのが嫌で、その日は、夕方仕事が終わると、そのままずっと抜けて、手近なレストランで食事を済ませそれからぶらぶらと、河沿いに散歩して廻っ

たり、通りのショーウィンドウをひやかして歩いたりしているうちに、このバーに足を止める事になったのです。

割と人気のない路地裏にぽつんとあったそのバーの静かな雰囲気が入って、入ってみたのですが、扉を開けた途端、むっとする煙草の煙と、けたたましい女の嬌声でどぎまぎしてしまい。出ようとしたのですが、カウンターに居たフランス人のお客が「ムッシュー」と席をずらして椅子を一つあけてくれたので、断ることもできないまま、そこに坐ったのです。カウンターには他にも、四、五人

のフランス人の客が居て、二、三組夫婦連れも居た様な気がします。ボックスの方はアメリカ人が占領して、ヴェトナムの女達にとりまかれて、騒ぎ立てて居ました。

私はコニャックソーダを一杯注文して一人で飲みはじめたのですが、その時に私の眼を惹いたのが、レジスターに坐って居る混血の女の子で、これは後で判ったのですが、父親がフランス人で、母親がヴェトナム人だという事でした。私の気をひいたのはその彼女が勘定を終った一人のフランス人がいきなり彼女の手を握って、その手に接吻をしようとした所、その男の髪をつかんでひきよせ、思いつきり平手打ちを喰わせた事でした。傍にいたアメリカ人達が大声を挙げて笑い、そのフランス人は、氣まり悪そうに出て行きました。尤も彼女はそれの時は大変愛想のいい女で、どのお客にも微笑を向けて居たのです。

彼女は赤味のかかった長い髪の毛を、肩迄垂らし、濃い眉と、少し反り気味の鼻、肉の厚い唇で、非常に野性的な感じを受けました。大柄で背が高く、一米七十の私が並んで立つと、見下される程で、胸とお臀が異常という程発達していて、腰だけが細くくびれた

所は熊蜂を思わせました。

私がカウンターの隅からじっとみて居りますと、カウンターに坐ったフランス人達が皆、彼女に、酒を御馳走したり、エスカルゴ等をとってすすめて居ましたが、彼女はそれ等を横柄にもとれる様なおうような態度で受けて居ました。大体彼女は尊大な印象を与えアメリカ人等が露骨な冗談をいうと、ふんと鼻先であしらって、相手にしませんので、自然とアメリカ人達は、金目当に露骨な媚態をみせてまつわりついて行く他のヴェトナム女達の居るボックスの方に集まり、フランス人だけがカウンターのの方に寄って彼女の御機嫌をとり結んでいる恰好です。

何とか彼女に話かけてみたかったのですが何か飲物をとって彼女にすすめるという気の利いた事も出来ぬまま、その日はそれで帰りましたが、大体この様な傲慢な女性にあこがれを持ち、しかも、大柄で肥満した彼女は私の好みのタイプにぴったりで、ベッドへ入ってから、一度で良いから彼女の豊満なお臀の下敷きにされてみたい等と迄空想し、容易に寝つかれませんでした。翌日は早目にバーへ行き彼女の近くに席をとりましたが散々でした。勇を鼓して、何かお飲みになりません

かと持ちかけたのですが、冷くノン・メルシーと一蹴されました。大体彼女は、ボーイ達に対しても、私に対しても、東洋人に対しては何か一段下の人種の様子にみて居る様子でした。到頭その日は、揚句にはフランス人の常連がやって来て、彼女に、席をうつしてくれとカウンターの隅に追い立てられる始末でした。所が、私は彼女にその様な目に遭わされれば遭わされる程、彼女に対する思慕は一層強まったのでした。

この様な状態で私はそのバーに一カ月程通ったでしょうか。その間、他の女達が傍にやって来て、飲みものをせびったりすると、寧ろ、一番高い上等のものをおごってやり、その代り、彼女等の示す媚態には一切乗らず、ひたすら、何とか彼女のお氣に入る様に努めました。そんな事で、彼女も私を少しづつ信用しはじめたのでしょうか、或る時、又早く出掛けて、彼女のレジスター近くに座をとって居ると、声をかけて来て、今夜は、何だか気がいらいらするから、シャンパンでも飲ませてくれないか、と話かけて来ました。シャンパンといえは安いものでも一本五百から千ピアスタ、日本の金に直すと五千円位するのですが、はじめて彼女に声をかけて貰った嬉

しさに、即座にダ・コールで、感激に胸をときめかしたのですが、その時、自分が日本人だという事と彼女の名前がアンマリーという事を話しただけで、やがてフランス人の客達が出来ると、もう私には見向きもしてくれませんでした。それでも彼女に初めて話しかけて貰えたという事で、興奮してその夜は容易に寝つかれませんでした。

次に行った時には又何か話しかけて貰えるかと胸を躍らせたのですが、こちらから笑顔を向けて声をかけようとしても、つんと横を向いてしまつて、とりつく島もありませんでした。所がフランス人達がやって来て彼女もそちらに席をうつして何か暫く喋り合つて居たのですが、そのうちこちらにやって来て、何か食物をとつても良いかと聞くのです。勿論彼女と一緒に食事が出来ると大喜びで承諾し、何がよいかと聞くと、何かこちらの判らないフランス語の難しい料理の名をいいました。所が彼女はすぐにフランス人のお客の所に行つてしまい、料理が出来てくると、それをフランス人のお客と一緒に食べて居るのです。二人で何か楽しそうに談笑し、もうこちらには見向きもしてくれません。その晩は、何とも寂しい気持で宿に帰った事でし

た。

そんな毎晩を過しているうち、或る夜珍らしく彼女の方から笑顔で話しかけて来たので胸をときめかせていると、実は今従妹と二人暮しなのだが、何かと不便で仕方がない、どこか別に部屋を借り度いのだが、最初の預托金が高くて困っている。五万ピアスタ程（約二十五万円）、貸してくれないかというのです。比較的高い海外手当を貰つて居たので、経済的にはかなりゆとりはあったのですが、決して小さな額ではありません。一旦、ウィと承知したものの、折角のこういうチャンスに何か交換条件でもつけて……と口籠っているのに急に彼女はきつい顔になり、アヴェク・プレジール・ウ・ノン、ときめつけて来ました。喜んでそうするのかどうなのかというのです。慌てて喜んでお貸ししますと答えさせられてしまいました。

彼女はまるで貸りてやる事を恩恵でも施してやる様な態度で、結局すぐその晩のうちに要求された額を店迄届けねばならぬ破目に持込まれたのです。宿から言われた通りの五万ピアスタを持って大急ぎで駆けつけた時は、もう十二時近くでした。人に見られぬ様にカウターの下で新聞紙にくるんだ金包みを手

渡しますと、流石ににっこりして、一時に閉店だから、それ迄ねばって居て、一時一寸前になったら一足先に出て路地の入口で待つて居る様に、といわれた時は天にも昇る心地でした。

彼女の家は河に面した通りにある二階建の小じんまりしたアパートの二階の二部屋続きで、カーテンで仕切られ奥がベッドルーム、入口の所の部屋が応接間になって居ました。真直にここ迄送つて来たのですが、所在なげに応接間のテーブルに坐つて居るうちに彼女は奥の部屋に入つてしまいました。暫く待つてみましたが、奥で何やらやって居るのか、なかなか出て来ません。酔は廻つて来るし、今夜何とかしなければ、もうこんな機会は二度と得られないだろうという氣になり足音を忍ばせてカーテンに近寄り、そつと覗いてみると彼女は鏡台の前の小さな腰掛に坐つて顔を直している最中なのです。

ぷりぷりとはち切れんばかりのお臀がどっかと坐り、長い髪が白く透けてみえるネグリジェの背中に波打つて居ます。ここ迄来て何も出来ないで帰つたのでは、いつ迄経つても今迄の様な関係が続けるしかないんだから、いっそこで思い切つて必死になつても、



彼女におすがりしてみねば、とすっかりのぼせ上ってしまって、いきなり彼女の傍迄這い寄り、素足に口づけしながら

「どうか私を貴女の奴隷にして下さい。貴女の腰掛代りにお使い下さい」と背中を差向け

たのです。途端に背中をいやという程蹴とばされました。

「これは一体何の真似なの！ お前はおとなしい男だと思ったからこそ、アミになって上げたのよ。それをいい気になって……お前と

はもうこれで縁切りだ！ こんなお金いらないから、とっとと出て行って頂戴！」とベッドの枕の下に押し込んであったお金の包みを床にたたきつけたのです。折角ここ迄こぎつけたのに、もうつき合って貰えないとなると大変です。酔もすっかり醒めてしまつて真青になりました。慌てて包みを拾い上げ床に土下坐し額を床にすりつけて私が悪うございました。これからは決して変な真似は致しませんから、どうかこれをお受取り下さい。どうか、御機嫌を直して今迄通りアミになって下さい。と懇願したのですが、もう今迄にこれ程心からのお願いをした事はない位で、しまいは涙で声がふるえる始末でした。

床に這いつくばった眼の前には彼女の赤く爪にエナメルを塗った恰好の良い足が白く輝いているのです。おそろおそろ見上げると、彼女は腰に両手を当てて仁王立ちになって睨み下して居るのです。「今の言葉に嘘はないね！ 誓うわね！」といつて貰えたので慌てて合点合点をすると「じゃ、このお金貰つて上げてあげるわ、返さないわよ」と、とうとうただでまきあげられてしまったのです。

結局、私はそこに正坐し、彼女はベッドに腰を下したまま、今後、私等がバーに出入りして彼女に話かけたりしては迷惑するからバーには行かない事、その代り、フランス語が下手だから、火曜と木曜日毎週二回午後一時間彼女の部屋でフランス語を教えて貰うという取決めをして、その夜は帰りました。これは私にとっては大変好都合に思えました。というのは元々バーに行っても無駄な費用が嵩む割には彼女と接触のチャンスは殆んどないし、その上彼女にフランス人との戯れを見せつけられずにも済むし、又サイゴンでは、フランス人の習慣に従って午後十二時から三時迄は午睡の時間で、事務所も休みになりますので丁度良かったのです。時間は一時から二時迄という事になっていました。待ちに待った最初の約束の日、勿論朝から仕事も手につかなかったのですが、彼女の部屋の扉を押した時は本当に、目もくらむ程興奮して居ました。

テーブルに向い合って坐った時も、自分で何を喋って居るか判らぬ位だったのです。彼女に先ずこいわれたのです。「お前はフランス語が下手で、今のお前の喋って居るのを聞いていると胸が悪くなる。だから、これか

ら当分ここに来たら、お前は一切口をきいてはいけない。先ず犬として取扱ってやるから私の命令が聞き分けられたら、その通りにやってみせてごらん、本当に聞き分けたかどうかみてあげるから」というのです。

それから彼女は、「お手」だとか、「お廻り」だとか、「お坐り」「伏せ」揚句の果ては、私の無恰好な姿をみて大口を開けて笑うのです。しまいには彼女のスリッパを部屋の隅に投げて口でくわえて拾って来させるのです。これを何度も何度もやらされましたが遅いといつては四つん這いのお臀をスリッパで叩くのです。この様にしてその日は散々おもちにされたのですが、私の胸のうちは幸福感で一杯でした。犬が飼主を得た喜びと全く同じで、本当に私は犬になった気持ちで、彼女のどんな命令にも易々諾々として従ったのです。そうして、その日は一時間三千ピアスタの指導料を払って引揚げました。二度目のレッスンは、もうすっかり私をみくびった彼女は仰向きに床に寝かせた私に口を開かせてその上にまたがり、右足の指を押し込んできたのです。汗ばんだ塩っ辛い足の指に、私は思わず知らず、しゃぶりついていました。彼女は擦ったいらしく指をくねくねさせている

のが、私は舌の先で感じとっていました。

その日は、酷い目にも合わされました。うつぶせにした私のおしりに、空気入れ（多分バレーかバスケットのボール用と思います）を突っ込んで空気を入れるのです。ぐんぐん入れられるうちにおなが丁度大便を我慢している様に苦しくなり、しまいには胃の方迄圧迫が来て、呼吸もつけぬ程苦しいのです。遂には腸が張り裂けるのではないかと思う程になった時ずっと弁を抜くのです。すると今迄一杯に詰まっていた空気が、奇妙な音が立て続け乍ら抜けてゆくのです。これは彼女がふと気まぐれに思いついたらしいのですが、私の苦しみ方が気に入ったのと、空気の抜ける時の音が面白いといつて、その後も何度もやられました。

それから、疲れたといつてベッドにひっくり返った彼女の足の裏を彼女が眠る迄舐め続ける事を命じられたのです。寝ころんで雑誌を読んで居る彼女の足の裏を一心に舐めて居るうちに、ふと気がつく、彼女はすやすやと寝息を立てて居るので、その日はそれでそっと帰ったのです。この様にしてその頃の私は毎週二回のレッスンだけが楽しみで生甲斐の様なものでした。彼女の私に対する仕打ち

は段々酷くなりました。素っ裸で仰向きに大の字に寝かされて顔といわずおなかの上といわず素足で踏みにじられた事もあります。裸にひき剥かれた背中やおしりをムチ打たれた事もあります。これは、どうしても悲鳴がもれ、又思わず逃げ廻ったりする程痛さが烈しいので、彼女の御機嫌を損じたのですが、

漸く、ムチ打ちの時は手足を縛り、さるぐつわをして下さる事を認めて頂きました。尤も彼女のお好みで、私に目かくしだけさせ、部屋中をムチで追い廻すという遊びもやりました。人間が口にする事の出来ない様なもの迄食べさせられた事もあります。それも、両手

を揃えて受取ったのを正坐して捧げ持ち、何度も女王様のお恵みに対する感謝を唱えさせられた後に食べさせられたのです。その時は匂いは殆んど感じず、口中がしびれて息も詰りそうなのを夢中で吞み下したのですが、その所為がどうか、その夜発熱して、翌日一日寝込みました。

或る時はレッスンに行ってみると彼女はフランスの男とベッドに寝ていて、その前で散々犬の芸をさせられて二人のなぶりものにされた揚句、その恰好がおかしいと笑い転げるのです。この時程屈辱を感じた事はありますが、もうその晩は本当に彼女の飼犬の心境

でしたから、命令に従う事以外私の念頭にはなく、夢中だったのです。

この様な日々が続いたのですが、結局、彼女は従妹と住んで居た訳でもなく、新しい部屋を探して居た訳でもなかったのです。そして時々、大金をせびり取られて居たのですが、或る日突然私は、イタリアの一人婦人に譲り渡されたのです。

彼女もそろそろ私に倦きたので、恐らくバ―で面白いジャポネが居るという話でもしてそれに興味を示したイタリア婦人に譲り渡す話が起ったのでしょう。その後はこの女性に今度は飼われる身分となったのですが、これは次の機会にお話ししましょう。結局、このイタリア婦人とは、最初彼女は、東洋人として一段劣った人種として、私を奴隷扱いしていたのですが、彼女自身の胸のうちに恋愛に似た感情が起って、悩んだらしく、話合って別れました。本当はこの二人の女性に、犬や奴隷として扱われた頃の事をもっと詳しく書くつもりだったのですが、経緯を書くだけで、余り長くなってしまったので、今回は、一応これで止め、来月にでも又、あらためて、詳しいお話をする事にします。

限定版写真集
グラビヤ印刷

豊満と清楚

四月下旬発売予定
頒価一部一〇〇〇円（送共）

一般書店にては販売いたしません。直接お申込者に限り分譲いたします。

モデル——長野 良子、大塚 啓子

モデル——五月亜紀子、新井マリ子

豊満な肉体を誇る長野良子と大塚啓子の緊縛裸身を全画面いっぱい活躍させ、加うるに清楚なフェイスと肢体の五月亜紀子

と新井マリ子の両新人の痛々しいばかりに可憐な緊縛裸身を以て、誌面を飾ってゆきます。本誌口絵グラビヤには掲載できない超弩級品ばかりを揃えます。一見マニヤの方々の胸を抉ぐる力作の網羅です。次号にて詳細発表いたしますが、どうか御期待下さい。尚、新人モデル、ベテランモデルの特写フォト、モデル特集などを引続いて刊行するよう企画中です。

本限定版の略号（限二）



連載小説

花と蛇 (第十一回)

団 鬼 六

裸踊り

均整のとれた美しい乳白色の肉体を火柱のように燃え立たせて、静子夫人は激しく首を振り、川田に許しを乞いつづける。

それを眺めていた田代は、

「一体、どういいうお仕置を考えついたんだ。

川田——」

と、ウイスキーのグラスを口へ運びながらいう。

「へっへへ、女である限り、一度はさせてみてえ責めなんですよ。葉桜流悦虐責めッてやつなんで——」

と、川田は、その方法を田代の耳元でニヤニヤして小声で告げる。

田代の顔も、それを聞くと、しわだらけにくずれたが、

「だが、そういう色責めは、もう少しなれさせてからの方がよくないか。何も一度に責め抜く事もあるまい」

つい、今しがた静子夫人の唄った清元のす

ばらしさに蕩然としてしまった田代は、このように日本的な素養を持つ淑やかな夫人を葉桜団好みの淫らな踊りものにするのに、いささか気がとがめ出したらしい。

「川田、この奥さん、踊りの方も、相当なものだといったな」

「へい、踊りの方も立派な名取りの腕前ですよ。何とかの会という上流階級の有閑婦人だけの踊りの会があるんですが、その会長がこの奥さんでさあ」

川田の説明を聞くと、田代は満足げにうな

連載小説「花と蛇」 掲載号一覧

- 第一回 昭和三十七年八月号（売切）
- 第二回 昭和三十七年十一月号（売切）
- 第三回 昭和三十七年十二月号（在庫）
- 第四回 昭和三十八年七月号（売切）
- 第五回 昭和三十八年八月号（売切）
- 第六回 昭和三十八年十一月号（在庫）
- 第七回 昭和三十八年十二月号（在庫）
- 第八回 昭和三十九年二月号（在庫）
- 第九回 昭和三十九年三月号（在庫）
- 第十回 昭和三十九年四月号（在庫）
- 第十一回 昭和三十九年五月号（在庫）

ずいて、

「じゃ、一つ、奥さんの見事な踊りを拝見させてもらおうか」

田代は静子夫人の日本舞踊を所望する。

川田がズベ公達の手でさせようとした淫らな責めは、免れたというものの、こうした野卑な人間達の中で、踊らされるという口惜しさ。静子夫人は固く唇を噛んで、美しい顔を横へ伏せる。

川田が近ずいて静子夫人にいう。

「奥さん。よかったね。葉桜団は、あんたをこたえられねえ恥しい責めにかけてようとしていたんだが、社長のお情けで、今日のところはかんべんしてもらえたよ。だから、一生懸命踊って、社長の御機嫌をとらなきゃ駄目だぜ」

そういいながら、川田は、静子夫人を縛しめている麻縄を解き始める。

肌身に喰いこんでいた固い縄が解かれた静子夫人は、ふらふらと、その場にくずれるように膝をつき、陶器のように白い腕を交錯するようにして肩を抱くと、ほっと息をつくのだった。長い間、緊縛されていたため、肩から腕の附根あたりが麻痺したように重い。

ふと、静子夫人は涙にうるんだ切長の瞳を

京子と美津子の方へ向ける。

二人の美しい姉妹は、二つのテーブルの上へ、各々、仰向けに回定されている。すらりとした白い両肢は、上よりつり下げられている青竹の両端に縛り止められ、言語に絶するあられもない姿をさらしているのだ。

「ああ、京子さん」

静子夫人は、京子とその妹のあまりにも無残なその姿を見ると、たまらなくなつて、二人の縄を解こうとして、かけ寄るのだった。

「勝手な事、するんじゃないよ！」

朱美が横手から足を出し、走り寄ろうとした静子夫人の脛を払う。

あつと、その場へ転倒した静子夫人の柔軟な体の上へ馬乗りになった朱美は、

「二人を助けたいのなら、やるだけの事をしなくちゃ駄目じゃないか」

二、三発、豊満な尻を平手打ちされて、静子夫人は引き起され、銀子は赤い扇子を夫人の前に投げる。

「さあ、その扇子を拾って、踊りな。唄は社長にお願いしようよ」

静子夫人は、屈辱にむせびながら、土間に投げられた扇子を拾ったが、久しぶりで自由にされた両手は本能的に豊かな二つの乳房を

抱き、両膝をぴっちりと合わせて、その場に小さくちぢかんでしまふのだった。

そうした水々しい娘らしさを失わぬ美貌の静子夫人を、田代は舌なめずりするように見て、

「じゃ、奥さん、下田のお吉でも踊って頂こうかね」

朱美が、ちぢかんでいる静子夫人の横へかがみこむようにして、

「社長、全ストにしてしまいましたようか」と田代に聞く。

「まあ、今日のところは禪ぐらいはかせてあげな。日本舞踊も小唄と同様、名取りでいらっしやる令夫人を全ストで踊らせるのは可哀そうだ」

静子夫人は、思わず両手で顔を覆い、泣きじゃくる。

そんな夫人の背を足で突いた朱美は、

「禪をとるのは、かんべんしてあげるとさ。」

社長のお情けに感謝して、さ、踊ったり、踊ったり」

つづいて、田代は、一杯機嫌で、ガラガラ声をはりあげ、端唄を唄い出す。

京子と美津子を、この地獄の責めから救うためだと静子夫人は自分の心にいい、我身に

ムチ打つ思いで立上った。

田代の奇妙な節廻しに合らし、静子夫人は禪一本を腰に巻かれた屈辱的な裸身をくねらせるようにして踊りを始めた。

そんなところへ、どやどやと森田の乾分達が七八人階段を降りてやってくる。

「何でい。こんな面白い事が始まつてるのなら、俺達にも知らせてくれたら、いいじゃねえか」

森田組の幹部の吉村が、葉桜団のズベ公達に口をとがらしている。そして、台の上に、両肢を半吊りにされた恰好で縛られている京子と美津子に気つき、大声で笑い出した。

「静かにしねえか。今、達山令夫人が、その二人を救おうとして一生懸命に踊ってなさるんだ。手前達もそのへんに坐って、ゆっくり見物しろい」

森田が乾分達にどなった。

酒気を帯びている男達は、じゃ、見物さしていただきやしょう、とそのへんへ散らばって腰をおろし、手にしていたビールをラッパ飲みしだした。

男達が加わった事で、いたたまれなくなつた静子夫人、その場へ身を伏せてしまいたくなるのを必死にこらえ、唇を血の出るほど噛

んで踊りつづけるのだった。

やっと、一節が終ると、葉桜団も森田組もわあーと声をあげて拍手する。

静子夫人は全身から力が抜けたよう、ふらふらと、その場へくずれてしまふ。

静子夫人が、氣も狂いそうになる羞恥と戦いながら、踊っている最中、男達は、いいおっぱいをしてやがる、とか、たまらねえぜ、その腰つき、とかいって夫人を揶揄し続けていたが、今、眼前に力尽きたようくずれていく夫人に対し、

「奥さん、もう一曲頼むぜ。今度は、カッポレだ。俺達が合唱するからな」と、浴びせかける。

静子夫人は、土間に泣きくずれながら、嫌嫌、と首を振る。もうこれ以上、鬼畜に等しい人間達の罵りものに耐える力は、静子夫人にはなかった。しかし、

「男達の気分を悪くすると、面倒な事になるぜ。さ、奥さん。もう一曲、がんばるんだ」

川田が土間へ顔を埋めるようにして泣きつづけている静子夫人の白い背を指でつく。

男達の希望に応えないと、京子と美津子はやっぱり、予定通り、浣腸責めにかけるといふ川田の言葉を聞くと、静子夫人は、ふらふ

らと立上った。

男達は、拍手をし、ズベ公達と一緒に
で、カッポレを唄い始める。

へカッポレ、カッポレ、よいとな、よいよい
静子夫人は、毒喰らわば皿まで、といった
気持で、その動きの早い踊りを始める。

はち切れるばかりに見事な乳房が、身の動
きに合わせて揺れ動くのだ。

「さすがだね。名取りだけの事はあるよ。ち
やんと踊りの型に入ってる」

田代は、襪一本で踊らされている静子夫人
であるが、その艶麗な身のこなし方に感服し
たらしく、隣の森田にそういうのだった。

ようやく、カッポレを踊り終えた静子夫人
は、再び、土間に身を低め、両乳房を両手で
隠しながら、激しく息ずき、涙にうるんだ美
しい切長の瞳を田代に向ける。

「こ、これで、するだけの事は致しました。
どうか京子さん達を許してあげて下さい。お
願です」

静子夫人のうるんだ瞳から、屈辱の口惜し
涙が一筋二筋、白い頬を伝って流れ落ちる。

おしめを使う夫人

田代は、凄惨なばかりに美しい静子夫人の

容貌に射すくめられたように視線をそらし、
川田の方を見る。

「これからあとの事は、お前に一任するよ。
どうするかね？」

川田は、ニヤニヤして、静子夫人の横へし
やがむ。

「あとのしめくくりが大切だよ。奥さん」

川田は朱美から、麻縄の束を受取って、
「さて、元通りに縄をかけるから、お手々を
うしろへ廻しな」

川田に背をつかれた静子夫人、ベソをかき
そうな表情でいう。

「そ、その前に、京子さんと美津子さんの縄
を——」

「うるせえ。いわれた通りにしねえと、お前
さんの今までの努力は、何にもなくなる
ぜ」

静子夫人は、眼を閉じ、口惜しさを呑みこ
むようにして、両乳房を覆っていた両手を解
き、静かにうしろへ廻すのだった。

「本縄をかけるんだ。誰か手伝って下せえ」

川田は、森田組の男達に声をかける。

幹部級の吉村と井上が、含み笑いで立上
り、やって来た。

観念して、両腕を背中に廻し、固く眼を閉

じている静子夫人の艶やかな白い首へ、手垢
のついた麻縄が二巻きほど巻きつく。かつて
は、何十万円もする豪華な首飾りがかった
夫人の白いうなじに、今は、どす黒い首縄が
かけられるのである。

更に、形のいい見事な夫人の乳房の一つ一
つに縄の棒がかけられ、ことさら乳房は、大
きくくびれた形になる。背後に交錯している
夫人の両手首を頑丈に縛り合わせた川田は、
縄尻をひいて、夫人を強引に立上らせた。

静子夫人は、もうどうともなれ、とすっか
り観念したらしく、川田のするままになって
いる。川田は、元通り、縄尻を天井から下が
っている鎖につなぎ止めて、夫人を田代達の
前へ立たせる。

「ほほう。そういう本縄をかけると、遠山夫
人、ますます美しく見えるじゃないか」

田代は、眼をギラギラさせながら、そうい
った。

川田は、更に別の麻縄を持ち出して来て、
「へっへへ、もっと美しく見えるよう、今仕
上げて御覧に入れますよ」

と田代にいい、恐怖に頬を硬張らせている
静子夫人の眼の前に、手にしている麻縄を突
きつけるようにして、川田は口元を歪める。

「奥さん。すばらしい小唄と踊りを見せて頂いたお礼に、今、すばらしい縄をかけてあげるぜ。川田式股間縛りというやつさ」

股間縛り——一体、それはどんなものなのか。静子夫人は知る由もないが、何か恐いものに違いないことはわかる。

銀子が煙草をくゆらせながらいう。

「そうそう。この奥さんにも、そうそう、そういう縛りになれさせたいと思っていたところさ。色禪は、今日で卒業ってわけね」

銀子は朱美に目くばせをし、どうしようもない静子夫人の背後へ廻ると、腰に固く喰いこんでいる紫地の禪の紐を解きにかかる。

「待、待って、待って下さい！」

静子夫人は、身悶えし、うしろのズベ公達に声をかけた。

「どうしたの。股間縛りにして頂けるお礼がしたいの」

銀子と朱美は、手を止めて、楽しそうに静子夫人の横顔を見るのだ。

川田が、静子夫人の正面に立って、おろおろした顔を小気味良さそうに見ている。

「お前さんを完全な股間縛りにしたら、約束通り、京子と美津子は浣腸責めにはせず、台から降ろしてやるぜ。さあ、よく考えて返事

しな。股に縄をかきけさすのか、かけさせねえのか」

静子夫人は、ああ、と首を左右に振り、泣き出す。川田のいう股間縛りの意味が漠然とわかってきたのだ。

「——川田さん。お願い。か、かんにんして——」

静子夫人は、美しい頬を涙で光らせながら訴えるように川田の方へ瞳を向ける。

静子夫人の背後で、禪の結び目に手をかけていた銀子と朱美が、何かニヤニヤしながら話し合っていたが、川田に向かっていい出した。

「川田兄さん。股縄をかけるなら、その前にすまずものは、すまさしておいてやらなきゃ可哀そうじゃないか。そいつをかけられてからじゃ粗相するにも出来なくなっちゃうんだからね」

それを聞くと、川田は声を立てて笑う。

「成程、そいつは気がつかなかった。そうならそうと奥さん、いってくれりゃいいのに」

川田は、すすりあげている静子夫人のあごに手をかけて、ぐいと美しい顔を正面にこじ上げる。

「奥さん、その色禪はおしめの代用にもなる

んだ。遠慮はいらねえ。おしめを使って、早いとこすましちまいな」

川田のいう言葉の恐しさに静子夫人は、息をのみ、柳眉をあげて、川田を睨むのだ。

「何さ、その顔、まだあたい達に楯をつく気なのかい！」

朱美が静子夫人の盛りあがった尻の肉をつねりあげた。夫人が悲鳴をあげて身をもむと銀子が夫人の黒髪をわしづかみにして、
「ぐずぐずせず、早くおしめを使うんだよ。すばらしい股縄をかけてあげるからナ」
つづいて、朱美が、

「奥さん、あんた、朝からまだおトイレへ行かせてもらえないんだろ。可哀そうにお腹がはってるじゃないの」

静子夫人はズベ公達のそうした言葉が耳に入るのを防ぐかのように、真っ赤になった顔を激しく振る。

たしかにズベ公達のいうよう静子夫人は、朝から用便を許されず、先程から激しく襲ってくる尿意と戦いつつ、数々の仕打ちに耐えてきたのである。

もし、用便の許しを川田や銀子に乞えば、それを責めの材料に使うに相違ないと静子夫人は連中の恐しさを骨身にこたえる程知って

いる。一体、どうすればいいのかと静子夫人は次第に高まっていくどうしようもない尿意を感じつつ、そんな自分を口惜しく思っていたのだった。

そして、その苦しさで羞しさを遂にズベ公達に見抜かれ、責めの道具にされてしまったのだ。

銀子と朱美に、早くお始めたら、と邪慳に背や尻を小突き廻される静子夫人は、たま

らなくなったように、眼の前で、酒を飲んで
いる川田に声をかけた。

「——川田さん、後、後生です！」

「どうしたんだい。奥さん？」

川田は、ニヤニヤして、静子夫人の前に立つ。

「お願いです。そ、そんな事だけは、させないで。この場で、そんな事だけは——」

静子夫人は、泣きじゃくりながら、必死に

なって川田に哀願するのだった。

「そりゃ俺だって、遠山財閥の美しい令夫人に、そういうみっともねえ事はさせたくはねえが、何といっても、奥さんは、もうこの森田組の持物なんだ。俺の仕事は、奥さんを秘密シヨ一のスターとして飼育することなんだからな」

川田に、頭からそう浴びせられた静子夫人は、望みの糸も切れたよう、がっくり首を落してしまふ。

そんな静子夫人にズベ公達は再び、寄りたかるようにして、拷問を始めるのだ。

夫人は、耐えられなくなって長い黒髪を払いあげるようにして首をあげ、周囲のズベ公達をきっと睨むのだった。「じゃ、貴女達のお好きなようにして頂戴。どこへでも縄をかけるがいいわ！」

捨鉢になったように静子夫人は叫び、固く唇を噛みしめるのだった。どのようにならぶられようとも、自分から、彼女達の期待する浅ましい姿を演じるな



ど、静子夫人に出来る事ではない。

「さすがは上流階級の令夫人だね。出るものはがまんするから、股間縛りにしてくれとおっしゃる」

一切の望みを捨てたように、眼を固く閉じている静子夫人の凄惨なばかりの美しい顔を見ながら朱美は舌を出す。

「お尻をもじもじさせているじゃないの。やせがまんするんじゃないよ、奥さん」

銀子も、せせら笑って、静子夫人の腰のあたりに眼を落とす。

そいつはいけねえ、と川田が再び、静子夫人の前に立った。

「これ以上、がまんしていちゃ身体にさわるよ。大切な商売ものなんだからね。奥さんは——。」

川田は、静子夫人の艶やかな白い首筋を指でくすぐりながら、

「さあ、そんなに強情をはらずに、おしめを使うんだ。京子なんぞ、生まれたまんまの姿で、おしめめなんか使いたくても使わして貰えなかったんだぜ。大家の令夫人だからこそ、特別におしめを使わせてやるんじゃないか」

朱美も、それに付け足して、真っ赤な顔の

静子夫人に浴びせる。

「川田の兄さんがいう通り、おしめを使わせてもらえるなんて特別よ。そして、さっぱりしたところで、川田式の結び玉つきのすばらしい股間縛りにして頂けるのじゃないの。うらやましい位だわ」

と、からからのだった。

静子夫人が、身を震わし、鳴咽をつづけるだけで、なかなか命じたことを演じようとはしないので、しびれをきらした川田は、ズベ公に命じ、京子と、美津子の強制浣腸にかからせようとする。

二本のガラス製浣腸器は各々、三十CCのグリセリン溶液を吸いこんで、不気味に光った。

川田は、それを意地悪く静子夫人の鼻先へ近ずけるのだ。

「小唄を唄ってもらったり、踊ってもらったりしたが、とうとう無駄骨だったね。京子と美津子の泣声をよく聞いていな」

川田は、そういつて、背後の台に縛りつけられている京子達の方へ行こうとする。

「待って、待って、川田さん！」

静子夫人は、あえぐようにして、川田を呼び止める。

「ふふふ、おしめを使う気になったかい」

川田は、静子夫人の紅潮した顔をのぞくようにしていった。

静子夫人は、命がけで自分を救おうとした京子と、その妹の急場を救うため、死ぬより辛い羞恥地獄へ身を投ずる決心をしたのである。

「川田さん、そうすれば、本当に、本当に、京子さん達を——」

涙にむせて、あとは言葉にならない静子夫人である。

「ぶつぶつというのは、おしめを使ってからにしなよ」

朱美は、いやらしく殊更口元を歪めて、静子夫人の美しい横顔を眺めて、ぺっと唾を吐く。

「小唄や踊りが、とてもお上手な事は、よくわかったよ。あとは、おしめを上手に使って頂くことね」

と銀子。

「遠山財閥の令夫人として、恥しくないようしっかり、おしめを使うのよ。わかった」と朱美。

「さあ、早くすますんだ。俺は気の短い方なんだぜ」

川田は、静子夫人の腰のあたりに眼を向けながら、愉快そうにいうのだった。静子夫人は、歯を噛み鳴らしながら、顔を横へそらし苦しげに眉を寄せる。

息づまるような屈辱に耐えて、唄を唄い、裸踊りをし、そのあげく、畜生にも似た浅ましい状態をさらさねばならぬとは。夫人は、のど元に熱っぽくこみあがってくる口惜しさを呑みこみ、先程から、必死になって集中していた下腹の力を抜いた。

「ああ——」

静子夫人の柔軟な白い肉体は火柱のように燃え、美しい彼女の顔は、艶やかな白いうなじを見せて、大きくうしろへ切なげにのけぞる。

静子夫人のしめている色褌の中で、小さいが激しい音が起る。それを聞きつけたズベ公達、一度にどっと声をあげ、生地獄に身をゆだねている夫人の周囲を取巻くのだ。

「奥さん、しっかり、しっかり、がんばってっ」

ズベ公達は、黄色い声を出して、まくし立て、火のついたような真っ赤な顔であえぎつづける静子夫人の顔と水分を含んで次第に重みを加えていく色褌とを交互に眺め、キャッ

キャッと笑い合うのだった。

屈辱の挨拶

野卑な愚連隊と下品なズベ公達に、死ぬ程の辛い姿を目撃されてしまった静子夫人は、放心したように、ぐったりと首を垂れ、流す涙も枯れてしまったようである。

川田は、機嫌をうかがうように田代と森田の顔を見て、ニヤリと口元を歪め、放心忘我の静子夫人に近づく。

「どうだい、奥さん。さっぱりしたろう」

川田は、静子夫人のあごに手をかけ、消え入るように眉を寄せている夫人の顔を正面にあげさせる。

静子夫人は、固く眼を閉じ、唇を噛み、一切口をきかぬ事が、せめてもの抵抗としているのだろう。川田にされるがままであった。銀子が、そんな夫人をぞくぞくした気分で眺めて、

「奥さん。だけど、随分と派手におしめを使ったものね。ぐっしょりじゃないの」

朱美も、夫人の縄に締めあげられている。はち切れるばかりの見事な乳房を指ではじいて、

「せっかく巻いてあげたカッコいい色褌も、

それじゃ台なしね。一体、奥さん、この始末はどうする気？」

と、声をたたて笑う。

「何とか、おっしゃいよ」

と、マリが足で夫人の盛り上がった尻を押す、

「もう少し、大家の令夫人らしく、おしとかにおしめは使うものよ。美しい顔をしていくくせに相当な心臓ね。あきれるわ」

と、悦子は、夫人の鼻をつまみあげていうのだった。

静子夫人は、気が狂いそうになる、こうした屈辱を全身に力を入れて、ギリギリ耐えている。

さて、と川田が、夫人にいい出す。

「その派手に汚れたおしめの始末をしなきゃならねえが、社長と森田親分にお頼みしようじゃないか。ただし、そいつは、奥さんからじかに、お二人様に頼んでみるんだな」

川田は、静子夫人がかたくなに口を結んでいるのが小憎らしくなったのか、そんな事を夫人の口からいわせようとするのだ。

夫人は、川田の残忍さに、わなわたと肩のあたりを震わす。もう鉄仮面でもつけた気持で、声も出すまい、泣きもしない、と心にき

めた静子夫人であったが、川田の言葉を聞くとたまらなくなつて、声を立てて、泣き出すのだった。

「泣けといったんじゃねえ。社長と親分に、おしめの後始末を、お願いしろ、といつてるんだ」

それがいえねえと、京子と美津子を颯りものにするぞ、と川田は凄んで見せる。

静子夫人は、胸のはりさける思いで決心し涙を振りはらうようにして、美しい顔をあげる。そして、川田に命じられた通りのことを田代と森田に向かっていうのだ。

「田代社長様、森田親分様——」

静子夫人がすすりあげるようにいうと、田代も、森田も、腰をあげながら、ニヤニヤする。

「——ど、どうか、私の——おしめを——始末して下さいませ」

静子夫人は息もたえだえにやっという、再び、耳たぶまで真っ赤にして、わっと泣き出す。

「他ならぬ遠山夫人の頼みとあらば、お引受けしよう」

田代と森田は、悶え泣く夫人の傍へ寄り、含み笑いしながら、背後へ廻ると腰をかがめ

べっとり夫人の腰に巻きついていろ色褌の結び目を解き始めるのだった。

「ああ——」

静子夫人は、どうしようもないよう真っ赤な顔を右へ伏せたり左へ伏せたりしている。

田代は、ズベ公の一人にむしタオルを持ってこさせ、褌を解き放たれた腰のあたりを森田と二人、念入りに拭き始める。

何分かの後、静子夫人は、失心したように首を深く落とし、身動きもしなくなった。

田代と森田は、ようやく夫人の足元から立上り、前へまわつて、繩にふちどられた見事な乳房、ゆるやかな起伏をもった腰のあたりなまめかしい曲線を描く太腿から肢、それらをギラギラした眼で見つめている。

「奥さん。後始末は終つたよ」

川田は、静子夫人の背をつく。

静子夫人は、ぼんやりと眼を開き、自分の足もとに蛇のように長くくねって落ちている紫の布を見ると、ハッとしたように腿を閉じ合わせるのだった。

愚連隊もズベ公も、どっと笑う。

川田は、新しい麻繩を手でしごきながら、おろおろしている夫人にいう。

「へっへへ、さて、奥さん。ところで、最後

の仕上げさ。素ばらしい股間縛りにしてあげるぜ」

川田は、今度は男達に目くばせする。

吉村を始め、森田組の乾分達、一せいに立上り、嗜虐的な興味にぞくぞくしながら、静子夫人の周りを取囲むのだった。

静子夫人は、乳白色の素肌を針のように緊張させ、おろおろした表情で、迫って来る野蠻な男達を見る。

川田は、そんな静子夫人の耳もとに口を寄せるようにしているのだ。

「繩は、森田組の兄さん方にかけて頂くからね。奥さんからも一応、このお兄さん方に挨拶しな。しっかり、繩をかけて下さいと、お願いするんだ」

狂ったように首を振って、泣きじゃくる夫人の頬を川田は、ひっぱたき、

「まだ、素直になれねえのか。おめえは、俺達の奴隷なんだぜ。いつまで、大家の令夫人ぶってやがるんだ」

静子夫人は、もうどうともなれ、と観念し再び、きつと美しい顔をあげ、眼を閉じたまま、川田に命じられた事を口にしようとするのだが、声は震え、思うようにならない。

「はつきりと挨拶しなくちゃ駄目だよ。小唄

の名取りなんだから、もっといい声が出る筈じゃないか」

朱美が、せせら笑って、静子夫人の顔をのぞくように見、森田組の男達に自己紹介を夫人にさせようとするのだ。

銀子は、ポケットから手帳をとり出して、ニヤニヤしながら、それを夫人の耳もとで読んで聞かせる。手帳には、夫人の略歴、そして、身体検査表などが書きこまれている。葉桜団が、静子夫人をかつて自分達の隠家に誘拐した時、面白半分に測定したもので、それを夫人に教え、夫人の口から、森田組の男達に、挨拶代りとして、いわせようとするのである。

「私は、元、遠山隆義の妻、静子と申し、二十六才——お、お、女盛りでございます」

静子夫人は、銀子や川田に指示された通りの事を血を吐く思いで、いうのだった。

十九で花柳流の踊りの名取りとなり、二十一では小唄の名取り、とそんな事まで、川田は静子夫人に話さし、夫人がためらうと、煙草の火を尻に押しつけたりして、つまり、挨拶なるものを強制するのだ。

「——私の体について——申し、申し上げます。バストは、九四センチ——ヒ、ヒ、ヒッ

プは——」

静子夫人は、たまらなくなったように顔を伏せて嗚咽する。すると、川田の手にしている煙草が再び夫人の尻を襲うのだ。

ようやく、珍妙な自己紹介を終え、静子夫人は、息も絶え絶えに大きく肩を動かしている。

「おっと、肝心の事を忘れちゃいけないよ。挨拶を聞いて下さったお兄さん方に、お願いする事があったじゃねえか」

川田は、奥さん、次はこういうのだよ、と次の文句を夫人に教える。

それを聞くや静子夫人は、ギクッと身を震わせ、嫌々、とうなだれている顔を左右へ振る。

そんな静子夫人を銀子や朱美が笠にかかって、責めるのだ。

「これが最後じゃない。しっかりおし！」

つねられ、平手打ちされ、静子夫人は、遂に口を開く。

「森田組の皆様——色々と、御迷惑おかけ致しましたが、遠山静子は——二度と逃亡を計るような事は致しません。遠山静子は、永遠に、森田組のものです。至らぬ私でございますが、どうぞ末長く可愛がって下さいませ」

静子夫人は、あえぐようにそっくり、口惜しさに身をよじる。

「次を続けな」

川田は、夫人の尻を指でついた。

静子夫人は、一種壮絶な美しい顔つきになり、

「どうか、皆さん——こ、この私の——身体に——しっかりと、縄をかけて、く、く、下さいませ」

静子夫人は、そこまでいうと、気を失ったようにぐったりとなってしまった。

ズベ公達は、やんやとはやしたて、やくざ達は、舌なめずりし、川田の指示に従って、麻縄を受取ると、静子夫人の熱れ切った肉体に縄をかけ始めるのだ。

豊満な静子夫人の両乳房を包むようにかけられて、胸に新たな麻縄がつかねられ、それは、夫人の形のいい臍を中心に菱形に結ばれていく。男達は、消え入りそうな静子夫人の前と後にとりついて、そういう菱縄を実に手ぎわよくかけていくのだった。

ようやく下半身を菱形に縛ったやくざ達は余った二本の縄尻を、夫人の腹部をしめつけるようにしてたぐりながら、

「最後の縄止めは、川田兄貴に頼むぜ」

と、その二本の縄尻を川田に渡すのだ。

川田は、ニタニタ笑いながら、その二本の縄を揃えて、キリキリとねじり、小さい結び玉を一作りあげる。

「へっへへ、さあ、奥さん、すばらしい股縄をかけてあげるぜ」

静子夫人は、川田のしょうとしている事がわかり、力一杯、両腿をびったりと密着させる。

「お願い——川田さん、そ、そんな事だけは——し、しないで！」

泣きはらした美しい瞳を夫人は川田に向けて哀願するのだったが、川田に通じる筈はない。

「何いってやがるんだ。たった今、自分で股縄をかけて下さい、と、このお兄さん方に頼んだじゃねえか」

川田がどなると、またしても、銀子と朱美が夫人のそばへ寄る。

「おしめを使わせてやったのも、股間縛りにしてあげるためじゃないか。生娘でもあるまいし、そんなに尻込みする事はないよ」

銀子は、ガスライターをつけて、夫人の尻に近づく、

「さ、もたもたすると、こうだよ」

静子夫人は、生身に炎を当てられて、悲鳴をあげる。ズベ公達は、夫人にそういうポーズをどうしてもとらせようとし、責めつけける。遂に静子夫人は、屈伏し、激しく泣きながら、両肢を小さく開くのだった。

「よしというまで開くんだ」

夫婦SMプレイ 雑感

新 宮 明 夫

生首、処刑夫婦プレイマニアの皆様。久しく御無沙汰致しましたが、お褒りありませんか。昨春秋のつたない夫婦プレイ写真をグラビヤに発表させて戴き同好の諸兄からいろいろと御批評や御指導を承り有難うございました。最近号の読者通信欄に二・三の諸兄から、更に発表するようにとの激励を感謝しております。

私は全裸が好みで、夫妻のプレイはいつも全裸で行なっておりますが、本州南端の地とはいえ妻に風邪をひかせてはと思い冬中はシーズンオフとしてプレイの休んでおります。しかし、その間スクラップブックの整理、アイデアの工夫に余念がありません

銀子は、夫人の尻を足で押す。静子夫人は、キリキリと歯を噛み鳴らしながら、更に足を開く。

そんな静子夫人を田代と森田は魂を奪われた顔つきで、見とれている。

「まあ、そのへんでいいだろう。じゃ、奥さ

ん。三月もなかばを過ぎると本格的に暖かくなると思いますので、最近は撮影準備に大童です。従来の撮影方法にもいろいろと欠点があり同好諸兄に見苦しい写真をお見せ致しましたが、今後は閃光球をやめて写真電球を使用してみようと思いい準備しております。

ところが最近不良雑誌追放の余波をうけて奇クの編集方針も自粛の方向をとり、女性の乳や臀部の露出した写真の掲載を中止めたため全裸好みの私には掲載して戴く余地がなくなつたのです。下半身は腰巻で覆うとしても乳が残り、これを布でかくすと処刊そのものが持つ残虐性が大きく割引き

ん。川田兄さんに、お願いするんだよ」

銀子は、カチッとライターをつけて、夫人の口から、そういう事を要求させようとするのだ。

「か、川田さん、お、お願い——致します」

あられないポーズをとらされた静子夫人は、ぶるぶる白い肩を震わせて小さくいうのだった。

「そうかい。股縄をかけて欲しいというんだね」

川田は、涙にむせんでいる静子夫人の顔を楽しげに眺めている。

静子夫人は、大粒の涙をハラハラこぼしつつ消え入るように小さくうなずくのだった。

(つづく)

好評を博しております「花と蛇」は、作者団先生も大いに張りきって、前篇の完結まであと数回・毎月引続いて執筆下さる由です。そこで、編集部では、皆様の御要望に応じて「花と蛇」の単行本化を企画しております。如何なる形式にするか、今のところ未定ですが、只今四馬孝画伯を煩して、口絵並に挿絵の構想を練って貰っております。何卒御期待下さい。

(編集部)

されます。いずれにしてもプレイ写真である以上、着物を着せてもと考えましたが、現実的にみて男が女を処刑する場合、最大の恥かしめを相手に与えるという意味からも全裸にする筈です。

私達の場合結婚後八年になり生活も一応安定し、子供にも手がかからなくなって、夫婦関係もマンネリ化し、何かしら他の刺激も求める気持が、お互いの心の中に眠っていた、S Mを呼び起したともいえるのです。このように私達夫婦の場合はどうしても、やはり全裸（最初は着衣であっても最後には）によるプレイとなるのです。このような考え方に対しては、いろいろご意見をお持ちの方もあると思いますが、夫婦のS Mプレイの窮極はSEXに結びつくのではないのでしょうか。私の妻も最初はプレイを厭がっていましたがプレイ後の魅力にひかれて私の要求に応じていたようです。しかし最近では妻の方からプレイを要求する程になっています。

また夫婦だけのプレイを外部に公表すること自体がおかしな話で、あくまでも妻と夫の間でひっそりと行なわれるべきもので

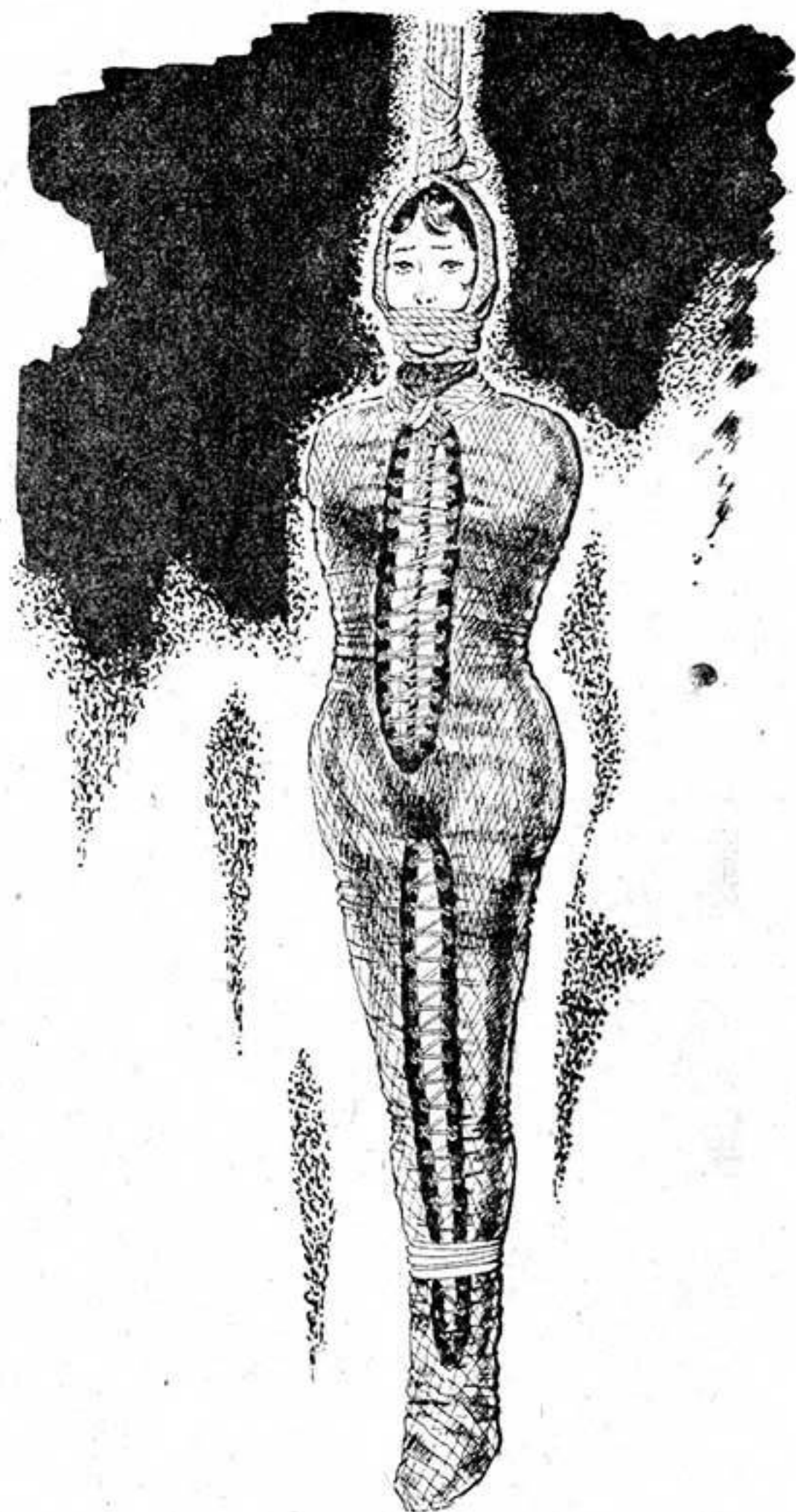
もあります。しかしながら私達は自分達以外の夫婦の生活が、どのように営まれているかについて常に興味を持っています。私が拙い私達夫婦のプレイ写真を奇巧に掲載して戴いたのも、そのような考え方にたつたもので、それにより他の御夫婦の方の御意見を聞き自分達の生活にプラスさせたいためでした。

その結果良い同好のご夫婦を得て、お互いのアイデアや意見の交換を致しております。私達は知合ってから、どれ程も経ていないのに、すっかり信用し合ってプレイ写真を交換して批評し合っております。これが私達の生活にどれ程の潤いを与えていることでしょうか。

最初はカメラの前に立つことを厭がっていた妻も、相手の奥さんの処刑写真をみると対抗意識をもつものか私に撮影技術の注文をつける程になりました。

早く暖かくなるのを待ちつつ小道具を作製するのにも人知れぬ楽しみです。奇巧掲載可能な作品もつくる心算ですから、出来ればファンの方々の御批判を仰ぎたいと思っています。

(以上)



アルバム列伝

芳野眉美

A 春日ルミ

三十七年一月号に、「春日ルミ女史に奉仕

した三日間」というショッキングな通信がある。根岸悦夫氏、奇クサロン。即ち、

「足舐めから始まって女王様のお身体に対す

る奉仕は、嘗て私の日夜夢に描いていたシーンだが、現実には、もっとリアルで官能的な数々が展開された。

『もみくちやにされた私は、今こそ、自分が本当のマゾヒストだということを自覚すると共に、彼女は偉大なるサジスチンだと、今更ながら感嘆した。』

その時の様子は刻明に彼女のカメラに収められて、今でも残っているはずである。

私が彼女のために借りた駅前のホテルはバス、トイレ、テレビ、電気冷蔵庫付の三部屋続きの一室だった。」とある。

根岸氏が春日ルミ女王から、どうもみくちやにされたのか、根岸氏の短文からではわからない。わからないから、女王様春日ルミ女史のマゾヒスチック・フォトを見ながら勝手に空想することになる。

これは、非常に楽しいことである。

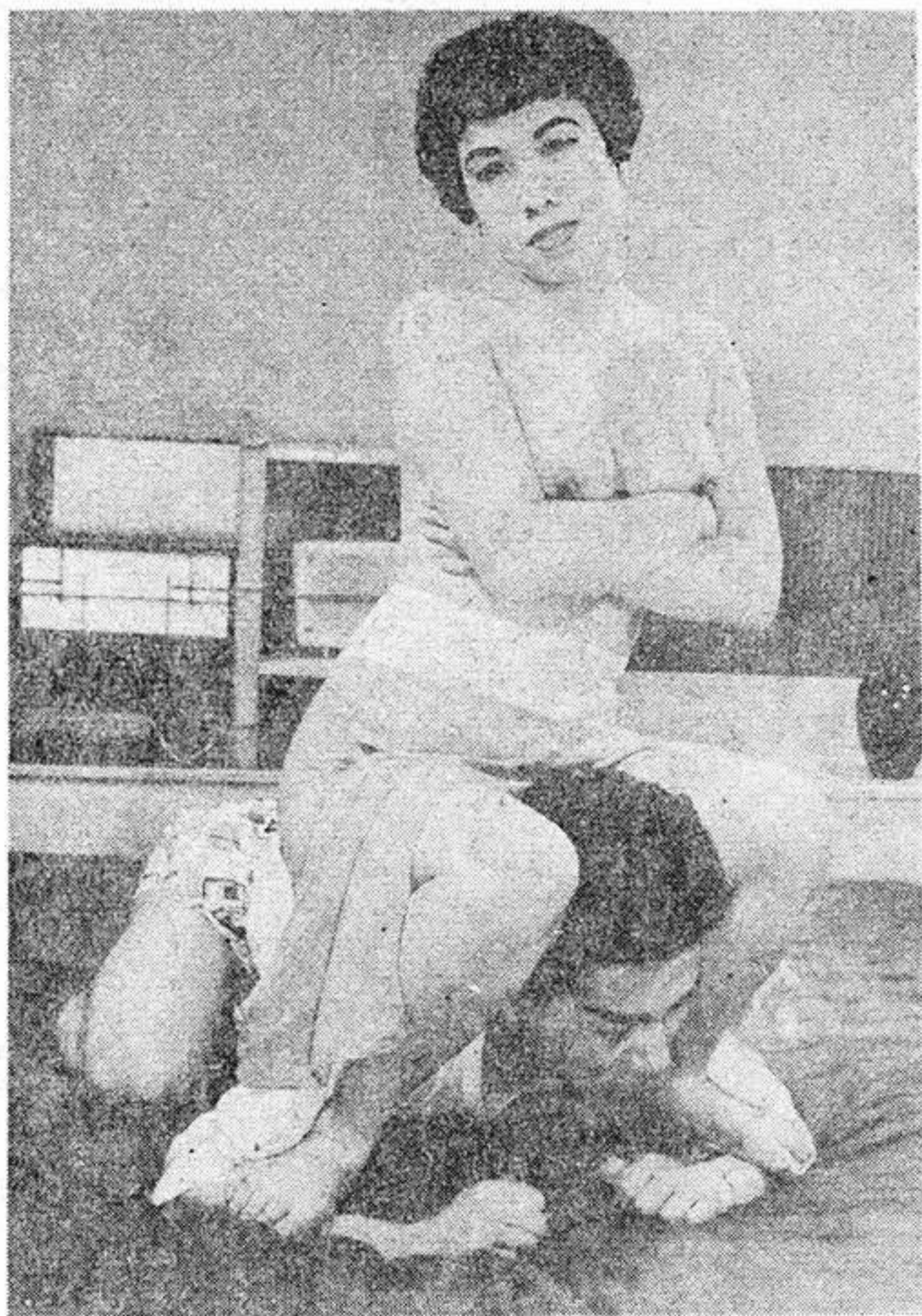
根岸氏は「足舐め」が好きらしいから、根岸氏に敬意を称して、足舐めフォトをさがすことにする。

あるある。そのままずばり。

「足舐め」と題して、

「それ、わたしの足の裏を舐めてごらん。素

(春日ルミと小沼正三)



足でサンダルを履いて来たんだから、大変汚れているんだよ。きれいに舐めないと承知しないわよ」

読んでいてうれしくなるような女王の命令が親切についている。続いて、

「お前なんて仕様がないう男なんだろう。犬の首輪をはめられて、それでお前は喜んでいいのかい。お前なんか足で踏んでやるのが相応

なんだ」

後手に縛られ、犬の首輪をされた根岸氏—じゃなかった、このモデルは小沼正三氏らしい。私でもいい。とにかく、女王の足で顔を踏んづけられ、頭をサンダルのまま踏みつけられる。

首輪の鎖を女王が持っているところなんかにくいね。

「足台」「沓脱台」「洗面台」とフォートはにぎやかだ。

「ベッドに腰かけて朝の洋服を吸っている女王様に対しての朝の挨拶は、先ずそのおみ足を頂いて、下僕としての誓いのキッスをすることである」

春日ルミ女王の味、香を知りたい。誓が終ると「犬の訓練」が始まる。

「女王様の従順な飼犬として、永遠に手落なく奉仕することが出来るようになるための躰が行なわれる。訓練中、首に首環がはめられている」

と説明文にある。

「足舐め」と「首輪」は、男性マゾの象徴らしい。

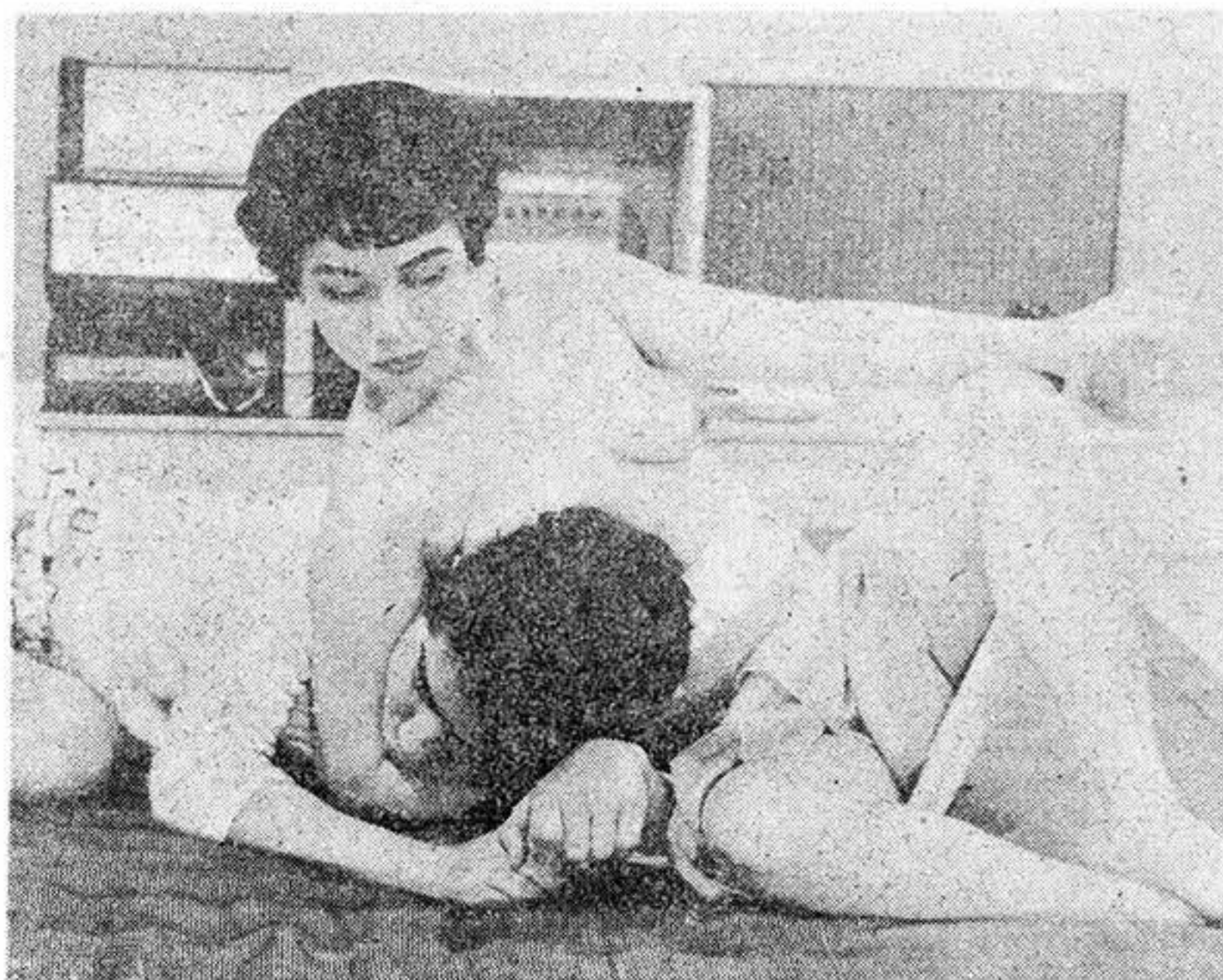
女王、男を責めるだけではない。

パンティだけの女王が、愛川悦子の胸に馬乗りになり悦子の顔を両股ではさんでいる。それだけではない。女王の手は悦子の頭を下からかかえて、上に持ち上げているのだ。悦子の口は、女王のパンティで猿ぐつわをされているのに違いない。

女王のぬくみを感じられる猿ぐつわこそ最高だ。

女王の「尻敷きプレイ」を見て嘆息をつい

(春日ルミと小沼正三)



てはいけない。

(根岸様、畜生、うまくやっていやがる)

「私が根岸氏と逢って半年以上も経ってから初めて春日女史を紹介しているのである。

るところ

続いて、

「真新しいタオルをとると、真佐子嬢の口へ

その間、私は彼と幾度となく逢って職業や年令、経歴等から、その私生活に至るまで熟知した上で、安心して春日女史を紹介したので。

私が彼女に紹介した。たった一人の人の根岸氏なのだ。

今までに数十人に数え切れない位の方から、そういった希望や申出を受けたことがあるが、すべてお断りしている」

三十七年三月号「編集手帖控から」より。

春日ルミ女王と根岸氏の間で、どんなプレイが展開したのか、やさもきしても始まらない。せめて「猿ぐつわ遊戯」でも見てなぐさめよう。

伊吹真佐子を後手に縛り、頭をかかえ、

「ルミ嬢愛用のレースのふちをとったハンカチーフを真佐子嬢の口へ詰めてい

手早くかまして、ぐいと引きしぼった」

真佐子の顔は、なんともいえないすばらしい表情をしている。うっとりしているんですね。

「猿ぐつわをされた真佐子嬢が、お姉様に甘えて抱かれているところ」

泣かせるねえ、この言葉。

女王の手は、真佐子のむきだしにされた乳房を握っている。

B 川端多奈子

「私はやはり縄で縛られるということに、一番強い興味を持っています」

「後手、それに高手小手というのですか、手首が、ぐっと肩先近くまで上るくらい厳しくされるのが好きなのです。」

「力まかせに二の腕の肌がしわるくらい、ぎゅうぎゅうと締めつけてほしいのです。強くされる程、私は満足です」

「精神的には、温かい思いやりとか、いたわりの気持を責め手の方にも持って頂きたいと願うのは、私の我儘でしょうか」

「縄のことなのですが、ごわごわしたものより、よく使い慣れて肌にぴったりまといつくようなもので、ぎゅっと締めつけられるのが

好きです」

「綿のロープで縛られて、一度にわか雨に遭ったことがあります、縄がきつく締って、ほんとうに緊縛感があり、それから、水で濡らされるということに興味を持つようになりました」

「後手に縛られたまま、風呂に漬けられたこともありました」

「脂垢で黒ずんだ、しねしねとした縄が、私の目の前にあらわれただけで、私の心はすでに放心状態になって、両手は思わず知らず自分から、後へ組み合っているのです」

三十六年八月号「縄と猿轡、近藤一さんに捧ぐ」川端多奈子の告白より。

告白は続く。

「ある日のこと、正座したまま後手に縛られて背後へ倒れると、いったポーズをとらされたときのことでです。」

丁度逆エビのような恰好にされて脚を曲げて坐ったまま太股がはりきれるように突っばって、たまたま痛くて、脇腹がぶるぶるとふるえるくらいでした。

あの頃の私は、きまって全裸で縛られていました。仰向いた私の口

の中へ、日本手拭がまるめて押し込まれたのです。さらさらとした木綿の布地が舌にさわって……その気味の悪いこと、新しいものではないので、なにか酸えたような臭気と塩っぱい味が口中一杯に漂ってきます。

思わず、う、う、う、と呻めいて目を白黒させました。手拭は尚もぐいぐいと押し込まれて、その上から豆しぼりで締めつけられました。私は一瞬、うーん、と息を吸い込んでこの初めての本格的な猿轡ぐつわを味わいました。

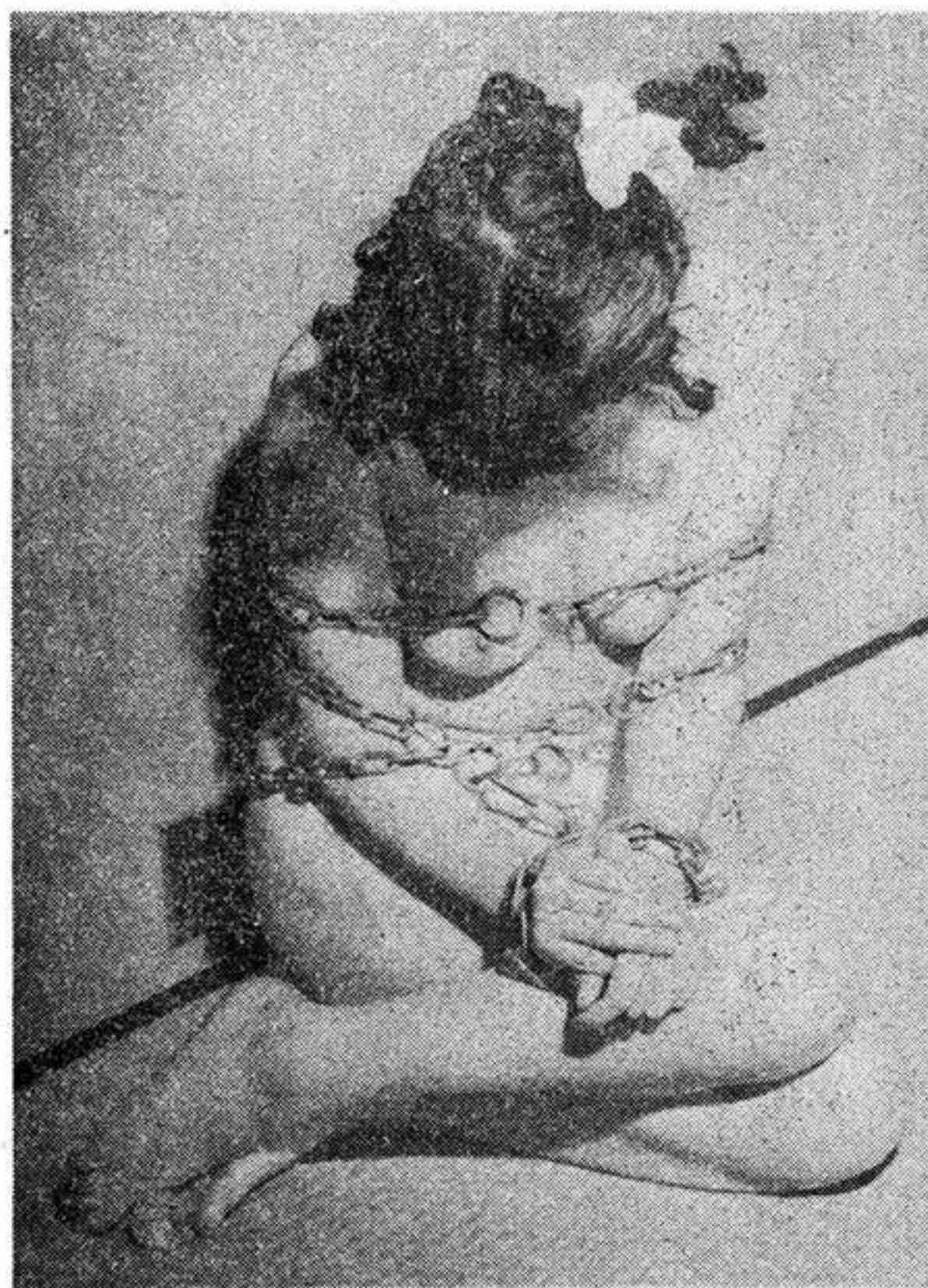
単に口の上から手拭を巻くだけのものとは格段に違った強い刺激を受けたことは事実です。

後手に厳しく縛られて、両手の自由を完全に奪われてしまった拘束感と、それにも増して、口の機能を完全に奪われてしまった束縛感、私の心をいたく喜ばせました」

マゾ女性としての告白としては、リアルで立派なものだと思います。

三十六年十月号の「縄の魅力」では、結婚話のために帰郷したもの、

「縄でガンジガラメに縛りあげられたい、という想念をすっかり打ち払いたいために、決



(川端多奈子)

(川 端 多 奈 子)



心して帰郷した私でしたが、縄の魅力はとうとう私を解放してはくれませんでした」

一日目、再び家を出た。

連絡船中で、かつて、文通の上一度縛られたことのあるKに会う。

「今晚は、ひよっとしたら彼の手で縛られるかもしれない。そう思っただけで私の身体中の血がにえたぎるように燃え上るのです。」

私は男の人にこの身体を縛られたいためにわざわざ大阪へ逆戻りしたのだろうか。

Kはいつも満足のようでした。もうどんな厳しく縛りあげたって、喜びこそすれ悲鳴なんか挙げない娘が湯上りの浴衣姿で涼んでい

るのですから。

ごわごわとして糊のよくきいた白光りのするロープは、まだ一度も人の肌を知らない生硬さで畳の上に投げ出されています。

Kが私の背後に近づいてくるなり、私は身体をくねらせて浴衣の右肩をぬぎ、右腕を背後へ回して、彼が縛りよいように恰好をつくってやりました。

そのまま背中中で吊り上げられ、肩へまわした縄をぐいぐい締めつけるので、右手首だけが首筋近くまで上ってくるのです。私は左手を畳の上について、うううと声を押し殺してこらえています。

左肩にかかっていた浴衣の袖もすべり落ちて、上半身がすっかり裸になってしまいました。

その後のことは、私は知らない。

「私はもっと強く締めつけてほしい、出来るだけ長い間縛っておいてほしいと心の中で願っているのです」

と告白は結んでいる。

縄の遍歴はなまやさしいものではない。

「緊縛モデルとして数々の縛られたポーズを写真にされ、その自分の写真をハンドバッグの底に忍ばせて、愛読者の人達と逢っていたあの頃のこと。自分宛局留で貰った手紙の数は今までどのくらいになるだろう。座談会に出席したときなんか、そのときの出席者全員の方々から、申し合わせたように手紙を貰ったことがあります。」

しかし、逢っては失望し、逢っては失望しの繰り返しだったのです」と文中にある。

三十七年七月号「バックナンバー」では、川端多奈子はすでに過去の人になっている。

遊戯の相手はいても、彼女の趣味を理解出来る結婚相手にはぶつからなかったのだろうか。「バックナンバー」のような告白は、フ

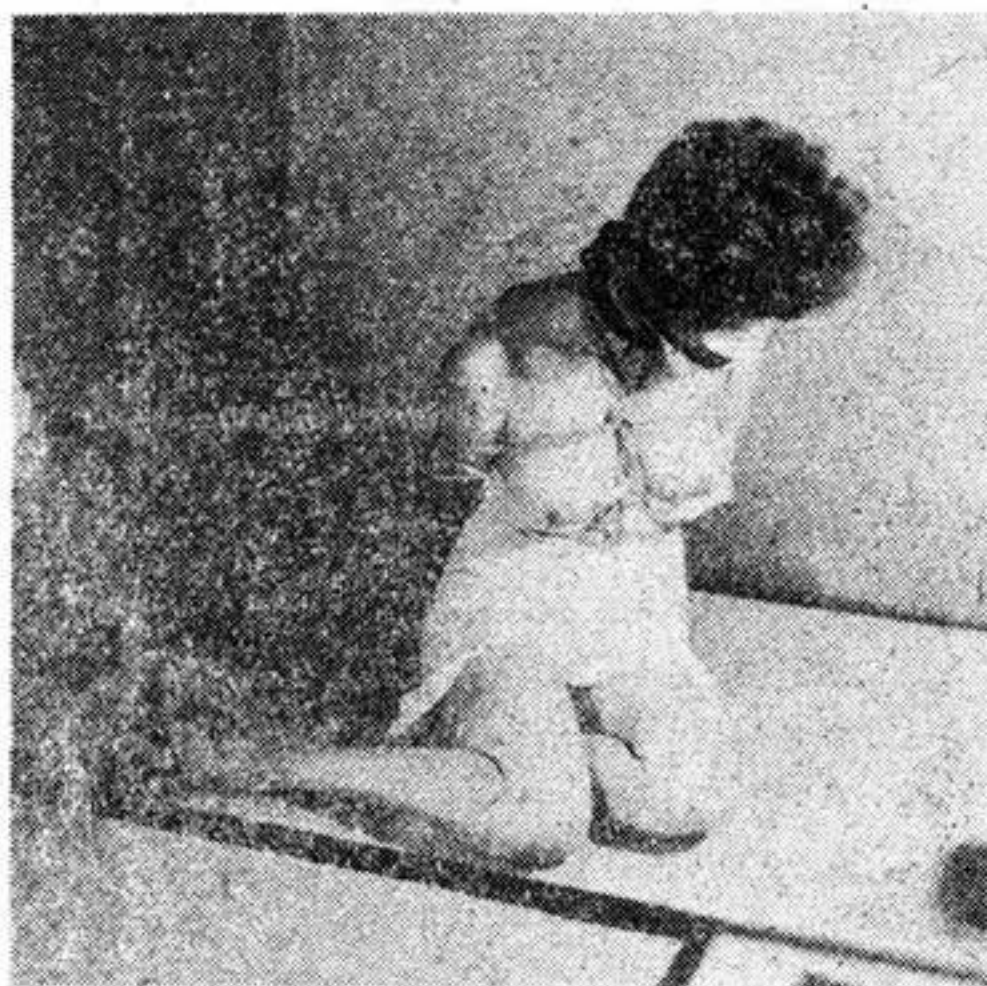
アンとして、読みたくはなかった。

川端多奈子の魅力を、近藤一氏の「川端多奈子を想う」三十六年八月号から紹介してみよう。

「奇クの中から生まれ、共に生長した川端多奈子。」

奇クの進路は川端多奈子の出現によって決まり、しかもその川端多奈子は奇クによって緊縛マゾヒスティンの境地へと導入されて行った。

川端多奈子のあの女らしい肉体を、彼女の



(竹野ひろ子)

満足のゆくまで吊るしておいたら、関節が外れ、血行が停滞し、肉体の先端から血が滴下するかも知れない。

革の窄衣を極限まで締め上げた上に水を浴びせれば、水分を含んだ皮は縮み上がって心臓を圧し潰すであろうし、長時間の放置の果は、捻じ曲げた両腕が凝り固まって神経麻痺を起してしまう。

現実には、とても行うに忍びないことを、川端多奈子という女体は相当の可能性を持って想像させてくれた。彼女の心なら尻込みはしないだろうし、彼女の肉体なら堪えてくれるだろうと思わせたのだ。

ギチギチという形容があてはまる程に、強烈な海老縛りもあったし、それに誌上に現われた典型的な逆さ吊りは彼女の被縛ポーズしかなかった。」

彼女は自己を識り、自己に誠実であろうと努めることを忘れない人だった。

自己に誠実であつたばかりに、現に川端多奈子が不幸であれば、いう言葉が無い。

川端多奈子の全裸被縛フォトを見てみると「女体」という言葉が、これほどぴたりくる人もいないと思われるのだが。

その意味において、川端多奈子ほど、女ら

しい女もめずらしい。

C 安原さゆり

三十八年九月号読者通信、羽村京子夫人より安原さゆり夫人あて。

「臨月間近い妊婦のよく熟れた巨大な果実を思わせる、ぶっくり膨らんだ丸い腹部の魅力は、妊娠している女性の裸体を見たいという男性の方々の願いをたっぷり満足させるでしょう。」

おそらくご夫婦の間がらでしょうか、安心して妊娠しているからだを、すっかりさらけ出して撮影されていらっしゃる」

同感です。

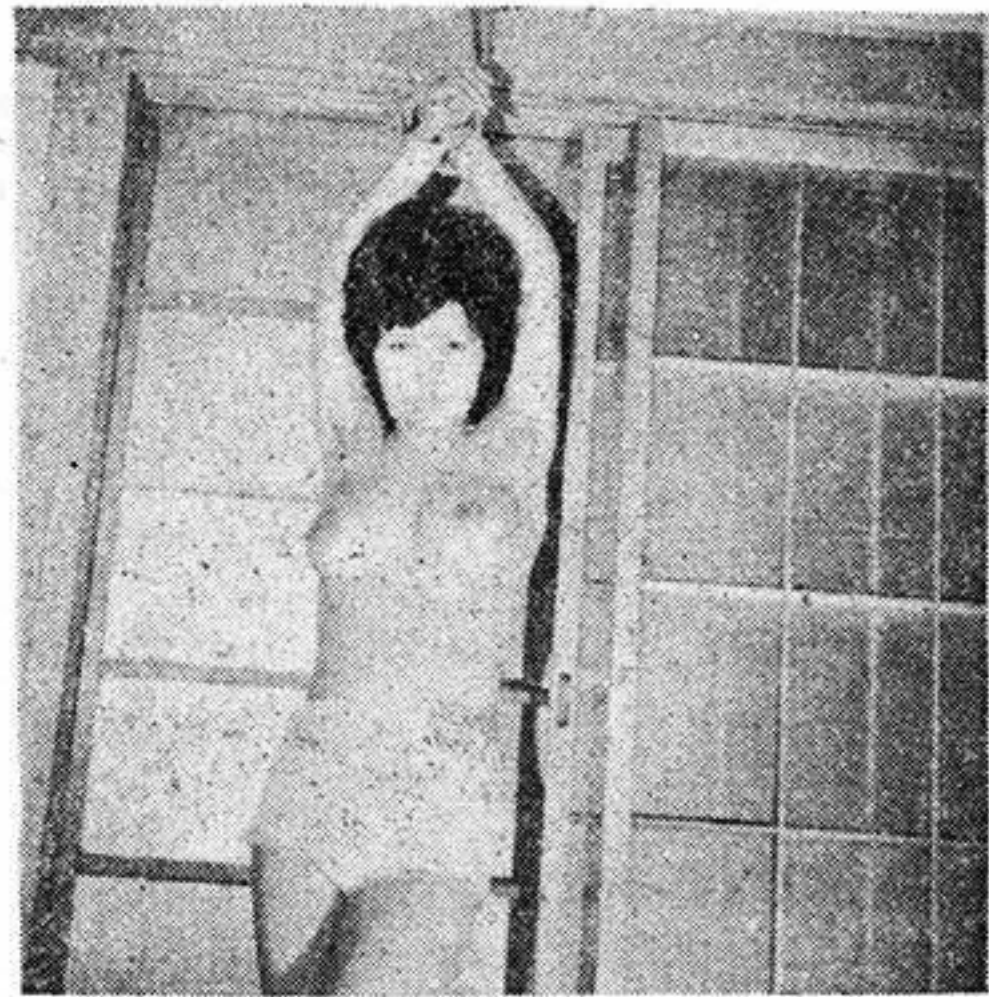
「それがこうして発表されて、好事家のあくなき鑑賞に供せられる。思ってみるだけで、何という素晴らしいマゾ感でしょうか。あなたは勇敢にもそれを実行なさったのですわ」

三十八年十二月号読者通信で、

「私の不格好な妊娠ヌードを奇クの愛読者の皆様にお目にかけるはずかしさと、興奮に身も染まる想いです。」

夫に嫁いで六年、ノーマルだった私は今日では完全にアブノーマルな飼いなされた雌犬同様な生活を送っております。

(五月亜紀子)



家の反対を押して同棲した時から、夏はシユミーズとワンピースだけ、冬はセーターとスカートだけ、その他の物は一切禁じられました。

夫の私に求めるのは露出とムチ打ちですが初めの内は肌にアワ立つ程だった私も、今は毎日の様な夫の責めを心持ちにするほどになりました。」

とさゆり夫人は告白している。妊婦のヌードという特殊な事情であり、夫の理解無しでは全く考えられない。夫婦生活にSMプレイ

が見事に活用された典型的な例であろう。

「冷えたためか子供に恵まれずにおりましたが、六年目に初めて身ごもって、皆様にヌードをお目につけられた次第です」

感謝します。

全裸立像の、出産を目前にひかえて、皮膚もはちきれそうな巨大な臨月腹を、ぐいとせり出しているフオトは全くすばらしい。

左右側面とななめ正面から、立ち上って膨大な臨月腹を突き出したカメラアングルは、毎日見ずにはいられない。

ことに、右側面全裸立像の、さゆり夫人の盛り上った腹部に、可愛いお臍がぴゅっと突起しているフオトは、分娩間近のことを暗示し、また、撮影されながら、さゆり夫人もいつしか興奮していたのではないかと思われ、『生むぞ』という気迫がひしひしと感じられるといっても、決して過言ではない。

さゆり夫人の全裸の臨月腹をさらけ出した大胆なポーズは、目録にあるように、マニヤでなくても、貴重な作品に間違いないのである。

薄い小さなパンティを着用している立像は、妊婦特有の垂れ下がった腹部と、背後に突き出した臀部との比較、全身との比較が容

易であり、さゆり夫人が健康にめぐまれた美しい肢体の持主であることがよくわかるのである。

四つ這いになって、どっしりした腹部を垂れ下げたポーズは圧巻で、豊満な臀部からねらったカメラアングルには、全く驚異的なフオトと感心せざるを得ない。

さゆり夫人が着用している可愛いパンティが気になって仕方なかったが、通信に「ヌードに使用したパンティも、普通は使用出来ませんので、どなたか欲しい方に、お分けたしてもと思っています。色はみどりです」

とあるのを見て呆然自失した次第である。(のどから手が出るというのは、こんな時の気持なんでしょうね)

天邪鬼かもしれないが、夫婦のSMプレイがフオトに表現されているのは、むしろ、始めて発表された、犬の首輪をはめられたり、鼻輪をつけられたりしているさゆり夫人のフオトのほうが、よくその雰囲気を与えているような気がするの、私だけだろうか。

写真の技術としては下手かもしれないが、なんでもないようだが、計算されつくりだされた美と次元を異にした、安原夫妻のSM

(愛川悦子)



プレイに対する息吹きが感じられるのだ。後手の簡単な縛りは不用だけど。

片膝を持ち上げている坐像は、まん丸な腹部をよりよく美しくあらわに見せてくれている。羽村京子夫人もはめていられる。妊娠という実感がこもっているフォトである。

夫婦生活が、この上なく幸福でありますように。

D 竹野ひろ子

竹野ひろ子、二十三才、洋装店勤務。
(初めてお便りします。私は二年程前からの貴誌の愛読者です)

この通信は、十二月号辻村隆「ひろ子緊縛記」にも載っている。

(薄いコバルトに白い模様を散らしたワンピースの清楚な長身の女性が、音もなく入って来た。白いマスク——)

左の腕にさげた白いハンドバッグ。そして右手に今年の若い女の間で流行している濃緑

三十六年十一月

号読者通信

(辻村様、是非、

私も一度責めて下さいませんか)

とあって、

(私も胸をぐるぐると括られ、ゴムのオムツカバーでくるまれ、レインコートを着せられたら、どんなだろうかと胸をわくわくさせております)

のサングラスを持って——。

「竹野ひろ子さんですね?」

「……」

女性は頬をパッと染めてうなづく。

「辻村です」

「あっ」

ひろ子さんはマスクを外すと、小さくつぶやくようにいった。ハリのある綺麗な声だった。切長の稍小さい理智的な瞳、少し顎の張ったしやくれた感じ、色白の広いひたい、綺麗な歯並び)

初対面の印象である。

かくして、読者通信の女性は、その望みをかねえられて、縛られることになる。

(辻村さんなら、仕方ないやね)

二人の会話の続き、

(「どうして、古川裕子が好きなの?」

「雨の日、レインコートに身をくるんで、頭からすっぱり頭巾をかぶり、体中汗ばみ乍ら雨にずぶ濡れになって街の中を歩くと、古川裕子さんの、文中の人になってレインコートの上から、ぎりぎり締めつけられたいような気になるのです」

「後悔はしないでしょね」

「辻村さんを信じてね」

(愛川悦子)



乙女としての恥らいが強いのだろう。)

緊縛第一号は、服の儘の床柱縛り一、二枚
猿轡をはめる。このフオトは好きだ。

続いてシュミーズ一枚の緊縛、床柱の背で
両手を縛りあげる。猿轡は彼女には不可欠。

シュミーズの下から盛り上がった豊満な乳房
が悩ましく、眼をつぶったひろ子の表情は新
鮮で全くすばらしい。このフオトは大好き。

(何の躊躇いもなく、彼女の上半身を裸に剥
いてしまった)

と「ひろ子緊縛記」にある。

(見かけによらぬ豊かな乳房は、娘盛りの盛
熟をまざまざと見せ、淡紅色の乳首の可憐さ
が、そこにありありと、ひろ子の処女性を如
実に示していた)

胸の上部に二筋、乳房の下部に二筋、乳房
をはさんでの緊縛フオトは、ひろ子の猿轡を
された顔を重点にしたとは思えない。

(抱え起こして猿轡の手拭を締めつける。う
うと呻めき声を出す、口の中まで布片を

詰め込んだ本式の猿轡なので、何をいって
いるか私には判らない。これが彼女の望みの姿
態なのだろうか)

ひろ子の通信には、

(息も出来ない位に強く噛まされた猿轡を

私も一度はされてみたい)

とあり、また、

(ぐっと口を締めつけられると息苦しいよう
な緊迫感が、私を被虐の世界に導いてくれる
のですわ)

と、辻村氏にいている。

鼻柱の上まで、顔の殆ど半面をおおった猿
轡、この人ほど猿轡のよく似合う人はいない
のじゃないかしら。眼の表情がぞっとするほ
どにくいね。

(パンティ一枚にして、全身にビニール布を
巻きつけて、その上から、犂々と太縄で緊縛
して行った時、初めて強い反応を示した)

と「おしめカバーガール」にある。三十七
年一月号辻村隆「続ひろ子緊縛記」

(透明なビニール布の下で、豊かな双つの乳
房が激しく波打っていた。閉じた瞼が、微か
にヒクヒクとけいれんして喘ぐような呼吸を
した)

(容赦なく、私はその唇に透明なナイロンの
猿轡をはめた)

初対面の時に、ひろ子は辻村氏に、

(自分で自分を縛るってことは案外難しいけ
れど、そんな時、素肌の皮膚の透き通るナイ
ロンのレインコートを纏った上から、自分で

「じゃ、出掛けましょう」

「あっ、もう一つ。私、申し難いんですけど
全裸にはなりませんことよ。どうしても、必
要ならとりますけど、パンティだけはね、ど
うしても、いや」

ひろ子さんは眼を閉じてうなだれる。

「それに……縛り以外のことは何もなさらな
いで……」

「いいですとも——」

緊縛に憧れ、古川裕子に陶醉する彼女も、

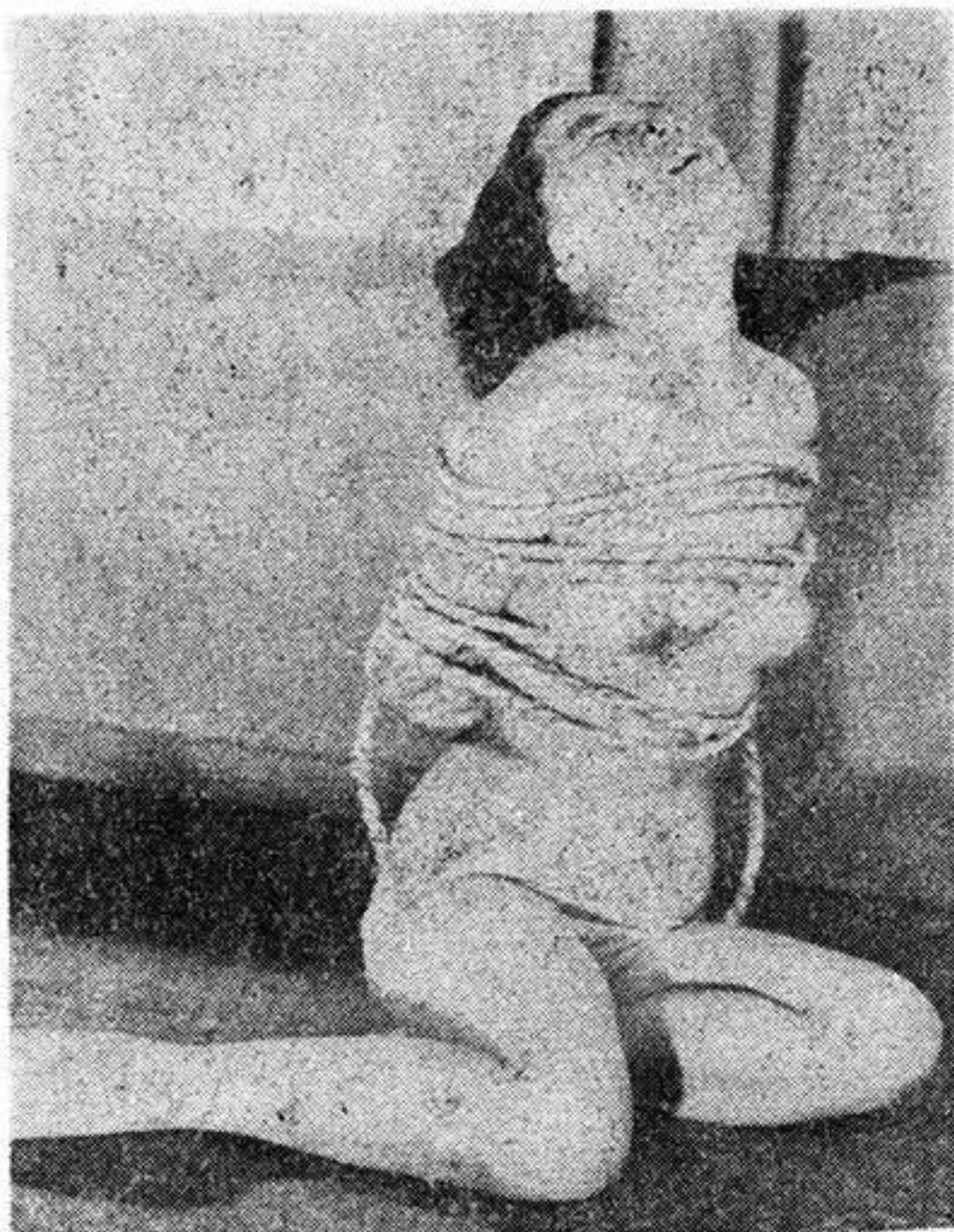
ぐるぐる巻きに、きつく体全身に巻きつけて猿轡をして、床に転々としていると、ジーンと背骨を刺すような陶酔感が走るわ」といっている。

ナイロンの布はぐっしよりと彼女の汗に濡れていた。

ビニール布で巻かれた竹野ひろ子のグラビアは「新しい目ざなし」と題がついている。

清楚な眼、美しい人だとはれぼれる。

(私はひろ子の、両手足を一纏めにして縛っ



(大塚啓子)

た。太腿と胸が密着するようにかがませ、胸

から腰へと、太腿ごとぐるぐる巻に縛り上げた。人間のお荷物だ。エバソフトの袋の口を

大きく広げると、臀部にあてがい、片手で背

中の縄を握って、ぐいと体をこじ上げ、袋の

口に臀から入れた。ついで、そろそろと袋を

たぐりよせて彼女の体に袋をかぶせて行く)

(遂にすっぽりと袋の中へ彼女は納まった)

グラビアの題は「ビニール袋の機密室」グ

ラビアの中の圧巻であり、強烈な印象は他の

追従を許さない。

緊縛記は続く。

(袋の口を細い紐で縛り、しっかりと口をしめた。袋の中の僅かな酸素が、数分は彼女に呼吸を与えてくれるだろう)

(私は嗜虐に憑かれて、彼女の身体を袋ごと抱きかかえ腰の辺りまで持ち上げて、ドサリと敷布団の上に投げた。袋の中で悲鳴が走った)

(これが最後のつもりで、尚も私は袋ごと、彼女を引曳り廻した。ヒイヒイと苦悶の悲鳴が大きく洩れ始めた。私は手を止め

た)

(袋の口の紐をとき、ずるずると袋から引曳り出した時、彼女は全身汗にべとついて風呂から上った様に濡れていた)

今度は撮らないでプレイだけして、とひろ子は辻村氏にいつている。カメラなんかにわずらわされないで、ゆっくりプレイを楽しみたいの。

いいですね、この言葉。

「さるぐつわを求める女」「私のよろこび」の竹野ひろ子は私は好きだ。長襦袢や腰巻には興味はないのだけど、彼女の豊満な女らしい柔かな肢体が、よくマッチして悩ましい。ことに、左の乳房に、ポツンと小さな突起物がある。それがこたえられない。

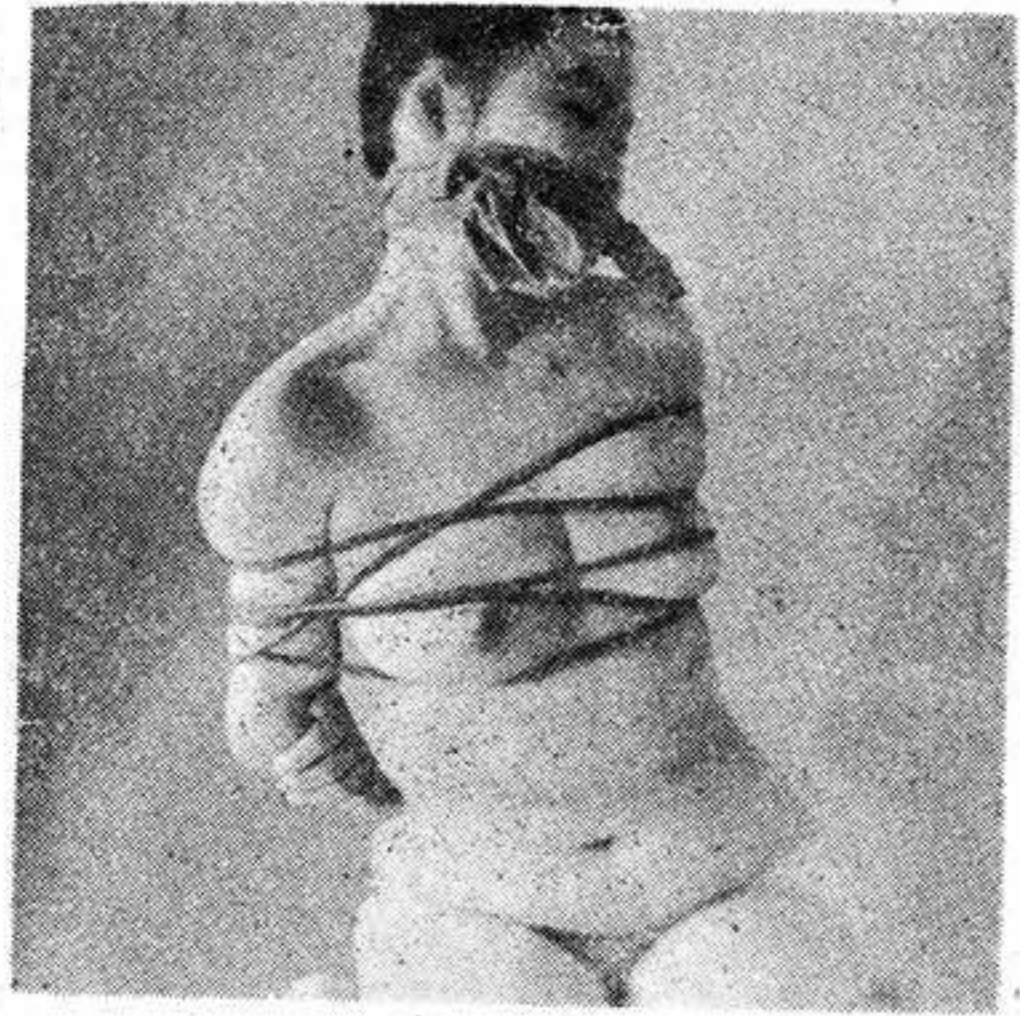
美しい乳房も、それだけで竹野ひろ子のファンになるのに充分だ。見ていても、吸いつきたくなるような豊満な乳房である。

さて、忘れてはいけないフォトがある。

おしめカバーをつけた竹野ひろ子のフォトである。緊縛記に、

(おしめカバーをはかせ、黒い眼鏡をかけさせ、頭から首にかけて、おしめカバーをかぶらせた。猿轡は、生理帯の替ゴムだった)(激しい息づかいが替ゴムの隙間から洩れ、

(大塚啓子)



彼女はうっとりとした様に、己れの曝し者の姿を鏡に写して見惚れていた)

とある。

(替ゴムの猿轡を外してやると、ひろ子は放心したように、その場にうずくまった)

古川裕子に彼女自身がなり切った、自己感激の一瞬であった。

私の最も好きなフォトである。

願えれば、竹野ひろ子の使用したおしめカバーがほしい。おしめ? もね。

この頃、グラビヤに竹野ひろ子のフォトが見られないのは、残念なことである。

彼女自身いつているように、彼女はモデルではないのだから、これも仕方のないことなのだろうが。それだけにおしいなあ。

竹野ひろ子のファンは、全国に数多いのではないかと確信している。

竹野ひろ子の夫君がうらやましい。

(美しい奥さんを縛れる奴は、どこのどのだ。それとも、まだ結婚してないのかしら)

E 五月亜紀子

一月号にも「危ぶまれるもの」という題でグラビヤがあるが、全く五月亜紀子のフォトは、その表情が危ぶまれる。

「彼女はちよっと恨めしそうに私を見た。肩がかすかに震えているように見える」

と、「新人撮影行」にあるから、恨めしそうな表情なんでしょう。

文献特集号、由岐敏夫「五月亜紀子さんの場合」

「彼女にいきなり縛るといふ目的を説明した時、大きな特長のある、その眼をクルッと向けて初めはビククリしたようだった」

彼女、緊縛モデルは初めてらしい。

「だんだん話している内に彼女は羞かしそうに笑いながら首をすくめる真似をした。恐らく、そんな事は想像もしていなかったに違いない」

「頃合いを見て着ているものを順々に剥いでいった。彼女はもう顔を上げられないで、うつむいたまま消え入りそうであった」

彼女の表情の秘密がここにもあった。消え入りそうな表情。眉をひそめてね。

「むき出された肌は想像以上に美しく、私は眼を瞞った。色の白いしっとりとした肌は若々しく引締って、特にその胸の隆起は、はち切れそうに見事なものであった」

坐像のフォトの乳房は、若々しく、はち切れそうで、突起した乳首から今にも白い乳液が飛び出しそう。健康な新鮮な豊満な乳房がそこにある。

「裸にむかれて縛り上げられている亜紀子さんのしいたげられた美しさを見てみると、暑さなんか何処かへすっ飛んでしまうようだ」

「猿轡を嵌めて様々な形に彼女の身体を折り曲げたりした。彼女はとうとう痛そうな呻きをもらした」

初々しい五月亜紀子さんを私は愛する。

F 愛川悦子

三十六年十月号、塚本鉄三「ゴムの感触とフェチ好み、緊縛フォト撮影の実際」より。
「おむつを当ててカバーで包み、冷たい石の上へじかに坐らせておく。身動き出来ない女体は、次第に迫りくる尿意に身悶えするが、口にかまされたブラジャーの猿轡は苦痛を訴えるすべさえないのだ」



(関谷富佐子)

「といって極限に達してきた尿意は全身の毛穴を鳥肌だたせ、身ぶるいする悪感がぞくぞくと襲ってくるのだ。目の前にトイレがあるのだが、なんとかしてそこまで這ってゆけないだろうか」
私好みのフォトだから、大切に保存してある。

ゴム製おしめカバー着用と、花模様のブラジャーによる猿轡、後手しぼり高手小手の愛川悦子の全身からマゾヒスチックなムードが漂ってくる。

春日ルミ女史に責められていた頃の事がなつかしい。

「彼女はただ呆然と、放心したように坐ったままだった。虚脱した全身に、ほっとした解放感が快く感じられたが……」
トイレが見える

フォトなんかすみずみまで計算されていて楽しい。

それに、おしめカバーに愛川悦子の放出した量感さえ感じられて身体がふるえてくる。
(そこまで責めつけたのかしら)

G 大塚啓子

ベテランの大塚啓子さんについては、何もいうことはない。

「スタジオに入ると肌脱ぎになって大急ぎで化粧、ライト、カメラの準備がOKとなった頃には、彼女も衣服を脱いで待機していただける」

「この頃一入色の白さを増し、ぼってりとした肉づきの豊かさを見せはじめた彼女は、最初のようなぎこちなさが、すっかりなくなつて縄づいているというのか、全く頼もしいモデルぶりである」とある。

三十七年八月号塚本鉄三「縛り過程の変化と表情、緊縛フォト撮影の実際」

「おしめカバーの悪用」「バンドの猿轡」「おしめカバーとゴムの感触」「粘着タッチとゴムカバー」と私好みの作品は多い。

中でも、おしめカバーで頭と顔をすっぽり

(関谷富佐子)



ドの替ゴム、ビニール、白マスクと色とりどりだ。

「口もきけないくらい厳しく顔の中心である一器管を荒々しく封鎖されたという凌辱感。更に猿轡ぐつわに使用される布片の種類(例えば使用中の禪の如きもの)による汚辱感といったものに至るまで十分考慮に入れねばならない」

「これを施される者の立場から見ると、口から呼吸が出来ない(息苦しい)押さえつけられた舌が痺れてくる(ほおばった感じ)」といった色々の圧迫感が起こってくる」

「口を動かしたり舌で押し下りして布片を吐き出させないためには、口を一杯開けたままになる位の、大量の布片を詰め込む必要がある」

「ぐいぐいと沢山の布片を口中に詰め込めば必然的に嘔吐を催しそうになるものだ」

三十七年二月号、塚本鉄三「乳房、臍の強調とビニール猿轡、緊縛フォト撮影の実際」
「本当に猿轡の醍醐味を味うとすればどうし

ても、口中に詰め物をして、しかも、それが自由に吐き出すことが出来ないという状態において、発揮されるのではないかと思う」
親切な解説だと思う。

そこで、本格的な息苦しいまでの拘束具としてのビニールの猿轡の実演となる。

「マゾ女性の告白によれば、概して彼女たちは、厳しい責めが烈しければ烈しいほど、息苦しいまでの猿轡を嚙まされている方がよいそうである」

そういうものなんでしょうね。

レインコートのフードを切ったビニール特製の猿轡は、

「あお向けに倒れて、足をばたばたさせて悶えるのは、まだいささか早かったようだ」

とあり、彼女のもがき様はすさまじかったらしい。鼻口に蓋をするビニールは、忽ち彼女を呼吸困難にし、後手に縛られているのでただ頭を動かすだけだったらしい。

これを知ってフォトを見ていると、倒れた脇腹に足をかけて踏んでいるフォトは、いささか残酷だと思われる。

「体重を片足にかけて腹を踏みつけられ、思わず顔がのけぞって苦悶の呻めきを洩らす」と書いている。

おおった「おしめカバーの悪用」は、私のアルバム中天下一品の威容をはこっている。

マニヤの気持を、よく理解した作品だと思う。一月号の「嵌口、口中の詰めもの」が気になったから、大塚啓子の猿轡について触れてみる。

一月号のグラビヤの猿轡は、フレヤーのついた可愛いパンティじやないのかしら。

ゴム、そのものずばりの猿轡、メンスバン

ベテランモデルのマゾ性の真髄というところか。猿轡の中ではバンドのゴムが好きだ。

大塚啓子は、操り責めを最も恐れているという。両手を後手に縛られて、無防備の柔肌に加虐される操り責めは、感受性に富む彼女のことだから、あっさり降参してしまうのだろう。

そういえば、グラビアの「操り責め」「足のいたぶり」などの彼女の表情は、ベテランらしい落ち着いた表情の彼女にとっては、めずらしくくずれていてすばらしい。半開きの口も苦しそうだ。

全裸に近い大塚啓子は美しい。

大塚啓子の圧巻は、「逆海老縛り」であり

「海老固め」だろう。

うつ伏せにした彼女を足を折り曲げていくと、顔面から上体にかけてそり返ってくる。

じりじり縄を締めつけていけば、

「くく、くるしい」

美しい表情が出るまでシャッターは切らない。

(三十七年八月号参照)

拘束感を満足させてくれるフォトに、一月号「サテンの責衣」二月号「革拘束具装着」のグラビアがある。

革の責めを受けている彼女を見ると、モデルらしいモデルさんだと感謝する。

(透明なパンティを穿いた、うしろから撮した綺麗なフォトがあるでしょう。長い黒髪と豊満な臀部がパンティからすき透って美しい。こんなロマンチックなフォトも大好きです)

H 関谷富佐子

関谷富佐子夫人の手紙、

「私は結婚後一年半になります人妻でございます。夫は私と結婚する以前からの貴誌の愛読者です」

「ここに同封しました四葉の写真は、夫が私をモデルとしてうつしました写真です」

「ぜひ私をモデルとして写真をとっていただけませんか」

「貴誌のグラビアによってマゾの私を沢山の愛読者の方に見て戴きたいと思ひます」

とあり、

「私は一度男の方にきびしく縛り上げられ思いきりきついむち打ち、逆さ吊り、浣腸責めなどにしてほしいと願っております。きつければきつい程私はうれしいのでございます」

「主人が毎日六時半頃帰宅いたしますので、

午後二時から五時頃までの間でしたら、毎日いつでも結構でございます」

と結んでいる。

「落着いた上品な物腰、どんなことでも嫌味なく答えてくれる綺麗な声、私はこの初対面のモデルに対して、何のともないもなく、のびのびとした気持で準備をすすめてゆくことが出来ました」

「彼女もすっかり洋服を脱ぎ、持参のブラジャーにバタフライという姿で待っていてくれました」

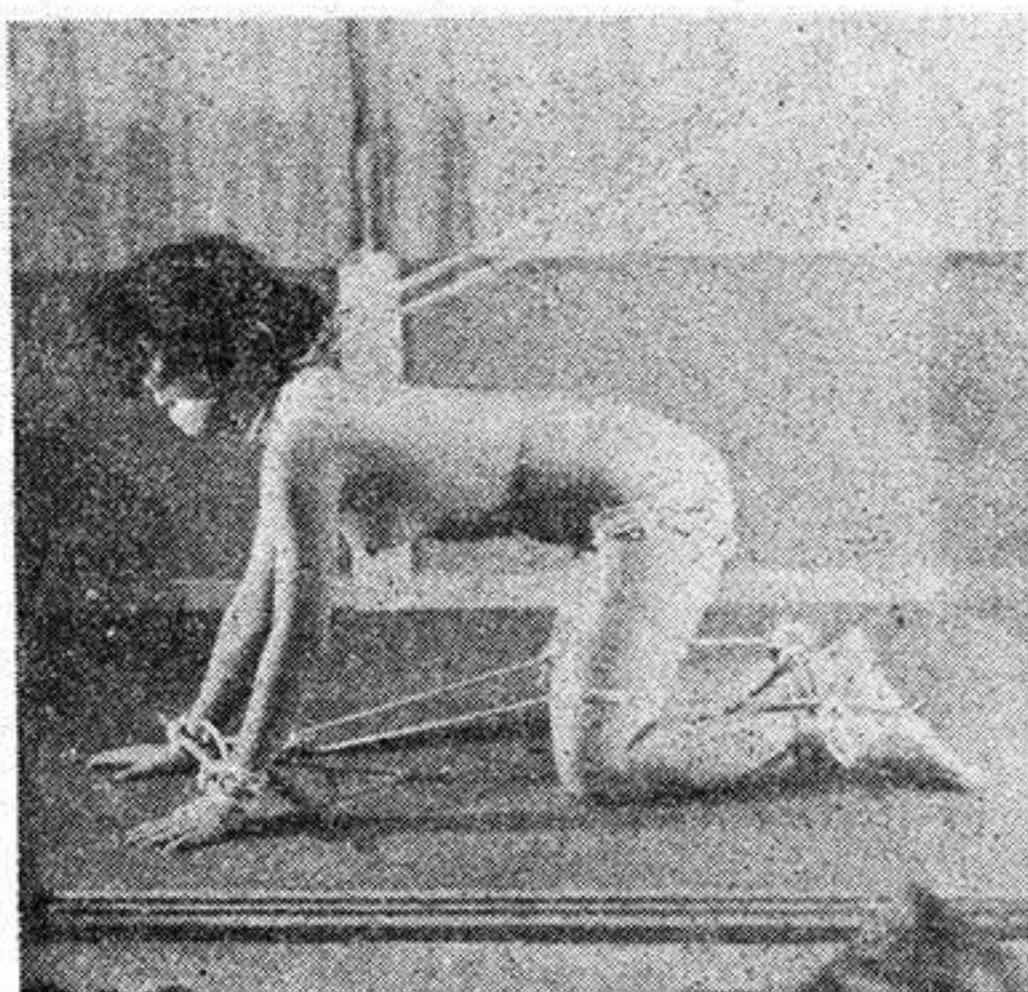
すでに夫によって飼育されている新妻という雰囲気伝わってくるようだ。自然なんですね。

「彼女の肉づきのよい、それでいて均整のとれた素晴らしい肉体、胸から腹部にかけての素晴らしいポリウム。真白い肌は健康美に輝いています」

「殊にお臍を中心とした前面のカーブが気に入りました。ムチ打ちの激しさにも耐えるという彼女の両の臀部も魅惑的な膨らみを見せています」

ムチ打、逆さ吊り、浣腸責め、と続けて書くこと、関谷夫妻の夫婦生活が、何かなまめいて、うらやましく思えるのだが。

(東浦ひかる)



「私が彼女の髪の毛を掴んで仰向けに倒そうとした時、彼女のバタフライの片方の紐がとけて、太股の肉づきがあらわになりました。猿轡の中で息のくぐもった、うううという彼女の初めての呻めきを耳にしました」

以上、三十七年十二月号塚本鉄三「若妻をモデルとした構成、緊縛フォト撮影の実際」

関谷夫人の第二回目の手紙、

「主人も冷やかし半分写真を鑑賞していましたが、あれから二、三日は、ずい分ひどい折檻をされました」

「主人も少々の縄やムチの痕だったら構わないと申しております。いや、実のところ私の身体に跡が残っている方が主人も喜んでいるのかもしれない」

「次回私は私がムチを持ってまいりますから、どうか激しいムチウチを直接肌に加えていただきます」

「私は結婚以来、主人から激しいムチ打ちに仕込まれ、時には失神するまで打たれたことがあるくらいです」

「どうか、思うままに私の肌をうちのめしてそのときの激しい表情の変化を、お写真にとって下さいませ」

「彼女のパックから取り出した貴用のムチ。それは、彼女がご主人との激しいプレイに十数度いな数十度の使用に耐え、彼女の肌の脂を吸った柔軟な革製のものである」

「富佐子夫人は全裸である。」

「エビ縛りの彼女の臀部に、最初の一撃をふり下した。その一撃に対する彼女の反応は全く見事なものである。びくっととびあがるようにけいれんした全身が、縄目の喰い込むのもかまわず、激しい伸縮をした。素晴らしい躍動。続いて、二撃、三撃、

「私にしても、このような激しいムチ打ちの経験は初めてだった。汗にまみれてムチ打ちにもだえる被虐美の極致が、関谷夫人によって演じられているのだ」

「固ぶとりの豊かな双丘に、ぴくりという弾きかえるような、あの反動、あの感触。打たれるたびに、飛び上り、跳ねかえる女体」

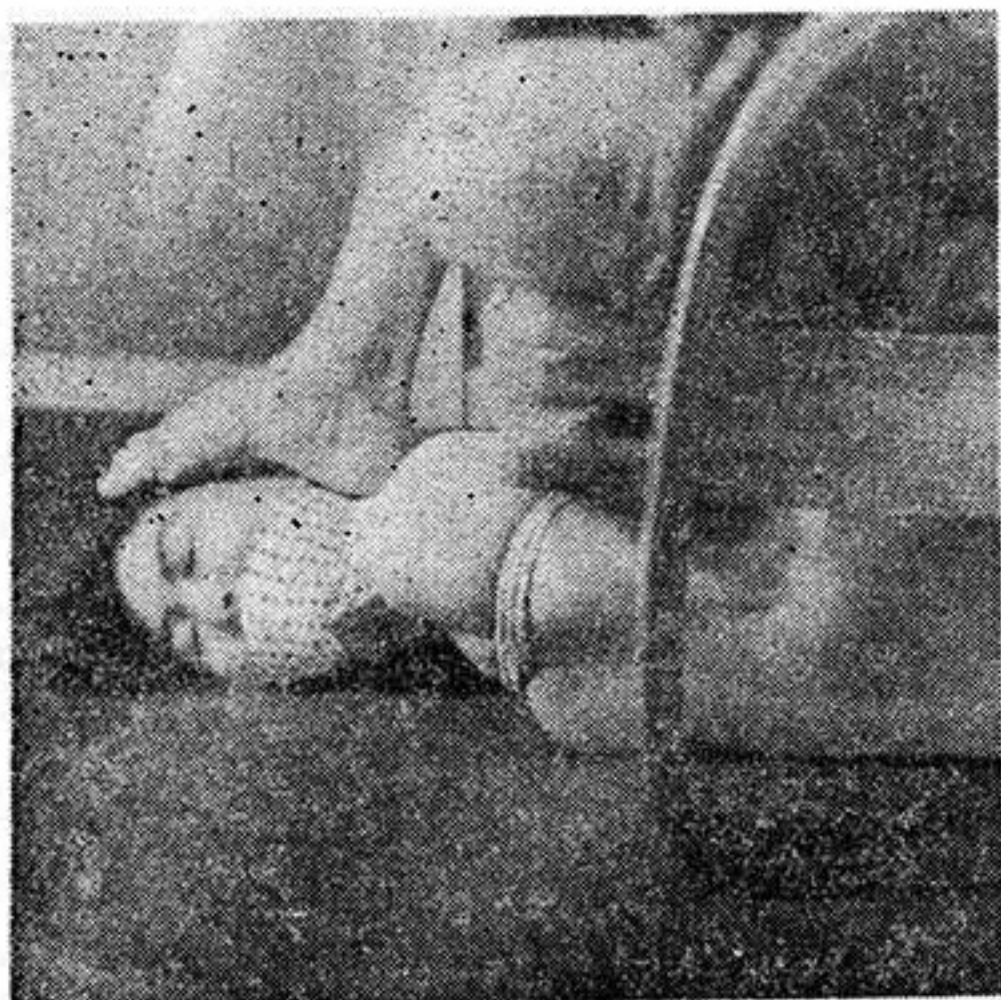
三十八年一月号「答打ちに悶える媚態、関谷富佐子第二回の撮影」より。

グラビヤの関谷夫人の躍動美を見ればわかることである。ムチ打たれている表情が、なまなましく伝わってくるようだ。

三日後、

「バタフライの両脇の結び目を解いて臀部を

(東浦ひかる)



まる出しにする。豊かなポリウムを見せた双丘には、うすくムチアトが二条三条残っているだけで、白い肌はほんのりとかすかな赤味を帯びて逞ましい盛り上りを見せている」

「忽ち臀全体が真赤に染まり、その真赤の肌の中に、数本のミミズ脹れが、はっきりと見える」

「脛から内股、太股、臀部、そして時には足の裏へ」

ミミズ脹れはすぐ引くものらしい。ほんの

りと赤味が残るだけだという。

くわしく知りたい方は、三十八年二月号の「関谷夫人緊縛日記」をごらん下さい。

富佐子夫人三回目の手紙、

「枚数は多くありませんでしたが、その少いお写真の中に、私のムチうちに悶える姿がいきいきとあらわれていて、本当に有難うございました」

「グラビヤでは全国各地のマニアの方々に関谷富佐子の激しい表情の変化をあますところなくごらん頂き、マゾの私としては、本当に満足でございます。まるで、衆目の中に晒されてムチ打たれているような気持でございます」

「最初思いました、主人と相談いたしました折も、自分ながら大胆なことだと、一寸あきれておりました。でも、私は今となっては嬉しさでいっぱいです」

その気持わかります。ご主人もよく理解して許して下さったものです。その勇氣には敬服します。グラビヤが夫婦の刺激となり、その刺激が夫婦生活を円満にみちびくとすれば夫婦生活の中に生きたSMプレイの最高と称しても過言ではないでしょう。大胆、全く結構なことです。発展して下さい。

「今度こそ、この私の身体はすべて貴方さまにおまかせします。どうぞお気のすむようにお仕置下さいませ」

ときた。

(塚本氏なら、仕方ないやね、畜生)

「私は主人の好みに飼育されました結果、ムチ打ちについて大変な喜びをいただいております。先日、貴方さまから受けましたムチ打ちも、本当に全身の痺れるような感激を味わいました」

どうして飼育したか、ご主人におたずねしたいものです。飼育日記をお書きになって発表なさったらいかがなものでしょう。リアルで、最高の読物になると思います。

それとも夫婦の秘密ですか。やけるねえ。

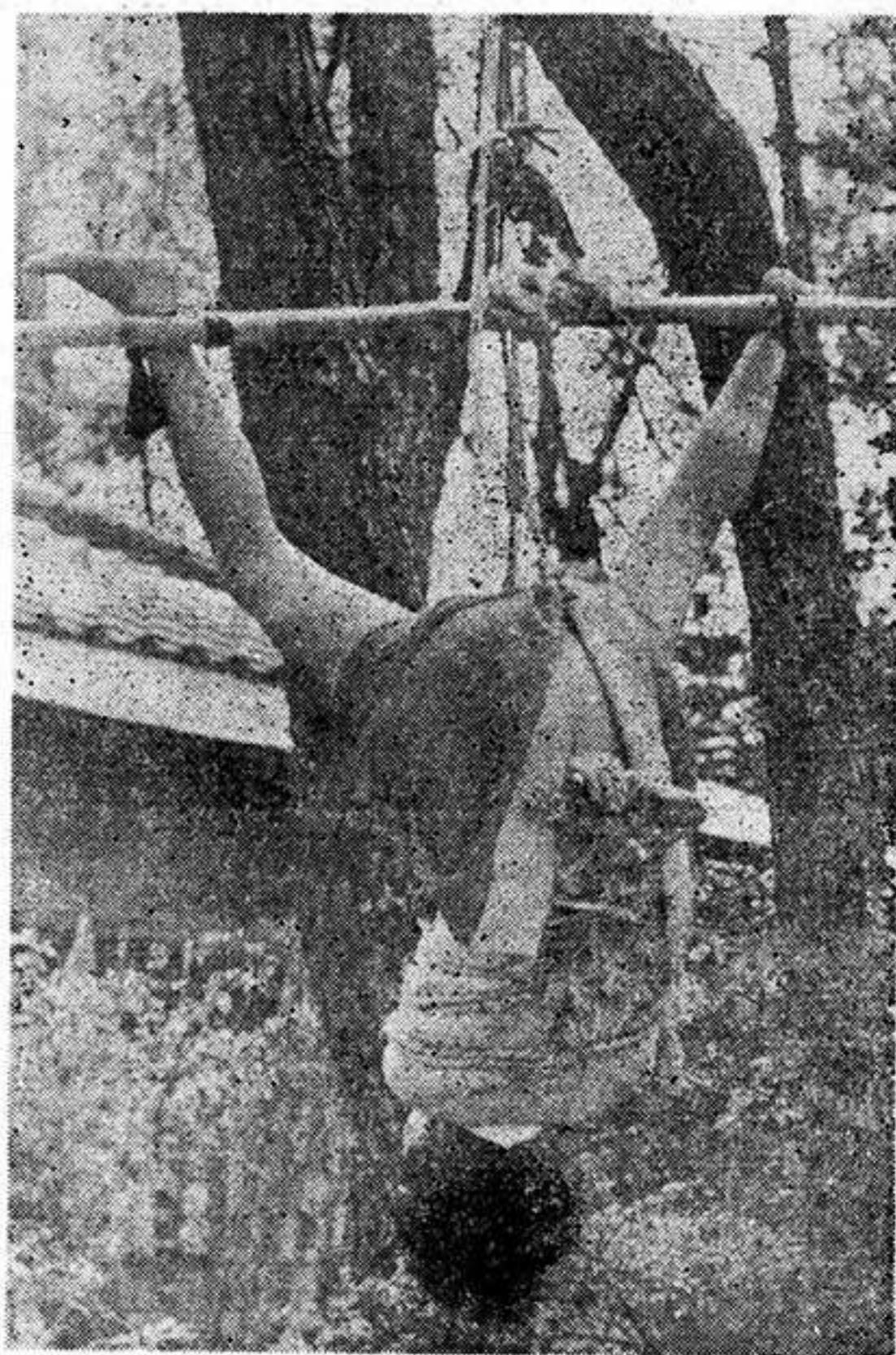
「浣腸されて排便を抑圧された苦痛にもだえる表情を、刻明にフィルムに印していただきたいものだとお願いします」

とあるが、このフォトは是非見たいですね。

三十八年三月号「芦屋マダムか白百合夫人か」より。

関谷夫人の連絡は、一回目が西宮市甲東局止、二回目が西宮市西宮局止、三回目が芦屋局止になっている。参考まで。

(梨花悠紀子)



ようなバランスのとれていない私の生活に力強い絆を与えて下さる方っていないでしようか」

というもので、「ここ半年間ばかり、何人もの方から縛りの経験を受けました」

「私はずっと家におりますので、身体はあいています」

三十八年一月号

富佐子夫人のグラビヤは、全裸であるだけに、刺激が強すぎるかもしれない。

I 東浦ひかる

「わたしを責めて下さい」で有名。

三十七年七月号読者通信に、彼女の通信がある。

「私の心の中のふていな欲望とはことかわり毎日が平和で平凡な生活です。どなたかこの

の読者通信では、それから半年ばかり病氣のため入院したらしい。

退院後モデルに復活している。

さて、三十七年十一月号、辻村隆「雑踏の中の孤独、わたしを責めて下さい後日譚」では、

「水色のパンティ一枚になって踞まる彼女に私は素早く近づいて、両手を軽く横に上げさせると素肌の乳房の上に二巻き、下に更に二

巻きして乳房の谷間で結んだ。その縄を臍の辺りまで二線に伸ばし、腰で再び二巻きした上股に廻して結びをつくり、その儘臀部の合間から背に締めあげて、努めて結び目を小さくして繋ぎ止めた」

その上から、ひかるはシュミーズをかぶりブラウスを着る。ブラジャーはつけない。二人は何をするつもりなのだろう。

「乳房の上下で締めつけた縄の強さが、ひかるの服の上からでも胸部をぐんと大きく張りきらせていた」

「ひかるはぎこちなげに、そろそろと小股で歩を運んだ」

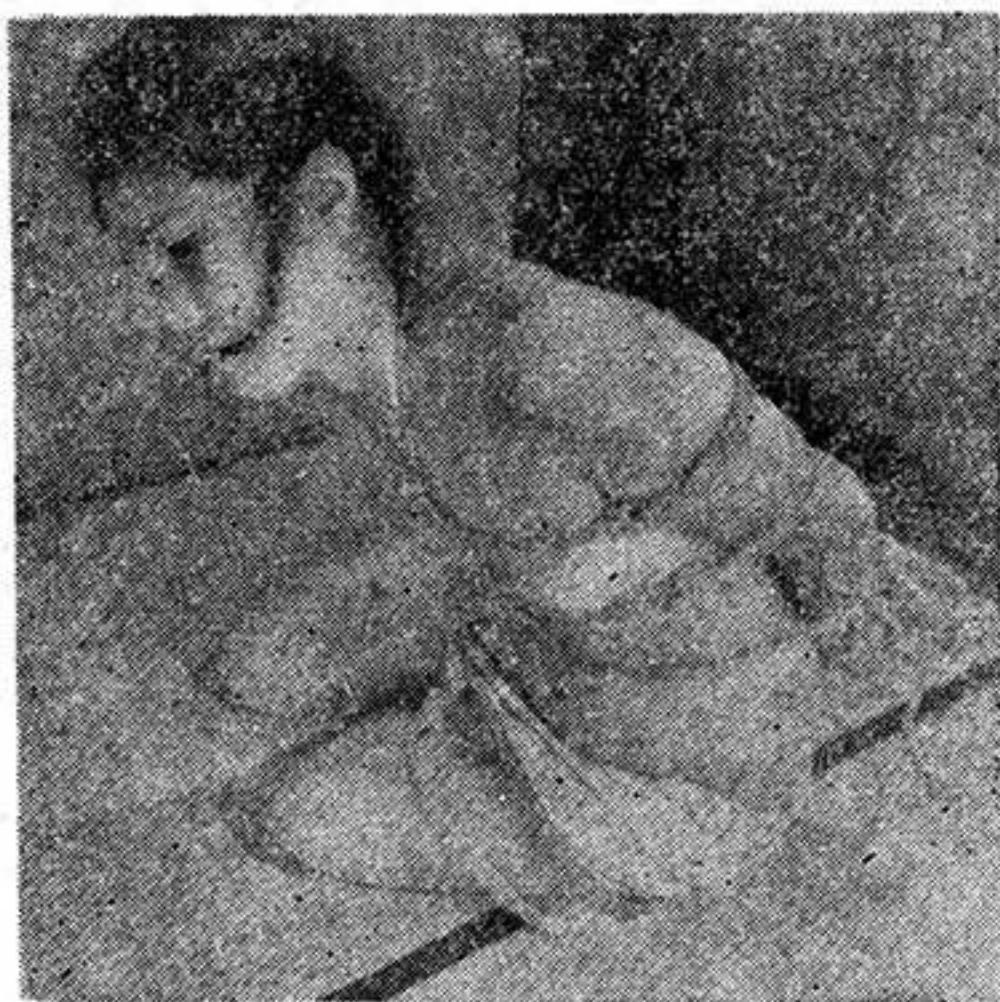
二人は心齋橋筋の雑踏を歩いているのである。あきれた。

戎橋のたもとの喫茶店で小憩。

(汗でべっとりよ。それに股ずれしたのかしら、ヒリヒリ痛むわ)

そしてホテルの一室。これから責めが始まる。鼻環をつけ、わたしを責めて下さい、と口紅で書かれた、ひかるの後手に縛られた全裸の坐像は、ユニークな作品。

「鼻環の縄を引張ると、彼女は眉をしかめ、痛みをこらえて、鼻環につれて顎を突き出してくる。鼻環の縄を引っ張って、縛ったまま



(水本 茂美)

の彼女をぐるりと狭い部屋で一周させる」

とある。なかなか嗜虐的で面白い。

私の好きなフオトは、「滅茶苦茶」ひかるの顔はめちやくちやに縄に縛られてよくわからない。全裸開股で、下半身が気になる。うれしくなるような作品。第一回撮影。

絶品は「灯台」。ローソク責めで、さぞあつかったでしょう。ひかるの真白な豊満な臀部が美しい。かぶりつきたいようだ。第二回撮影。

「奇妙な飾物」は楽しめる。彼女をホテルに誘ったら、実行してみたいようなポーズ。第二回。

「鼻責め」も、ひかるが全裸だけになまなましい。クリップで鼻を挟むのがアクセントになる。少しは鼻が高くなったでしょう。第一回。

クリップで乳首を挟んで痛くなかったのかしら。それにしてもひかるの表情はなごやかなのだけど。うっとりしているのかな。「私の愛読雑誌」

「ハンガーを用いての縛り経過」は、「滅茶苦茶」の系列で、ひかるらしい雰囲気だと思ふ。ひかるの性格を現しているんじゃないかしら。パンティが綺麗だ。関係ないな。第一回。

「硝子戸の彼方」「海老責」第二回は強烈。「サテン責衣緊縛」は私を責めて下さいにびったり。ひかるも満足したでしょう。

「強制空気浣腸」はお尻に浣腸器が差し込まれているのが可愛い。これはグラビヤではない。膨満している腹部も可愛い。グラビヤから受ける感じと、写真では違いますね。

三十七年四月号、辻村隆「クリスティール讃歌」に、

「ひかるをいつものように後手に緊縛しました。彼女は目隠しをしてくれと私にねだりました。私は猿轡をはめてやりました」

「私はひかるに、浣腸の姿勢をとらすと、水止めの金具を力強く握りしめました。

千ccの液は、約二分間程で全部ひかるの腸内に充満しました」

蛙腹実験。

「更に約五百cc程をイルリガートルに注ぎ続けて注入したのです」

「千五百ccの液体によって、ひかるの腹は妊娠七カ月程に膨張しました」

そして一分四十秒……

「縄尻を掴んで、私はひかるを便所へ伴いました」

「私が縄をとくと、漸やくひかるは始末をしてトイレを出しました」

中四日後、空気浣腸実験。

「ゴム風船をふくらませる、足踏み式の空気送り器が理想的です」

「足踏器のゴム管の先端に、イルリガートルの、水止めの先についている黒いエボナイトの挿入具をしっかりと嵌め込み、勢よく足踏器をふんだのです」

「ひかるの腹は蛙腹にふくれ上りました。私

は玩具のラッパを、逸早くひかるに装填しました」

とある。

「ひかるの人格を無視した試みも、彼女なればこそ、私の意のままに、すべて易々として協力してくれたのです」

東浦ひかるの飼育はかくて成功した。

J 水本茂美

三十七年八、九月号、辻村隆「ニューフェイス登場、梨花悠紀子の贈りもの」にあるように、水本茂美は梨花悠紀子のファン。彼女は梨花悠紀子を通じて辻村氏に紹介される。いわばプレゼント。

十一月号の「水本茂美の登場」を見てみよう。

二度目に海老責めをするんだから乱暴だなあと思うんですよ。

「後手高手小手に縛ると、その縄を首へ吊り上げて前廻し、胸を轟々としめ上げた。両脚を座禅のように組ませ、脚首を縛った上、上体をぐっと力強く押えつけて跼ませると、脚の縄を肩から背へと廻し、強くしめつけてぎりぎり海老縛りにする」

「前後左右から、更に横に転がし、後に倒し

さまさまの角度からカメラに収めた」

縛られているのが好きなんだって、彼女。

「縛ったままで、そっと肩を抱いて引き寄せると彼女はなすがままに凭れかかってきた。激しい鼓動が手にとる様にきこえる。唇が微かに合う。ここまでが私に許された限界である」

茂美は全裸で縛られている。自由は奪われている。

「私は長年の経験から、女の理性をしばれさせるような行動に出て、行きつくところまで行きついた時、その後に来る虚無の空白が女に激しい悔恨と、汚辱の爪跡を残して、再び私の前に現われない苦い経験を、幾度か味わっていた」

「男として相当つらい据膳を食う立場を、敢えて拒否しようとしたのである」

カメラマンとモデルのモラルなんでしょうね。苦しいでしょう。

ともあれ、水本茂美のエビ責めのポーズはすばらしい。

この二度で彼女は姿を消している。なかなか神秘的である。

十カ月の空白があつて、「水本茂美、再び登場」となる。三十八年七月号「奇譚三十九

夜第六十話

「あの時、私をはぐらかしたでしょう。なんだか辻村さんが狡るい人に思えて。私独り角方しているみたいで自分が惨じめになりました」

といった。乙女心なんてわからないもんですよ。大人の気持も知らないで。

「モデルでない私が、そんな気になったからといったって、それを、咎めるのは無理ですわ」

ごもっともです。

そこで、三十九夜同人の撮影会に招待。

その一例、

「縄の中央で輪をつくり、彼女の首にはめ、菱形にきっちり、彼女の体を後手に締め上げていった。腰で結んだ縄を、股へ通して後手につなぎ股縛りにすると、水本茂美はやや悶えた。その姿勢で腰を落させ、足をうんと左右に開かせて、頃合の棒で両足を棒の尖端に縛りつけた」

それだけではない。終局の目的は、開股逆さ吊りである。水本茂美は勿論全裸。

「床上一米有余の処に彼女の顔がある。髪は垂れて両足に喰い入る紐の痛みに彼女は唇を噛み、眉をしかめている。併かしその眼元に

は、何か快よげな、会心の被虐の想念が浮んでいる」

結論にこう。

「今後、お目にかかるかどうか、ちよっとシヨックで、気分の整理がつかないので判りませんけど、貴方とは段々と気持の上で縁遠くなる気がしますわ。私も所詮、貴方にとっては一モデルに過ぎないってことが、やっと判りかけてきましたわ。さようなら」



(梨花悠紀子)

このような激しい性格がひそんでいようとは思えない。

もったいないニューフェイスを失った。

K 梨花悠紀子

鑑賞用緊縛女性、とは梨花悠紀子のためにあるような言葉だ。

逆さ吊り、後手吊り、は他の追従を全く許さない。吊られたほうも吊られたほうだけ吊ったほうも吊ったほうだ。彼女の積極的な意欲は賞讃するけれど、そこまで彼女を飼育したカメラの鬼にもあきれる。

竿竹の吊りは意表をついて面白い。竿竹に悠紀子を乾すなんて、彼女のアイデアなのだろうか。

逆手足吊りは、後手緊縛の悠紀子を足首と胸を縛った縄で宙吊りにしているのだけど、吊り上った瞬間の彼女は、眉をひそめて、眼を薄く閉じ、半開きの唇はかすかにふるえているように思え、顔をあげて苦痛をこらえている表情は全くすばらしい。

狸がぶら下がっているような、両手足をまとめて縛った吊りは好きだ。

特に好きなフोटは、「責めに憑かれて」「宙に耐える」で、悠紀子の両足を両側へ開

かせて完全に浮かし、手摺に縛りつけてしまっている。前者は後手緊縛、縄のために乳房もゆがんで、パンティ一枚の悠紀子は悩ましい。後者は両手両足を左右に開け、男の足が彼女の首を踏んづけて、最大限に開股させようとしている。二つのフोटとも苦痛にゆがむ悠紀子の表情は最高だ。さんざん責めぬいたらしく、猿轡も好ましい。眉の間の強烈なしわが印象的だ。

悠紀子の感受性が単的に表現されているのは、「美しい玩弄物」「恐怖の塩水」で、前者の露出的な被虐態は、精神的な責めといったほうがよく、若くて美しい女性の羞恥が彼女の足の爪にでさえ露呈しているのである。「お前は美しい私の玩弄物だ」と説明文にあるけれど、これはシャッターを切っている人の本心なんじゃないんですか。むきだしにされた悠紀子の真白な臀部がにくいね。

「どんなにもがいたって結局は飲まなくてはいらなくなるんだ」と説明文にあるけれど悠紀子独特の恍惚とも思える表情は、すでに迫り来る自然現象を必死にこらえているのではないかと、考えただけでも身体がふるえてくるような空想をしてしまうほど、迫力のあるものである。彼女のモデルとしての大胆

(絹川文代)



さ積極性は、あるいは真実に尿意をこらえているのかもしれない。

後手首縄で自由を奪われ、食塩水を飲まされているのだけど、首縄は大変嫌うものらしい。息苦しさは猿轡と同じで、女を責めるコツの一つでもあるそうだ。髪を掴んで引き倒そうとすれば、咽喉が締めまり、全身に戦慄が走ったような反応が起る。鼻をつまんで口を開けさせ塩水を飲ませる。いやいやと顔をのけぞらせると首縄がしまる。よく計算されつ

くした責めといわねばならない。

尿意を起こさせるのは私の好みだし、私の場合、悠紀子の体内を通過した塩水は、あたためられて、彼女の左右に開股した中に顔を突っ込んだ私の口に、無事と帰還ということになる。そんな責めを私はやってみたい。

「座敷牢の麗軀」「柔膚は縄にくびれて」

「荒縄」「柱と荒縄」は、荒縄のあららしい縛りが強烈で、めちやくちやに乳房がひんまがったのも責めらしく、また、全裸の悠紀子が荒縄のアクセントを得て、変になまなましく新鮮なのが、これまた荒縄縛りの妙というべきなのだろう。

「雨装束とチュリップ」は、多くの読者から賞讃を浴びたとのことだが、素肌に透明なレインコート、それにビニールの猿轡は、古川裕子をほうふつさせたようで、有難い作品であった。後手高手小手のまま、雨の中を放置してみたい誘惑にかられる。勿論、彼女はどう実験済みでしょうが。レインコートに内から突起した乳首の強さを見ると、飼育された悠紀子の完成した悦虐ムードを感じるのである。

私の好みとしては、おしめカバーを頭からかぶせられた「惑溺の瞬間」や、グラビヤで

はないが、メンスバンドをつけ、バンドの替ゴムで猿轡をされた「あてゴムの猿轡」おしめをつけた「おしめ図絵」などが最高のプレゼントである。

「彼女は至って開放的な性格だし、それに第一、頭脳が極めて鋭敏で、しかも感受性に富んでいるときているから、私達の参考になることは、いろいろとアドバイスしてくれるし聞きたいと思うような事項については、いち早く察知して問わず語りに話してくる」

「彼女を吊り上げたとき、痛い痛い悲鳴を挙げたので、慌てて下ろそうとしたところ、辛抱するからシャッターを早く切って、と逆にハッパをかけられたのには、そのモデル精神に敬意を表すると共に大いに意を強した次第である」

「乳房も腕も胴も、忽ちのうちに縄によって息づいてくる。水を得た魚のように、悠紀子の全姿態がいきいきと活気を帯びてくるから不思議である」

「程よく肉のついた白い大腿を投げだして、両手の自由のきかない上半身は、なよなよとくずれようとする。飼育者にとって、これほど魅惑的な雰囲気はまたとあろうか」

「悠紀子さんの姿態のいいところであるが、

目唇から足の爪先に致るまで、ぴんと緊張していることは、まことに締りのある画面を構成してくれる。緊縛されても、組上の活きた鯉のようなイキが身体のスミズミまで、満ち溢れているところが彼女の身上であろうか」

三十七年四月号、塚本鉄三「首縄と後手縛り緊縛フォト撮影の実際」より。

モデルらしいモデル、とも、モデルらしくないモデル、ともいえる。職業的な臭味はいささかも感じられず、飼育された鑑賞用緊縛



(絹川文代)

女性としての梨花悠紀子は、あまりにも偉大で、いくら書いても書くすべを知らないのである。

L 絹川文代

Mフォトといえば、男性マゾを主題とした作品で、他誌には見られない独特な世界が展開されているのは、Mマニアにとって貴重な存在といわねばならない。

数多く紹介されたグラビアの中でも、男性の責めを一手に引き受けた感じのある絹川文代については、ここではあくまで女王としてのフォトのみあつかうことにする。

「絹川文代嬢のファンは大変多い。その華麗な姿態をグラビア口絵に現わすと、発売と同時に夥しいファン・レターが殺到する」

と塚本氏もいっておられるから、緊縛フォトのみならず、春日ルミ女王と同様、サジスチンとしても眼をみはるような傑作な作品を見せて、全国のMマニヤを驚喜させているのである。

「裸になると抜けるように肌は白い。陽に焼けないのだが、クリーム色の肌が写真電球の光線にキラキラと輝いて、目のくらむような美しさだ」

「身体全体が白いのだが、足や太股、それに胸のあたりが殊に白い。女の肌の健康的な白さというものは、見ていてもほのぼのと楽しい」

「白くて柔軟な餅肌、これが彼女の肌を表現するのに丁度恰好の文句である」

美しい柔肌が眼に見えるようだ。三十七年一月号、塚本鉄三「逆エビ縛りの一例、緊縛フォト撮影の実際」より。

撮影者が絶讃する真白な女王の太股に首をしめられ、真白な足で顔を踏みつけられM男は、殺されてもいいほど幸福なはずである。

Mフォトの解説に、「出演している男性モデルは応募した読者です」

とあるのは、全くにくだいね。

「マゾモデル募集」

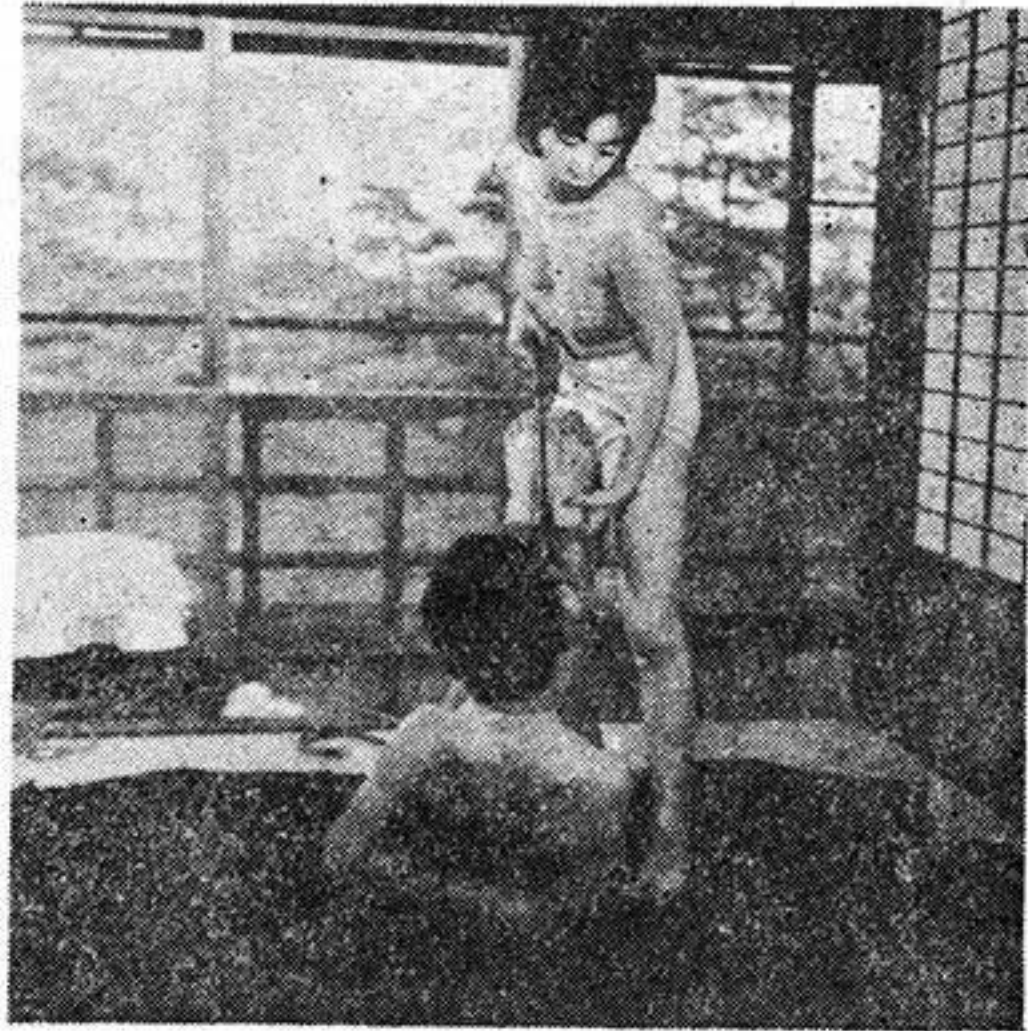
に応募した全国のM男性はさぞ多かったことだろう。読者通信にも応募の手紙が見受けられた。

三十七年十月号、読者通信に、

「今日この頃では現実に責めを受けたい、徹底的にひどい責めを受けたい、そんな気持ちが心全体を覆っています」

とあり、

(絹川文代)



「手足吊り、逆さ本吊り、逆エビ責め、とに角肉体的に強烈なもので、全裸で責めていた
だきたい」

絹川文代女王のファンであるという、身長
一米六十五糎、体重五十三疋、四十才の中年
の男性。更に、

「顔面はいずれもタオルできつく眼かくし心の
寄り処を抹殺することになります。なお、ゴ
ムの強い婦人の汚れたパンティを、汚れた処
が鼻口のあたりを掩うように首まですっぽり

冠せればよいと思います」

「こんな男性をモデルとして駆使して頂けま
すでしょうか」

宝塚市春川秀一氏の通信である。

編集部より、ご住所お知らせ下さい、とあ
る。

春川氏が絹川文代女王の奴隷になったかど
うか、私は知らない。

三十六年七月号、読者通信、

「ひたすら男を苦しめて喜ぶ女性を探し求め
ていました」

とあり、

「思う存分組みしかれ、足の先を口の中へ押
し込まれ、両手両足を縛られて転がされ、顔
を座布団かわりにしていただきたいたいと思いま
す」

大阪市、川本鉄男氏の通信である。

「もしご希望の方があれば、私は喜んでその
方の奴隷となり、椅子代り踏台代りは勿論、
例え便器代りにされても、その方のためにお
尽しするつもりです」

編集部より、ご住所お知らせ下さい、とあ
る。

川本氏、女王の便器になったかしら。

ともあれ、合格した奴隷は、

「美人の手でいじめられたいという希望者は
このようにして縛られる」

と親切なグラビアがついている。

パンツ一枚で、後手高手小手に縛られた読
者の一人が、ブラジャーとパンティだけの女
王に、背中を踏みつけられ、馬乗りになられ
たりして、逆エビ責めにされている。

犬の首輪をはめられた奴隷の頭は、女王の
足台になり、犬は女王のスリッパを口にくわ
えて女王に履かせる(以上演戯)

スリッパをおしただいているのが神妙な
ので、ごほう美に、女王の美しい足の指を舐
めさせて頂いている(足舐めの構図) 鎖を引
っぱられ、ドイツの元帥杖のような女王の杖
で首を突き上げられて、女王の足の拇指を口
に含む奴隷は……いったい何処のどいつだ。

後手に緊縛された奴隷は、女王の足のかか
とを舐め、足の裏を綺麗に舐めさせられる。

女王はパンティを杖の先にひっかけて犬に舐
めさせる。足で犬の頭にパンティをかぶせ
た。美しい模様のついた華麗な女王のパンテ
イである(女臭にむせぶ)

頭だけではつまらない。奴隷の顔に、女王
はパンティをすっぽりかぶせる。女王の秘所
をおおったところが、犬の鼻口をふさいでい

る。パンティのマスク。お前が好きらしいから、汚せるだけ汚しておいたんだよ。女王のパンティのフレヤーが気になる。

(応募すればよかった)

女王は犬の首をふくよかな両股ではさんで肩車(尻の下に敷かれてみたい)溜息ばかりついていても仕方がない。早くサジスチンを見つけて、女王のパンティで猿轡をしてみよう。

(ちよいと一休み)犬の背中に女王は腰をおろす。頭を踏んづけて、これから何をして遊ぼうかな。女王の豊満な臀部の感触に犬は酔いしれる。

奴隷の首に更に首縄をしめ、犬の顔をふんまえて、後手高手小手に縛り、仰向けに転がした、犬をひっぱる。犬の悲鳴。面白い。もろに足の裏を奴隷の顔にかけ、首縄をしめあげる。犬の上半体があがったところで、おもいきり犬の顔を蹴飛ばす。めんどくさい。犬の顔と腹の上に、女王は両足をふんまいて立ち上った。犬の悲鳴は、女王の足の裏で消える。ぎゅうぎゅう踏みつける(幸福なる隷属)女王の体重が犬を責めつける。

(天性のサジスチンじやないのかな、絹川文代さんは)

さあ、食事にしよう。女王は足の指に犬の食物をはさんで、奴隷にたべさせる。口をすすいだ水が、犬の飲料だ(飼い馴され愛犬)椅子に坐った女王が、床に仰向けに寝て口を開けた犬に、口から水をたらしている。一本の細い線が、これほど悩ましく、また、うらやましく見えたことはない。一息ついて、奴隷の顔に両足を下ろした女王の顔に、ふっと微笑がもれている。いいねえ、この表情。

マゾモデル募集に応募し、合格した一読者は、かくして絹川文代女王の完全な愛犬となった。

「フン、お前なんか、これが身分相応というものだ。お舐めたら、頭をふんづけてほしいのかい」

と解説されているのは、

「便器と奉仕」「強制される法悦境」

パンティ一枚の素肌の上に豪華なネグリジェをまとった女王は、女王の便器に顔を入れた奴隷の頭を踏んづける。

「さあ、お舐めたら。舌で綺麗に掃除するんだよ」

女王の神酒は、澄き透って美しい。

(絹川文代さんの神酒を呑んでみたい)

Mフォト組写真は、その外「ハイヒール」

「女主人と奴隷・マゾの境地」「奴隷哀歓」「人間馬の調教」「女主人と奴隷・飼育中」「長靴の下に蠢めく男」とどれをとっても立派なMフォトばかりで、いつ見ても楽しく面白く胸をおどらせるには充分で、賞讃すぎることはない。

珍獣シリーズも好きで、「足拭き台」「足で食べさせてやる」「女主人と奴隷・足舐めの構図」「テーブル代り」「室内馬に好適」など、絹川文代女王の面目躍如であり、女王の足下に悶えるMマニアの真随をあますところなく、写しだしたものだといえるだろう。

絹川文代女王を得て、Mフォトは見事に開花し、満天下にその偉大な法悦境を展開したのである。

男性マゾヒストの限りなく見果てぬ夢は、ずばりカメラの眼で適格に表現されたのである。

絹川文代女王を知って、驚喜し、熱狂し、マゾヒズムの幸福感に酔い痴れない男性マゾヒストは皆無といっても決して過言ではないだろう。

女王よ、ますます美しく、ますます暴君たれ。

(おわり)

「本誌最近号総目次」

昭和三十一年一月号

(定価二五〇円)

△第一グラビヤ▽女体緊縛フオ
トのアルバム▽カメラに晒す縛ら
れ女体(絹川文代)▽絶妙白マス
クの女(大塚啓子)▽弄顔——瞳
孔検査(梨花悠紀子)▽耽美——
なぶられる鼻(大塚啓子)▽嵌口
——口の中の詰めもの(大塚啓子)
△巻頭口絵▽イルリガートルのあ
る部屋(四馬孝・画)甘味を慕う
蟻の群(四馬孝・画)鼻孔で吸わ
す煙草(四馬孝・画)奴隷に君臨
する女王様(四馬孝・画)女体切
腹「馬上に切腹する乙女」(四馬
孝・画)高校女子相撲選手権大会
(雪崎京人提供)猛レッスンのバ
レー(四馬孝・画)

△第二グラビヤ▽木下闇(館典
子)▽危ぶまれるもの(五月亜紀
子)▽沈黙の抵抗(遠藤百合子)
▽光沢と拘束(大塚啓子)膨満、
胸部のワンカット(長野良子)▽
麻縄にくびれる太股(絹川文代)
▽鼻孔清掃(大塚啓子)▽爪先に
現れた囚女の憂愁(梨花悠紀子)
△本文▽読者通信によるファンタ
ジー(芳野眉美)浣腸の種々相
(山岸操)ゴムマニヤのプレイか
ら(森中雨奇男)十三人の女死刑
囚(佐出須登)夢のひと(万田不
二)きものきもの物語(牧高志)
商敵(栗瀬長)村の祭礼(大中
忠)ああ悲しみを胸に秘めて(田
村清章)「奇譚三十九夜」物語
(辻村隆)鼻の狂想(水上健三)
美容と浣腸(栗瀬長)告白「雨合
羽とお仕置(伊藤二郎)ユニホー
ム物語(川崎進一)女子寮の雪合
戦(高木紀久枝)「臨月腹」に寄
せて(瀬沼四郎)夢の中の妊婦
(瀬沼四郎)宇宙のどこかで(佐
治麻造)パンティと私(山口明)
畜生責二題(佐野光子)ゴムとブ
ルマー(T・Y生)斬られる女と
腰巻(森田敬二)青山播磨(おも
だか・しの)愛情は縄に結ばれて
(新井マリ子)グループ切腹プレ
イのリポート(小田久仁子)水責
め(黒田寿)お臍十年(多山皓)
フンドシは果して下品か(川崎進
一)濡れにぞ濡れし(芳野眉美)

昭和三十一年二月号

(定価二五〇円)

△第一グラビヤ▽吊り上げられ
た梨花(梨花悠紀子)▽椅子逆エ

ビしぱり髪吊り(大塚啓子)▽黒
縄後手高小手棒責め(絹川文
代)▽猿ぐつわの種々相四態(大
塚啓子)▽夫婦のSMプレイより
「生首晒し(新宮明夫・提供)
△巻頭口絵▽女囚第30283号
(四馬孝・画)貴婦人と貞操帯
(四馬孝・画)抜歯の幻想(四馬
孝・画)美女と奴隷男(四馬孝・
画)耽溺(白川潤・画)奉納娘相
撲(雪崎京人・提供)激斗する二
人の美女(雪崎京人・提供)落城
譜美女奮戦(四馬孝・画)

△第二グラビヤ▽磔処刑構図
(大塚啓子)▽縛りのポートレ
ー「妖しい視線」(加茂良子)▽
膝小僧のポリウム(大井小夜子)
▽雨具の光沢と縄(梨花悠紀子)
▽鼻をいじめられる(大塚啓子)
▽緊縛の正面と背面(長野良子)
▽革拘束具装着(大塚啓子)
△奇クサロン▽おへそとおシリ
とおチチ(編集子)○期待する二
新人(藤村若葉)○女体縛りの執
念(塚本鉄三)○屈辱の行進(葉
村正一)○おこし雑考(野中信
敏)○風船腹についてなど(羽村
京子)○スケートの乙女(畔亭数
久)○パンティに魅せられた男
(花上良海)○腰元の切腹○偶感
「十二月号を読んで(佐渡耕作)
○OPAYの思い出(ささ木十
郎)○私の随想「マゾの発端と本
誌のマゾ(若駒仰)○連載異色貴
小説「遊蕩児の面目」(土岐進)
○山田久仁子さんに(中康弘通)
○首級を拳げる裸女二題(前川
成雄)○ある耽美男の生涯(水上
流太郎)
△本文▽尾行の果(大中忠)「奇
譚三十九夜」物語(辻村隆)嗜虐
千一夜「悪童日記」(忍頂寺実)
隠花植物(万田不仁)天国とその
隣(九雅節夫)天女と小悪魔(安
堂馨)十三人の女死刑囚(佐出須
登)妖異不死身娘(滝沢史郎)私
のマゾ日記(遠藤百合子)宇宙の
どこかで(佐治麻造)魅力ある責
めの感想(柴島令子)変人同志の
SMプレイ(甘木笑夫)少年の回
想(三村敏夫)花と蛇(団鬼六)
浣腸憧憬度(原了吉)私の告白の
断章「女主人の脚」(天泥盛英)
臍窩とその周辺(須藤律夫)浣腸
という絆で結ばれた「私とあな
た」(小泉尚子)山中での娘相撲
(岡平吉夫)「深夜の独白」(堀
夏彦)殉難抄(中康弘通)教師の
記録(摩耶馨)

昭和三十九年三月号

(定価二五〇円)

△グラビヤ・フォト▽濃艶裾乱れ縛り(絹川文代)▽三面鏡猿ぐつわ見せ(絹川文代)▽後手縛り袂まくれ(絹川文代)▽破れた白下着(梨花悠紀子)▽美女いたぶり行状(梨花悠紀子)▽旅役者緊縛記(尾上ゆかり)▽お妙被虐の幻想(尾上ゆかり)▽足首縛り指の表情(大塚啓子)▽海老型しぱり(大塚啓子)▽長襦袢足むきだし(館典子)▽長襦袢猿ぐつわ(館典子)▽或る撮影風景(竹野ひろ子)▽カメラの前にて(竹野ひろ子)▽逆さ吊りの準備(梨花悠紀子)▽浴衣のもだえ(絹川文代)松の木と黒の下着(大塚啓子)△口絵▽葉巻の鼻責め(四馬孝・画)飛入り縁日娘相撲(雪崎京人・提供)脚線美の誇示(四馬孝・画)木馬館猯奇異聞(四馬孝・画)辰巳芸者の誇り○崇拜のきわみ(白川潤・画)最後の一人(四馬孝・画)

△奇クサロン▽○煙草と酒の害(編集子)○遠藤百合子さんを夢に描く(大野潔)○遊蕩児の面目(土岐進)○再び「女の斬られる時」(中屋敷真)○「夫婦のSMプレイ」(水野弘)○浣腸のうめき(並原新一)○娘相撲○最近の映画・テレビ美女緊縛シーン(東山映史)○ツイタテに縛られた少女(畔亭数久)○女剣劇と夫婦のプレイ(川田和茂)○編集室だより○切腹断想(畔亭数久)○女の脚、足、アシ(伊東潤一郎)○K編集漫談(覆面子)○「今日は赤ちゃん」可愛い初夢(白川睦夫)○産婦人科の思い出(中津綾子)○アクロバットと妊婦アクロ(山川登)

昭和三十九年四月号

(定価二五〇円)

△本文▽伝奇ミステリー「血汐弁天(有珠新) 孤独の幸福(近藤一) 十三人の女死刑囚(佐出須登) 私の告白の断章(天泥盛英)責めのレイアウト(遠藤百合子)「奇譚三十九夜」物語(辻村隆)冬の夜の女相撲(芦浦素舞夫)女社長様と私(泉恵輔) 悪魔の酒(芳野眉美) 宇宙のどこかで(佐治麻造) 大塚啓子さんへ「柔肌に恋う」(長門弘) 残酷グループ(大中忠) 切腹体験記「鏡美人の切腹」(新山武) 花と蛇(団鬼六) 浣腸による第三の感覚(志摩英樹) マゾ芸術考「女性男装管見(田島直士) オーバーと下着と浣腸(山田那津子) 毒婦と隠坊(由木稔) ゴム・マニヤのプレイから(森下雨奇男)

△第一グラビヤ▽物置小屋の責め(梨花悠紀子)▽責めのある部屋(大塚啓子)▽縛りに興味のある乙女(花本京子)▽鼻責めの四ポーズ(大塚啓子)▽法悦境の縄プレイ(関谷富佐子)△巻頭口絵▽オラン・ウータンの檻(四馬孝・画)○ドミナとスレイブの部屋▽鼻輪と舌輪▽コルセツト責め▽責道具の怖え▽三人の女スレイブ▽目隠しの階段昇り○女相撲▽砂の足形▽輝を締め直す(雪崎京人・提供) 天主閣炎上(四馬孝・画)

△第二グラビヤ▽革製覆面と手錠(大塚啓子)▽光と影の双曲線(梨花悠紀子)▽黒光りする那智石▽麻縄乱舞足首の美(大塚啓子)▽猿ぐつわと後手(遠藤百合子)△奇クサロン▽○戦争の惨虐性(編集子)○一読者の戯作集(T・H生)○切腹幻想」から三月号を見る(森田敬三)○二、三月号の短評(佐渡耕作)○変天古林短信○女の晒し首(水野弘)○緊縛フォトの蒐集(下野はじめ)○遠藤百合子さまへ(益原駿夫)○ネルの魅力(野中信敏)○モデル嬢への便り(門田弘志)○大塚啓子さんまいる(奈良文夫)○ふんどし女の血斗図絵(北村英一)○二の腕と太股と顎(河又三蔵)○MS十戒○口絵「女相撲」解説(雪崎京人)○Mへの捕虜(M七〇生)○女性崇拜十二ヶ条(服部耕三)○オムツマニアの女性から(松本淑子)○編集室だより○萩の咲く庭にて(畔亭数久画)

△本文▽浣腸に関する幻想(栗瀬長)映画、女優、脐(南方佳男)「奇譚三十九夜」物語(辻村隆)腹を切る女と腰巻(森田敬三)倒錯の夫婦生活「交替日の私」(西村憲一)パンティと死刑マニヤ(黒田寿) 姫小姓奇聞(万田不仁) クリスターマニヤその後の体験(北沢操) 四人の女性の切腹見聞記(赤城宗一郎) 犬の首輪(芳野眉美) 絹子の休日(大中忠) 宇宙のどこかで(佐治麻造) 十三人の女死刑囚(佐出須登) 花と蛇(団鬼六) 真夜中の女子レスリング(芦浦素舞夫) 鼻に狂う(斎藤金雄) 贗作「妖花」(芳野眉美)

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13㎝) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E 2	仕置を受ける裸身(大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E 4	ムチに耐える美肌(関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり(愛川)
E 6	捨身の後手観念像(大塚)
E 7	足から眺めた裸身(水本)
E 8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E 9	ハリツケられた娘(大塚)
E 10	強烈後手高手小手(愛川)
E 11	責め抜かれた疲労(梨花)
E 12	逆エビにもだえる(大塚)

E 13	拘禁された美囚女(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E 15	海老責に泣く足首(大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E 20	ベッドにもだえる(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄(愛川)
E 22	放置された海老責(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E 24	ローソクで責める(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像(関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛(東浦)
E 29	女体の全部を晒す(愛川)
E 30	激しいムチ打の果(関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E 32	投げ出した脚線美(絹川)
E 33	臍中心の腹部緊縛(梨花)
E 34	セーラー服の哀歓(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女(梨花)
E 37	制服の女学生縛り(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)

E 39	痛打にくねる裸身(関谷)
E 40	乳房に加える金具(大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E 45	敷布の上ののびて(絹川)
E 46	鼻いじめのアップ(梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E 48	縄にくびれる裸身(東浦)
E 49	椅子に晒された女(大塚)
E 50	臍そうじをされる(大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E 52	火のついた煙草責(四方)
E 53	踏みつけられた胸(梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E 55	手足猪吊りの美態(絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E 57	諦めた観念全裸像(水本)
E 58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E 59	黒髪を吊られた女(大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E 65	野外的後手宙吊り(梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中(四方)
E 67	室内の後手宙吊り(梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ(大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責(梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み(竹本)
E 72	野外的逆さ吊り責(梨花)
E 73	梯子責にあう美女(梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E 75	娘十六しぼり加減(花坂)
E 76	踏みにじられた顔(大塚)
E 77	逆エビニ反る足先(大塚)
E 78	両手吊りのお仕置(絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)
E 81	食卓上の縛り人形(大塚)
E 82	むしられる下着(大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り(梨花)
E 84	寝台上の若妻狂態(関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り(東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り(東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒(関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図(大塚)
E 89	令嬢後手高手小手(絹川)
E 90	臍部乳房強調緊縛(東浦)
E 91	責衣にくるまれて(東浦)
E 92	全裸逆エビ責め(水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ(梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒(関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ(関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ(東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り(梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡(関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡(絹川)
E 100	強烈縛り臍いじめ(東浦)

女体切腹資料

分譲品

血紅使用、腸露出

女体切腹シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(せぬ)

裸女血紅切腹

大写真連続迫力フォト

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶表情悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美裸身切腹写真

大手札五枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号(なせ)

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やえ)

浣腸関連フォト

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号「るい」

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

懐かしい縛られ美女

東山映史

最近ではテレビの「三匹の侍」のリアルな立ち廻り、縛りの影響か、映画にも、これまでの絵空事でない美女緊縛シーンが見られるようになり、大いにファンを喜ばしている。

そして、これは時代劇だけでなく現代劇にも現われている。勅使原宏演出、岸田今日子主演の「砂の女」は岸田今日子の全裸シーンが話題になっているが、彼女が逃げださないようにというために、手足を緊縛されているシーンもある。この撮影のため、彼女の手足はしびれて動かなかったそうだ。

時代劇の残酷シーンは、忍者もの、やくざもの、そして現代劇はギャングものというのが定石になっている。だが、現代劇でも大映の「悪名」もの、「黒のシリーズ」で滝咲子や藤由紀子など、いま売り出しの美女スターの縛りシーンをふんだんに入れるなど商魂のたくましいものを見せている。だが、緊縛美女といっても、かつての入江たか子とか、三浦光子、木暮実千代とか、スケールの大きな美女の縛られ姿が見られなくなったのは、淋

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

大好評！注文殺到売切れ近し

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

目下発売中 直接お申込を 定価一部五〇〇円（送共） 略号（文献）

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び集録出来ない特殊文献を掲載いたしました。売切れますと、補充がつかまへん故、今すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次第折り返えし急送いたします。

〔第一グラビヤ〕 (十六頁)

自己愛の女神を写す……………塚本鉄三、構成
「私の乳房を見て」……………長野 良子
露出癖の充足……………長野 良子
後手縛りのワンカット……………大塚 啓子
転ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子
新井マリさんと共に……………由岐敏夫・構成
棒責め愉悦……………新井マリ子
ムチ打たれる肌……………新井マリ子
サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる
顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子
押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子
餅肌はくびれて……………東浦ひかる
柱縛り首繩……………梨花悠紀子
海老責二態……………梨花悠紀子
黒いアンネパンティ……………遠藤百合子
〔巻頭口絵〕 (オフセット八頁)
△絵物語▽白ターバンの女……………四馬孝・画

第一図章ハ捕獲……………第五図章ハ美容
第二図章ハ飼育命令……………第六図章ハ洗腸
第三図章ハ調教……………第七図章ハ矯正
第四図章ハ訓練……………第八図章ハ仕上げ

〔第二オフセット〕 (八頁)

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマーの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画
〔第二グラビヤ〕 (十六頁)
五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と差らい……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……………五月亜紀子
鼻責「鼻孔測定」……………大塚 啓子
緊縛俯瞰姿……………大塚 啓子
憧れの優美ポーズ……………大塚 啓子
両手吊りの構成……………長野 良子
ズベ公天使（トカゲグループ）……………新井マリ子
1、「みんな剥いじまいな」……………由岐 敏夫
2、「その顔をめちやくちやにしてやる」……………
3、「それだけは止めておきなさい」……………
4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」……………

しい。往年の阪妻こと阪東妻三郎と入江たか子の「天狗の安」などで、入江たか子が長襦袢一枚にむかれ、土蔵の中で白い麻縄に縛られ、戸上城太郎扮する用心棒に猿ぐつわを手きびしくかまされ、身もだえするシーンなど大いに楽しませた。

また高峰三枝子の「治郎吉格子」で、手足をがんじがらみに縛りあげられ、豆しぼりの手拭を猿ぐつわにされ、手足をピョンピョンエビのようにはねながら、身もだえするシーン。また、題名は忘れたが、木暮実千代が、不義のために家出したが捕えられ、長襦袢一枚にむかれ、往来の立木に縛りつけられ生き晒しの刑にあうシーンなど、忘れられぬ美しい風景だった。

山本富士子は直木三十五原作の大映「踊子行状記」で、美しい着物の上から、しごきで胸を二巻きか三巻き縛られたシーンを見せてくれたり、長谷川一夫の「銭形平次捕物控」で女目明しのお品に扮するが、悪者に捕えられ、米倉の中で吊り責めにあうシーンがワンカットだがあった。今後、彼女のテレビ、映画がまた多く見られるだろうが、一度悪女ものでもとり、彼女の緊縛シーンでも見せてほしいものだ。

投げ出した脚線美………絹川文代
悶悦ポーズ二題………絹川文代
厳重な本縄掛け………梨花悠紀子
〔写真版アルバム〕 (十六頁)

禪裸女斗争場面………絹川・大塚
浣腸部屋の悦楽ムード………大塚啓子
浣腸器を握って………大塚啓子
縄にくびれた柔肌鑑賞………大塚啓子
女やくざ一本刀姿………大塚啓子
女ネズミ小僧次郎吉………大塚啓子
高小手二ツ折り………松本アサ子
エビ縛り二種類………松本アサ子
血紅使用女体切腹連続フット………大塚啓子
サジスチン宮井美佐子の近影………宮井美佐子
縛り過程の構成………大塚啓子
鼻責めシーンの点綴………絹川文代
〔本文・解説〕 (三十二頁)

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合………由岐、
絵物語「白ターバン」の女………辻村隆
新しいモデルを写す………由岐敏夫
〔告白〕宮井美佐子の略歴………宮井美佐子
〔告白〕モデルとしての私………大塚啓子
自己愛の女神、長野良子撮影記………塚本鉄三
〔第三グラビヤ〕 (十六頁)

台所のめしうど………新井マリ子
飼育のヴァリエーション………新井マリ子
椅子に呻めく………新井マリ子
長襦袢と腰巻………遠藤百合子
豊満への擦過………遠藤百合子
美しき小鳩の緊縛………長野良子
ポリウム自慢絵模様………長野良子
床柱縛りに耐える表情………大塚啓子
煙草一服の鑑賞………大塚啓子
組上の鯉と料理の仕方………五月亜紀子
二ツ折り縛り………大塚啓子
鼻料理と鼻掃除………大塚啓子
上からと横からと………梨花悠紀子

〔第一オフセット写真〕 (十六頁)

神さまへの人身御供………絹川文代
腕と脚の双曲線………梨花悠紀子
足首の縄を解く………大塚啓子
緊縛女体モザイク模様………愛川悦子
光と影の表と裏………梨花悠紀子
縄に狙われたポーズ………梨花悠紀子
女相撲「四ツに組む」………A氏提供
女相撲「吊り合い」………A氏提供
爪切りと白足袋………浜千代子
高小手腰縄………絹川文代
底園の塑像………梨花悠紀子

〔第四グラビヤ〕 (十六頁)

女奴隷の飼育効果………新井マリ子
ゴム衣着用中………梨花悠紀子
バンド着用後手縛り………東浦ひかる
荒縄さらしと折檻場………梨花悠紀子
下着の散乱する中にて………新井マリ子
用意周到なる馴致………新井マリ子
白刃に狙われた柔肌………大塚啓子
浣腸器の恐怖と幻想………梨花悠紀子
くさり、くさり、くさり………長野良子
団子鼻をいためる………長野良子
〔第二オフセット写真〕 (十六頁)

美しき乳房………長野良子
愛らしき羞らい………長野良子
仰角のいたずら………長野良子
顛倒した瞬間の表情………大塚啓子
森の中のニフ………絹川文代
緊迫の演技(斬られる女)………愛川悦子
ヘッドロックと首絞め………春日・愛川
S Mの魅力プレイ………三木・浜本
前手縛りと後手縛り………梨花悠紀子
黒フンドシと白フンドシ………大塚啓子
Mフット陳列——長靴にもだゆ。鉄鎖と手枷………鉄鎖と手枷
の下で。凌辱される男ドレイ。煙草とローソク………絹川文代
愉悦ポーズ二景………絹川文代



○
 せる、ひさ、はろ、の三種入手
 予想通り、「はろ」が最もよかった。「ひさ」は駄目、大塚君はい
 つも足をすぼめるクセがあります
 ね。立腹なんですから、こんなナ
 ヨナヨしたポーズでは切れないと
 思います。ヒザをしっかり開いて
 ふんばらないと力が入りません。
 キレイゴトではないのです。「せ
 る」は大ガツカリ、ダブルという
 からには下になる方も切っていな
 くては、それが見えなくては大ブ

ルにならないではありませんか。
 禪のしめ方も横ミツが大変上の方
 で、あまり緊縛感なし、私なりに
 夢みていた「せる」はこんな姿態
 です。スケッチを同封します。右
 のは禪の前袋同志を当てたもの、
 左は下の顔の上にまたがったもの
 いずれも前袋はいっぱい締めてい
 ます。本当は禪なしでこのポーズ
 がほしいのですが、それでは発表
 できないでしょう。それから刀の
 持ち方、こんな風に腹に近い所を
 持ってほしいと思います。実際に
 もコブシを腹に当てて引く位にし
 なくては深さが加減できず深く突
 込みすぎて引き回せないと思われ
 ます。この点貴誌のはみんな遠方
 を持ちすぎです。フォートの出来と
 しては上等と思います。モデル、
 ポーズ御一考下さい。モデルさん
 もあまり西洋流のバイヤリースの
 ビンみたいなグラマーは、この種
 のものには考えもの、日本的な胴
 長さんの方が、もともと腹がポイ
 ントになるのですから適当？と
 にかく腹のきれいな人が禪を思い
 きり下げて腹を切ってくれると嬉
 しいですね。切ってる顔が笑って
 るみたいではダメ。口に懐紙でも
 くわえさせたら口の表情だけでも
 消せるでしょう。それにしても切

腹は貴誌が専門化されてしまった
 ことは敬意を表します。ちょっと
 取りしまりがウルサクなったよう
 で、以前、週刊朝日は女の切腹を
 とりあげていましたね。あれでは
 かえって知らぬ人に宣伝したよう
 なものですが、私は貴誌がますま
 すゴージャパンになることは反対で
 むしろこの際自主休刊位にして、
 また白表紙に戻って売られた方が
 良いのではないかと思います。こ
 のようなものは実に貴重な文献で
 日本の昭和三十年乃至四十年をマ
 ークするものですし、大衆向けに
 売られてツブレるのも残念です。
 必要な少数だけにわかる方が良
 いと思います。もっともそうなる
 私はその少数に入れてもらえぬか
 もしれませんが、それにあまり高
 価については買えません。ナゴヤ
 は今、日本で一番ラクな都市らし
 く、ストリップも全開が楽に見ら
 れ、SM誌も店頭で一番多く見ら
 れますが、東京ではKKも殆ど見
 られません。そのうちにナゴヤも
 そうなることを怖れます。切腹、
 浣腸、禪はいずれも下腹に加虐す
 る点において共通であり、共通の
 マニヤを持つこともまた当然と考
 えます。特に切腹はサブリメイト
 された Sex とあり刀は Male sex

のシンボル、腹は Female のシン
 ボルで、それ自身セクシイです。
 文学でもナニワブシでも切腹が愛
 好されるのは、もともと Sex だか
 らでないでしょうか。そして外人
 が日本人の切腹について深い興味
 を示す理由も彼等はいっと Sex
 に気がついてからではないで
 しょうか。私はロンドン空港で「
 によ一式」を税関で見つかり、一
 汗かきました。別室へつれてい
 かれて英人二人が色々質問してく
 るので、とにかくプレイであるこ
 とはわかってくれました。没収も
 されず返してくれましたが、絹川
 さんはロンドンまで行ったわけ
 ですよ。そのフォートはアイルランド
 でさる所へあげてきました。一昨
 年のことです。そのとき私は「こ
 れは結局 Sublimated Sex でしょ
 う」といったところ、「少くとも
 我々にはね」といって英国税関の
 オジサンはニヤリとしました。今
 後とも貴誌が発展せず(?) 続く
 ことを祈ります。(津川八郎八四
 ○才台の男ですV)

○
 三月号拝見しました。死刑マニ
 ヤである私のいたずらを書いてみ
 ます。グラビヤの「葉巻鼻責め」
 喉から下を消すと生首の髪をつか

印画紙焼付 梨花悠紀子吊責写真 再分譲

連続吊り責めフオトの決定版、未発表の秘蔵写真

A5判感光紙焼付にて分譲していましたが、未だに御注文や照会が参っておりますので、ここに再び印画紙焼付として再分譲いたします。(内容は以前分譲のものと同じです)

第一集 逆エビ吊り

略号(りつ1)

大手札印画紙焼付

六枚一組 五〇〇円

第二集 逆胴吊り

略号(りつ2)

大手札印画紙焼付

六枚一組 五〇〇円

全身をぐるぐる巻きに縛られて吊り責めにされてみたいというのは、マゾヒスト梨花悠紀子の第一の念願でした。彼女の願う強烈にして苛烈な本格的な吊責。彼女の思うままに、何ら手心を加えることなく、S派の第一人者辻村隆がピシピシと縛り上げて滑車により吊上げた連続場面です。

余りの強烈さと刺戟の強さに口絵としての使用を遠慮されていたのですが、ここにマニヤの強い要望により分譲品として同好家の方に限りお譲りすることにしました。梨花悠紀子嬢の均整のとれた姿態が吊責という妥協のない緊縛方法によって決

定的な効果を打ち樹てることを信じます。

第一集 (逆エビ吊り)

両手首は後手に括られて、曲げた両足首と共に逆エビに緊縛された梨花嬢の肌には深々とロープが喰込んでいます。ギリギリううう、と、思わず彼女の口から悲鳴が洩れ、じりじりと全身が浮き上って、苦悶の表情が彼女の顔面から、次第に足の爪先にまで伝ってゆく。高々と吊り上った美しい逆エビの裸身――

第二集 (逆胴吊り)

ヒューツという悲鳴も口にかまされた猿ぐつわによって、くぐもってしまふ。繩は徐々に滑車によって巻き上げられて、頭を下にした全身は宙に浮いてきた。二の腕に、太股に、胴体にひどい程埋れてしまふ縄目。宙ぶらりんとした裸身が吊り縄を中心として、ゆるく回る。時間が経つにつれて苦痛が次第に増してくるが、彼女はまだ頑張っている。

んで、ぶら下げてある図となりまです。ライトの中にぼおっと浮かびでてるわけ。鼻から煙が立ちのぼるといふのは、「十三人の女死刑囚」斬首篇のクロチルドというところですか。「脚線美」はどうしたらよいか、銃殺でもよいし、オシリの下に爆薬をおくカポー篇のフランソアーズでもよい。「木馬館」は舌ばさみのかわり首にロープをまき、木馬がまわるにつれ絞首刑になるのは絞首篇のナタリーですね。「最後の一人」は背後から斬りつけられ、美女の生首が宙を飛ぶとしなくては面白くありません。フオトの方ではあまり控えめにすぎないで、せいぜい打首の想像しかできないのは、残念です。梨花さんの逆吊りも完全にぶら下つておれば、いろいろ面白い想像がつくのですが。水野氏の生首フオトは場面が暗く満足とはいえませんが。グラビヤか分譲フオトにしてもらいたいもの。「女の斬られる時」も同様です。「ツイタテに縛られた少女」これに對し矢や槍を投げつけてみたらどうなるでしょう。オヘソに命中したものに首をやることにでもしたら。「切腹」は首が飛んでいない限り興味なし「十三人」の挿絵にやっと生首が

でできましたが、これからもどしどし「死んで」いる絵をお願いいたします。以上勝手なことを書きましたが今後無事に続刊されることを願います。発行日もできるだけ守って下さい。十一月号以後三、八、四、一、七日おくれれています。私には全然興味の無い二誌がちゃんと発行されているだけに気になります。(黒田寿)

初めて投稿します。小生奇くを讀み始めてから約一年位になりますが、男による男責が少いのが淋しく思われます。小生31才の独身会社員で身長一米六八、体重六七、健康に溢れております。20才より30才迄の男性で男責、禪、サポータ、浣腸等に興味のある方は御便り下さい。小生はMです。肉体責や精神責に對してS男性の要望にお答えし度くあらゆる加虐に對して耐えしのびS男性の御満足の得られる様に飼育、訓練をお待ちしております。プレイの時は貴方の完全な奴隷となり、玩具所有物、犬、馬、人間椅子、人間足温器となつて奉仕します。勿論小生の御主人となられる方は体格も容ぼうも十人並以上の方を望んでおります。尚小生は足フェティ

シズムがありS男性のたくましい脚、足、足指等にひかれます。心身共に小生を奴隷として君臨出来る、又処理出来るS男性のお便りお待ちしております。特に学生、自衛隊員の方歓迎致します。(東京八中田明)

○ 奇ク御愛読の皆様御変りありませんか。二月号のこの欄でメンスバンド愛好者の方々の通信を拝見し本当に嬉しく存じます。原口里子様の効果的な生理バンドの使い方も素敵です。又中川フミ子様三原康子様の様にサド性向の方々のバンドをいただければ吾々男性フェチシストの最高の喜びである事はいまでもありません。兵庫県の岡田京子様の様に女性として堂々とバンドを御使用になれる立場にあり乍ら又バンドへの魅力を強烈に感じ今でも御氣が向いたら下着の代りに月経帯を着用なさるとかそうすると、吾々の様に女性だけにしか許されないものだからという事の魅力だけではなしにもっとバンド自体のもつ肌触りとか臭いとかいうものが月経帯の本質的な魅力なのでしょうか、いずれにせよ、素晴らしいものです。美しい二十五才位の女薬剤師のいる

薬局を選んでメンスバンドを買いに行き、不審気な態度で求めるまま色々のタイプのバンドを並べている彼女に私は自分が使用したいのですがどれが宜敷いでしょうか、とふるふる声を押えて尋ねました。彼女はまあ貴方が！と聞いて私の顔をなじる様に見つめて二の句がつけぬ態でした。私は一寸理由があつて私が欲しいのです。これにしますがすぐ穿きたいのでトイレを貸して下さいと厚顔しくたのみ如何にもいやいや乍ら教えてくれたトイレの中で彼女の手で掘ぐここに綿をはさむのですと替ゴムの所を、触って説明してくれたバンドをじかに肌に当てた時には膝はガクガクするし、手がふるふるし、ノドはカラカラに乾き、全く困つてしまいました。勿論そのまま辞し彼女の軽べつの視線を背にして店を出たのですが、この後トイレから出て来た私に彼女は貴方は男のくせに何故生理バンド等当てるのですかと難詰され遂に自分の性癖を告白させられ、そうだったの話には聞いた事あるけど始めてだわ、といって私の耳を引張つて一寸此方にいらっしゃいと奥へつれて行き、後手にしはって一度男が月経帯を当てた恰好

を見せてごらんなさいといってズボンをはがし始めました。私は思わず勘弁して下さいと声を立てると、うるさいわねといって丁度生理日だったのでしようか自分のまだ暖かみの残っているソフトネットのバンドを私の口に押し込んで了い頭から真赤なパンティーをかせ惨々に責められるという想像に胸をふくらませて毎日悶々としております。男女を問わずバンドに興味をお持ちの方々、どしどし告白や、御意見や空想を発表して下さいませ。御希望の方々は私のバンド着用写真御送り申上げます。遠慮なく御申越して下さい。(徳山市八安田隆夫)

○ 見当違いの「悪書追放」とかによつて廃刊になつてしまふのではなにかと心配していましたが、今後とも変りなく刊行を続けられる由安堵の胸をなでおろしました。近頃哀切極まりない「女腹切」の分野がいささかマンネリ化してきて秘かに胸を痛めておりましたところ一月号山田さんのレポートを見て暗雲の晴れる思いでした。五人の若い女性がひそかな一室で、それぞれその白い艶やかな腹を押し寛げて腹を切る——そのせつなくも

「今月の新版」

全裸の切腹悦楽

モデル 大塚啓子

△第一組V略号(ひと)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

△第二組V略号(ひと)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

女体切腹プレイの醍醐味は、一糸まとわぬ全裸になつて演ずるそれであるというところは、切腹マニヤの若き女性、例えば信太啓子さんの告白をはじめ多くの女性の方々の言によつて裏づけられていきます。三宝を前にして、衣服をきちんとつけ、腹巻に身を固めて切腹プレイに興じていた彼女も、次第に衣服を脱し、それらの散乱した中に、一糸まとわぬ全裸の肉体をさらして、さまたまなポーズによつて柔肌を白刃によつて切りさばいてゆく。

妖しい美しさ、その人々の嘆息や、あえぎ、高鳴る胸の鼓動までが感ぜられる思いでした。特に山田さんの体験に至つては全く「切腹」というにふさわしく、筆には表わせない衝動を覚えました。望

み得ない事とは思いつながら、その時の記念写真を分けていただけたら、どんなに素晴らしいだろうと考えずにはおられませんでした。先日ふとした機会があって、三人の女子高生と一緒にテレビドラマ「赤穂浪士」の「松の廊下」の下りを見ました。浅野内匠頭の罪が「切腹」と決められた時、その一人が、切なげに「せつぷく……」とつぶやくように言っていて、手で腹を切る仕草をしながら「K子、こ

れ、できる？」といったのです。K子も顔を上気させていましたが恥かしそうに更に頬を紅らめ「うん」と首を横に振って、「お腹切るの、痛いんでしょ」と、自分も腹を切る仕草をして見せました。すると、それを見ていたA子「が、わたしなら、がまんしていいで、もっと早く殺して（吉良を）自分も切腹するわ。」といったのです。私が「切腹って痛いよ」というと、三人とも照れたように

笑って見せましたが、もし私が同席していなかったら、この三人の乙女達はどんな話をした事でしょ。女性の、特に若い女性の心の中には思ったよりも深い切腹に対する憧憬のようなものがあるのではないのでしょうか。もし、この乙女達に山田さんのレポートを見せたとしたら、どんな反響が出るのでしょうか。二月号に山田さんのレポートに対する中康氏の質問が出ておりましたが、その貴重な体験

をみんなのものにしてくださるために、どうかその質問にお答えになってください。心から期待しています。（福島八飯森潔）

○
御誌八年来の愛読者ですが、本日始めてお便り致します。私達夫婦は近鉄奈良沿線在住の者ですが数年前より夫婦でSMプレイを行なっております。私はS、妻はMです。奇巧の四馬孝先生の画や、いろいろの緊縛ポーズを頼りに一

「最新版」 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙（9×13）焼付

各組一枚一組（送料共）

B1	全裸エビ責仰向け（関谷）	一組一枚	一〇〇〇円
B2	逆エビ責め全裸像（水本）	五組五枚	四〇〇〇円
B3	乳首ペンチ挟み（竹野）	十組十枚	七五〇〇円
B4	後手十字縛肩口上（梨花）	二十組二十枚	一四〇〇〇円
		三十組三十枚	二〇〇〇〇円
		四十組四十枚	二五〇〇〇円
		五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B5	足の裏擦り責め（竹野）	B6	おへソいじめ大写真（関谷）
B7	剥いだバタフライ（関谷）	B8	貴方に捧げた裸身（大塚）
B9	乳房責め絶叫苦悶（大塚）	B10	無防備双手吊り（絹川）
B11	豊満臀部エビ縛り（水本）	B12	一糸纏わぬ股間縛（水本）
B13	全裸亀甲股間縛（関谷）	B14	足踏付け二つ折り（大塚）
B15	尻突出しムチ打ち（関谷）	B16	手錠にもだえる（竹野）

B17	尻突出てエビ責め（水本）	B18	椅子開股鼻責触手（梨花）
B19	息もつがせぬ猿轡（竹野）	B20	投げ出した全裸（関谷）
B21	美しき尻部の露出（絹川）	B22	猿ぐつわ悦虐境（竹野）
B23	後手柱縛り脚線美（竹野）	B24	強制鼻挟水吞ませ（梨花）
B25	苦悶にねじる裸身（関谷）	B26	責めに気を失って（関谷）
B27	さアどうでもして（関谷）	B28	豊満乳房膨隆縛り（竹野）
B29	投げだされた女体（竹野）	B30	裸身をくびる麻縄（梨花）
B31	強烈縛りに悦ぶ（梨花）	B32	全裸逆エビ片脚拳（東浦）
B33	踏みつけマゾ境地（東浦）		

B34	すべてをさらけて（関谷）	B35	ムチ打ち失神寸前（関谷）
B36	クリップ鼻挟み（絹川）	B37	台上的マゾポーズ（大塚）
B38	吊られゆく美体（絹川）	B39	拷問に無惨な美貌（梨花）
B40	マゾ女性の表情美（東浦）	B41	喰い込む股間縄（絹川）
B42	灸責めに悶える（梨花）	B43	犠牲台の人身御供（大塚）
B44	美肌無茶苦茶縛り（絹川）	B45	裸身に立つ蠟燭（大塚）
B46	手枷足枷大写真（四方）	B47	鎖に悶える足首美（柳初）
B48	蛇責めに柔肌栗然（梨花）	B49	鼻の玩弄恍惚境（大塚）
B50	女囚菱縄さらし（絹川）		

今月の新版分譲品

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(たく)

身動きもできぬ真白な裸身をも
だえさせて、火のついた巻煙草を
無理にぶかぶかと吸わせられる。

淫らな長髪 of 乱れ

大手札三枚一組 三〇〇円

長野 良子 略号(ろも)

ふり乱す長髪のもだえ

大手札三枚一組 三〇〇円

長野 良子 略号(ろめ)

肉体美に自信のある長野良子は
もともとポニーテールの長髪を巻
いていたのだが、この二つの写真
集は、その長髪をふり乱して強烈
な縛りにボリウムのある身体をう
ねりにうねらす彼女の最近作。口
絵に不適のため特に分譲品に。

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 三〇〇円

モデル 愛川悦子、田中芳代

略号(らく)

愛川悦子によって背後から抱え
られるようにして、臍の下も鎌に
よって掻き切られている可憐な女
子大生田中芳代嬢。

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 三〇〇円

モデル 愛川悦子、田中芳代

略号(らみ)

虚空を掴んであお向けに倒れた
芳代の上に跨った悦子が、その咽
喉元へぐさりと短剣のとどめを刺
し、後から抱えて、首を掻き斬ろ
うとするところ。

血紅使用 斬られる女

大手札七枚一組 七〇〇円

絹川 文代 略号(らふ)

美貌の絹川文代の真白い下腹に
或は脇腹に、のど元にドキドキと
する脇差が突き刺って、断末魔の
苦悶にあえぐ表情と、死のけいれ
んにゆがむ四肢と指先、血紅を使
用して斬られる女の真迫的な美し
さとスリルを盛り上げました。

浣腸を施される女

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ちら)

敷蒲団の上に長々と寝そべって

週間に二回位実施しております。
拙い乍ら妻の緊縛写真も相当撮り
まして本日五枚許り同封致します
が、御差支えなくば御掲載下さ
い。同封の写真的外、妻の逆吊り
や、はりつけもあります。全裸で
すので一寸都合悪いと存じ送りま
せんでした。近頃は妻もすっかり
被虐になれ、大抵のポーズなら辛
抱します。先日必要で二、三時
間外出の間、妻を鴨居から吊り、
足がたたみすれすれにして股縛り
にして外出して戻って参りました
が、ぐったりとし乍らそれに堪え
ておりました。最近ではこの緊縛
を私一人で楽しんでるよりこの
姿を同好の士に見せて、共にプレ
イして見たいと考へ、妻に同意を
求めました。快諾を得ました。
誰か夫婦でプレイしておられる
方があれば文通し、フォートの交換
や、撮影会をして見たいと思いま
す。布施の門田様—どうか私宛に
御連絡下さい、私の住所氏名は編
集部に明記して廻送して頂たく様
お願いしております。同好の夫婦
プレイも又人生のエンジョイに不
可欠の愉しい試みではありませ
んか。どうか私達夫婦のSMプレイ
の夢を叶えて下さい。(奈良八三
隅良信)

○ 最近の奇譚クラブを読んで私の
感じた事を率直に書いてみたいと
思います。実際に昨年の秋以来、
書店では中々この種の雑誌を入手
することがむづかしくなり、古本
屋でも古い発行の分が次第に姿を
消してきました。稀に珍らしく
二、三年前のきれいな本が飾って
あるなと思つて、手にしてみる
と、定価の二倍位の値段がついて
いるのです。そして、よく気をつ
けてみると、口絵やグラビヤを
切り取ったものがあることです。
古い雑誌を承知で買うのですから
致し方ないことですが、やはり
買って帰ってから、切り取られた
ところがあつた、そこにどんな写
真や絵があつたのかと思うと氣に
なつて仕方がありません。それが
不思議なこと、以前あんなに沢
山書店に出ていた頃は、いつでも
買えると思つていたのに、最近に
なつて無精に欲しくなり、殊に最
近号を手にして物足りない氣持が
するにつけ、古い号が欲しくなつ
てくるのです。あまのじゃくとい
うのでしょうか。悪書追放とい
うのも、私にとっては逆効果であ
り、かえつて執着するような結
果を見せはじめています。最近の

浣腸を待つ女の足元から、一〇〇CCの大きな浣腸器が施術者の手によって、迫ってくる。

自から施す浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)
浣腸しようとしているところを描きました。

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)
イルリガートル、エネマシリンジ、一〇〇CC、三〇〇CC、二〇〇CC浣腸器などを弄ぶ若き女。

縄目にもだえる夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほく)
猿ぐつわも厳しく後手に縛られた夫人が、乳房も太股もお臍もあらわに、平常のつつしみ深さも忘れて、もだえぬ魅力的ポーズ。

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほむ)

正面向いて顔をはっきりと見せた夫人は、強烈な亀甲縛りに全身をひしひしといたましめられ、髪をむずと掴んで引きまわされる。

豊満を切り裂く刃

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ほふ)
豊満な柔肌、ふっくらと膨らんだ下腹に切り込む鋭い刃先。床の間を背にして演じられる大胆奔放な切腹の姿態。

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ろみ)
全身に皮下脂肪がのり、殊に下腹のポリウムの増したひかるが、相撲一本で立った勇姿。

凄んだ女賊スタイル

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へに)

バンド、ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(へみ)

代理部分譲品総目録

十円切手封入の上お申込み下さい。

奇クをみますと、相当苦心して作っていることがよくわかります。いろいろな面で制限されるし、それに、読者通信を拝見していても各々それぞれ思いのままのことをいっているようで、それらの我儘勝手な読者の言うことを或る程度満足させてやる編集のやり方には、中々大変だと思えます。私自身のことはいえ、女性の猿ぐつわの表情に多大の興味を抱いています。中には猿ぐつわなんてまっぴらだといわれる方もあるでしょうが、私にとっては、猿ぐつわは絶対のものです。口も鼻もすっぱりと掩って、ムムムッと息づまるような表情、特に目の表情が素晴らしいのです。はっきり言って縛りよりも猿ぐつわに興味をひかれます。雑誌をひらいて、ぱっと猿ぐつわをされた顔が目の中にとび込んできますと、もう私は夢中になつてしまいます。他の本や雑誌では、殆どといっていいくらい、こういう写真や絵は見受けられません。だから私は万金を投じてでも奇クにひかれるのです。実際は二五〇円でたった一冊しか買いませんが、他の我儘な読者の願いと同一で恐縮ですが、猿ぐつわの絵や写真を一枚でも多く載せて下さる

○

よう同好者の一人として御願ひ致します。(東京八古川生V)

前略悪書追放とかで町の書店から姿を消したことは楽しみを奪われたようで残念ですね。それでも尚発刊を続ける貴社の職業意識には読者の一人として、感謝する次第。さて、小生は長年貴社の愛読者として毎月発刊日を待っているのですが貴社の記事すべてに興味を持つものではなく単に女相撲の画であるとか物語を拝見し又読者通信で同好者のある事を知り、その情報を得たいと思うからです。一月号ですか読者通信で市川の方が東京国技館で女相撲大会が開かれるとかありました。非常に疑問、小生自身その方面の情報を得るため相当調査していますが、そんな噂はきかないし念のため国技館(日大講堂)及び現国技館にきたただしたところ全然そんな行事の企画はきかないとの事でした。小生達特殊の興味を持つ者は、こんな記事には異常な関心を示すものですから、全く根拠のない事は発表してもらいたくないし又、情報がある場合はその雑誌名、新聞名とか年月日をそえて発表してもらいたいと思ひ希望意見を書きま

生首フォト 分譲

△新宮明夫氏提供△

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円
略号(のく)

本誌口絵グラビアに発表して大好評を博した新宮明夫氏が美しき愛妻をモデルとして撮影された生首フォトの中、氏が生首の乱れ髪を纏んで晒首台の上に置かんとしてゐるところなど、分譲品ならではの傑作を特に氏の御好意により生首ファンにこそらんにいれます。

斬首フォト 分譲

△新宮明夫氏提供△

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円
略号(のき)

自晒フンドシ一本の裸身を後手にきびしく縛り上げられた可憐な死刑囚の細首に振り下された白刃。痛々しき風情の彼女は目かくしをされて首の座にすわっている残酷美のなかに、そこはかとなく漂う哀れさとエロチシズム。

した。それから編集部にお問い合わせたいことは画の掲載は有難いですが未だ一度も写真の掲載もなく分譲写真も発売なく又読者通信でも再三この問題が希望意見として出されていきますが誌上に責任ある御意見が伺われず残念です。この点に關しても是非一度簡単でよいですから御説明下さい。右御願ひまで(東京八女相撲大ファン)

○ 『森田敬三氏に与う』森田敬三氏は本誌三月号で「斬られる女と腰巻」なる論説と「腰元切腹」でデビューしられ、四月号で「切腹幻想」と「腹を切る女と腰巻」を発表されて一躍斯界の注目を集められた。「腰元切腹」なる絵は当

時、奇倶編集部でも何人の作か分らなかつたらしく又我々女性切腹マニアの間で珍らしい姿態として評判になったものである。この四篇を通じて知り得ることは森田氏が単なる腰巻マニアであるに止まらず、女性切腹にも強い憧憬を抱いて居られることである。森田氏の結論はエロティシズムなくして何の女性切腹ぞやというところに有るらしい。しかもそのエロティシズムを和装女性の裾の間から迸る緋色の腰巻に求めることを最良の策とされているようだ。確かに赤い腰巻はエロティシズムの象徴の一つであろうが、これなくして女性切腹の醍醐味なしと速断することは極論ではなからうか。切腹

は自害行為の一つであって専ら武士の行なう自決方法であった。女性の自害は必ずといって良い程、咽喉か左胸部刺突によって遂行された。従って女性が切腹したという史実は四ツ葉のクローバを探すほどの難行苦行によってのみ掘り出される。小説化されることも稀れで、演劇や映画でも極めて稀れに演じられるのみである。しかし奇ク誌上にはそう稀れではない、その姿態に赤い腰巻を見ることは稀れで、森田氏の「腰元切腹」はその意味では貴重な物といえる。だが、女性自身身だしなみの良い(男性に比して)もので、いかに切腹するとはいえ、腰巻を見せることは極力避ける傾向があるようだ。衣服の上からの切腹は至難の業であるから、少くとも胸腹部は露出せざるを得ないが、腰からは深く衣装でおおい時としては上肢さえも露出しなないのが普通である。膝は必ず扱帯でかく縛る習慣があるから、裾の乱れは見られない。このような慎み深さが男性の切腹と著しく異なるところであろう。又この慎み深さがあってこそ女性切腹の最大の魅力が感じられるのである。女性は自害に際しては通常白無垢を身にまとうもので

ある。これこそ女性の健気を象徴するものといえる。エロティシズムは赤い腰巻のみに求められるものではなく、こうしたつましさを湛えた女性切腹にこそ、ほんとうの魅力が発揮されるものであることを強調して森田氏の御批判を待ちたい。(兵頭庫一)

○ 奇譚クラブの愛読者の皆さん、今日は。二年ほど前から貴誌を愛読しております当年二十二才になる独身の男性です。今迄この書店でも貴誌を買えたのに、最近ではどこでもというわけにはいかず残念です。でも私は知っている店を五、六軒回って探しましたら、二軒ほど貴誌を売っている所がありましたので安心しました。私は生来どうもSの傾向があるらしく一度女性を緊縛してみたいという気持が押さえきれなくて困っております。勿論誰彼なしにというわけにもまいりませんので、貴誌の読者通信を通じて、私の希望を満たすことが出来たらと思ひ、お便りさせて戴きました。只今交際している女の子は、二、三人おりますが、一緒に映画を見たり喫茶店でコーヒを飲む程度の軽い付き合いですので、なんとなくなりましたよりなく

思っております。大阪近郊の女性の方で一度私と会って下さる方はないでしょうか。若しプレーするのがおいやでしたら、話し合いだけでも結構です。そして将来一つのグループをつくり上げ、お互いに楽しもうではありませんか。もしもデートして下さるなら日曜日なら、いつでも南でも北でも出かけて行きます。お便り待っています（大阪市都島区八山内一雄）

貴誌益々御繁栄の事と存じます。愚生此処年来より貴誌を楽しく愛読させて頂いておりますオールド・ファンです。此処に誌上から衷心より御礼申し上げます。愚生が殊に関心を持っておりますのは、灸責めに関するものです。それも男性が灸責めを受けているといったものや、自分自身が灸責めをえられるといったことは、いささかも興味を持たず、専ら、うら若き美しき女性が、雪をもあざむく白い肌もあらわに、灸をすえられて、苦悶するといった体に対して強い魅力を抱いております。貴誌においても、このような灸責めの記事は、時々散見いたしますが、全体としては非常に少ないのではな

いかと思います。全国には同好の志も数多くおられることと思いますが、どうか灸責めに関する、体験、告白、或は見聞、思ひ出話といったものを、灸マニヤ同好者のために御寄稿下さるよう望みます。それから編集部の方でも、場所、ポーズ、カメラの角度なんかをいろいろに変えて、灸責めを受けている女性の写真を作製されるよう望みます。浣腸や切腹、オシメといった写真と同様に灸責めについても十二枚一組の分譲写真を作って下さいますよう敢てお願いして止みません。（北海道八南原善七）

○

悪書追放とかいう悪台風の風当たりも中々厳しき今日此の頃、いつに交らぬ編集子諸兄の御精励を感じております。待望久しい写真集「美しき縛しめ」の第三集が発刊の運びとなりましたことは、何はともあれ、嬉しき限りです。アルバム「美しき縛しめ」の第一集第二集、大分古びて赤ちゃけてきました。思えば大分以前のこととて、小生の女体緊縛フォトの蒐集も相当の歴史を経てきたようです。時々取り出しては、楽しんでおりますが、定価五百円の第一集が、ずしりと手ごたえのある重量

感で、今だったら、送料だけでも二百円ぐらいいはかるのではないかと思うくらいです。第二集では大きさも重量感も第一集から比べて半分近くに減少していますが、それでも、一枚一枚はりつけられた女性縛マニヤ（愛読者）

女性縛マニヤ（愛読者）

フンドシ姿写真分譲

本誌の読者通信に投稿された愛読者の栗本ミチ嬢のフンドシ・フォトですが、御本人がグラビアに登場するのを恥かしがって特に分譲品としてはほしいと希望を申し出られましたので、ここに芳紀二十一才のBG栗本ミチ嬢の白晒六尺襠一本のりりしい姿をマニヤの方にごらんにいれます。彼女は一六二センチの身長につりあう均整のとれた中肉中背、ピチピチと張りきったスポーティな肢体、愛らしい童顔の持主です。

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号（ふの）
しなやかな肢体にきりりと締めたフンドシ姿の魅力が開股し横臥しかがむことによって画面いっぱいむんむんと発散される。

たアルバムとしての珍重さが、一般市販しないというたて前からも今になれば、いよいよ貴重なコレクションになってきたという感じます。此処に新しく第三集を揃えることが出来たのは、戦後に生き

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号（ふへ）
六尺襠を締めるのが好きだということは、それを裏がえせばフンドシ姿に対して異常なまでの羞恥心を持っているというところである。彼女の初々しい羞らいの、フンドシ姿をごらん下さい。

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円
栗本 ミチ 略号（ふな）
フンドシをきりりと締めた栗本嬢の魅力を、そのまわりからあまらず狙いうちしました。

フンドシの変わった姿

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号（ふに）
両股を開いてかんだポーズや尻の割目に喰い込んだ晒を強調する尻振りポーズ、前袋をあらわにした横臥ポーズなどを揃えました。

永られた賜物と喜んでおります。小生、長らくサド一点張りかと思っておりましたが、稍フェチがかったのか、パンティ、特に黒いパンティに魅了されること切です。(メンスバンドを含めて)緊縛、猿ぐつわは勿論ですが、黒パンティ装用で行なわれる責め(吊り責めは格別)を懇望すること切実なものがあります。又の機会にお取り上げて下さい。「美3」落手の日を楽しみにしつつ。(本多守生)

○ 四月号ありがとうございました。鼻責めについて毎号希望を入れて頂き厚く御礼申し上げます。奇クの御指導で鼻責めの被虐哀歓と加虐悦楽に耽溺して、この道から脱し得られぬ日を過しています。

昨夏以来「魅せられた鼻責め」、「私の鼻を責めて下さい」及び読者通信に三回程私の記録を御報告致しましたが、其後も種々責めつ責められつ鼻に生きています。偶々四月号の八告白V Mへの捕虜を發表されたM七〇生様の記録を読んでびっくりしました。私の受けつつある過程そのままなのです。もっと激しいので、この被虐工事が完成したら御報告申し上げます。

○ 思います。被虐期間が永びく様に鼻梁の傷が直りかけると自ら又痛めて彼女(里子)に加虐して貰う悦びに引づられて行きます。目下小さな孔ですが鼻障子の痛みを噛みしめて被虐欲に浸りM七〇生に共感を感じ又遠藤百合子さんとも鼻被虐の心境を語り合い、お互に加虐交歓が行えたらと、細かい血管が脉動する思いでも。四月号入手したばかりなのに、もう五月号が待ち遠しくなりません。グラビヤも口絵も責め場で鼻孔型が現わされると鼻息が感じられて見る者の心をかき立てます。四馬孝先生画くところの美の破壊の美しい娘さんに久しく御目にかかりません。一度会わして下さい。(東京八湯谷照夫)

○ 御誌ますます御発展のこととお喜び申し上げます。時折拝見しております無精な読者でございますが、この欄にも同性な方が勇敢に顔を出しておられるのを見て、私も仲間入りさせていたただきたくお便りする次第です。ほんとうは親しく同好の方々とお話できる機会がございましたら、うれしいのですけど、いろいろのことを考えますと、なかなかむづかしことだ

と思しますので、誌上でお便りをしあい、気があった方がありましたら、直接文通などしたいと思えます。今朝の朝刊で私の胸をドキリとさせる記事がございました。それは大和川の川岸に二十才ばかりの女性の全裸の死体が発見されたということでした。今のところ身長一六〇センチ腕に注射のばんそうこうのあとと、ほうそうのあとが一列に並んでいるなどの外、わからないそうですが、全裸で死んでいるところから、他殺の疑いで捜査しているとのことでした。二十才の若い女が何故全裸で死んでいたのか。露出症の傾向のある私は平常空想していることが、現実になっそう、そのまま現れているので、その死体がまるで自分であつたかのように、ドキリとしてしまいました。全裸の死体となつて、たくさんの人達の目にさらされ、果ては解剖されてみたいという空想の中、いつも、もう一人の自分は死んでいなくて、死んだ自分の死体を多くの人々と一緒に眺めているのです。私はいつも、こんなつまらない空想にふけています。こんなことを考える私は異常でしようか。二十三才の会社事務員で、やはり大和川を渡る鉄橋を

新宮明夫氏提供

「処刑」フオート 分譲

新宮明夫氏から「夫婦のSMプレイ」として提供を受けました。本誌口絵発表が不適当です。分譲品として処刑マニヤの方々にお分けいたします。

一、絞首刑 略号(こけ)

大手札三枚一組 三〇〇円
後手高小手、胴じばりにされ目かくしをされた麗人が、首に痛ましい吊り縄をかけられて絞首にされる哀れな処刑の姿を、前、後、側面からごらんにいたします。

二、磔 略号(はみ)

大手札三枚一組 三〇〇円
両手を左右いっぱいひろげて側木に厳つつけられた可憐な女囚が、大の字に、或は十の字に将又哀れみを乞う膝立の姿勢でハリツケられる美しい裸身はどうぞ。

三、晒し 略号(さら)

大手札三枚一組 三〇〇円
両手首を揃えて高々と吊り上げられ、或は万才の形に左右にせい一杯ひろげて吊り上げられて、衆人の目の中に、かくすことなき裸身の隅々までを視線になぶられる晒しの処刑ポーズ。

「今月の新版分譲品」

オシメ・フオート

・シリーズ

おしめ着用

連続写真

第一集

前開きゴム製カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(しま)

第二集

前開き布製防水カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(しな)

オシメ・マニヤの方々の強い

要望によって、ここに大塚啓子

嬢を煩して、連続写真を新しく

撮影しました。一糸まとわぬ全

裸となった彼女が、自らオシメ

を整え、中腰になって当てつつ

オシメ・カバーをつけてゆく有

様を刻明に捉えました。尚、カ

バーの間からオシメがはみ出

ている状態も、オシメだけ前に当

てた状態も、仰向けになつてオ

シメを当てられている状態も加

えました。マニヤの方々のお申

込みが多いようでしたら、更に

御希望のアイデアによって、次

々に撮影したいと思ひます。何

卒奮ってお申込み下さい。

乳房しぼり

略号

(うは)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野良子

凄く恰好がよくて大きな乳房は、彼女の自慢のものである。只でさえ、むっくりと突き出て両手でも掴みきれないほど立派な乳房のまわりを、ロープでぎゅうぎゅう力一杯しめつけられ、只さえ大きい乳房が一層強調されて物凄いくらい見事な張りきりぶりを見せている。同じ責めらるなら、これぐらいの乳房をいたぶるのが効果的である。

鼻責と緊縛

略号

(うい)

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚啓子

何にもつけていない豊かな胸に縄が喰い込み、後手首は背中であぐらに括られている。鼻の穴をいたぶられようと、無抵抗の状態におかれている。鼻の穴を上に向けてあお向にころがされ、た上、ドキドキと光る短刀で、金属棒で足の裏で、グイと鼻の先をあぐらにされる。無抵抗な女性の鼻責めに、関心をお持ちの方のために最近撮影の写真の中から選びました。

通って毎日通勤しておりますので、自分の車窓から見た空想が重って、思わずお便りを書いてしまいました。こんなことを話しあうお友達もございませんので。又、私の告白のような文章も書かせていただきます。お便りをお待ちいたします。(大阪市八宇野淑子)

前略御めん下さいませ。四月号うれしく拝見致しました。私の拙文は出ていませんでしたが、通信ランに糸枝の恥かしい告白がのせていただきとてもよろこんでおります。以前より告白的な私の想いをペンのまにまににお送り申し上げておりますが、半分ぐらいで中途半端のためかはしりませんが採用になりません。やはりまとめて掲載文を送らねばならないものだと思ひます。私の心の底よりの悲願でいつわりの告白ではけっしてない事だけは信じて下さいませ。他の人の(ネルの好きな)ものはサロンにも本文にもよくのせていたのだのにどうして私の採用にならないのでしょうか。希望するサシエと共に文章になって奇クの誌上にまとまてのせていただければこのやるせない気持は満

足するものと思ひどうかして一氣にまとめ上げるべく現在書いております。先日お送りしました小文(サロンむきのもの)本月号にと思ひておりましたがぜひ次号の余白にお願い申し上げます。次に私の読者よりの呼びかけのための局名と名前は貴誌の係にお願いしてあると、ございますので問合せがあらましましたら、どうかよろしくお願い申し上げます。誌上の編集部のお言葉に一切の問合せには応じないと思ひますが……読者通信文(私のもの……)に、係の方にお願ひしてあると、発表させてもらっておりますので都合が悪い気もします。(里乃いとえ)

拝啓御誌益々御発展、愛読者の一人として、誠に喜びに耐えません。私は三十才の独身M男性です。何時の頃芽生えたのか、もう十年以上、過去一度もS女性との交際もなくMの性癖に悩み一人も人もの日々を送ってまいりました。奇クを知って早三年、再度、読者通信にお手紙をしようと思ひ筆を手にするのですが、気の弱い私は一度もお手紙を出しませんでしたが、先日四月号を購入致し芳野眉美様の「犬の首輪」胸をおど

今月の新版分譲品

女体切腹「血紅立腹」

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(るな)

フンドシ一本の裸身ですくつと立った大塚啓子が下腹を血だらけにしなが、キリキリと切りさばいてゆく連続切腹フォト。

木馬責三態

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(もく)

後手高手小手に縛しめられて、両手の自由のきかない女体を鋭い三角板の頂点にまたがされて、痛い痛いとい悶え苦しむ木馬責め。

椅子責の果

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(いす)

二月号の口絵にのった椅子しぼりの女体を、弓のように逆エビに反ったまま、あっちへ転がしこっちへ転がし、さんざんに責んだ果太鼓のような胸部腹部の正面からその苦痛のさまに狙いをつけました。

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

略号(そう)

全く素晴らしく大きく恰好のよい乳房ですね。彼女は自分でもそれを意識して殊更強調しようとし、す。縄は只さえ巨大な乳房をくくり上げて更に大きくくびる。

動感エビ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(とう)

柔肌を喰い込むばかりに縛られたばかりか、胸、二の腕の厳しい縄目と両足首の縄目を連結した上右に左に、ごろごろと転がし、お尻を中心にくるぐると回したりする。喰い込む縄にもだえる表情と姿態を早いシャッターでキャッチしました。

色禪開股縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

略号(いふ)

縛られた縄もはじきかえすばかりのポリウム。喰い込む色フンドシ一本で、思うままにあばれまわる美麗な裸身のもたえ。

らせ喜こんで拝読致しました。私のMの願望そのものです。この度初めて全国のS女性の皆様にお願ひ申し上げる次第です。女王様の足下にひれ伏し犬の首輪をされ鎖でつながれ、奴隷として女王様の身の辺りのお世話から犬として口と舌先で足の指先から御体の隅々までお舐めしての御奉仕、便器としてチリ紙としての御使用下さる女王様に終生御奉仕、これが私の最大の望みです。私、昨年の夏仕事

中十メートルの高さから落ち、背椎を、つぶし現在入院治療中です。が近頃では外出も出来る様になりましたが性的不能になってしまいました。前より一そうMとしての願望が強くなり日夜胸苦しい思で悩み続け居ります。私はスポーツで鍛えた体相当の女王様の責に堪る自信はあります。全国の女王方、このあわれなM男の願望をかなえて下さい。女王様のおともをして歩くにも顔スタイルに自信は有ります。体重十八貫、身長五尺七寸、仲々の好男子と人はいって居ります。住所は編集部の方にお知らせして有ります。御命令あれば何時でも女王様の足の下へは参じます。故何卒機会をお与え下さい。秘密は厳守する事をお誓い申し上げます。

ます。女王様のお手紙お待ちして居ります。編集部の皆様方の御健康をお祈り申し上げます。(足舐め便器生)

四月号拝見しました。今月号も新宮、前川両氏の作品がないのは残念です。グラビヤもおチチ、おへソ、おシリを自粛したのでは殆ど意味はなく、むしろ全廃案も皆様と共に検討する必要があると思われまます。その分だけ分譲品を充実させればよいでしょう。勧告をうけたという一月号のグラビヤも私にとっては、そんなに有害なものとは思われないのですが「目隠しの階段昇り」はちょっと気に入りました。私の場合、このロープは横棒でなく首にかけられています。そしてムチうたれながら階段をのぼるうち十三段目からボタンとおちて一巻の終り。「天主閣炎上」では後方の武士の刀が肩先に食いこんでいます。もう少しずれて首すじに、出来れば首が刎ねあがるといった場面を希望しているのですが、なかなかえられそうもありません。「革製覆面」の中央白線はもはやいうことなし、革製ブラジャーでもやればよかったです。これでは大塚さんが泣きます

よ。水野様の「晒し首」これがグ
ラビヤなら、どんなによかったで
しょう。三月号は顔が半分かくれ
ていましたが、今度は文句ありま
せん。分譲フォトには是非お願い致
します。さて北村英一様即ち女斗
彦様の血斗図絵、さすがにすばら
しく、私の「御前試合」の十分の

集部あてに手紙をだし、編集部は
集った便りをその人のところに送
る。送られた代表者は自分で適当
に処理するという様にしたらどん
なものでしょう。一人一人のあつ
せんは無理でも、これ位なら何と
かなりませんか。(佐出須登)

○

一の長さで、十倍以上の内容で
す。この場合も何とか絵にしてい
ただきたいもの、ますます私の作
品が恥ずかしくなりますが「大決
戦」も完成した以上心臓を強くし
て投稿します。七月号あたりで採
用ともなればお笑い下さい。「パ
ンティと死刑マニヤ」の黒田氏と
は現在親しく文通しており、私が
渡欧する時は彼氏に残る材料を提
供してゆきます。美女たちは今後
も殺されることでしょう。御安心
又はウンザリして下さい。読者通
信も前号までの十六頁から十頁に
減ったのは残念です。あらゆる雑
誌をみても通信欄がこんなにある
のは、我が奇クだけなのですから
これは是非復活して下さい。とこ
ろでファン同志の文通ですが、せ
めて毎月一人位づつ処刑マニヤ、
生首マニヤその他の代表者をえら
んで誌面にその名を発表し、文通
希望者は十日とか十五日までに編

奇譚クラブ毎月楽しく愛読して
おります。私も御誌は四年程、前
から愛読しております。四月号で
松本淑子様のお便り楽しく読みま
した。私も大のオムツマニヤで
す。私がオムツが好きになった動
機は、私の家の近くに引越してこ
られた家の娘さんからです。娘さ
んの家族は三人で両親と娘さんと
三人です。娘さんは私よりも二才
上の当時二十四才の人です。私に
は姉も妹もなく、両親と弟の四人
家族です。私はその人が姉さんの
様に思われ、その人も私を、弟の
様につきあって下さいました。そ
の娘さんの二階の部屋で二人でレ
コードを聞きながら話し合った仲
です。そんなある日、娘さんの部
屋のすみに洗濯物がといれて有り
ました。娘さんがお茶を入りに、
階下の部屋に行った時、その洗濯
物の中に、娘さんの下着の中に数
枚のオムツがありました。それも

大人用と思われる大きいオムツで
す。それとオムツカバーでした。
そのオムツカバーを手を持った時
娘さんが入ってこられ、二人の顔
が合い両方ともしばらく無言のま
までしたが、娘さんは私の所へ来
て、私のほほをしばきました。そ
の時娘さんの告白を聞きました。
その人は一度嫁に行ったが、オネ
ショが元で数カ月で離婚されたそ
うです。オネショも一カ月に数回
で薬も色々用いたがなおらないそ
うです。私は初めてオムツカバー
を着用した女性を見ました。色ん
な下着も見せてくれました。シュ
ミーズ、ブラジャー、パンティ、
ズロース、メンスバンド、それに
十数枚のオムツとオムツカバー三
枚。私は大人になって初めてオム
ツを当てました。私は夢中でオム
ツカバーを着用しうれしさのあま
り、そのオムツを濡らしてしま
いました。それから私もオムツが好
きになり、現在でも週に数回着用
しております。その人も父の仕事
の関係で、わずか数カ月で引越さ
れました。数カ月の間に、その人
と色んなプレーをしました。浣腸
もオムツカバーのまま、外出もし
ました。別れる時その人は私にゴ
ムのメンスバンドとオムツ数枚、

オムツカバー一枚残してくれまし
た。それから一人で自室(二階)
で時々着用して思い出して居ま
す。松本淑子様、貴女の自作のオ
ムツカバーゆづって下さいません
か、「オムツを当てた花嫁さん」
すてきですね。大歓迎です。女性
の方でオムツマニヤ又ゴムマニヤ

最近撮影

新作Mフォト

一、女の尻の下敷

大手札印画紙焼付二枚一組
略号(まぬ) 五〇〇円

二、女の足に踏まれる

大手札印画紙焼付二枚一組
略号(まあ) 五〇〇円

三、女の股責め

大手札印画紙 二枚一組
略号(ませ) 五〇〇円

四、足舐めの奉仕

大手札印画紙 二枚一組
略号(まし) 五〇〇円

以上のマゾフォトは、いづれ
も分譲用としてではなく、プレ
イとして最近撮影したものの中
の一です。Mフォト撮影の再
開を望まれる方も多いので、一
応打診的に分譲品としました。の
で、従って以上は全部未発表のもの
です。

の方の出現を期待して居ます。長々と書きましたが、よろしく、毎月毎月の発売日を楽しみに待っております（京都八奥村勇次郎）

○

山田那津子さんといえば、確か昨年夏同じ様な薄着というテーマで、わずか二、三行ですが記載されて居た様に思います。当時私はこの文章を読んでこの様な女性が居る事に非常に喜んだものですがその後これに対する読者諸君の寄稿がないのが残念でした。所が本年三月号で再び同じ事を読者告白文に見出し、四月号で他の読者で、同好者にないかと思いましたが、やはり前回と同じく見出す事は出来ませんでした。私も昔から女性の薄着には関心をもち、街では脚元をみて靴下をはいていないか、又オーバーの袖口から下に何を着て居るか気を付けております。只最近見受ける薄着はM的からというよりスタイルからみて薄着するものが多いので見別けがつき難いが、私はその時靴下をはいておるかどうかで区別しておりますが、実際に那津子嬢のいう様には見受けられません。那津子嬢も薄着にしては文章より見て靴下をはくのがうなづけません。私の現在のガ

ールフレンドにも薄着と緊縛を強いて居りますが、Mでない彼女にはある程度は実行に移せても、それ以上は思う様になりません。

（とはいっても相当な事はしてあります）が、実は私が前から実行してみたいと希望して居たオーバーのデザインがあります。若し出来れば那津子さん、実行して見てくれませんか。先ず第一のオーバーは生地は薄手のジャージの袖丈は六分即ち肘がかくれる程度の長さ、袖口は広くかつチャックで割れる様になって居る。袖のつけねはうんと広くし乳房の下位にする。之はオーバーの下で裸にして手口は縛らなくとも身体腕は縛る事が出来る。脇は空いて居て袖の割れが、そのまま続いて居てチャックで閉じる事が出来る。之も縛って縄を調節したり責めたりする事が出来る為です。襟口は襟なしで前はダブルにする。背や前の肩の方はダブルになって居て釦で留め、釦を外せば背中や乳房がじかに露出する様にす。之も縛った儘で手首をオーバーの中へ入れて肩迄ねじ上げた時、手首がオーバーから出て、同じく責める事が出来る。袖は両サイドで割れて居て釦で留め、同じく責め用に使用出来る。

る。この様なオーバーであればオーバー下を裸にすれば、彼女は何時でも責められて居る様な事になる。又、少し淋しい所へゆけば何時でも責める事が出来るし、実際上半身は緊縛される事が出来ます。第二はマントを着る事です。但しこの場合全裸になれずスカートはつけねばなりません。その替り手首も縛る事が出来ます。

（にぎやかな所では無理ですが）勿論肩はダブルにして手首を吊り上げ易い様にせねばなりません。最後に那津子さん、この様な服装で通勤して見てはと思います。会社を退ける時、他の者より少しおそく退社してその際トイレットでも入ってオーバーの下を脱ぎ襟にはマフラーをし、袖には肘から手首迄腕カバーの様なものをすれば解りませんよ。もし実験出来ました次の読者通信にのせて下さい。尚若し冬がすぎれば春でも又雨の日レインコートでも実行に移せませう。期待して居ります。（神戸市三宮八山田道夫）

○

「花と蛇」、毎月愛読致しております。京子に対する流腸責めに、こんなアイデアは如何でしょう。か。まず三日くらい排便を禁じて

おきます。そして充分な頃をみはからい大勢の前に連れてきます。まずひざまずき、パンティを取去ってお尻を高く上げさせ、便の状態を検査します。そして充分固くつまっていることが確かめられししたら、そのままの姿勢でグリセリンの原液五〇CCを注入しワセリンをたっぷり塗ったピンポン球を押してみます。そして脱脂綿をあてその上から痔バンドをしっかり締めあげるので。グリセリン原液の作用で激しい便意が起つても固い宿便はピンポン球にさえぎられて出ることができず、ピンポン球は痔バンドのゴム球が強く圧迫しているために脱出することは不可能なのです。便が完全に泥液状になってしみ出るまでの長い時間を京子は強い排泄感の苦痛と羞恥にのたうちまわるのです。もしその長い時間が退屈でしたら静子夫人に御登場願います。もうか。まずカテーテルにつないだゴム管の端を京子にくわえさせるのです。羞恥に身もだえする夫人の意志にかかわらず京子の口へ流れ込んでゆきます。そしてもし一滴でもこぼしたら最愛の妹が代りにその責めをうけなければならぬのです。

(吉村英子)

K誌愛読者の皆様お元気ですか。私の住む所は上州のある城下町です。その劇場で昨年、女体残酷物語と題したSMプレイが上演され、私は拝見し、その実状をお知らせ致します。このSM者は全回を回る人なので他にも見た人もあるでしょうが、上州で行ったプレイはこう言うプレイでした。では舞台に御案内致します。こちらは女体実験劇場。出演、小林玲子、山本浩。小林玲子(仮名)は女としては小型ですが乳房はボリュームがありK誌の大塚さんの上背を小さくしたような美しい娘さんでした。山本浩(仮名)は反対に大型でちょっと見ただけでも二十貫はあると言う人でこの対照的な二人のプレイで私は胸をわくわくさせて待っていました。幕があくと舞台右手の手すりに両手を吊られ胸に足に雁字搦目に縛られた玲子の姿が表われ「人を縛って写真にとり人世の楽しみを感じる人間を愛態と言うんだ」山本はカメラを持って玲子の姿をあらゆる角度から映す、腕は抜けんばかりに吊られ首をたれて乳房の上下に二回通し足は雁字搦目に縛られ

「そうだ次の撮影に移ろう」玲子は手すりよりほどかれ「玲子この椅子に腰を下しな、反対に下すんだ」「反対に」腰を下ろした玲子の髪をつかむと山本は玲子を反対に倒し玲子の姿は腰は椅子に頭は床につけ「これから私はお前のお腹の上に乗るからこの椅子を回すんだ」山本は左右の足を玲子の腹の上に掛けて「ム……ム……」

「玲子まだねを上げるのは早い」「ム……ム……」今度は腰を玲子の腹の上に掛け玲子の乳房の左右に足を乗せ「玲子回せ」「ム……ム……」玲子の顔は真赤になり肩で息をして椅子を回そうとするが二十貫もある男が乗っていたのは回すことが出来ず、玲子は真赤な顔がうす青くなって来たように私には見えた。山本はその玲子の姿を見ながら約十分玲子の上に乗る玲子は4ぐらい回った所で椅子責は終わった。「お前は私の命令にしたがわなかった。このばつは大きいぞ」「先生ごめんなさい。こんどは、どんな責でもかまいません」「玲子そこに寝なさい」玲子は床の上に反対に寝、両手は後手に山本は両腕に二まきして縛り玲子の髪をつかんで引き起しながら胸に二まきし乳房の上に一すじ今

一つは乳房の真中を通り玲子のあんな大きな乳房も真二つに割れいかにも痛た痛たしそう。胸に回した縄を腕に回してしぼり、その縄を足首に二回ほど回してしぼり逆海老責に責めた。山本が引きしぼるたびに玲子は「ム……やめて痛いム……」と声を上げ劇場はまったく静まり、私はなにもかも忘れてしまったように二人のSMプレイを楽しんでいました。山本は「玲子こまではってきな」逆海老に縛られている玲子に申しつけた。

「玲子、返事がない」「はい」「返事が小さい」「はい」玲子はいも虫がはうように山本の所にはっていき、「先生喉がかわいた」「水がほしい」玲子の髪をつかんで引越し「玲子、水だ。たくさん飲め」髪を引かれた玲子の顔にむけてたらしたからたまらない。玲子の頭、顔、乳房は水でぬれ逆海老責を受けながら水責される玲子の姿。SMプレイを楽しむ人間以外の人にはわからない美しい残酷な姿です。玲子がむせ返っているのにも山本の残酷さは衰えず、玲子の両足をつかんで、中央に引っぱった。「ム……やめて……」足を引っぱられた玲子は上半身弓なりに、先ほど縄がかかっていた乳房は、

いつの間にかぴこんと正面をむきその上下に縄がかかり、山本が足を上げたり下げたりするたびにその美しい乳房をフルわせて悲鳴を上げる玲子。幕が下りて来たのもわからず私は夢中でこのSMプレイに見いていました。私はこのMの女性玲子に対し、これからも体を大切に、又プレイをして見たいと御手紙も出し、縛り写真も送りました。又上州高崎に於て公演を行って呉れることをたのみ筆を置きます。(埼玉上州無宿)

○ 佐出須登様の「御前試合」は面白く読ませていただきました。美女達のユニホームは私は私なりに想像することになりました。日本娘が混じる美女血闘の様子に私のイメージも大分狂倒されましたが前川様の御要望もあることです。で、私なりにイメージを物語風にまとめたつもりですが、佐出須登様の迫力の前には影がうすくなるようです。かねて私が抱いていた西洋娘と日本娘のふんどし一本での果し合いです。登場する女性はマリリンモンローと島娘としては三沢あけみをモデルにしているつもりです。そして、これは現在

の流球の状態に対する私の感情を諷しています。といっても、私は左翼や共産党の大きな国粋主義者と自負しています。題名は適当なのが見当りませんでしたので編集部で適当なのをお考え下されば幸甚です。尤てこれは採用される上の話です。次に抱いているイメージとしては十一月号のサロンにも出していたきました「美女血闘阿修羅」を土台としたもので女達はいうまでもなくリス・テラー、それにお富士（山本富士子）という東西を代表する美女でリスは映画「クレオパトラ」の時のようにエジプト風の髪形に勿論ふんどし一本の姿ですが、エジプト風に髪飾り、ブレスレット胸の飾り、それにふんどしの周りにも腰飾りをつけます。これに対してお富士は城主の姫君又は島田髻の娘のよそほいで白鉢巻、それに江戸紫のふんどし一本の姿で、薙刀か小太刀が武器です。そして血闘数刻、美しくよそほったクレオパトラのリスは数個所の深手にたまらず、血汐の中に対峙果たされ、首をかき落されて美事な肉体もズタズタに切りさいなまれてしまいます。ざっとこのような筋立てですが、前川様始め同好の方々のお

氣に召さば早い機会に物語り風にまとめてみたいと思っています。只、時間的に余裕があるかどうか私の仕事とにらみ合せて出来るだけの努力はしてみます。前川様、佐出様、中屋敷様、室井様、皆様方の次の作品、通信をお待ちしています。（女斗彦）

私、かねてより、奇クを愛読しているゴムマニアです。津田亜紀子さんと山田雨奇男さんの手記など興味深く読ませて頂きました。私も一度読者欄に投稿させて頂きました。そのうちに又手記を書いてみたいと思っています。以前二、三の方々がグラビア写真に雨具を着たものが少ない、もっとゴムマニアのための写真をのせてほしいと希望しておられた様ですが私も同感です。今年の三月号にビニールのレインコートを着用した責めの写真がありました。残念ながらビニールの量感が出ていません。もっとレインコートに光線を反射させてヌメヌメとした光沢を出させると一層効果的だと思います。ゴム雨具を着用させた写真でも矢張りゴムのムチムチするようなヌメヌメするような量感を出すことが大切だと思います。貴社

の分譲写真「いろ」の「レインコート」の拘束」ではその感じが今少し不足しているようです。又レインシューズをはいていないことも物足らぬ感じを与えます。今月号（四月号）ではゴム合羽のフードだけをかぶった写真がありました。が、ライトの方向がよくヌメヌメとした感じがよく出ていました。このようなフオトは夫々そのマニアが撮影者にならないと本場に読者の満足するような作品が出来にくいのではないのでしょうか。（失礼）そこで若し差支えなければ私に一度撮影させて頂けないでしょうか。あつかましいお願いですが、もし私にさせて頂ければきっと素晴らしい写真をお目にかけることができると思います。朝夕毎日阪神梅田駅西出口を通りますので西出口の伝言板（荷物一時預の前）に「GM曜日、時間（出来るだけ夜八時頃がよいのですが）K・K」と書いて頂ければ必ずお会いします。場所は梅新、梅田松竹前「ミッド」かOSミュージックから天六寄りの「トミー」（電話喫茶）前で、ポケットから白いハンカチをのぞかせてお互の目印としたら如何でしょうか。どうかよろしく。（大阪市内福島区八小川

一夫V

二度目の通信三月号に掲載頂き有難うございました。数回坂本局に足をはこびましたが吉村さんからご連絡なく、がっかりしていたところ、四月号でのお便り、大変嬉しく拝見しました。暇に同性の方（というのは、余りにマニアの願望をえぐっていられるので）としても、お友達になりたいものです。僕は十日と二十日に坂本局に行きますからお手紙下さい。本誌の主流がSとMなので、この欄を拝借するのも気がひけてなりませんが。直接文通だけでもマニアの知識がお役にたつて何よりでした。そこで、また昭和十五年四月二十日「食物療法」P一一五―一二九に亘る立野その子さんの体験談が、貴女に似ているので、ご紹介します。全文は長いので要旨を追ってぬき書きしましょう。「婦人には便秘はつきものの様に思われています。日本全国の婦人の八、九割迄がこの便秘に悩まされているのです。私などは生れてから病気に一度も冒されたことのない健康体ですが、ここ何年という永い間悩

まされている一つの持病がござい
ます。それは極度の便秘症でこれ
には本当に苦しみました。一週間
に一度、二週間に一度という具合
です。時折便を催し、喜んで厠に
走りましてもだめで、いくら永く
りきんでも便通はなく、少しでも
出て呉れたらどんなに嬉しいだろ
うとため息をつくのでした。(中
略、ここで頭痛肩コリ食欲不振と
悩みが語られ)浣腸をしてさえも
小指の先位しか出ないのです。両
親は元氣のない私を種々慰めて下
さいます。私は只今二十四才の独
身娘でございますので、その方で
心配してらっしゃるのだと思うと
おかしくて笑い出しますけれど、
便秘のことを思うと全く泣き出し
度くなります。(中略)ここでこの
人はのまないが、家中の人が梅干
湯をのむ習慣があり、偶然、ムリ
してのんでみると快通する)こん
なことであるの五年間も苦しんだ便
秘が治ろうとは夢にも知りません
でした。(中略)快通の喜びが語ら
れ)私が体験しました様に便秘症
には、朝晩梅干を少し焼いて、薄
いお茶に浸してのむのが一番効果

次号(六月号)は四月二十五日発売いたします。

のあることを、八、九割も便秘に
悩まされている世のご婦人方にお
進めします」吉村さんも手術をし
ないですむことを祈ります。然し
治って、浣腸からお別れしては、
マニアとして淋しいですね。(東
京都台東区八小森薫)

花と蛇、号を重ねるごとに益々
佳境に入り、喜びこの上もなし。
豊満艶麗、天女のような絶世の美
女静子令夫人。知性と教養にあふ
れる美貌の令嬢京子。羞恥心の人
一倍強い純情可憐な美少女美津
子。この三美女を全裸に剥いて意
の如く責め罵る淫獣のように好色
な男女の群れ。四月号でいよいよ
地下の淫虐地獄の饗宴は全裸の三
美女をならべてまさにたけなわに
入らんとしています。五月号以降
への期待と興奮はいやが上にも募
り増すばかり。特に私は、氣品に
あふれ人一倍淑やかで慎み深い絶
世の美女静子夫人への羞恥責めに
格別の期待を寄せております。で
すからどんなことがあっても、ま
た自分がどんなむごい目にあって
も、京子と美津子を救わなければ

と、あんなに悲壮な決意をかため
身代りになることを覚悟したとい
うのに、それでもなお、四月号の
終りのように、「嫌よ、ああ嫌、
そんなことだけは、か、かんにし
て——」後生です。そ、そんな
ことだけは、かんにして——嫌、
嫌、ああ、嫌——と必死に重ね
て哀願する静子令夫人への命令は
その身代りのお仕置とは、いった
いなんでありましょうか。淫獣の
ような男達の子を宿して、全裸妊
婦となり、秘密のエロショーにま
で出演することを誓った静子令夫
人が、これほどまでに恥かしがっ
て嫌がるお仕置とは？ おそらく
深窓の令夫人には想像することも
できない、そして言語を絶する羞
恥と屈辱にみちみちた折檻でなく
てなんでありましょうか。五月号
よ、早く手許に来てくれと祈り願
う気持は、私一人ではなく、たぶん
貴誌愛読者のすべてではないでし
ょうか。最近の読者通信が、その
ことをよく物語っていると思いま
す。同好の志の多いのに、大いに
意を強くしています。筆者団氏の
御健斗を切にお祈りいたします。
三月六日。(佐土良志)

「今月の新版分譲品」

鼻責めのアツプ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(はす)

膨満正面の縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(へな)

血紅切腹絶命態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ちの)

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ちた)

オムツ着用写真

大手札七枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(むね)

バンド着用開股

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦 ひかる 略号(つん)

マニヤ全裸緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(いな)

斬首処刑場面

大手札二枚一組 三〇〇円
新宮氏提供 略号(くし)

新人異色原稿募集

一、告白

「私は、こんな趣向を持ちます」

○自分はこのような人に言えぬ変わった趣向を持つてゐるという方はペンに托して、その偽らざる真実の告白をお寄せ下さい。どのような奇想天外のものでも驚きませんから、どうか、全国のファンの方々に、貴方（貴女）の真実の告白を引っさげて、お呼びかけ下さるよう心からお待ちします。

二、手記

「私は、このように思います」

○真面目な御批判をお寄せ下さるよう、お待ちします。御自分の生活のこと、社会一

般のこと、本誌のこと、同好者への呼びかけ等なんでも結構です。

三、体験

「私はこんな変わった体験をしました」

○長い人生の中には、誰でも一度や二度は凄く体験をするものです。ぜひ、とっておき異色体験記をお書き下さい。また、特に変わった体験でなくとも、御自身で非常に強い印象を受けられた事柄を、この際再び追体験して下さい。

○以上の「告白」「手記」「体験」の三項目の応募原稿は、近く発行予定の「特集号」に一括掲載したいと思ひます。採用篇には、相当稿料お支払い致します故、奮って御応募あらんことを。
◎締切日、毎月三十日

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思ひ出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△（映画、雑誌）通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお待ちの事項或はマニヤ各傾向の本

誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思ひ出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の栞 ☆

一月分（1冊）二五〇円△送共△
三月分（3冊）七〇〇円△送共△
半年分（6冊）一三〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価二五〇円

五月号

（第十八巻第五号）
（通巻第一八九号）

昭和三十九年四月二十日 印刷
昭和三十九年五月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天 星 社

（振替口座大阪五〇〇四二番）
（昭和三年四月三日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号）

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願ひます。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫していませんから、売切れぬ中御注文願ひます。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。